山田風太郎傑作大全⑥

天国荘奇譚

山田風太郎



廣済堂文庫

カバーイラスト=山本タカト
カバーデザイン=原田幸生

山田風太郎傑作大全⑥

天国荘奇譚

山田風太郎



廣済堂文庫

541
や7-6
562

山田風太郎
天国荘奇譚
山田風太郎傑作大全⑥
廣済堂文庫

ISBN4-331-60542-6
C0193 ¥562E
9784331605424
1920193005622
定価 本体562円 ＋税

山陰地方の旧制中学で事件は起きた。寄宿舎・青雲寮の天井裏に「天国荘」と名づけた遊び部屋を作りたむろする悪童4人組は、教師への糞便攻撃の作戦を練り実行に移す。彼らの奇想天外なアイデアと抱腹絶倒のユーモアあふれた事件の裏には、時代の空疎な権威に対する反逆の意味が込められて……。表題作他、「恋罪」「ドン・ファン怪談」「童貞試験」「寝台物語」「大無法人」「臨時ニュースを申し上げます」の7篇収録。

ミステリー＆ハードノベルス
廣済堂文庫

山田風太郎
やまだ ふうたろう

大正11年兵庫県生まれ。東京医科大学卒業。昭和22年『宝石』新人募集に応募した「達磨峠の事件」がデビュー作。昭和23年「眼中の悪魔」で第2回探偵作家クラブ賞短篇賞を受賞。昭和30年代以降は一連の忍法帖シリーズで一世を風靡し、昭和40年代には『明治断頭台』『明治波濤歌』など明治ものの作品が続き、以後は室町ものに新境地を示す。近年、若い読者の間で人気復活。

天国荘奇譚
定価 本体562円 ＋税
平成8年10月1日 初版
平成10年10月30日 2刷
著者 山田風太郎
発行所 廣済堂出版

ミステリー
&
ハードノベルス

山田風太郎傑作大全 6

天国荘奇譚

山田風太郎

廣済堂文庫

ミステリー
&
ハードノベルス

山田風太郎　天国荘奇譚

廣済堂文庫

ミステリー
&
ハードノベルス

2230①

廣済堂文庫売上カード

廣済堂文庫	山田風太郎
山田風太郎傑作大全 6 天国荘奇譚	
541	や—7—6

本カード一〇〇枚を一口として貴店様印を押し、小社までお送り下さい。貴店様の売上資料にさせて頂きます。

廣済堂出版
〒105 東京都港区芝3-4-12
営業 03(5445)1202
関西支社 06(444)5911

ISBN4-331-60542-6 C0193 ¥562E

ミステリー&ハードノベルス

廣済堂文庫注文カード

書店・取次店

部数

590

天国荘奇譚
山田風太郎傑作大全 6

<541> や—7—6

廣済堂出版

山田風太郎

定価 本体562円＋税

ISBN4-331-60542-6 C0193 ¥562E

ミステリー
&
ハードノベルス

山田風太郎傑作大全 6

天国荘奇譚

山田風太郎

廣済堂文庫

目次

天国荘奇譚 5
恋　罪 113
ドン・ファン怪談 153
童貞試験 193
寝台物語 211
大無法人 241
臨時ニュースを申し上げます 273
解説・長谷部史親

天国荘奇譚

インキンとアベマツ親王

春、四月、花といっしょに胡桃(くるみ)のように小さな一年生が、青雲寮に散りこんでくる。まったく、彼らは胡桃みたいにかたくなって、寮のなかをあっちこっち、ころがりまわっている。彼らは、向こうの窓辺に、赤い厚い書物をひらいたまま、憂わしげに、ウットリと春の雲を仰いでいる四年生をみると、哲学者って、あんな人かな、と思い、こちらの廊下を、ウオーと猛獣のごとく咆哮(ほうこう)しながら、ノッシノッシと歩んでいる五年生をみると、まさに瞠目(どうもく)、驚倒、気死せんばかりの思いに打たれる。

人間、二十五歳くらいになると、もうそれっきり、あとは四十になろうが五十になろうが、ただ浮世の雨風に面の皮が角化し、書物や講堂や社交界や、その他手あたり次第に盗んできた金粉を衣裳に塗りこくって、ピカつかせているだけのことで、その内側は三ツ子とおなじ、愚鈍で臆病な魂が寒そうにふるえているばかりだということに、感づいてくるが、十三、四歳の中学一年の頭から見た場合、十七、八の四年生、五年生は、まさに巨人、モンスターである。

そのニキビも、恐ろしくとび出したノドボトケも薄気味わるい。まことや、その年齢の間には、第二次性徴の発現という、神妙な天の壁がある。

新入生の末弘馨は、つきそいの姉の弓子といっしょに、こんど入室ときまった二階の第十九号室の五年生運野甚太左衛門に案内されて、各部屋から食堂、洗面所、娯楽室、便所とまわって、ついでにその厠(かわや)の下駄をかりて外へ出た。

「あれが、豚小屋です」

「はあ……」

と弓子は菜園の向こうの丸太小屋を、いままでの惰性で、きわめて敬虔(けいけん)な眼でながめながら、

「ずいぶん、大きゅうございますね。何頭くらいおりますの？」

「ウーム、きょう一日で、たちまちふえた……」

妙な返答なので、ふたりがふりかえると、運野甚太左衛門は便所の汲取口の蓋をあけてのぞきこみ、ムッツリした顔に、なにやらニタリとほくそ笑んでいる。

「……………？」

弓子がそっと弟の顔をみて、左手を頭にあげて、クルクル指で左巻きをつくって見せると、馨は眼をパチパチさせて、あわてて首を横にふった。

姉の方は、これから遠い村へ帰ってゆくのだから、あとしらなみかも知れないけれど、自分はとり残されて、当分この室長さんのもとで生活しなければならないのだから、メッタな真似

をしてもらってはこまる。

――と、涙ぐまんばかりの真剣な眼つきであった。

甚太左衛門は悠然と汲取口のフタを閉めて、

「七頭居ります」

「まあ、ずいぶん……やっぱり、生徒さんのお世話？」

「はっ、一年生のお世話になっとります」

まるで豚になり代わって挨拶しているような返事をして、ノソノソ小屋の柵の方へ歩いていった。

遠い山脈の襞々（ひだ）には、まだ残雪が薙刀（なぎなた）みたいにひかっているが、春の日光はやわらかく、鼻を鳴らして柵に寄ってくる豚の柔毛（にこげ）を、黄金いろにふちどっている。真っ黒な水たまりには、花びらが白い貝殻のように浮かんでいる。小屋の向こうは崖だ。のぞいてみると、すぐ下は芍薬（しゃくやく）や薔薇の花ざかり。花壇の向こうは道路をへだてて広い広い運動場で、春の休暇を終えて久しぶりに再会した中学生たちが、野球をやったり、寝ころんだり、口笛をふいたりしている。

「一年生の――お仕事って、まだほかにありますの？」

「はっ、一週にいちど、食堂横のゴミ箱を裏山の焼場へはこんでいって焼きます」

馨はゲッソリしてしまった。そのゴミ箱なら、今しがた見てきたばかりだが、毎日、各部屋

から出るゴミを投げこむのだそうで、二メートル立方もありそうな、巨大な箱だ。そんな大きなものを、どうして運ぶのだときくと、ごく原始的に、蟻が甲虫をひくがごとく、一年生が総がかりでかついでいくのだと、甚太左衛門は澄ましている。――弟に課せられた運命の哀れさに、弓子はウッスラ涙ぐんで、ちょっとヒステリカルな声をあげた。

「それじゃ、二年生には、なんのお仕事もないんですの？」

「便所掃除があります」

「あら、まあ――三年は？」

「週に一回、寮の庭の掃除です」

「四年は？」

「寮にはときどき祭みたいなものがあるんです。誕生会とか、天長節とか、開校記念日とか……そんなときの余興の舞台つくりの役ですな。そうそう、これからちょうど一月たったら、一年もだいぶ寮生活に馴れるでしょうから、その日に新入寮生の歓迎大会がありますよ。わしら、芝居をやるつもりですがね……」

「あら、お芝居を？――どんな？」

暗闇の牛みたいにモッサリとした運野甚太左衛門のドス黒い顔をみて、弓子はちょっと吹き出したくなった。

「黄金仮面――」

と運野クンがいいかけて、急に天を向いてしまった。
「おう、運野、御案内か。御苦労御苦労」
うしろから金属的な声をあげて、恐ろしく顔がながくて真っ白な、ただいくぶん反り気味の鼻だけ赤い男が、ニコニコ笑いながら菜園のなかを近づいてきた。
「あ、舎監さまでございますか――」
と、弓子はあわてて小腰をかがめた。さっき、挨拶に舎監室にいったとき、入れ替り立ち替る新入生の父兄たちに応対していた四人の舎監のうち、弓子が話したのは舎監長の大塩という先生であったが、この長面赤鼻の教師は、遠くから、しきりにチラチラ彼女の方へ横目をつかっていたから、記憶がある。
「はあ、たしか末弘馨――君でしたな」
と、もう名前を知っている。しきりに長い顔をふりふり、
「ウム、クリクリして元気そうな子だ。しっかり勉強するんだな」
と、馨の頭をなでながら、眼だけは弓子をウットリながめている。
「はあ、末ッ子で、なにぶんいままで親の傍(そば)をはなれたことのない甘えッ子でございますから、これから皆さんと御いっしょにやってゆけますかどうか、あたくし、心配で、心配で――」
「ねえさん」
と馨は顔をしかめて、姉の袖をひっぱった。

「もういいよ。もうかえれよ」
「え、かえるわ、かえるけど……先生、ほんとにどうか、よろしくお願い致します」
と、弓子の眼はもううるんでいる。よく、こう簡単に泣けるもんだ、と馨が呆れて、恥ずかしそうに舎監の方を仰ぐと、おどろいたことに、先生の方も、あわやもらい泣きせんばかりの表情。
「わかりました。わかりました。たしかアにわたしがひき受けました」
かなしげに、またしきりと駄馬のごとく首をふるのに、背後から、エヘンと咳ばらい。ふりかえると、運野甚太左衛門、西郷さんのごとき眼を炯々(けいけい)と舎監の顔に据えたまま、ムッツリと澄ましている。大根みたいに白い舎監の頬に、ドギマギと血の色がゆらめいて、
「き、きみ、運野――クン、きみも、こんどから室長だからな。末弘君に、あんまりくだらん悪戯(いたずら)、教えちゃいかんぞ」
「まあ、悪戯って、どんな――」
と、弓子はちょっときっとして頬をひきしめる。ふだんは毎日姉弟喧嘩(げんか)してきたくせに、きょうの彼女は、あたかも神経が極度に敏感になった母鶏(めんどり)の趣がある。
「はッは、いや、この運野クンはね。ちょっとみると、まるでお尻に釘が刺さっても、三日くらいしてから、痛い、といいそうな顔してますがネ。これでときどき、途方もない悪戯して人騒がせをやるんで。――たとえば、この豚です。毎年暮になると、豚汁用に一匹ひきずり出し

て、剣道の先生が居合だか据物斬りだかの稽古につかうんですがね。去年、運野クンがひっぱり出した奴、グァーッ、スーッて、凄いイビキかいて寝ちまって動かないんです。で、大剣士、悠々と大上段にふりかぶり大喝一声さッと一太刀浴びせたら、尻の一角を斬りとばされた豚、悠然と起き上がったかと思うと、突然まるで獅子のごとく加害者にとびかかりましてね。さあ、ふたり、血だらけになって大格闘。豚は痛くも何ともないような顔をして、いやもの凄い大あばれなんです。こんなこと、それまでにゃなかったんで、――あとで調べたら、運野が豚に泡盛を一升呑ませたんだそうですよ。はッは」

「まあまあ、それで剣道の先生は――」

「あとで本人は、油断の虚をつかれた、と負け惜しみいってましたが、そのときは豚に押しつぶされて半死半生、いや、武徳殿五段もハチのアタマもありゃしない。はッは、わるい悪戯をする。――いや、なにもう五年だし、室長ともなったのだから、二度とこんなことはやりますまいがね。なあ、運野クン、もうやらんなあ」

「はッ」

と運野甚太左衛門、しごく真面目くさって直立不動の姿勢となったが、やるとも、やらぬとも、依然ムッツリ。やむを得ず、舎監の方が、カン高い声で、はッははと笑いながら、また長い顔をふりふり遠ざかってゆく姿を見送って、はじめてニッタリ。――どうも薄気味わるい男だ。

「ひっひっ、インキン先生、いま貴女とお話ししたくて来られたらしいですね」

「え？」

「最近、御失恋なさってね。とにかく若い女のひとと見ると、なにかしら慰めたり慰められたり、そんなことがやりたくて仕方がないといった御心境らしいですな」

大変鄭重な敬語を使用するけれど、弓子にはちょいと耳にひッかかった言葉がある。

「いま、何とおっしゃって？　あの先生のお名前――」

「インキン」

甚太左衛門、泰然たるものだ。弓子の方が真っ赤になって、

「あら、まあ――」

「いや、はじめ、いろいろ皆で談合したんですがね、天キナ、あるいは、昔々大ムカシ、これもなかなかよろしいですが――」

「天キナ？」

「ええ、いかにも天井がキナ臭い、ってな鼻つきをしておられるでしょう。それから、お顎が大変お長いから、ロング・ロング・アゴウ、つまり昔々大ムカシ――しかし、結局、インキンが多数決で採択になったんです。ほら、今でも右手を、革帯の間からズボンの下へさしこんで、ポリポリやりながら、かなしそうにお話しなすっておられたでしょう？」

「あらいやだ――じゃ、ほんとの御名前は？」

「ほんとの御名前は——と、ウーム」

と、運野クン、急につまってしまった。三分くらい苦吟の態であったが、やがて、べつに羞色も浮かべず、「谷垣省三。英語の先生です」

異名だけ知っていて、本名の方を忘れているのには弓子も吹き出した。甚太左衛門は自若たるもので、

「いや、わしよりもまだヒドイ男がいますよ。風早という友達でね。職員室の窓の外を通りかかったら、ウワバミって綽名の先生が遠くを歩いている花王石鹼って綽名の先生を指しながら、ちょっと君、お呼びしてきてくれ、と御命じになったんです。風早、駈けながら、花王石鹼を呼ぼうとしたが、どうしても本名を度忘れしていて声が出ない。しかたなく傍までいって、フーフー息をきりながら、さて——お呼びです、といおうとしたら、こんどはウワバミの本名が出てこない。だれがお呼びなんだ？　とき返されても、あウ、あウ、と何のことはない、まるで唖者の問答ですな。あぶら汗をながして、結局ものもいわず手をつかんで、ウワバミのところへひっぱっていったそうですよ」

「まあ、中学生ッて、みんな先生にそんな——」

姉弟は腹を片手で押さえて笑いこけながら、寮のなかへ戻っていった。

食堂横の廊下を通っているとき、彼らはたいへん妙な光景を見た。

例のゴミ箱のところへ、ノッソリ立っているのは、正真正銘の怪人である。両肩まで垂れ下

がる蓬々たる髪、幾千匹のミミズをぶら下げたようなケンランたるぼろ、宛然乞食界に君臨する王者の概があるが、惜しいかな、眼が三次元か四次元か、どうもそのへんを見てござる。

その腕をつかんで、ガサガサ、ゴソゴソ、ゴミ箱のなかをかきまわしているのは、これはまたすばらしく颯爽たる美少年。キラキラひかる襟章のVの字から判断すると五年生にちがいないが、いったい何をさがしてやっているのだろう？

見ていると、彼はゴミのなかから、燦然たる一つの塊をつかみあげた。まったく、日光にかがやいて、文字どおりの黄金いろである。——姉弟が眼を見張っていると、彼はその塊の皮をクルクル剝いて、なかから一個の大きな白パンをとり出した。地に舞い落ちた皮をみると、これは金粉を塗った紙片である。

「つつしんで、アベマツ親王に献上つかまつりまする」

鞠躬如として白パンをささげると、乞食の王様は猛然とそれをひッたくって、傲然と碧空にそっくりかえったまま、黄色い乱杭歯をむいて喰い出した。

「ここは、はしぢか、いざまず、かなたへ——」

と、その五年生が裏山の方を指さすと、アベマツ親王はパンをかじりかじり、威風堂々、生ビールの樽のごとくかなたへいってしまった。

「いったい、なんですの？　あれ——」

と弓子が呆れかえるのに、相も変らず運野甚太左衛門、四角な顎を撫で撫で、ムッツリした

返事。

「柳瀬川の河原に小屋つくってる乞食ですよ。誇大妄想狂で、賞勲局郵船会社社長アベマツ親王と自称し、百億円のダイヤモンドを三百二十個持っているとイバッてる豪傑ですがね――」

「いえ、いまの生徒さんは――なにか黄金いろのパンを――」

「さあ、ありゃ何でしょうかね」

といったが、遠ざかってゆくその謎の五年生を、呼べば呼べる距離にありながら、べつに問いかけようともせず、ノソノソ廊下をあるき出した。

天国荘の悪童達

ここで断って置くが、これは七三にわけた頭をトンボびかりにひからせている、アプレゲールの中学生の話ではない。太平洋戦争まえの「野蛮時代」山陰地方のある山のなか――豊国中学の寄宿舎、青雲寮に起こった物語である。想えば、このあかるい、健康な風物詩のなかを、上野動物園の猿のごとく、飛んだりはねたりした悪戯な少年たちは、そのとき夢想だにしなかったその後の十年間の悲壮な嵐のなかに、ほとんど半ば、勇ましい姿を、永遠にこの地上から消してしまった。……

さて、姉は遠い村に帰り、弟は青雲寮にとり残された。が、帰った弓子は、室長の運野甚太左衛門が、まるで暗闇の牛のようで、ちょっと底気味わるいところもあるけれど、案外滑稽な

面白い人物のように思われ、それにはじめて入って見た中学校の寄宿舎には、女学校のそれみたいに春の夜めいた柔かさもないかわり、あのそこはかとなくネチネチ澱んだ空気もなく、蛮風颯々底ぬけの爽やかさが、妙なたとえだけれど、深い永遠の蒼穹を見ているような魅惑で、別れるときまた泣いたことはむろんだが、心はむしろ浮き浮きした、明るい信頼を抱いて帰っていったし、残った馨は、音波も光波もピチピチ交錯し、はねかえるような新しい生活に、姉の泣顔など一瞬のあいだに忘れはて、運野さんにいたっては気味悪いどころか、その茫洋として自若たる神色、まさに泰山のごとく、――その泰山の地肌につかまった蟻みたいに、その夜、彼の傍に小さな机をならべて、はじめて買ってもらった赤い漢和大字典をパラパラめくっていた。

五時半夕食。六時半まで運動。それから九時まで途中十分間の休憩をはさんで勉強の時間である。

東向きの十二畳の部屋。南の壁際に、五年の運野さんと一年の末弘馨。北の押入のまえに、四年の石丸和吉、三年の筏昭之助、二年の一ノ瀬渉が、机を寄せ合わして本をひらいている。本はひらいているが、それぞれ休暇中の挿話をボソボソ話しあうのにみな夢中のうえ、帰寮のしたてだから、家からもらってきた豆や煎餅などポリポリ食べるのにいそがしい。ボソボソ、ポリポリという低い、奇妙な音響が、階下の九室、階上十室からいっせいに発して、青雲寮全体が、まるで蜂のような唸りをたてている。階下の一室――二階の第十九号室の下は、舎監室

である。

「どうも、うるさいな、読書の三昧をさまたげる」

と、運野さんがつぶやいたので、北側の三人はちょっとボソボソ、ポリポリを中止した。運野さんはギロリと馨のほうに顔をむけて、

「小学校とはちがう。君も大いに勉強せんといかんぞ」

「はい……でも、まだ、何をやったらいいのかわかりません」

「ウーム、いや、その漢和大字典を読めばいい。ぜんぶ覚えたら文学博士になれることは、わしが保証するよ——おい、キング・コングが廻られはじめられたらしいぞ」

と、急に北側に警告を発した。この人の敬語は、ときどき度がすぎるようだ。

なるほど、階下のボソボソ、ポリポリが、南から北へ、みるみるすーっと消えてゆく。キング・コングとは舎監長の大塩先生の綽名であることは、もう馨も知っている。まもなく北の階段を上ったと見え、ドン、ドン、という跫音が廊下をちかづいてきた。その跫音が隣りの第十八号室のまえまで来たとたん、その瞬間まで悠然としていた運野さんが、非常に敏速に開いていた本を机の下にかくしてしまった（あとで、馨がみたら、それは江戸川乱歩という人の小説であった）。

舎監長が、廊下沿いの窓ガラスに、大きな鼻を押しつけるようにして部屋のなかをのぞきこんで、ドン、ドン、ドン、と通っていった。

「はたせるかな」

と、また机の下の本をとり出しながら運野さんがいった。

「キング・コングはね、ふだん、御監督にまわられるとき、決して部屋をのぞかずに跫音だけで脅して通られるんだが、きょうは新入生があるので破格の行動に出られた。一番うるさいのは、アラエッサッサの御当直である。あれは階下の場合など、猫のごとく窓沿いに外からのぞいて廻られる」

アラエッサッサというのは、やはり舎監のひとり、学校では数学の先生とかいうことである。この綽名は本名の安木義之助からきているらしい。

「しかし、怒られると、最も怖いのはキング・コングである」

「満面朱をそそいで、万雷のくずれかかるがごとく、沛然として湯気がたちのぼるからな」

と北側の三年生筏さんが長嘆息を吐くと、四年の石丸さんが首をひねって、

「沛然として湯気がたちのぼるとは、少しおかしいね。ありゃ、立ち下る方だろう、——ちょっと字引を貸して御覧」

と、また変なことをいっている。

ところへ、カーン、カーン、と休憩の鐘が鳴って、十九個の部屋から、ウワーッというアクビの大合唱がわきあがる。まもなく廊下向きの硝子戸がガラリとあいて、三人の五年生がゾロゾロ入ってきた。

「イヨウ、これがおめえンとこの坊主か。なかなか美か稚児だが、少し色が黒えな」

いきなり頭をガリガリ撫でまわす一人を見あげると、黒水晶のごとく燦々とかがやく瞳、薔薇いろに匂うような頰、――なんと、ひるま食堂横でアベマツ親王に金色のパンを捧呈していたあの人である。

「心配するな。おれにア稚児さんの趣味はねえからな。おれ、頼大太郎ってケチな野郎だ。爾今御昵懇にねげえやす」

美少年だが、おそろしく伝法な口調だ。向こうでは、痩せた背のたかい、どこか仙人みたいな顔をした一人が、石丸、筏、一ノ瀬のまえにあぐらをかいて、

「さても、親愛なる紳士諸君」

と、いきなり演説をぶちはじめた。

「すでに雷名は御聞き及びのことと存ずるが、われわれ四人は、天衣無縫、破天荒の悪戯をもって、全寮全校に鳴っておるものである。しかしながら、残念なることに、いままでのわれわれの行動にはイデオロギーの裏づけがなかった。ところが、ここにわれ風早扇吉は、この春季休暇、沈思瞑想して右の一大欠陥を埋めることに専念した。その結果――おい、その豆センベイを一枚くれ」

このトボケた五年生が、ウワバミと花王石鹼の無声連絡に苦闘したという風早クンであった。

「いいか、人間の目的は、要するにこれ、何らかの意味で幸福を獲得するにある。諸君、この

命題に異論があればいいたまえ」

「ありません」

と筏君が素直にうなずいた。

「ショーペンハウエルの哲学によれば、幸福とはすなわち幸福感である。異議があるか？」

石丸君、ちょっと首をひねったものの、この命題の間隙にきりこむだけの頭がない。だいいち、ショーペンハウエルを読んだことがないのだから、風早先輩が出鱈目をいっているのかどうか、それもわからない。

「しからば、人間に幸福感をあたえるものは何ぞや。それが形而下のものである場合、そはすべて空虚なることは、古来の聖者哲人の口角泡をとばしてのべ来ったところである。それ、富貴権勢は浮雲のごとし――」

「異議あり」

「なんだ？」

「物質的でない幸福があるでしょう」

「よいかな、言や。しからば形而上の幸福について攻究してみよう。まずそれを智的幸福感、情的幸福感、意志的幸福感に大別する。智的満足からくるものの最高の例として、真理発見を目的とする学問をあげてみよう。だが、諸君よ、人間の発見する真理は、実に九牛の一毛的なものであるのみならず、かつ、甚だアテにならんものである。古来、何千何万の学者が、何億

何兆かの真理を発表し、さてそのなかで永遠の真理として残ったもの、はたしていくばくぞ。しからば、真理を発見せりとさけんでトビあがる。学者の狂喜が、絶体絶命根拠あるものであると、誰が保証することが出来ようぞや」

「ヘンなところにやをつけるな。そんなところにやがついたら、フンドシにポケットがつく——」

と頼大太郎が傍から茶を入れる。

「第二の情的幸福感は、まず恋愛と芸術に及ぶものはないであろう。——しかしながら諸君、人に愛せられると一語にいうが、自らふりかえって、果たして自分は人に愛せられる資格ありやと心に問うて見たまえ。資格あり、とウヌボレて澄ましているような厚顔無恥の輩、かかる愚鈍にして無良心の輩は、そのこと自体でもはや人に愛せられる資格はない。しからば、その資格なし、とみずから忸怩たる人は、すなわちその愛が実体なきものであることを告白しているにほかならんのである。——どうだ、異議があるか?」

「……あるんだが、どうも、詭弁だな……」

「よろし、語なきは思想なしであると認める。次に芸術的作品より享受する幸福は?——アナトール・フランスはいみじくもいった。過去の天才は習慣によってさだまる。現在の天才は流行によってさだまると。人間の大半は、高名の芸術的作品に対して、たんに虚栄心からわかっているような顔をしているだけで、実はなんにもわかってもいなければ、嬉しくもなんともな

いのである。それらはすべてウソッパチ、芝居、マヤカシ、勘ちがいにすぎない。——諸君、このマヤカシ、勘ちがいの幸福の代表的なるもの、それは第三の意志的幸福感、すなわち宗教にいたってきわまる。宗教はすべて高等心霊術であり、信者は入院せざるあわれむべき一種の精神病者にほかならんのである。——異議があるか?」

「いったい、結論はなんです?」

と、ケムにまかれて石丸君が悲鳴をあげた。風早扇吉は飄として、

「すなわち、人間の幸福はすべてインチキ、まやかし、勘ちがいのうえに立つものであるということさ」

「どうも、なんだか、妙な結論になってきたな……」

「はッはッは、石丸——いや、みな聞け!」

ふりかえって、拳をつき出したのは頼大太郎である。

「かかる大イデオロギーにより、われわれは俯仰天地に恥ずるなく、爾今堂々と恐るべきペテンを駆使して、諸君を驚倒せしめ、もって醇乎として醇なる満腹の幸福感を味到させてやることを、ここに予告する。諸君、刮目して待て!」

そのとき、また、カーン、カーンとふたたび自習開始の鐘が鳴って、全寮を震動させていた爆笑、咆哮、ハーモニカなどの音響がいっぺんに沈静に帰する。眼をまるくした石丸和吉が、何かたずねようとする暇もなく、風早扇吉と頼大太郎は背をかえして、スタスタ——部屋を出

てゆくのかと思ったら、押入の扉をガラリとあけた。

この押入は、石丸君たちの背後にある、夜具や行李などを入れたそれではない。おなじ北側だが、それとは床ノ間をへだてたもうひとつの押入で、二段にわかれた下には靴箱や掃除道具、上には洗面用具や柔道着、剣道着などを入れてあるものである。

ところが風早さん頼さんは、その押入の上の方にポンと入っていったから、末弘馨はびっくりしてしまった。あれ？　あのひとたち、何しにあんなところへ入っちまうんだろう？

すると、そのときまでうしろの方に、妙にションボリ坐っていたもう一人の五年生が、中風の老人みたいにへんにふるえる声で、

「にゃあ運野、その一年坊主に、あれを一応見せて、釘を打って置かなくちゃあいかんにゃあ」

その顔をみて、馨は急に赤坂城の泣き男を思い出した。垂れ下がった眉毛、なんだか涙のたまったような眼尻――このいとも哀れな相好の持主が、雨宮宗兵衛という人であることは後に知った。風早の大演説も、頼の獅子吼も、春風の耳をなずるがごとく、駘蕩として顎を撫でていた運野甚太左衛門。

「ウム、そうだな。そうするとしようか」

ノッソリ起ちあがって、末弘、来いよ、といった。

雨宮さんと運野さんにはさまれて、末弘馨が押入の上段に這いあがると、おどろいたことに

天井板が一枚はずされて、紫の柔道帯が一本垂れさがっている。あれ？　と思うまもなく、雨宮さんは尻あがりの調子で、ペコンと上方の穴へ消えてしまった。

「それ、おまえも上がれ」

下から運野さんに小さな尻を押しまくられて、天井裏へよじのぼってみると、これは何としたこと、暗黒のなかに、一個の小さな宮殿がひかりかがやいている。

よくみると、天井裏を縦横に交錯する柱をつらねて、厚い板をならべ、床にはゴザを厚く敷き、壁には真っ白な紙を貼りつめた、一坪足らずの小屋であったが、電線をひきずりこんで煌々たる電燈をふたつもともしているため、その洩れ灯が周囲の物凄い埃や蜘蛛の巣をボンヤリ浮かびあがらせて、その対照の甚しいおかげで、まったくヴェルサイユ宮殿のごとく壮麗にみえる。

入口の上に扁額がかかって『天国荘』と青絵具でかいてあった。

その下のカーテンをまくってなかに入ると、壁には女優のブロマイドや素っ裸の美人の写真などが貼りつけられ、壁際にはいっぱい本がつんである。ちょっとみたら、『デカメロン』だの『初夜の知識』だの、『図解性典』だのという標題が見えた。どうやら、寮室には置いておけない書物ばかりらしい。

「おい、きょうな、わしが豚小屋のところにいたら、インキンが来られてな」

と、大あぐらをかいて運野さんがいうと、頼大太郎、パッパとチェリーを吹きたてながら、

「あいつは女の次には豚が好きだからな。自分が大飯ぐれえだから、豚を見てると、おおわが同志よ、ってな心強さを感じて肩身がひろくなるらしい」

「いや、この末弘の姉さんがいたものだから、彼女とひとことでも言葉がかわしたくって来られたような御あんばいであった」

「豚族のくせに、僭上な奴だな。豚の牝とでも交接した方が似合いだがな。もっとも、猫に嫌われるくれえだから、豚の牝もいやじゃというかもしれん」

　頼って人は、ずいぶん口のわるい人だ。馨は真赤な顔になった。

「そして去年の豚酒乱の巻なんかおしゃべりなさって、たいへん御満足の御様子じゃった」

「はッはッ、今に自分の番がまわってくることも知らないで――おい、チビ、おめえの姉さん、シャンかい？」

「いえ――オタフクです。でも豚よりキレイです」

　と馨は膝小僧を揃えて、いささかフンゼンとしていった。

「わッはッはッ、ときに末弘さん、かな。これでおめえさんも天国荘をかいま見たわけだ」

　と、頼は急にこわい顔になっていった。

「ここを見た奴ア、現在、おれたち四人と、十九号室の連中だけだ。こんなものがあることだけを、うすうす知っているのも、ほかに五年が四、五人ぐれえしかいねえはずだ。――キング・コングにでも知られたら、沛然として湯気をたてるどころか、心臓マヒをおこす。われわれは放校だ」

　馨はブルブルふるえ出した。

「秘密をまもれ」

「はいッ」

「よろしい」

　頼大太郎は莞爾としてうなずいた。

「そのかわり、あと四年たったら、おめえさんがここの主人公となる。それまでは真面目に勉強しなくちゃいけねえ。こんなことア、おれたちの年配になってからやることだ……」

「はいッ」

　悠然と倚りかかったうしろの壁、頼の頭の上に、一枚の紙片がピンでとめられて、それにこんなことが書いてあった。

　本年度のスケジュール。

　　『第一回、黄金仮面の巻』

1　アラエッサッサ→X
2　X→インキン
3　ガンちゃん↑☆↓X
4　キング・コング（心理的トリック）

糞すくいアラエッサッサ

アラエッサッサこと安木義之助先生は、運野君の口真似をしていえば、恋をしておられる。

相手は中学前のユレカ文房具店のひとり娘、おキンちゃんで、ことし二十三。眼はまさに睡眠に入らんとするネコのごとく、ぽってりふくらんだ頰には銀いろのうぶ毛がかすかにそよぎ、唇の上に薄いヒゲが生え、白い顎は三重にくくれている。果然、中学生たちは彼女を「眠りネコ」と呼んでいるけれど、これは春機発動のゆくさきが、まだお下げにリボンの女学生程度にしか達しない繊弱なる審美能力のせいで、つまり醱酵するイーストのごとき彼女の性的魅力は、三十男の安木先生や谷垣先生などにして、はじめてその頭を生暖かく甘酸っぱく、ドンヨリとけぶらせる魔力を持っているらしい。

実はインキンこと谷垣省三先生の失恋の相手もこのおキンちゃんだった。谷垣先生はずっとユレカ文房具店の離れに下宿しているうえに、生来たいへんなフェミニストだから、おキンちゃんもはじめはマンザラでない顔をしていたのだけれど、それがこの春ごろにいたって秋風がたちはじめた。

というのは、その深刻なる遠因として、ユレカ文房具店を喰いつぶしかねない先生の大飯喰いがあるのだけれど、不幸の原因を他に求める凡夫の常として、彼はもとより責任を自分の胃袋に帰せず、すべての恨めしさを同僚の安木先生にかけている。

もっとも、安木先生も、眠りネコの歓心を得るためにずいぶん精励した。七カ月にわたり、学校から帰る途中、きっとユレカにたち寄って、ケシゴムやら鉛筆やらを買ったものである。たとえ一回の散財はかならず十銭以内にかぎられていたとはいえ、あわて者の、オッチョコチョイの安木先生としては、実に実に涙グマしきばかりの精進で、そのうえ、一銭の散財につき十分間の割でネバって駄弁を弄してゆくから、一念は恐ろしいもので、ついにおキンちゃんの駘蕩たる笑顔をもっぱら享受するの光栄を獲得するようになった。

悲風落莫たるを覚えつつも、愛着なお断ちがたき谷垣先生は、依然としてユレカに尻を吸着させ、テンコ盛りの茶碗のかげから、終始恨むがごとく怨ずるがごとき視線をおキンちゃんに送っているから、やむを得ないので彼女は外で安木先生と会う。

しかし、毎晩自分の下宿に呼びあげることは、いくらアラエッサッサでも教師の体面上、家人に対しても面羞ゆいし、それかといって町の喫茶店ではいっそう人目につくうえに、第一費用が決して十銭以内ですまないこと明白である。

かくて、窮すれば通ずで安木先生、四日目ごとに舎監として当直の順番のまわってくる寄宿舎の、例の豚小屋の傍の崖下にある花壇のなかでおキンちゃんとあいびきする方法を発見した。

それは早春のある午後、なにげなく崖のうえに立って、花ほころびんとする足もとを見下した瞬間、ふっと頭にひらめいたインスピレーションの如きものであったが、いちどためしに試みたところ、畳のあかちゃけた下宿の二階などとちがい、すこぶる詩的でロマンチックで、結

果はなかなかよろしい。——で、それ以来、当直の夜、九時半の消燈の時間がくると、遠い崖の下で、かすかに鈴の音がするのをあいずに、安木先生、さすがにアラエッサッサという調子にはゆかないが、ぬき足、さし足、ソロソロと外に出て、菜園をよぎり、豚小屋のうしろから細い崖路を、香ばしい夢幻の花園へしずしずと沈下してゆく。——

——ところが、春休みの直前、この浪漫的あいびきを、はからずも発見したのが、噫（ああ）、やんぬるかな、天国荘の悪童連の一人、雨宮宗兵衛クンなのであった。

実は雨宮宗兵衛も、消燈と同時に、そっと寄宿舎を忍び出ていたのである。これは彼等四人組にとって、べつだん珍らしいことではない。単に夜ふけの町をブラブラ散歩することもあるし、映画や芝居をみにゆくこともある。宗兵衛クンも、これから彼らの隠語でコーナーと呼ぶ、角のある食堂の二階に上がって、徳利一本に浩然の気をやしなうつもりであった。

ところが、崖を下って花壇をよぎり、運動場をへだてる道路へヒョイと出ようとしたら、向こうからシトシトと歩いてくる人影がある。あわててまた花のなかへもぐり込んだのは本能的な行為であったが、やがて近づいてきた女をユレカ文房具店のおキンちゃんとみとめて、宗兵衛クンはおどろいた。

この女が、今夜当直の舎監アラエッサッサと何とか何とかであることはよく聞き知っているから、いや、見つけられては天下の一大事とばかり、あわててゴソゴソ花の奥へ這いこんでゆ

くと、なんと仰天したことには、おキンちゃんまた道路からゴソゴソ花壇のなかへ入ってくる。

（こりゃ、いったいなにごとだ）

宗兵衛クン、すっかり閉口して、しばらく息をひそめて形勢をうかがっていると、おキンちゃんは崖の下にソロリと坐って、やおら袂（たもと）からとり出した一個の鈴、ひとふりしてリーンと美しい音を発した。

（あれ？　なんの真似だ？　こりゃ、ほんとに眠りネコか、それとも、もしや、化け猫じゃあるめえか？）

宗兵衛クン、なんだか背すじのあたりが、ゾッと冷たくなってきた。

しばらくすると、うしろの崖路から、ガサリ、ゴソリとやってくる人間がある。

「——おキンちゃん？」

「安木せんせい！」

ひそやかに息はずませて、ふたつの影はかたく手をにぎり合った。

（ありゃりゃ、アラエッサッサだ。これはおどろ木、桃の木——）

なんとも進退谷（きわ）まって、土グモみたいに花蕊にへばりついている宗兵衛クンの一メートルほどまえで、ふたりはモーレツに抱き合っている。貝殻みたいに歯がカチカチ鳴る音の次に、いとも高らかな接吻のひびきがとどろきわたった。五分間くらいいして顔がはなれると、

「こんや、三日月さまネ？」

「三日月は、満月ほど明るくないネ」

くだらんことを、気息奄々と話し合っている。

満月ならば宗兵衛クンの方が、卒倒したかも知れない。——半時間ほどして、うしろ髪を断つがごとくふたりが別れていったあとに、むせかえる花の香気と、ほのかな月光のなかに、哀れな彼は、一万メートルマラソンをやったあとのように、汗ビッショリ、ヘトヘトになり、腰をぬかして座っていたのであった。

朦朧たる神気を、十回ばかり頭をふって鎮静させてから、彼がフラフラ崖の下へいってみると、蒼い光の下に、折りたたまれた一通の封筒が寂然ととり残されていた。……

さて、それから約一月たって、休暇もすみ、新しく入ってきた一年生も、寮生活の勝手次第をようやくのみこんできたかに見える四月末のある午後のことである。

夕食が終って六時半までの自由な時間、ふだんなら、たいてい運動場へ飛び出してあばれまわる寮生たちだけれど、このごろはそれぞれの部屋で、石臼をまわすがごときバス、顱頂骨のてっぺんからきしりでるかと思われるソプラノ、ハーモニカから、あやしげなる浪花節の声まで、いやもう、耳も聞えなくなりそうなほど騒々しいのは、五月末に開催予定の、新入生歓迎余興大会の猛練習をはじめたからで、その番組のポスターはもう寮のあちこちにペタペタ貼ってあるが、なかでも前人気盛んなのは、頼、風早、雨宮、運野の共同脚本、共同監督、共同出演と銘打った『幻妙魔怪・大悲劇・黄金仮面』と称するもので、これには特別出演、木村屋の亀さんとおまけがついている。亀さんは、寄宿舎出入りのパン屋の小僧である。元来、こういう催しに外部から人を加えることは違法なのだけれど、その大悲劇とやらに、是非ともアコーディオンの伴奏がほしいということで、特にアコーディオンの名手と聞えた亀さんを出演させることに、神ならぬ身のキング・コングは、むずかしい顔をしいしい許可を下したのであった。

さて、そのパン屋の亀さんが、いま出張してきていると見え、遠い階下の第一号室のあたりから、雑然たる騒音を縫ってひときわ美しく、嫋々たる『船頭可愛や』のアコーディオンの音がながれてくるのに、聞くともなしに耳をかたむけながら、舎監室で当直の安木先生が、ウットリと眼をほそめ、おキンちゃんのぽてぽて暖かい肌ざわりの幻想をたのしんでいると、突然、黄昏の窓外を、キラッ——とひかりつつただよっていったものがある。

（おや？）

と顔をあげると、菜園のなかを飄々とあるいてゆくのは、柳瀬川の河畔に庵をむすんでいる怪雄アベマツ親王。いま安木先生の瞳のはしを射たのは、何のつもりやら、頭に陣笠みたいにのっけた金ピカの紙で、ムシャムシャ喰いついているのは、大きな白いパンである。

（パン……何処から盗んできたものかな？　どうも困った男が界隈をウロつきはじめたものだ。……）

と、顔を提燈のごとくしかめたものの、このアベマツ親王、ひとたび怒れば所謂バカ力を発揮して手に負えないという噂はかねてからきいているから、十三貫六百匁の安木先生、残念

ながら腕をこまぬいて見送っていると、親王は威風あたりをはらいつつ、堂々と裏の方へ消えてしまった。

すると、それから五分もたたないうちに、代わってユラユラあらわれたのは谷垣先生である。薄暮のなかを、豚小屋から菜園、崖のうえなど、首をふりふりあるきまわっている。ときどき地面にコソコソ手をさしのべたり、何かを嗅ぐように赤い天キナ鼻をピクつかせたりする。

女との甘い密会の場所あたりを、恋がたきが首をかしげつつ歩きまわっている光景は、背すじをナメクジがはうようで、なんとも気味がよろしくないものである。

（どうじゃい、チク膿先生、なにかいい匂いでも感じられるかね？）

と、はじめニタついて憫笑していた安木先生も、だんだん背なかがムズムズしてきて、そこには他人の恋人を強引に奪取するくらいの度胸の持主だから、ついに、ガラリと舎監室の窓をあけると、敢然として攻勢に出てみた。

「おうい、谷垣先生、今ごろ、どうしたんですか？」

谷垣先生は、長い白い顔をあげて、恨めしそうな眼をこちらに向けた。

「いや……万年筆を落としちゃいましてね……あれは、ユレカでも一つしかない高級品で、買ってまだ半年くらいにしかならんものだから……」

「ははん。それはどうも、たいへんでがすな」

といって、安木舎監は思わずニヤリと笑った。奴さん、ずいぶん、ムリしたな……と思い、

テキのかくまでの奸策にもかかわらず、おキンちゃんが徒手空拳の自分に白い大ソーセージのような手をさしのべてくれたのかと考えると、感激の余り熱い涙がにじみ出しそうであった。

──なに、安木先生だって、七カ月間、鉛筆やらケシゴムやら買いに通ったものだが、この瞬間にかぎって、ヒョイと自分のはらった物質的犠牲を忘れたのは、その方がさらに色男としてのウヌボレを有頂天にするからで、このしごく都合のよい心理が、愚昧なる人間性のすこぶる面白いところである。

その意地悪い笑いを見て、谷垣先生のノッペリ白い頬にポウと血がのぼり、

「いや、べつに、かまわんですがね。きょう午後、五年の風早といっしょに豚を見てたんだが──そのときはたしかにあった。と今そこを通りかかったら、風早が窓越しに教えてくれたものだから、ちょっと、念のため、見てまわっているだけで……イッヒヒヒヒ……」

と、急に一秒間の振動数一千回くらいのカン高い笑い声をたてたかと思うと、すうっと、これも裏の方へ消えてしまった。

暦をみると、この日は一白仏滅、厄日進むに大凶とある。月は朔、真っ暗な夜であった。

九時の点呼が終ったあと、各部屋部屋では蒲団の上での最後のドタバタ騒ぎに、春機発動期の鬱勃たるエネルギーを吐きつくして、九時半いっせいに消燈と同時に、全寮の叫喚は、クックツ、ボソボソ、それから寝言と歯ぎしりから、次第に健康な眠りにしずんでゆく。

と、遠くで、リーン……とかすかな鈴の音が聞えた。すでに舎監室から忍び出た安木先生、

顔面筋肉のことごとく弛緩して、生暖かい夜気に、全身ナメクジのようにとろけそう——と、突然リーン、リン、リン、とけたたましい鈴の音に、はっと立ちすくみ、本能的に寄宿舎の方をふりかえる。そのとたん、キャーッと、ひくいが、たしかにおキンちゃんの恐怖の悲鳴が聞えた。

安木先生、一瞬に理性を忘れた。すわ何ごとと、無我夢中、真っ暗な菜園を崖に向かい、アラエッサッサとばかり突進する。突然、何かにつまずいて、あっと全身の血が氷になったのは、水泳の飛込みのごとく両腕が無限の空間に突出するのを感じたからで、しまった！　と打ちひらいた口もろとも、顔が何やら柔かいものへ、グワッとばかりメリこんだ。

とたんに、その顔の下から、ド、ドーッとなだれ落ちていったものがある。たちまち闇夜の底から、熱湯を浴びた猫のごとき物凄い叫びがあがった。はね起きたアラエッサッサはもう半狂乱、横にすッ飛ぶと、崖路をころがるように花壇のなかへ——

「おキンちゃん！」

「せんせえ！」

飛びついたふたりの顔と胸が、なにやらグニャリとしたものでへだてられ、はじめて猛烈な悪臭がふたりの鼻毛をたち枯れさせせんばかり。

「クソだ！」

と、アラエッサッサは悲痛な絶叫をあげた。

「糞だ！　こ、これは、いったい、ど、ど、どうしたんだ！」

「あたし、待ってたの。いつものように、こ、ここに待ってたのよ。そしたら、な、なにかその花のなかから、ガサガサ這い出してウーって唸るものがあって、思わずキャッと——」

しめやかなる春の夜の恋よいずこ。われをわすれて、ケタタましくわめきあっているふたりの頭上から、そのとき、さっと蒼いひかりがふった。

崖の上にならんだふたつの懐中電燈。

「誰だ！　そこにいるのは！」

と叫んだのは頼大太郎の声だ。

「おお、頼か——わしだ。安木だよ！」

「あ！　先生ですか？　いま、何だかこのへんでグワッと変な声が聞えたようなんで、飛び出してきたんですが——風早も運野も雨宮もいます。が、どうなさいました！　そのお姿は——」

いわれて、安木先生とおキンちゃん、やっとおたがいの姿をみると、果然、頭の上から肩へかけてケンランたる糞まみれ。先生のごときは、全顔面いかんなく塗りつぶされ、交錯する二つの光芒に浮かびあがって、見よ！　宛然、闇にかがやく黄金仮面！

「キャーッ」

と、物凄い悲鳴をあげて、おキンちゃん、卒倒してしまった。アラエッサッサ、介抱しあぐ

んで、地団駄ふみながら崖の上をふりあおぎ、

「おい、頼――そ、そこらへんに、何か変なものはないか？　そこから落ちてきたんだが――」

「変なもの？　さあ、何も異常ありませんが……」

それから、あわてて、懐中電燈が崖路をどやどや下りてきた。

そこで、寝まき姿のままの四人、二メートルもはなれて鼻をつまみながら、口々に事情をきいてみると、なんとも奇々怪々なる事件。どうやら、転んだ安木先生は、辛うじて首と両腕が崖のはしから突出したにとどまるらしいが、その顔にどうして糞がくっついたものやら、その糞がどうしてこうハデに落ちたものやら、第一、おキンちゃんを脅やかしたという花壇の怪物なんぞ、懐中電燈をふりまわしてみても、影もかたちも見あたらない。

「ウヘッ、鼻粘膜がビランしそうだよ――」

「こういう場合には、つくづくチク膿の谷垣先生が羨ましい――」

ワイワイ、ガサガサ、大騒ぎしてあたりを探しまわっていた四人、しばらくすると、何やら小さなものをひろいあげた様子。

「あ――万年筆だ」

「これ、あの、イン――谷垣先生のじゃあねえか？」

そのとたん、悄然としていた安木先生、あっとばかり一尺も飛びあがった。

「チクショ――悪党め！」

「な、なんですか？　なにか、わかりましたか？」

「いや、なにがなんだかわからんが、ウーム、あいつにやられたにちがいない……」

歯ぎしり、キリキリ……といいたいが、実はニチャニチャで、それでも、やっとコーフンの火が体内によみがえったと見えて、安木先生、ぶるぶるふるえながら、おキンちゃんの身体を抱き起こそうとした。

「きみ――起きたまえ。カタキはかならずとってやるぞ――」

「イヤ！　寄らないで！　あっちへいってエ！　くさいから――」

おキンちゃん、狂乱したごとく全身をふりたてたが、なに、自分だって糞だらけだ。が、かかる勝手きわまるエゴイズムは、女性の本質的な強靱性のひとつとして、永遠に男性をナヤますものである。

それから一時間後。……――

参謀本部、天国荘の灯のなかで、四人の諸葛孔明が、腹をかかえて作戦の講評をやっていた。

「大成功じゃ。作戦、ことごとく図にあたった」

「崖のはしに、二本木の枝を水平に突き立てて、油紙を張り、その上にXを盛りあげていたというトリックは、お釈迦さまでも気がつくめえ……」

「ちょうどそこへ、アラエッサッサの顔面がとんでゆくような距離と方向に、丸太ン棒を置い

てつまずかせたのがミソじゃ」

「その丸太ン棒や、木の枝や、下に落ちた油紙を、あの騒動にまぎれてまンまとかくしてしまった手際。花壇のなかで眠りネコを脅やかした風早が、あとで駆け下りていったわしたち三人にまぎれこんで、唯今四人参着と見せかけた手際――」

「ましてや、アラエッサッサがインキンを犯人と疑惑するにいたっては、当初の計画外の副産物ながら、まさに錦上花をそえるものというべきだな」

「ただ――」

と、運野甚太左衛門クンが、片腕を鼻さきへもってゆきながら、

「われわれ自身にも、いささか異臭が伝染したかに思われるのを、唯一の遺憾(いかん)とするわい……」

「もうひとつ、千秋の遺恨事があるヨ……」

と、雨宮宗兵衛が、眼じりに涙をたたえ、ふるえる声でやるせなさそうにいった。

「油紙を崖から張り出したのは、アラエッサッサの両腕が空間にしずんで、顔をXにメリこませるのが目的であったのに、そのXがなだれ落ちて、あたら絶世の美女までも……ああ、気の毒で、わしア今夜ねむれんにゃあ……」

「はッはッ、こいつから見れア、女はみんな絶世の美人に見えるんだな。なんだ、あんなヒゲの生えたネコ――気をつけろ、鼻ン下のなげえのは、古来、大望の最大の敵だぞ」

と頼大太郎が決然と薔薇いろの顔をふりあげ、壁のスケジュールのうち、『アラエッサッサ→X』の項をグイと赤鉛筆で消して、

「次は――」

運野甚太左衛門、ニッタリと顎を撫でて、

「心得たりっ」

黄金満腹

「あっはっはっはっ」

ズボンの革帯のあいだから手を入れて、あまり清潔ならざるあたりをポリポリやりながら、一秒間一千回の振動音を発したのは、谷垣省三先生である。

「そんな糞アぼくア知らんね。あの附近にあったとすれば、そりゃ柳瀬川の乞食でも垂れよったんじゃろ……」

「いや、それがあとで調べても、崖のうえにはひときれもなかったちゅうから、これアてっきり何か変な細工がしてあったにちがいないと、安木君は涙をながして歯ぎしりしておるんじゃがね――」

といったのは舎監の三輪巌先生。ブルドッグのような獰猛(どうもう)な面がまえ。碁盤(ごばん)みたいに四角な身体つき。博物の教師だが、柔道三段で、生徒たちがガンちゃんと呼んで、キング・コングの

次におそれをなしている。

あの悲劇的な夜から二日目の夕方。——すでに舎監室の椅子におさまって、なにやらしきりにニタついていた今夜当直の谷垣先生を、倉惶(そうこう)として鞄をかかえたまま三輪先生が訪れたのは、実は今しがた学校をひいてユレカ文房具店のまえをとおりかかると、電柱のかげから離れの方を、血ばしった眼でハッタとニラミつけている安木先生に会った。アラエッサッサは、あの夜から発熱して寝こんでいるおキンちゃんの見舞にきたのだけれど、たちまち面会謝絶をくらって、ていよく追ん出されたところであったらしい。寝不足にムクんだような顔をブクつかせながら、彼は三輪先生の手をとって、今回の受難は、奸悪なる谷垣君の陰謀によるものであると確信すること、かならずこのフクシューをせずんばやまざること等を、悲涙蕭然としてくだりつつ誓ったのであったが、その無念の涙まで、なんだか粘稠(ねんちゅう)性を帯びて薄黄色いように見えて、三輪先生もそぞろ悵然(ちょうぜん)の思いにたえず、言葉をきわめて軽挙妄動をいましめ、ともかくひとまず帰らせたのであったが、さて事態容易ならずとその足でとってかえし、一応谷垣先生に警告にきた次第であった。

このふたりの同僚の恋の暗闘は知らないことではなかったけれど、先夜の犯人にいたっては、いくらなんでも半信半疑のガンちゃんの表情を、しだいに陰鬱にしていったのは、だれの罪でもない、一にインキン自身の不覚である。——

「ひッひッ、糞をしかけたのが、ぼくだって？　なにをくだらん、妙なところで、女と乳繰りあってるから、天が罰をくだしたんだよ。夢中になりすぎて、へんなところへころがったんじゃろ。それでおキンちゃんに肘(ひじ)鉄砲をくらわされて、八つあたりをぼくのところへ持ってくるのは、まったく迷惑千万だね……」

インキンが、しかし有頂天になっているのは、単に恋がたきの筆舌につくしがたい悲惨な災難に、このうえない痛快を感じているばかりではない。実はいろいろ意味がある。

ひとつは、おキンちゃんの風向きが変わったらしいことである。先夜来、病めるドラ猫のごとく横たわっている彼女の枕頭(ちんとう)に侍して、何千回谷垣先生が、かなしげに首をふったことか。洗っても洗っても、いまだ消えやらぬ異臭にも、チク膿の鼻粘膜はやるせなくも仄(ほの)甘くふるえるばかり。軽はずみな恋人が、悲劇の幾山河をこえて、もとの男の腕にもどってくるという、かつて読んだ無数の小説や映画の筋書きが頭に充満し、それらのけなげな男達のように、自分もまた、寛容、神のごとく許してやるのだという悲壮な微笑に、先生の口はひとりでにダラシなくゆるんでくるのであった。……

すると——きょうの午後になって、はじめて気がついたのだが、果然、上衣のポケットに一通の手紙が入っていたのである。

『恋しき恋しき先生サマ。

かなしきキン子は、あの夜いらい、先生サマの御愛情をわすれようとしてもわすれることの

できない女となりました。夜、星マタタけばあたしの頬には真珠のような涙がながれ、昼、鳥なけばあたしのふくよかな乳房は、先生サマを恋うて喘（あえ）ぎうずくのでございます。どうぞどうぞ先生サマ、かなしきキン子をいつまでもいつまでも愛して下さいましね。先生サマは上原謙サマに劣らない美男でありますから、かなしきキン子は、心配で心配で夜もねむられないほどなのでございます。……

それにつけても、あの邪恋にくるう男は、何をするかわかりません。蛇のように執念ぶかく、芋蟲のように醜いあの男は、なにか恐ろしいことをたくらんでいるように思われてなりません。どうぞくれぐれもお気をおつけ遊ばせまして下さい。でも、リューリューとたくましい男性的な先生サマと、花も嵐もともにふみこえてゆくのかと思うと、かなしきキン子の明眸（めいぼう）は、歓喜と希望にランプのようにかがやくのでございます。あわれ、あわれ、あわれ、春のこの宵、涙しつつ――

あなたの白バラ、かなしきキン子より』

まごうかたなき、キン子嬢の手紙である！

が――読者はもうお気づきだろうと思うから、もったいぶらずにここでタネを割っておくが――実は、これはいつかの夜、雨宮宗兵衛クンが花壇のなかでひろった代物で、つまりおキンちゃんが安木先生に送った手紙なのを、そっと谷垣先生のポケットに入れておいたにすぎない

のだが、いかにインキンが夢想的空想的でも、まさかにアラエッサッサが上原謙サマに劣らないほどの美男であるとか、リューリューとたくましい男性であるとは、想像を絶しているうえに、まして自分が、蛇のように執念ぶかく、芋蟲のように醜い、邪恋に狂う、悪漢の該当者だとは、絶体絶命ウヌボレが承知しないから、文中の『あの夜』というのも、大過去に属する意味深長なるあの夜であるとはゆめにも知らず、あの悲劇の夜の意味にかってにきめこんで、きょう午後から『……くれぐれもお気をおつけ遊ばせまして下さい……あわれ、あわれ……』という、総身の起毛筋を刺激するに足る名文を、幾十回、陶然と口ずさんでは涙したことであろうか。――

そのうえ、いったいきょうはなんという祝福されたる日であろう。なんと、もうひとりの女性からも花を贈られたのである。というのは、先刻一年坊主の末弘馨が恥ずかしそうに入ってきて、きょうやってきた姉が、これを舎監さまにあげてくれと持ってきたという白薔薇を、山ほど置いていったのであった。かつて花など盛られたためしのない大きな花瓶を高い書類戸棚のうえからとり下ろし、ほこりをはたいて手ずから生けながら、谷垣先生はふと、

（両手に花……）

という文句が頭に浮かんで、しらずしらずニタニタ笑いがコミあげてくるのを禁じ得なかったのであった。……

この白薔薇は、いまも先生の背後の戸棚のうえから、チク膿の鼻粘膜にもなおかつふくいく

たる芳香をまきちらし、先生の眼には、いつしか対座している三輪巖先生の四角な姿が消えうすれて『あなたの白バラ、かなしきキン子』のまぼろしが、朦朧と浮かびあがってくる。……

「じゃ、なにはともあれ、一応御報告して置きますからな……」

と、全然正体のない谷垣先生に愛想をつかして立ちあがるガンちゃんを、突如としてまた笑いとばすがごとく、

「ひッひッ、ま、かりにです、一歩ゆずって先夜の事件が、ぼくの陰謀によるものであったとしてもですな。いったい安木君が、あれを公に問題にできる立場にありますかネ。聖職にある身分として、破廉恥な現場を生徒たちに目撃されて――いや、あれたちの口を封じてあるからいいようなものの、いったんこの噂がひろがって御覧なさい。実に大変なことになりますぞ。ま、あまり逆上せん方が、安木君自身のためでしょうな、ひッ、ひッ、ひッ、ひッ」

ふたりが舎監室を出かかると、遠い一号室のあたりで、

「ドロボーッ」

というけたたましい叫び声が聞えた。

つづいて、バタバタとはしる音、ワイワイとさわぐ声。

両先生、こは何事とながい廊下をすっとんでゆくと、突端の玄関口に十数人の生徒たちがむらがって、ひしめいている。

「なんだ、なんだ、どうしたんだ」

「泥棒です。アベマツ親王です」

ふりかえって答えたのは、風早扇吉である。

「アベマツ親王！　なにを盗まれたんだ」

「頼の古外套と黄金仮面です。一号室の窓のところに置いてあった奴を、外からいきなりさらっていったんです。頼がいま追っかけてゆきましたがね――」

「黄金仮面？」

と、ガンちゃんは解せぬ顔つきになる。

「は、実は一年の歓迎大会に僕たちがやろうと思っている劇ですが、それに使おうと思っている金ピカの仮面です」

「あの乞食、最近になって、チョクチョクこの附近に現れるようだが、どうしたんだ？」

「さあ……どうしたものですかね。いっぺん親王の御心境を叩いてみるといいですネ……それに狂人の狂人たるゆえんか、金ピカのものにたいへん魅力を感ずるらしく、いまから思うと先日からネラっていたようですが、とうとうやられちゃいました。……もっとも、あんなものすぐにまたつくれますが――」

しばらくすると、真っ赤な顔に湯気をたてたて頼大太郎がもどってきた。

「どうした？　外套は――」

「いやア、ダメでしたよ。いちど、とッつかまえたんですが、怪力無雙、黒帯も鎧袖一触と

いうところで、はッはッはッ」
と、うす赤いきれいな口蓋垂がのぞいて見えるほど、カンラカラカラと笑っている。
「なに、あの外套はね、この春卒業した飯島さんが置いてったおッそろしいオンボロですから、アベマツ親王にゃ恰好の衣裳ですよ。いっそあっさりやって置きますさ」
「そうか。しかしこれから先もあることだから、みんなよく用心しないといかんよ」
——この騒動で、二十分ばかりして、インキン先生がひとりで舎監室へもどってくると、鈍麻した嗅覚にも、なにか一種異様の匂いが部屋をひょうびょうと漂っているような感じがした。
「……おや？」
と赤鼻をひくつかせて見廻していると、あけはなした窓の外で、ポンと、あかるい音がして、
「嗅覚なき者にとりては、屁は快活なる音なり……か」
と、誰かノンビリひとりごとをいう声が聞えた。
窓から首を出して見ると、運野甚太左衛門クンである。肩にわたした天秤棒の両側に肥桶をブラ下げ、お百姓さんみたいに馴れた手つきで、その附近の菜園いちめんに、恐ろしくハデにまきちらしてござる。
「お……これは運野か。御苦労だな」
「はっ、春になりましたから、すこし植物にも滋養分をやろうと思いまして——」
「うむ。感心感心。なにしろ、高度国防国家体制をととのえなきゃならんからな。大いに自給

自足に努力しなければいかん。いやえらいぞ」
と絶讃激賞したものの、猛烈なる臭気にはいささか辟易して、しばらくすると先生は、ガラガラと舎監室のガラス窓をしめてしまった。高度国防国家体制をきめこんだわけであるが、この小さな一舎監室も日本の縮図をまぬがれないと見えて、その窓ガラスは膏薬だらけ。
窓をとじると、春の日光がおんもらと部屋いっぱいに満ちて、まるで孵卵器のよう……その卵が腐ったような異臭がいっそうこもってきたような気もするけれど、不思議なもので二、三十分もたつとあまり感じられなくなって、ただ脳味噌が醗酵したような恍惚茫々たる境地に沈澱し、谷垣先生は机のうえに例のラヴ・レターをひろげたまま、
「夜、星マタタけば……真珠のような涙がながれ……ふくよかな乳房は先生サマを恋うて喘ぎうずくのでございます……花も嵐もふみこえて……あわれ、あわれ、あわれ、春のこの宵……」
と、異なところをポリポリやりながら、四十二度五分くらいもある高熱患者みたいな顔で、いつ果てるとも知れぬウワゴトを口ばしっていた。……
やがて、かなしきキン子嬢の、まさに睡眠に入らんとするネコのごとき眼がランプみたいにかがやき、真珠のような涙をこぼすなる、なやましき春の夜がおとずれる。——
夕食がすんで、自習時間がなかば過ぎたころ、舎監室の扉をホトホトたたくものがあった。先生がたっていって扉をあけると、横笛ならぬ炊婦のお蕗ちゃんという娘が、布巾をかぶせた大きなお膳のようなものを持って、ションボリと立っている。インキンはニッタリ不気味にう

ち笑いそっと彼女の手をとって、部屋のなかへひき入れた。――といってかんちがいしてはいけない。度胸のいいアラエッサッサにしてすら、ようやく崖下の花壇でしばしの逢瀬を盗んだくらいであるから、まさか寄宿舎の最高の立法府にして司法府たる、神聖な舎監室をけがすなんて大それた野心は、毛頭谷垣先生は持っていない。先生の目的はただただ食欲である。飯櫃である。

先生はお膳を受け取ると、お蕗ちゃんの掌にそっと五銭玉をにぎらせ、また音もなく彼女を部屋の外へ送り出すと、一応廊下へカマ首をつき出してあたりの形勢をうかがい、しずしずと扉をしめてガチャリと鍵をかけてしまった。

谷垣先生の大飯ぐらいの件については、今までにもちょいちょい紹介しておいたが、それはそれは実に恐るべきものである。

むかし、希臘の哲人は、「万有ハ真空ヲ嫌忌ス」といったが、先生の胃袋は真空どころの騒ぎではない、気泡ほどの空間でも、嫌忌するらしい。医学的にいえば、善饑症ないし不飽症にでも属するのか、べつに胃潰瘍でもないらしいから、おそらくノイローゼか、それとも――先生の胃袋が超人的（？）にエネルギッシュで獰猛強靱なせいにちがいない。朝食五杯、昼、夜ともに六乃至七杯という壮観である。実はこれでもだいぶ周囲に遠慮しているので、先生は三条実美公をだだッ広くしたような容貌の持主にふさわしく、たいへんな気取り屋でお澄まし屋だから、他人に対してのみならず、自分自身にも痛烈にこれを恥じて、いままでだって、こ

の問題についてどれほど精神的苦悩を経験してきたことであろうか。

それは先生の日記に、しばしば次のような悲痛な表白が見られることからもあきらかである。

『某月某日。なぜおれはこんなに、メシが食いたいのであろう？　これは哲学的に考えてみると、こうである。もともと人間なるものは、生活の中に何らかの快楽をもたねば生きてゆけないものだ。ところが、おれは教師という聖職と薄給のために、贅沢な快楽などゆめにもちかよることができない。しかし食うことだけは、生きてゆくうえに絶対必要な最大条件である。これればかりはキリストもカントも省略するわけにはゆかない。ガンジーといえども生まれながらに断食してきたわけじゃあるまいし、竹林の七賢も、筍かなにか食ったにちがいない。してみると自分が食欲にこよなき愉悦を覚えているのは、実に実用と娯楽を一に兼ねようとしたのである。金と環境に縛られた人間の、本能的なかなしい打算である。……云々』

『某月某日。きょうひるまえ、三年四組の授業の終り近くなって、猛烈なる空腹を感じ、腕時計を盗み見しつつしゃべっていたら、気がとおくなりかかった。一秒が、かけねなしに三分くらいに感じられた。アインシュタインの相対性原理はまったく真理だ。……眼のさきがモーローとして、立っているのが死物狂いであった。ひるの休憩になって、無我夢中に弁当をただひとくちに呑みこんだ。おおあの弁当バコの大きさは、そもいかなる吝嗇にして、狡猾なる商人が規定したのであろう。……憤怒のため、悪鬼のごとくおれは町へとび出し、角の食堂でウ

ドンを九杯食べた。半ばヤケになり、またべつの食堂にいって、さらに三杯食べた。……夕方より、凄じい下痢……云々』

『某月某日。夕食後、スシ食いにゆく。五皿食って出た。青やぎと鮪のスシが、ワサビがピリッと利いて、いちばん美味い。海苔巻は断然ダメだ。それからある喫茶店でお汁粉三杯のむ。棕櫚の葉蔭を往来するガールは、西洋人の娘のようにきれいだった。次に食堂にいってランチを食べる。料理は魚の天ぷら、鰯団子、大根、コンニャク等。さらに精洋軒でパン六個とコーヒーをもらう。……つくづく自分は馬であると自責の念耐えがたきものがあった。腹は重々しく痛み、胃袋は鶏の砂嚢のごとく張りきり、口からはノベツに苦しいゲップが出る、……ああ、満腹のあとにくるうらがなしきこの哀愁。そうすると、いつものようにおれの心のなかにひとつの争闘がまき起こる。食欲は青春と健康の象徴である。食え！　食え！　死すとも食え！　という野獣の咆哮。それは下等である。高貴なるものを求めよ、仙人のごときようかな胃袋を保持せよ！　という澄明秋天のごとき霊魂の絶叫。――考えきたってここにいたれば、これは実に深刻な、偉大なる争闘である。おお、「知」よ「肉体」を征服せよ！……云々』

　とはいうものの、やっぱり仙人にはなりきれないとみえて、谷垣先生は依然として実用と快楽を一に兼ねつづけている。然り而うして「薄給」の身には、ユレカの夕食後町で毎日右のような大散財をすることは、とうていよく耐え得るところではないから、四日に一度の寄宿舎当直は、先生にとって書きいれ時といわなくてはならぬ。……この点は、食気と色気とちがうだ

けで、アラエッサッサと軌を一にしていたわけである。

　その夜先生は、お蕗ちゃんに密輸入させたお櫃を――小さいとはいえ――ひとつ、みごとにたいらげて、天上天下の幸福を一身に集めたような顔をして太平な眠りについた。

　窓はとっくにしめたものの、まだ心なしか異な匂いが残って揺曳しているようだ。が、それと花の芳香とが溶けあって、なんともいえない神韻漂渺たる雰囲気をかもし出し、枕に後頭部をつけたまま、ちょうど真上にあたる白薔薇がガラス越しの月光に仄びかるのを仰ぎつつ眠った先生は、いくたびかおキンちゃんの白いうぶ毛の夢を夢みた。――

　真夜中である。

　二階の第十九号室で眼をパチンとあけたまま、運野甚太左衛門は、このとき、悠々と河豚提灯のごとく頬をふくらませた。その口に細い長いゴム管がくわえられて、ゴム管のゆくえは窓の外に消えている。

「用――意っ」

　枕もとに坐っていた風早扇吉がひくく叫んだ。傍にあぐらをかいて、眼をショボショボさせていた雨宮宗兵衛が、

「うまく、顔のうえに落ちてくれるかにゃあ！」

「インキンの広大なる顔面積を信頼せよ」

　と、両腕をくんでいた頼大太郎がいった。宗兵衛クンはなお落着きかねた顔つきで、

「もし、脳震盪を起こしたり、眼の玉がとびだしたりすると、すこし、コトだにゃあ……」
「インキンの面の皮の厚さを信頼せよ」
と頼がまた答えたとき、甚太左衛門の頰がぷうっと膨らんでいった。空気を吹き送ったような按配である。さらにふた吹き、もう三吹き——突如、階下の舎監室でギャッという悲鳴があがった。
同時に、えたりやおう——とはいわなかったが、風のように飛び出してゆく頼、風早、雨宮の三人。あとに甚太左衛門、こんどは一心不乱に空気をゴム管から吸っては外に吐き、はいては吸いとる作業に悪戦苦闘。
一方——夢まどかなる春眠を、轟然炸然と破られた谷垣先生、暗黒のなかに突如まっさかさまに顔面に落ちてきた物体にあわや絶息せんばかり。ギャッと叫んで三尺ばかりとびあがり、メチャメチャにふりまわす両腕をなにやらバリバリとひっかくものがある。のみならず、顔いちめんに、ヌラリ、ベットリ、ぬらつき、まぶれつく粘体の恐怖に半狂乱。枕もとに展開したままのお櫃や茶碗をガラガラガチャンと蹴っとばしながら電燈をつけてみると——おどろいた。
落ちてきたのは、棚のうえの花瓶である。両腕をひっかいたものは、あたりに抜け落ちて散乱している白薔薇にちがいない。そして顔面にベタつく粘体は——血？　いや、両掌で押しぬぐえば、おお、これなん糞！
だが、いったいどうして花瓶が落ちてきたのだ。窓にも扉にも鍵はかけてある。鼠がはしっ

て落ちるような不安定な花瓶じゃない。地震？　それにしても、そもそもこの糞はいったいぜんたい何処から出現したのだ？
——と、谷垣先生の張り裂けんばかりの眼は、一面に散らばる薔薇の花のなかに、一枚の紙片が落ちているのを認めた。ひろいあげてみると、なにか書いてある。——
『恥辱ならざる餓死あり。名誉なる満腹あることなし！』——
そのピンピン踊る蜘蛛みたいな字——知っている！　覚えがある！　憤激の唸りをあげようとして、ぐっと咽喉部に流入しようとするものがある。チク膿のかなしさ、ポカンと口をあいて夢中に太平の空気を吐呑していたものと見えて、口のなかにも、天キナ鼻のふたつの穴にも——はじめて激烈なる悪臭を知覚すると、あわれ、あわれ、虚空をつかんで谷垣先生はひっくりかえってしまった。……
「先生……先生！」
と、風早扇吉が外から扉をたたいたのはそのときである。
内部はしばらくしんとしていたが、急にカチャカチャと茶碗をひっくり返すような音がした。おそらく、インキンがはっと吾にかえって、ムクリと起きなおったのだろう。
「先生——今、ギャッてな奇怪な声がしたようですが、どうかなさいましたか？」
「な、なんでもない。なんでもないよ。絶体絶命、なア——なんでもない！」
夏でもさアむウい、ヨイヨイヨイ、と小声でいって澄ましているのは外の頼大太郎である。

風早扇吉は脾臓のあたりをおさえて死物狂い、なかでは大狼狽の気味なのは、糞かぶりの醜態もさることながら、それより以前の密輸入物資を見られでもしたら天下の一大事だからで、

「きみ、だれ？　風早——便所へゆくとちゅうだって？　イヤ、有難う。変な声出したちうなら、わしが夢を見たんじゃよ。ヒヒヒ、安心して、早く便所へいってくれたまえ」

「そうですか。では、グッド・ナイト・サア……」

英語の先生に礼儀をつくして、立ち去る——と見せかけて廊下の三人、もういちど扉に耳をピッタリくっつけて聞いていると、

「ウーム、この字は——ウーム、やられた！　アラエッサッサ……ウーム、理不尽、卑怯、お門ちがいだぞ、ウーム……」

そして、歯ぎしりニチャニチャニチャ……谷垣先生には、ただガンちゃんとあのラブ・レターの警告が猛烈な先入主観となっているばかりで、ついにこの怪椿事の全貌は判然しなかったにちがいないが、実は、真相はこうである。

糞の発生地は花瓶である。薔薇の花を生けた底に糞がつめこんであったのである。どうして花瓶がひとりでにころがり出したのかというと、瓶の下に、女の子のつく大きなゴム鞠がペチャンと平たくして敷いてあったので、その臍の緒に長い、ゴム管を連結し、棚のうしろから窓へ——ガラスの絆創膏がめくれてあいた小さな三角形の割目を通って、二階の運野甚太左衛門の口へ——これで読者はもう御納得であろう。この細工は、その日の午後、あのアベマツ親王

の窃盗事件で、先生が舎監室を留守にした二十分ばかりの間に施されたのであった。そうして、長いゴム管は、運野クンがグイとひとつ引っ張れば連結部が抜けて、あとには平たくつぶれたゴム鞠がのこっているばかり、管の方はスルスルと十九号室へ納まってしまうというメカニズムである。

『名誉なる満腹あることなし』という名文句は、むろん風早扇吉がアラエッサッサの字体を真似て書いたものを、薔薇のあいだにさしこんで置いたに過ぎない。——

「しかし、このトリックの最大の傑作部は、舎監室に前もって存在するXの香りを、いかにしてお気づきなさらんようにすますか、という点について、心理学的、生理学的の御錯覚を発生せしめた点にある。その功は一にわしに帰せらるべきじゃな」

深夜の天国荘。悠然とチェリーをくわえて威張ったのは運野甚太左衛門クンである。

「先ず前もって、肥料を窓の外の菜園にまきちらして置けば、すこしの異臭も、はじめにそれの名残じゃと思うて疑われぬ。これが心理的煙幕。——次に、そのうちお鼻が異臭にお馴れになって、嗅覚の興奮力が低下して、たとえ頭のうえにXが鎮坐していようとも、なんにもお感じにならんようになる。これが生理学的煙幕」

「それに加えて、チク膿という病理学的煙幕」

「もうひとつ、あの臭いがおキンちゃんを連想させる神秘なる魔力となって、インキンの脳味噌も陶然味然たるものに化せしめたということもあるぜ」

わっはっと、ノドボトケを震動させる頼と風早のあいだに、悄然と座った雨宮宗兵衛クン、例のスケジュールのうち、『X→インキン』の項に赤鉛筆の棒を弱々しくひきながら、中風みたいにふるえる声でつぶやいた。

「……でも、少し、こんどはザンコクではなかったかにゃあ……にゃあ、みんなそう思わんかにゃあ……」

雨宮宗兵衛の反間苦肉

石坂洋次郎さんは、中学生というやつはまず例外なくカンニングをやるが、女学生はほとんどやらないという理由について、これは主として中学校の試験は「実質」であり、ただちに将来のメシに関係するに反して、女学校は「形式」であり、嫁入道具のひとつ、装飾にすぎないせいである、という意味のことをのべられているが、実はこのカンニングをやるやらぬという相違は、もっとべつの重大的な直接的な原因がある。

カンニングの方法は、探偵小説のトリックの数くらいある。横目をつかう奴に、前の席の背中をつっついて小声で救援を求めるといういちばん原始的な手段から、小さなカードに書いて掌のかげで見るという極めて幼稚な方法。鉛筆にかいてすぐにけずり、ケシゴムにかいて直ちにすりつぶすやつに、黒い筆箱の底に書いて光線の加減である一定の方向からしか見えないという仕組、または鉛筆のお尻で机をトントンツーとたたいて電信（？）を交換するという比較

的近代的な手段ｅｔｃ。

風早扇吉などはすこぶる大胆不敵で、試験場に出ないでその窓の外に座りこみ、窓際の第五列に用紙を一枚落してもらって、ノートと首っぴきで答案をかきあげ、またそっとすべりこませていっしょに提出してもらうという、手に汗をにぎるような大冒険をやったくらいである。むろん先生は出席をとるけれども、ちゃんと答案が出ていて、しかもまごうかたなき風早の文章だから、まさか右のごとき破天荒の離れ業をしていようとはゆめにも思い及ばないので、これは出席簿のつけまちがいであろうとかってにきめこんで、そのまま採点してしまったようである。

ところが、上には上があるもので、頼大太郎となるともっとフラチで図々しい。出席はするけれどもまるで答案は出さず、あとで先生が不審に思って調査にとりかかると、断然提出せりと強引につっぱり、フンぞりかえって、答案紛失の責任をもって逆ねじに先生を糾弾し、降参した先生からついに九十点というわけのわからぬ点を掠奪（りゃくだつ）した無手勝流の梟雄（きょうゆう）である。

右の二豪傑のような、悪度胸の持主ならいざしらず、一般論をいえば、このカンニング道においても、他のあらゆる芸道とおなじく、なまじコセコセした小細工を弄（ろう）するよりも、かえって堂々と大上段にふりかぶって敢行する方が、かえって成功の確率が大きいようである。すなわち、答案用紙の傍にデンと辞書かなにか据えつけて、悠々とめくりつつ答案を作成するというたぐい。これが監督の盲点に入って、ツイ見逃してしまうこと実に不思議なくらい、ガマの

油なんぞよりもよっぽど利き目があるから、まだかかる必要ある御仁はいちどためしにやって御覧。

が、先生の眼をチョロまかすことは決して不可能ではないが、机の前後左右の友人の眼をゴマかすことは、どんな場合でも絶対に不可能である。中学校と女学校のカンニングにおける道徳的差異は、実にこの点より発する。すなわち、女学校においては先生よりも仲間の方が警戒すべき存在なので、彼女たちの舌頭はまさに端倪すべからざるものがあり、かつまた一朝なかのはずみで、先生の愛撫を得ようとする機会にのぞまんか、その機会を成功せしめる目的のためには、彼女らはなんら良心のトガメなくして天衣無縫に友を売る。彼女たちは、親友をも天使のごとく背後から刺すのである。このことを本能的にみんな知っているから、たがいに相牽制して、女学生はメッタにカンニングなどいう、愚劣な罠にはひっかからない。ところが中学生となると、異常性格でもないかぎり、絶対に密告なんかしない。どんなに我利我利の勉強家が落第坊主のカンニングを目撃しようとも、ときに直接に忠告することはあっても、かげで先生に告発するなどいう行為は、カンニング以上の恥辱と感じ、また一同から指弾されるからである。――

もっとも、この不文の鉄則は、彼らの自己防衛本能にその濫觴を有しているのかもしれない。ちょうど、竹を割ったような気性の人がみなに愛され、執念ぶかい人がみなに嫌われるのは、彼がこちらの罪悪を忘れてくれるか否かという、はなはだ虫のいい利己主義から発してい

るのとおなじことで、中学生のカンニング陣が徹頭徹尾裏切者を排するのも、わるくいえばお互いに都合をよろしくしようとする狡猾なる共同戦線、よくいえば、無意識的ながら、女学生のごとき短見者流の企図の及ばざる、遠大なる深謀からきているのであろう。――

さて、いま述べたように、監督の金壺眼をくらますことは決して不可能ではないのみならず、とくに日夜、頼、風早のごとき豪傑の謦咳に接する天国荘の住人として、そんなことは朝飯まえどころか、起床の鐘以前の易々たるものであるはずなのに、どういうものか雨宮宗兵衛、ある日マンマと現行犯を押えられてしまった。

ちょうど、インキン先生が燦爛たる腹鼓を鼓するの一幕あってから三日ばかりの後。新学期早々の試験なんて、下級生にはないけれど、四年五年となるとべつに学問の内容にそれほどの変化はないので、最後の学年は要するに来春の高等学校の入学試験のための訓練期みたいなものだから、先生は遠慮会釈もなく先ず劈頭に一棒をくらわせるのである。

試験は三角であったが、監督にこられたのは漢文の大塩玄蕃先生であった。

雨宮宗兵衛もずいぶんツマラン愚策をかんがえたもので、三角法の定理を十幾つか鼻紙に細写したやつを、洟をかんでは、多くの人のやるようにその分泌物の色彩濃淡をつらつら検討精査するごとく見せかけて、実は満腔の熱誠をもってサイン、コサインの定理を読んでいたら、豈はからんや、もうひとり、うしろからこれを熱心にのぞきこんでいた人物があったのである。

首すじにフーッと牡牛のごとき息を感じて、ヒョイと顔をあげると、背後に巌みたいに立っ

ているのはキング・コング先生。あっと思うまもなく、その鼻紙をツイとさらって教壇の方へ歩いていってしまった。クルクルとまるめて窓から外へポイと捨てたまま、なんにもいわない。なんにもいわないけれど大いに怒っている証拠は、赤く禿(は)げあがった広大な額にムクムクと血管がうかびあがっているのでもわかる。……

その夜――寄宿舎の当直は、舎監長たる大塩先生であった。夕食の時間、正面の席につくまえに、広い食堂に居流れた百あまりのイガグリ頭を見まわした先生は、雨宮宗兵衛にジロッと一睨をくれて何やら大きくうなずいた。宗兵衛クンは、さらでだにふだんから悄然哀然としたのが、ここにいたっていまや芋汁の湯気といっしょに空気中に消滅せんばかり。総身おののくことコンニャクの化物に似て、爾来一晩じゅうふるえどおしにふるえつづけたが、苦衷天に通じたものと見えて、そのままなんの呼び出しもなく過ぎてしまった。……

大塩先生は、いつもむうッと大きな口を真一文字にむすばれているが、いったん緩急あってその歯列を露出されるときは、まさにゴリラも狒々(ひひ)も三舎を避けざるを得ないだろうと思われるくらい凄絶な歯を所有しておられる。頼大太郎などは、いつか嵐にくずれた中学校の石垣の石が、夜のあいだに何者かに盗まれてしまったという事件があった際、

「おい、犯人はてっきりキング・コングだよ。あれが持って帰って食ってしまったにちげえねえぜ。どうしたってあの歯は豆腐や干瓢(かんぴょう)を食う歯じゃない。祖先の平八郎君は癇癪(かんしゃく)をおこしてカナガシラを頭からワリワリ嚙みくだいたそうだが、あれのは巖石(がんせき)用だ。孕(はら)み女が酸っぱい

ものがくいたくなるように、キング・コングもときどきあれくらい歯ごたえのあるものを食いたいという発作に駆られるにちげえねえ」

云々と吹聴してまわったくらいの歯である。

が、この恐るべき武器は、伝家の宝刀のごとく――いや、後の世の原子爆弾のごとく――めったやたらに現わすべき代物ではない。漢文の授業で、『未発の利刀』の効用をしばしば述べられる先生は、よくその語の真髄を体得されていると見えて、ふだんはただ口輪筋の内側に未発の威力を秘めて、暗黙のうちに腕白どもを脅威されているばかりである。キング・コングのゆくところ草木も泣く子も慴伏(しょうふく)するはもちろんのこと、暗闇の牛のごとき運野甚太左衛門クンすら、コソコソと江戸川乱歩を隠してしまうほどの盛威を、御当人はこれひとえに人格の力に基づくものと解しておられるが、その実、浚渫(しゅんせつ)機にもまごうこの歯のデモンストレーションによることはこれまた十年後の世界が、口にキリスト教的人類愛を云々しつつ、そのうしろから原子爆弾をチラつかせなくては、どうにも秩序がたもたれないのとまったく同様である。未発の利刀をきめこんでおられる大塩玄蕃先生は、かの窓外より猫のごとく奇襲していたずらに生徒の非をあばき、もって快とするアラエッサッサのような、そんな小人、オッチョコチョイではない。まして親になり代わって生徒の行住坐臥(ざが)を徳育する舎監長の重任を負うていられるから、すでに雨宮宗兵衛の天地に跼蹐(きょくせき)する恐れ入った姿を遠望して、無言の反省をうながすという教育の秘奥をきわめたものと思いこんで、わざとそのまま黙ってとおされた。

まあ、いってみれば改悛の情いちじるしきものとみとめて、執行猶予の寛典に附したというわけである。ところが――雨宮宗兵衛クン、どういう心境に相成ったものか、それから十日もたつかたたないかのうちに、またまたとんでもない大犯罪を犯してしまった。

　実はその十日ばかりのあいだに、ガンちゃんの柳瀬河畔における月下の猛闘という大活劇があったのだけれど、話の都合上、ここでは宗兵衛クンの犯罪――ヘソの緒をきっての濡場の段を御紹介する。

　五月中旬のある日曜日の午後、郊外にある大塩先生の自宅へ、息せききって雨宮宗兵衛がとびこんできた。

　大塩先生は土曜日の夜から当直で、もうそろそろ次の安木先生と交替して帰宅の時刻のはずだと待っていた家人に、宗兵衛がいうことには、今しがた先生がペンキ塗替中の体育館の傍をあるいていられたら、運わるくうえから塗料桶が落ちてきて、頭からクリーム色のペンキだらけ、目下アルコールで御清拭中であるが、とにかく着替の洋服をひとくみお嬢さんに持たせて、至急持ってきてもらいたい――という伝言であった。

　十分ばかりののち、雨宮宗兵衛は、大きな風呂敷づつみを小わきにかかえた先生の御愛嬢宵子ちゃんといっしょに、広い野原を走っていた。

　宵子ちゃんは女学校の三年生である。しかも瓜のつるに茄子はならぬというメンデルの大法則に反逆して、彼女は――大南瓜のつるになった小さな桃の実のように愛くるしい。

「ツバメがきましたにゃあ……」

と、走りながら、ふいに宗兵衛クンがいった。あんまり詩情にみちた声なので、一意父君の危難におもむく宵子ちゃんの耳にはヘンにひびいたとみえ、なにを悠長なといわんばかり、不審げな眼をチラと向けるのに、

「わし、お嬢さん……ちょッと、わし、お嬢さんに、御相談が、あるんですがにゃあ……」

急に宗兵衛は立ちどまってしまった。

「なに？」

「実は、先生がペンキで……塗抹されたってこと、ウソの皮ですがにゃあ……」

宵子ちゃんはあきれかえって、ポカンと口をあけてしまった。円らなひとみをひらいたまま、マジマジと宗兵衛のベソをかいたような顔を見つめていると――しばらくすると、宗兵衛の両足が、ガタガタ震動しはじめた。

「お嬢さん……あなた、キレイですにゃあ……ケク」

最後の意味不明瞭の発言は、シャックリの声である。

「た、立てばシャクヤク、坐れば牡丹……沈魚落雁、閉月羞花……ケクケク」

「…………？」

「秀でては富士の嶽となり、巍々として千秋にそびゆ……」

なにをいってるか自分でもわからない。

それにしても、詐言を設けて鬼舎監のひとつぶだねをマンマとおびき出し、ひと気のない野原のなかで、かくチョッカイをかけはじめるとは、その大胆不敵、平生の宗兵衛クンにはあるまじき手腕だが、あの鼻紙事件以来、懊悩のあまり頭がちとヘンになったのかもしれない。まったく今、宵子ちゃんと相対している宗兵衛クンの眼つきは、かん徳利をもってアベマツ親王が銭湯へとびこんだら、こんな風になりはせぬかと思われるくらい逆上した眼つきをしている。

「お嬢さん……わしは、あなたを……絶対的に愛するもので……ありますが……」

声は顱頂骨から蒼空の涯へとび去るがごとく、

「どんなものでしょう……にゃあ？」

急に、借金の相談みたいに心細い声になった。

宵子ちゃんは、ただマジマジと孔のあくほど宗兵衛クンの顔を見ている。ただし大脳の視中枢にはなんの姿も映っていない。相手の物凄いふるえが伝染して、立っていられないほど身体じゅうブルブルにふるえているけれど、これはゼンマイ仕掛の人形の震動とおなじようなものだ。

蒼い空を背景に、かすかにそよぐのは黄金の日光にふちどられる髪ばかり、じっと生命のない物体みたいに立ちすくんでいる女学生を見つめて、宗兵衛クンは、突然その足もとの地べたに土下座したくなった。眼をつぶると、真空の世界のなかに、（――こんや、三日月さまネ――）ととろけるようなあの夜のおキンちゃんの声が聞える。頭にゴッとフイゴみたいに血がのぼり、宗兵衛クンはフラフラおよぎ出すと、いきなり宵子ちゃんの小さな柔かい身体をギュッと抱きしめてしまった。……

サワサワと鳴っていた青い穂ずれのひびきが、天地の間に消滅した一瞬ののち、宗兵衛クンの頬っぺたを乳の香のような吐息がかすめて、

「こまる……あたし……こまる……」

と、宵子ちゃんが弱々しくいった。そのとたんに、まるで棍棒で耳をなぐられでもしたように宗兵衛クンはとびあがった。

「こまる……あたし、こまる……」

宵子ちゃんはくりかえした。桜ンぼうみたいに小さな唇が真ッ白になって、ぼうっとうるんだような瞳から、涙がしずかにながれているが、それでも自分では気がつかない様子である。

「こまる……こまる。こまりますか……にゃあ……」

と、宗兵衛クンも腑抜けみたいにいって、遠い遠い蒼空をボンヤリ見ていた。

急に宵子ちゃんは両掌で顔をおおい、声をあげてゲクゲク泣きだした。宗兵衛クンも負けずに泣きだした。頼大太郎なら、（チェッ、なんでえ、ちょッと抱いただけじゃあねえか……）と口をとがらして。石ッころを蹴ッとばすかもしれない。が、かなしげに泣きつつ宗兵衛クンは、おそるおそる地に落ちた風呂敷づつみをひろいあげ、遠くからヘッぴり腰でそっと宵子ちゃんの胸におしつけた。

「わるかったにゃあ……わしが、わるかったにゃあ……」

オンオンと汽笛のように泣きながら、青い麦畠のなかを走ってゆく宵子ちゃんの姿が消えはてるまで、悄然と宗兵衛クンはそこに立ちきわまっていた。

ほろほろと、酔い痴れるような五月の微風のなかに、やがて三年間醤油で煮しめたような腰の手拭いをとって滂沱たる涙をおしぬぐい、彼は溜息をついていった。

「ゆるしてくりゃれ、可憐の乙女よ、大望のまえの反間苦肉のはかりごとじゃ。……だが、頼、運野、風早わしゃつらいヨ……」

ガンちゃん死闘図

さて、話は一週間ばかりさかのぼって、ある土曜日の夜にかえる。

青雲寮では、新学期最初の「注意」と称する行事が執行された。執行とはまるで死刑か差押えのようだが、まったく下級生にとっては、死刑より差押えよりも恐ろしい行事である。つまり五年が一室に集まって、一年生から四年生までつぎつぎに呼びつけ、彼らの生活上看過すべからざる失態、怠慢、罪悪を指弾し、叱咤し、反省せしめるので、まあ、いってみれば当時の「吊しあげ」であろう。

戦争後は「吊しあげ」の秘芸はもっぱら引揚船と牛肉屋だけの独擅場となったけれど、戦争前は軍隊と中学校の寄宿舎が、その光栄ある選手権を所有していたようである。

ついでだから後世のために、当時の軍隊において考案されていた吊しあげの秘術を祖述しておくが、まず「こおろぎ」といって水をいっぱい盛った大洗面器をうやうやしく捧持させられる珍芸。「蟬」といって、たかい柱によじのぼりミーンミーンと鳴かせられる奇術。大の男が虫づくしでは曲がないと発憤したものか、二等卒やら三等卒を二列に相向かわしめて、おたがいの横ッ面をはりとばし、もって拳骨と顴骨の耐久力を比較研究させる「太鼓たたき」、ふたつの机で両腕をささえて身体を宙に浮かし、さながらペダルをふむがごとく、全速力をもって二本の足を回転せしめる「自転車」などというはなはだメカニカルな漫画もあった。もっともふるっているのは、隊中で紛失事件があった際施行される「お地蔵さま」と称する喜劇で、ひとりの兵隊を衣服箱のうえで、左掌をあげ右掌に椀をもつという恰好で胡坐をかかせると、分隊全員そのまえにひれ伏して、紛失物の現れ出でんことを祈願する。その訴うる声は哀音切々として鬼神をも哭かしめるものたらざるべからず、答えるお地蔵さまはお地蔵様然と声容荘重なるを要するときているのだから、まあ人間の愚劣さ加減がどれほどか、その深遠さははかり知れない。三十面四十面をさげた連中が、これみな朕が命をうけたまわる義なりと心得て、日夜かかるあさましき珍芸に粉骨砕身した甲斐あって、かんじんの戦争で首尾よく降参と相成った次第は、まことに世紀のカリカチュアであった。

さすがに中学生は脳味噌がこれほど風化していないので、これほどばかげた、これほど陰険な智慧は出なかった。彼らの吊しあげは一直線である。すこぶる単純で、陽性のものである。

「おいッ、吉田球一ッ、おまえほかの二年がみな死物狂いに便所掃除をやってるときに、おまえひとり裏山でノホホンと詩吟をうなってたそうじゃないかッ。だいたい、おまえの声は夜鴉（よがらす）みたいにしゃがれて、聞き苦しくて、騒々しい。爾今、気をつけろッ」ポカーンといったたぐいである。

二年の「注意」が十時半きっかりにすむと、彼ら憐れなる子羊どもは、ひら蜘蛛のごとく平伏してめいめいの室にひきとってゆく。ついで三年生が呼びつけられる。それまで三年は、正確に寝巻にきかえて、夜具から首を出したまま、キョトンと暗い天井を見つめて遠い怒号に全聴神経をとぎすましていなければならぬ。二年がもどってくるやいなや、三年は全速力で起きあがり、全速力で制服をつけて、全速力で「注意」の部屋に駆けつけてゆく。このときいちばん遅刻した男は、怠慢無礼のゆえをもってとくに油をしぼられる。なに、どんなにいそいだって、絶体絶命最後に参着するひとりができるわけだが、この小野蛮人どもの祭典には、どうしてもかかる告朔（こくさく）の餼羊（きよう）が一匹必要なのだからたすからない。十一時になると、いよいよ四年生である。年齢が接近してくるにつれて、弾劾（だんがい）する方も、弾劾される方もだんだん殺気ばしってきて、一方がなにをナマイキなと鼻の穴を猛烈にひろげれば、一方も満腔の不服をブーッと頬っぺたにふくらまし、顔面紅潮し怒髪天をつき、勇壮をとおりすぎて凄愴（せいそう）の景観を現出してくる。当時はこれを剛毅なる精神の涵養（かんよう）の一助――どころか、寄宿舎の秩序をたもつための必要欠くべからざる行事のひとつとして舎監も黙認していたくらいだが、かくて剛毅なる精神を涵

養された少年たちが、数年後に太平洋と亜細亜全土を野獣のごとくあばれまわり、要するに土着民たちの爪はじき者となるだけの効果しか生まれなかったのだから、この教育法はやはりあんまり褒（ほ）めたものではなかったようである。

ところで、天国荘の四人組。

およそ剛毅なる精神などいうものは、お臍でゴマイタメをして、胡椒（こしょう）をかけてクシャミしたいという頓狂な連中ばかりだから、ここでまた考え出したことがふるっている。

もっとも四人ともドンチャン騒ぎの好きなことは人後におちないうえに、伝統ということもあるから、二年以上の「注意」にはだいたいつきあって出席していたようであるが、いちばんはじめの、九時半からはじまる一年生の「注意」にあたって、すこぶる奇抜なことを一党に提案した。というのは、この一年生、なにしろ入寮してから一月たらず、まだ歓迎会をひらくまえのことで、ただ小兎みたいにオドオドしてばかりいる憐れなる存在だから、叱ることもなにもありはしない。で、例年、最初の「注意」の場合のみにかぎって、一年は寮則かなにかを、あらためて謹聴させるだけで放免するのだけれど、それではあんまりつまらんから、もっと有益な有意義な成果を獲ようではないか、といいだしたのである。

その夜――十二畳敷のまんなかに、糸くずみたいにひとかたまりになって、ガタガタふるえている一年生たちをぐるっととりまいて、蒲団を数枚ずつつみあげたうえに、それぞれ五年生が大あぐらをかいて、ハッタとばかりにらみつけていた。みんな牢名主乃至賭場の胴元といっ

た面がまえである。

「これやい、坊主ども」

と大喝したのは大野伝六という大坊主、内証をうちあければこの春休みにお母さんが学校にお百度をふんでやっと五年生に上った豪傑だが、一年生はまだ知らないから大丈夫である。比叡山の悪僧然とふんぞりかえり、せいいっぱいの蛮声をはりあげて、

「これより恒例の注意をはじめる。それよりまえに、そもそも寮則を知っているか？　知らん奴は手をあげろッ」

だれも手をあげる者はない。

「みんな知っているか、ぜんぶ、五十一箇条知っているかッ」

自分は歴史の試験で貞永式目は小式部内侍の夫にして古今和歌集の選者の一人なりと書いたくせに、今夜は、イヤもういい心持そう。いきなり手の竹刀でガーンとまえの机をどやしつけて気合をいれたから、一年坊主たちはたちまち一尺もとびあがって、いっせいに手をあげてしまった。

「知らん？　はなはだフラチである。よろしい、それではみなズボンをぬげ」

と伝六クンは大威張である。大威張だが、この宣告はなんだかすこし論理が飛躍している。が、恐惶の絶頂にある一年生のことだから、これに控訴を申したてるどころの騒ぎではない。みな一刻をもあらそって、バタバタ、ズボンをぬぎすててしまった。末弘馨など、おそらく五

十一箇条の寮則を知らないという重罪によって、お尻を笞杖の刑を処せられるのだろうと考えたくらいである。

「遅いッ、ダメである。こんどは全速力でパンツをぬげ。早く、ぬげエ！」

幸か不幸か伝六クンは、四年ばかりのちにガダルカナルで戦死してしまったけれど、もし終戦後まで生きのびていたら、その追いはぎぶりの貫禄といい、頭のわるいことといい、集団強盗の団長には充分なれたにちがいないと思われるくらいの見幕であった。

二十秒もたたないうちに、二十ばかりの小さなお尻が、沙漠の嵐に吹きよせられた駝鳥の卵みたいにチョコナンとかたまって現出した。奇観である。すると部屋の片隅から、飄然と風早扇吉がたちあがった。今夜ばかりは、文覚上人のような恐ろしく真面目くさったむずかしい顔をしている。

「おい、おまえたち、怖いか――怖いね――怖いだろう？」

顔色蒼然たる小臀群は、声もたて得ず点頭するばかり。

「だが、七月になると、いいか、もっと怖いことがあるぞ。――試胆会だ。籤をひいて、雨のショボふる丑満時、裏の古鏡山や陀経寺の墓場や狂山の千年杉へゆかせられるのだ。三年ほどまえ、怖さのあまり気がちがってもどってきた奴さえあった。……そうなるとちと気の毒だから、いまのうちにあらかじめおまえたちの胆ッ玉の大きさを調査しておく……ま、入学試験のまえの模擬試験みたいなものだ。覚悟しろ」

風早扇吉はポケットから小さなきたならしい帳面をとり出すと、ジロリともういちど一同を見まわし、

「ではこれから〝甘き初夜の夢〟と題する文章を朗読するから、つつしんで聞け。――これを聞きながら、おまえたちのうち、股間のバロメーターがいちばん盛大にメートルをあげた奴を、最も豪胆者とし、試胆会のときいちばん怖いところへゆかせる。読むぞ」

水のようにしんとしずまりかえった中を、勅語を奉読する校長先生みたいにおごそかな声で、

「……ワタクシは、ふるえている彼女の、白いしなやかなからだに右腕をまわして、いきなりぐっと抱きよせた……」

といいもおわらぬうちに、

「わッ、どうやら、わしがいちばん豪胆者らしいヨ……」

と、もう悲鳴をあげたのは、試験官の方の運野甚太左衛門クン、頭をかかえて起ちあがると、あわてふためいて部屋をとび出していってしまった。どっと笑う五年につりこまれて、ちょっと動揺しかけた一年生たちは、たちまち風早先輩の炯々たる眼光に射すくめられて、はっとばかり歯をくいしばり、悵然と眼をつぶって天井を仰いでいる。……遠い校庭に沿う道路を、春夜に浮かれる町の若者か、ハーモニカの音がひとつ嫋々とながれていった。

「ダンリョクのある、あつい乳房がワタクシの胸に押しつけられ、濡れた花びらのような唇は半開のまま、はッはッとリラのように甘い吐息を……」

――こんなばかなことを考え出したのも、この文章の作者も、おそらく頼大太郎にちがいないが、その頼クンはさすがに照れるのか、どこやら姿が見あたらない。――しかし、以下ルルとして風早クンが細述した〝甘き初夜の夢〟の芸術的価値にいたっては、終戦後の大文学者諸公のそれに比して、断じて一籌を輸するものではなかった。これは諸公の文学が中学生なみであるという意味では決してなく、まったくもって頼クンの大天才によるもので、これほどの大天才も、数年後ツイ逆上して神風特攻隊の一員となり、あたら比島沖の蒼海に消滅してしまったが、もうすこし臆病者で、うまく戦後に生きのこったら、肉体文学のみならず、記録文学の方でも洛陽の紙価をたかからしめて、自動車ぐらい買えたであろうに、惜しいことをしたものである。

さて、注意室において、実に大した先輩どもが下級生たちを、かくのごとくはなはだ有益な有意義な実験にかけているあいだに、その夜当直の三輪巖先生は、碁盤然たる身体を堂々舎監室から裏山へはこんでいた。

これは、生徒たちの怒号がうるさいとか、なんとなく不安だとかいうような繊細な神経による逃避ではなく、この剛毅なるスパルタ的習慣こそ青雲寮の華であると考えているくらい、ガンちゃんが古鏡山にのぼるのは、まったく先生自身の快楽のためである。先生の快楽というのは、アラエッサッサやインキンのそれのすこぶる原始的なのにくらべると、ダンチに芸術的というべく、単に歌をうたうことなので、こういうとはなはだ聞えがいいけれど、実はあんまり

聞えがよくない。第一にその歌いたい唄というのが八木節にかぎっている。チョイと出ました三角野郎が……という代物である。第二に先生は稀代の音痴である。鯨の遠吠のごとき殺人的奇声を発して、本人は節まわしの微妙霊異なることシャリアピンも隆達も師礼をつくすべきほどだと考えている。そのうえ、第三にこの八木節をノドボトケも破れるほど絶叫しなければ歌ったような気がしないときているのだから、結果においては、他人を苦悶させること到底インキンやアラエッサッサの比ではない。いつからこんな因果な趣味にとり憑かれたのかというと、たしか広島高師時代からで、このためある下宿では子供がカンのムシを起こして追いだされ、次の下宿では、突如としてあがった絶唱を隣り近所で火事とカンちがいして消防自動車がとんできたくらい。この町へ赴任してきてからも、宿の人がてっきり先生の発狂だと騒ぎたてた事件があって、さすがのガンちゃんももはや気勢をそがれて意気銷沈、とはいうものの、臍下丹田から攻めのぼって声門筋肉をかきむしるような三角野郎を鎮圧するのに死物ぐるい、日夜悶々として、ときにこの声的不満耐えがたきにいたると、わざわざ下宿から半里ばかりもある柳瀬川へテクテク歩いて、そこの河原で欲望をほしいままにするくらいの艱難辛苦をなめてきたのだから、青雲寮の舎監に就任してからは、四日にいちどの当直の夜、すぐ裏に巨木森々たる古鏡山をひかえて、どうしてこの時と場所のチャンスを利用せずにいられようぞ。……

で――その夜も、三輪先生は七丁ばかりの山道を、爽やかな樹々の芳香と歓喜に厚い胸をふくらませつつ、ノッシノッシとのぼっていった。

頂上は、天正のむかし宮部善祥坊という太閤麾下の悪僧が城をかまえていたあとだとかのことで、しかし、いまは、ところどころにくずれのこる巨大な石垣に苔と蔦かずらが蓬々と跳梁跋扈しているばかり、それに頭上に鬱然とおいしげる杉や樟や檜の大木が、颯々たる夜風におもおもしく鳴りざわめくのは、まるで魑魅魍魎が物凄く笑うどよめきかとも聞きなされる。

が、このガンちゃんなる人は、自分の顔の方が魑魅族なんかよりよっぽど怖いことを知っているせいか、生まれつきこの一族にはぜんぜん遠慮気がねをしない性で、それにいまや押えに押えた八木節の亡魂をノドボトケから噴出せしめる快味に心ワクワク、会心の微笑をもって、先ず西北の方、お伽噺の国みたいに愛らしい町の灯を俯瞰し、次に西南の方、月明に清澄な青い海のようにひろがる野、さらにその向こうに鏡のごとくひかる柳瀬川を遠望し、二度三度、糖尿病昏睡におけるクスマウル氏大呼吸みたいな呼吸をやって、さて……

「チョイと出ました三角野郎がア……」

胃袋も膀胱もとび出してしまいはせぬかと思われんばかりの大音声、天地も裂けよと、

「四角四面の櫓のうえでエ！……」

そのとたん、背後で、ケケケ……と異様な笑い声が尾をひいた。――ヒョイとふりかえると

――出たア！　さすがのガンちゃんも、思わずドキン！　と金しばりになってしまった。

樹々をとおして、蒼白くふるひかりの斑にぬれて、あらわれ出でたる三角野郎――じゃない、

能面のようなノッペリした顔、三日月形の唇からひとすじタラリと顎へながれる血、ボロボロの外套の両手を前へブランと垂れて、また、ケケケ、ケケケと笑うと、ソロリソロリとガンちゃんの方へただよってきた。

「――ギャッ」

と、さしものガンちゃんが物凄い奇声を発せざるを得なかったのも道理、その妖怪が冷たい手でペロリと先生の顔を逆なでしたからで、そのまま、すうっと向こうへゆきかけたとき――ガンちゃん、はっとわれにかえると、

「怪物っ、待てエ！」

いきなり、羅生門の綱よろしく、ムンズとばかりうしろから組みついた。と見えたとたん、柔道三段の三輪先生、あっと思うまもなく、みごとにズデンドウと草のうえに宙がえりをうった。一瞬に血が逆流して、無我夢中ではね起きる。――このとき早くかのとき遅く、かの怪物は、ヒラッと外套の裾をひるがえすと、一間ばかりの石垣をポーンと下の路へとび下りてしまった。たちまち樹立に見えなくなる。

「待てエ！　こらア、待てエ！」

絶叫しながらつづいてとび下りるガンちゃんの眼に、オヽなんという迅い奴、もう二丁もさきの山路を小さく駈け下りてゆく妖しの姿。

「この悪戯者オ、きさま、仮面をとれエ！　わしにゃわかってるぞオ！」

黒つむじのごとく追っかけながら、三輪先生がどなったのは、いまこそ読めた、そいつの外套はたしかにこの中学校の生徒のものにまぎれもなく、しかも、さっき組みついたとたん、あざやかにはねとばしたその腰ざわりは、たしかに覚えがある。あいつだ――ウーヌ、あいつだ！

「ウーヌ、きさま、フラチな――無礼者オ！」

憤激に火の玉みたいになって、三輪先生は宙をとぶ。路はいつしか山を離れ、月光に満ちた麦の野にかかっている。約十分にして先生の両手は、あわや無礼者の肩にとどかんばかりになった。――間一髪のところで、テキは桜並木に突入する。すでに花は散りはて、濃い青葉につつまれた真っ暗なトンネル、超特急でつきぬけると――おどろくべし、無礼者はすでに百メートルも前方を、妖々としてとんでゆく。

「こらア！　かえせエ！　もどせエ！」

畠をとびこえ、溝をはねこえ、さすがにガンちゃん、アゴが出てきたが、怒りいよいよ心頭に発してよろめきつつ追いすがると、逃走者はついに柳瀬川の堤防にかけのぼって、ポーンとまた河原へかき消えてしまった。

「もう許さんっ、コロすぞオー」

つづいて堤防におどりあがった先生、月明にそよぐ河原を見わたせば、またもや百メートルも前方の草の波を、ザーッとゆすりつつ河へむかって逃げのびてゆく姿。

「待てエ！」
　腰から胸へ達する草のなかを、面もふらずガンちゃんは最後の追いこみ。みるみる距離がちぢまって、あと五、六間というところで、テキはひとつの小さな掘立小屋にスポンと吸いこまれてしまった。つづいて阿修羅のごとき形相でとびこむガンちゃん、たちまち眼のまえにスックと立って待ちかまえる影に、思わず知らずタタラをふんで身がまえれば、屋根からもる月光にあざわらうような三日月形の口、タラリと顎にひく黒い血の糸。それに今はじめて気がついたのだが、胸のまえには何やら虚無僧のごとき白い箱をぶらさげ、腰にも両側にやはり大きな白い箱をぶらさげている。
「ケケケ……」
　笑いとも唸りともつかぬ不気味な声。窮鼠かえって猫をはむとも見える不敵なかまえに、三輪先生は烈火のごとく、
「ウーヌ、手むかいするのか、あの、ココナ、馬鹿者オ！」
　真っ向からとびかかって業をかけようとしたが――うごかばこそ、テキはあたかも大地に根が生えたよう。のみならず、いきなりサザエみたいな拳骨をかためて、ポカーンとガンちゃんの横ッ面をはりとばした。眼から火が出て、ガンちゃん、発狂したような声を発し、頭をさげるや否や旋風のごとき大外刈。こんどはきまって、ズデンドウところがる相手のうえにとびかかると、

「まいったかッ」
　大喝したのは、ここで当然曲者が降服すべきところだと思ったからで、ところが相手の怪物、グワーッと犀のごとき咆哮をあげると、凄じい怪力を発揮してガンちゃんを宙天へはねあげる。かくてここに、雲を致し雨を呼ぶ竜攘虎搏の大猛闘が展開された。
（はてな？）という疑惑が、悪臭といっしょに鼻の穴から頭蓋骨へつきぬけたのは組ンずほぐれつの真っ最中、それに相手の帯をつかんでも襟をしめあげても、なんだかヌラヌラ手がすべってさっぱり業がきまらない。（糞だ！　おれたちは糞のなかで格闘しているんだ！）この知覚が脳天に花火みたいにちったが、全身の筋肉はそんな疑惑や知覚作用に対応する余裕もあらばこそ、ただ相搏つテキのセンリツすべき怪力に抵抗するのに精いっぱい、柔道三段のガンちゃんでもなかったら、ついには犬のごとく撲殺されるか、シャモのごとく絞め殺されたにちがいない。たちまち、グワーッという凄じなんどいうばかりない咆哮とともに、空をながれる怪人の足が小屋の柱を蹴ると、ガラガラピシャーンと屋根がくずれ落ちてきた。
　まるで地震だ。無我夢中で這いだした三輪先生、メンくらってドボーンと傍の河へとびこんで、ブクブクもぐってしまった。かすかに息をふいて頭をあげてみると、倒壊した小屋のうえに仁王立ちになって、大憤激の鼻嵐をふきたてつつ、キョトキョト四辺をねめまわしている怪人の姿――思いきや！　仮面はとんで、威風ビヤ樽のごときアベマツ親王！
「ウーム、なにやつなるゾ、われこそは板坂天皇の第一皇子、正二位武蔵守、賞勲局郵船会社

社長アベマツ親王なるゾ、下郎、推参っ」
（あっ——）とばかり、はじめてその小屋が親王の御殿であったことを思い出すとともに、ガンちゃん、ぞっと水の冷たさが骨までしみた。
夢中でまた河にもぐって潜航十メートルあまり、やがてカマ首をあげるとガバガバ泳ぎ出して、やっと対岸に逃げわたったが、ほっとすると同時に、ふたたび自分の全身にぬらつく物凄い異臭に気がついた。なにがなんだかわからない。
（あれは——あれは、アベマツ親王だったのか！）
しかし——アベマツ親王が着ていた中学の外套はどうしたんだ？　あの変な仮面は頼たちがつくってる黄金仮面と称する細工物ではないか？　いや、あの古鏡山で自分をはね腰にかけた怪人は、てっきり頼大太郎のような直感がしたが……？
総身綿のごとく、ナマコのごとく、半死半生の惨憺（さんたん）たる姿で、ガンちゃんが青雲寮へもどってきたのは、それから一時間ばかりのちのことである。
「頼は——頼大太郎はいるか——」
気息奄々と呼ばわる声に、入口にいちばんちかい部屋から寝ぼけまなこをこすりこすり三年のひとりがとび出してきて、びっくり仰天して注意室に注進する。注意室ではそのときあたかも四年生をひきすえて、いまや断罪の真っ最中であったが、この急報におどろいて、なんだなんだとばかりみんなドヤドヤと入口へ出てきた。

「頼……頼はいるか？」
「います。ここにちゃんといますが——どうされたのですか、いったい——そのありさまは？」
頼大太郎、眼をパチクリさせて立っている。聞いてみると、頼は三年のときも、二年のときも、一年のときも、意気軒昂と怒号叱咤していたことにまちがいない旨を、怒号叱咤されていた連中も異口同音に証言する。
「ぼくがいたら、いったいどうなんですか——先生？」
「いや——いや、なんでもないが……」混沌朦朧（もうろう）たる頭脳を象徴して、塩鯛の眼玉のごとくドンヨリした眼をショボショボさせて、ガンちゃんはつぶやいた。
「きみじゃない……やっぱりアベマツ親王だ。……アベマツ親王にやられた。……だが、アベマツ親王が、どうして中学の外套きたり、仮面をつけていたりしたんだろう……？」
「なんのことか、さっぱりわかりませんが……」
風早扇吉が、けげん顔をして口を出した。
「アベマツ親王は——先生、こないだ青雲寮からボロ外套と黄金仮面を盗んでいったのですが、それとなにか関係でも？」
「あっ——そうか！」
突如、愕然と頭をかかえて、眼を宙にすえる三輪巖先生のまえに、おずおずと雨宮宗兵衛ク

ンがいたましげな顔を出して、
「先生、なんだかへんな臭いがしますにゃあ……肥壷かなんかに落ちられたんですかにゃあ……とにかく、早く洗われた方が、御健康によろしいんじゃありますめえかにゃあ……」
おそるおそるさし出したのをみると、一本の大きなビン洗い。狐につままれたような表情ながら、生徒たちは思わずクスクス笑い出した。
……
が――なんぞ知らん――古鏡山の怪人は、やっぱり頼大太郎であったのである。彼が注意室にあらわれたのは十時すこしまえ、一年の「注意」の終りごろのことで、そのころもはや運野甚太左衛門が代わって姿をかき消していたことは、まえに書いたとおりである。甚太左衛門クンの役目は古鏡山から桜並木までの力走であった。二年の「注意」なかばにして運野クンがもどってきたころすでにいつのまにか雨宮宗兵衛がいなくなっていた。桜並木から柳瀬川の堤防まで駈けたのは、まさにこの宗兵衛クンであった。それよりさき、まえもって借りた自転車を利用して、柳瀬川に急行し河原の小屋で甘言をもってアベマツ親王に黄金仮面の装束をつけさせて待機していた風早扇吉が、堤防の下からバトンを受けついで、小屋を風のごとく裏へとおりぬけたあと、不幸なるガンちゃんと不幸なるアベマツ親王が、いま書いたとおりの竜騰虎闘の大衝突をひきおこした次第であったが、この悪戯四人組が、時間的に各学年の「注意」の初期か末期かに少しずつでも姿を見せて、しかもおたがいの不在時間をきわめて短く、あるいはほとんど感づかせないように皆に印象づけさせた手際は、実に巧妙きわまるものであった。

「なにしろ、こんどはすこぶる遠大の計だったよ――」
真夜中の天国荘で威ばっているのは頼大太郎である。
「アベマツ親王の知遇を得るまで――親王が黄金仮面を盗んで逃げてくれるまで――金ピカものに執着を抱かせるまで――だいぶ例のパンをくわせたからな。資本も時間も、こんどはだいぶもとでをつかったよ、わッはッはッ」
「しかし、ガンちゃんと太刀討ちできるのは、まずアベマツ親王のほかにゃないからな。ところで、ガンちゃんはどうしてXがくッついたかまだとんと見当がつかない様子だな――世紀の猛闘に、それどころじゃなかったろうが……」
と笑いこける風早扇吉に、雨宮宗兵衛鼻をつまんで、
「蠟紙でメバリした糞入れの紙箱をつくる細工にゃア、わしゃホトホト閉口したにゃあ……」
「とにかく、相手が柔道三段でいられるから、こんどはこっちも命がけじゃよ。わしはあのマラソンで、いまにも背なかにお手がかかりゃせんかとヒヤヒヤした。つかまえられたがこの世の終りじゃからな……」
と運野甚太左衛門クン、しかしニタニタ笑って、あんまり怖くもなかったような顔つきである。
「だが、明日にでも柳瀬川へいって、アベマツ親王の御殿を再造したてまつらなくっちゃ、大不敬のいたりになるな。そうしようじゃねえか、なあ……」

頼大太郎は、スケジュールの「ガンちゃん↓☆↑X」にグイと棒をひきながら、

「おい、宗べエや、いよいよ、こんどは大詰、千秋楽だが、カクゴはいいかな？」

「ふうん――細工はリューリュー、装置はしかけてあるがな……わしゃツライ。わしがいちばん分のわるいなさけない役まわりだにゃあ……まさにこれ、断腸の思いだよ、ヒヒヒ」

宗兵衛クン、両掌で輪をつくって自分の頸にあてがいながら、なんとも悲壮なる泣き笑い。

圧巻千両役者登場す

「この、ばかものオッ！」

舎監室の卓をガーンとたたいて大喝したのは、キング・コング、大塩玄蕃先生である。

「先日は先日で、試験場で男児にあるまじき卑怯未練のふるまいをなし、それを黙ってゆるしたわしの情けが通ぜんのかッ。五年にもなって、わろエことはわろエことと、こっちでいわんでもちゃんと知ってるはずじゃと、ひそかにおまえの自覚を促したわしの心がわからんのかッ」

満面朱をそそいで万雷のくずれかかるがごとく、沛然として湯気のたちのぼるすさまじさ。――三尺をへだて、眼をとじて悄然と立っている雨宮宗兵衛クンは、いまにも蠟燭みたいに溶けてしまいそう。

むろん、あの宵子ちゃん誘惑事件の翌日の午後のこと。

「しかも、咄々(とつとつ)なんぞや、奸詐(かんさ)をもってせずんば三角形も二角形も判じがたい黄口の乳臭児の分際をもって、女子を誘拐せんとたくらむとは――あの、ココナ、鈍賊(どんぞく)っ」

大塩先生カンカンに怒っているのは、たんに雨宮宗兵衛が自分の娘にチョッカイをかけたというにとどまらず、そのおどろくべき不祥事を、なんと娘が、はじめ容易に打ちあけようとしなかったという奇々怪々なる事実にもある。しかし、ペンキ事件が根も葉もない真っ赤なウソなことは、むろん帰宅と同時に明々白々となったことだから、いくら隠そうとしたってダメである。さてこそ慄然(りつぜん)として、娘をといつめ責めつけ、ようやく、ただ三十秒ほど抱擁(ほうよう)されたばかりだということが判明して、ほっと胸をなで下ろしたものの――その白状をしているあいだの、あの娘のぼーっとうるんだような涙の眼！　それは父親の胸になにか海嘯(かいしょう)のくるまえの海鳴りみたいな底しれぬ恐怖を呼んで、その恐怖が憤怒の烈火に油をそそぎ、いまや全身、西暦七十九年八月二十三日のヴェスヴィアス火山のごとく、

「な、なんたる厚顔、なんたる牛鉄面。豊国中学の一大汚物、青雲寮の毒蟲とはおまえのことじゃ！　この逆賊、不良、怪物、売国奴――ウーム、わしゃもうなんといっていいかわからん、もはや寄宿舎を放逐するまでもない！　トクトク切腹でもしてしまえッ」

グワッとばかり、大顎骨に仕込んである浚渫機(しゅんせつき)を剝(む)き出したから、雨宮宗兵衛、おもわずヒシと両掌で顔をおおってよろめいて、気息奄々(えんえん)と蚊のなくような声。

「し――死にます……ケク」

「かってに死んでしまえッ」

宗兵衛クンは、身体がふたつに折れるほど低頭した。それから五分ほどもかかって頭をあげると、なんともいえないかなしげな、恨めしそうな眼で舎監を見あげ、すうっと影みたいに部屋から消えてしまった。

——待てっと呼ぶひまもない、まるで幽霊のような消滅ぶりであった。かっと眼をむいて見送っていた大塩先生の心に、このときなにやら不思議な不安と予感がゆれうごいたが、しかし先生はウームと口を真一文字にして考えこんだ。それから先生は巻紙を出して、宗兵衛の父親宛に召喚の手紙をかきかけたが、眼のまえに、いましがたの宗兵衛の憐れをきわめた顔がチラついてて、ついに一行もかくことができず、もうしばらく様子を見ていようという気持になった。……

それから三日ばかりのあいだ、大塩先生が注意してみた宗兵衛クンの挙動は、まるで大病人のように蹌々踉々（そうそうろうろう）、すっかり衰えはてた顔いろで、眼つきもどこやらあらぬ虚空を見つめて——先生、だんだん心配になってきた。（し——死にます……ケク）という憐れな声が、ふっと耳たぶをくすぐる。不安の水桶が下がるにつれて、憤怒の水桶は上の方へあがってしまい、いちど、「雨宮、もういい、わしはゆるす」と肩をたたいてやりたくなったくらい。ただ廊下のポスターをみると、一年の歓迎大会にはこの男も芝居に出るらしいから、どうせまともなしろものじゃあるまいが、ま、とにかくその所作ぶりを見たうえでと思案した。……

その新入寮生歓迎大会がいよいよひらかれたのは、三日後の五月二十日午後五時半からのことである。——

会場は食堂。東西に長い大きな部屋で、南向きは全部窓、北側に沿うて廊下がついている。西は厨房（ちゅうぼう）と接続し、そこではいまふたりの炊夫と五人の炊婦が一心不乱にはたらいている。東側は壁で、こちらが正面というわけである。その正面にテーブルを寄せあつめ、そのうえに畳を五、六枚敷き、まわりに緑の幔幕（まんまく）をめぐらし、花テープをにぎやかに垂れさげた、ちょいとイケる舞台は、これぞその日の午後から石丸クンたち四年生のお歴々の力作である。

舞台のまえ一帯にはむろん寮生たちの頭が暴風雨の夜の西瓜畑のようにゆれうごき、各寮室を構成するグループごとにスキヤキ鍋をかこんで大満悦のていである。四人の舎監は舞台のすぐ下に一団をなして、これも七輪をかこんでいるが、インキンとアラエッサッサは、身体の触れるのもけがらわしいといわんばかりの顔つきで、それぞれあいだに舎監長とガンちゃんをさしはさむ位置をしめているけれど、そのため鍋をなかに真向に相対することになり、ときどき眼がハタとゆき合うと、口をゆがめて大軽蔑の表情。ふたりともあの悲惨なる事件をおおっぴらに裁判にもかけられない事情にあるだけに、疑心暗鬼はいよいよ深みで相せめぎ、気の毒なことに誤解はここ当分ちょっと氷解しそうにない。たまにさし出した箸が同一片の肉をとりッくらする瞬間は、なんのことはない軍鶏の蹴合いを見ているよう——三十になっても四十になっても、まるでガキとおんなじだというのは、すなわちここらへんのことをいうので、この天

下の奇観を遠くからのびあがって見て笑っているのは、いうまでもない、天国荘の悪童四人。

入寮してから一月もたって、はじめて歓迎会をひらくのも妙な習慣だけれども、これは生まれてはじめての共同生活というものに馴れ、おたがいによく知り合ってからやった方が、ほんとうに意味もあり興味もあるので、実際上たしかに賢明の方法かも知れない。

一年は一号室から順々に舞台へあがって、

「ぼく、第十九号室の末弘馨っていいます。出身はＹ郡Ｓ村――どうぞよろしく。これから唱歌青葉の笛をうたいます」

という風に自己紹介をして、なにか余興をしなければならない。そのたびに、下では手をたたいたり、口笛をふいたり、

「よしよし、可愛がってやるぞオ！」「もういちど、姉さんをつれてきてくれエ！」わあッわあッとたいへんな騒ぎ。

これが上級にうつるにつれて、

「おれは、五年、大野伝六。浪花節、壺坂霊験記っ」

という具合に、だんだん喉頭部の組織が粗雑になって、

「――妻はア夫をいたわりつつウ――夫はア妻をウしたいつつウ……ペン、ペンペン」

伴奏入りだが、厨房(ちゅうぼう)では炊婦のお蕗ちゃんがヌカミソ樽の蓋をしめにとんでゆかなくてはならぬというゲテモノだけれど、当時は倖せ(しあわ)なことにべつに鐘も鳴らなかったから、本人はし

ごくいい気なもので、

「一年のアンコールにこたえて、特にもうひとつやる。ジョールリだ。……そりゃ聞えませぬ、伝兵衛さん……」

イヤ、メチャメチャな大熱演。伝六クンの多芸多才に、下の舎監達も唖然(あぜん)たる顔で、ガンちゃんのごときは、「ウーム、大野、おまえはしかし、顔を見ている方が面白いな……」と感服のあまり、ついに押えに押えた先生自身の芸術魂がふるいたち、四角四面の三角野郎が食堂全域を制圧沈黙せしむるという飛入りの一幕もあって――暖かい蒸気と肉の匂いのうちに青春哀歓の時間はうつり、いつしか時計は九時を打つ。

ところで、時計のことで、ここでひとつことわって置かなくてはならぬことは、実はその日の午後、盗難事件があった。盗られたのはキング・コングの十八金側懐中時計で、四年の舞台づくりを監督指揮するために、食堂の窓ぎわの食卓のうえに上衣といっしょに置いていたら、いつのまにやら時計だけ紛失していたのである。

もし、疑うべきものが生徒たちよりほかにない事情にあったとしたら、大塩先生ははなはだ苦いつらい心境に陥らねばならぬところであった。――しかるに、幸か不幸かその前後、またまたあのアベマツ親王が附近を徘徊していたのを目撃した者が数十人ある。いや、それは先生自身も知っている。そうして、アベマツ親王が最近不思議な黄金蒐集狂をかねてきたことも、多くのひとの知っているところである。――さてこそ、と大塩先生が一応警察へ電話して、調

査を依頼して置いたという事件なのであった。

　さて、九時を打つと同時に、どっと食堂鳴りどよむばかりの大歓声があがったのは、あたかもそのとき、厨房の奥からアコーディオンの音楽もいとにぎやかに、五つの異形の怪人がしずしずとあらわれてきたからで、みんなおなじような外套に身を覆い、金ピカの仮面をつけている。

「いよいよ、幻妙魔怪、大悲劇、黄金仮面のはじまり、はじまり――」

と、うしろの方で拍子木を打って、第十九号室の四年生石丸和吉クンが叫んだ。筏、一ノ瀬、末弘の諸君、待ってましたとばかり口笛を吹きたてるのをきっかけに、食堂はたちまち嵐のような喝采につつまれたが、しかし、いったいどんなことをやるのか、実は石丸クンたちもなにも知らんのである。ただ、「……恐るべきペテンをもって諸君を驚倒せしめ、もって満腔の幸福感を味到させてやろう……」というあの宣言が胸をふくらませ、期待に雙眼（そうがん）をキラキラかがやかせているばかり。

　五人の黄金仮面、だれがだれやらわからないが、ただ胸にアコーディオンをぶらさげている最後のひとりが、特別出演のパン屋の亀さんであろうとはまず見当がつく。

　――と、いましも、食堂の北西隅にある大きな扉の内側をこの仮装行列がとおりかかろうとすると、その隅の電話が急にチリリンと鳴り出して、ちょうどまえから三人目の黄金仮面がヒョイと受話器をとって耳にあてがった。

「はっ、こちら青雲寮です。え――大塩先生？　おられます。なんですって？――はアはア、なるほど、では、今――」

　ガチャンと受話器をもとへかけもどして、

「あ、大塩先生――豊国警察から、時計が発見されたそうで、いますぐ寮の入口へおいでになっていただきたいとのことですが――」

　声はたしかに運野甚太左衛門クンだが、この場合、尋常の発音をするのが、いっそう滑稽で、またへんに不気味な感じであった。

　考えてみれば、少し妙な電話の内容だが、それに首をかしげる余裕もなく、キング・コングは「ア、そう！」と天皇陛下みたいな返事をして、そそくさと立ちあがり、生徒たちのうしろをまわって、いそぎ足で、今の扉から暗い廊下へ出ていった。

　――このときはやく、黄金仮面はすでに舞台にかかっている。最後の仮面だけ、背景の緑の幕の向こう側にひっこむと、たちまちそこから陽気なアコーディオンの伴奏がきこえはじめた。あとの四人はズラリと舞台にならぶと、いっせいに尻ふりダンスを踊りだす。

「われは、全智全能の黄金仮面！」

と、音楽がやむといちばん左側の仮面がさけんだ。

　雨宮宗兵衛の声である。

「われこそ黄金仮面の王者、真の奇蹟をあらわすもの、ペテン上ペテン下唯我独尊、まことに

わが曹に告げん。わが幻妙の大魔力をゆめゆめ疑うことなかれ——」

もしキング・コングが見ていたら、その元気の恢復ぶりに、あきれかえって、苦笑したにちがいない。いやに威張りかえって、横柄である。はたして他の三人は大袈裟に腹をかかえて、ワッハッハッと呵々大笑した。やおらひとりがすすみ出て、

「アアラ、笑止やな、なんじごときがわれらが王か、いでいで、これよりその仮面をはいでくれんず」

という声は、まごうかたなき風早扇吉。

「よしよし、なんじに真に驚天動地の魔力ありとせば、こころみにわがこの問いにこたえてみよ。枳(からたち)の棘原(うばら)刈りよけ倉立てむ、屎(くそ)遠くまれ櫛(くし)つくる刀自——なんじ、よくこの歌を解義しあたうや？」

「カンラカラカラ、ヘソが茶をわかし、尻の穴がタバコの曲呑みをやるほどの他愛ない設問じゃ、それはにゃあ、万葉集巻の十六にある歌じゃろう。枳の棘原とは、夜な夜なきたことのあるトゲだらけの原という意味で、左様、まあ、いってみればあの豚小屋の傍の崖下の薔薇の花壇と似たような場所のことじゃて。刈りよけ、とは痛い痛いトゲを刈ってしまえということで、なぜかというと鞍(くら)立てむ、鞍をしたてよう、すなわちハイドウドウになろうというわけじゃにゃあ。屎遠くまれとは、糞はあっちの方でしておくれ。クシツクルとじとは、卵とじにちょっと似た当時の料理の名前で、クシツクルというものを、うえから卵みたいにドロリとかけた御馳走のことである——」

「ずいぶんくるしいな——なになに、しからばクシツクルとは、そもそもいかなるものじゃ？」

「ウーム、それはな、元来乳繰るというぐあいに動詞からきたもので、クシとは、草、瘡、腐る、奇し、楠、薬、糞というように、香ぐわしいもの、異臭をはなつものの意で、要するに、ライスカレーのごとくひっかきまわして、プーンと匂うようにしたある種のえも言われぬ調味料の名称じゃて——」

「ウフッ——ははん、しからばつまるところ、一首の意味は？」

「すなわち、トゲだらけの原っぱを刈りたてて、わたしは馬になろうと思う。どうぞ糞は遠くはなれてやっておくれ、さもないとわたくしはクシツクルとじみたいに頭から、ドロドロ、プーンと異臭をはなつようになる——」

突然ヒヒヒ……と、のどを鳴らして奇声を発したのは谷垣先生、さもさもうれしげに横目で宿敵の方をチラリとみやったものである。とんと安宅(あたか)関の武蔵坊弁慶のセリフみたいで、はっきり意味はとりかねるが、どうやら大要の結論は了解できたと見える。アラエッサッサ、真っ蒼になって舞台をニラみつけたが、さてどうすることもできない。わかったような気がするのはこのふたりだけで、ガンちゃんもただ眼だまをパチクリ、あとの寮生一同にいたっては、むろん、いっそうチンプンカンの怪問答である。

つづいてまかり出たのはもうひとりの仮面。

これが運野甚太左衛門クンであることは、さっきの電話のとりつぎでみんなにわかっている。

「しからばまた問わん、馬太伝第十五章の第十六節——イエスいいたまいけるは、なんじら今もなお悟りなきか、すべて口に入るものは腹にゆき、ついに厠にすてらるることを悟らざるや——この意味如何？」

「なんでもない。大飯をくらうは無益千万という、しごく衛生的ないましめじゃて」

「まった、このなかにいう厠の語源はそもいかに？」

「左様。古来それは河屋よりきたるとされておるようじゃ。つまり、いにしえはみな河に糞をたれながした風習にもとづくというのじゃにゃあ。——が、我輩の研究によれば、決してそんなばかなことはない。太古こそ河は漁業農業などの生産の根源、飲料にも交通にも欠くべからざる最大の恩恵者。されば、河をたどれば武陵桃源に通ずるとなし、メッタにもぐれば河童に尻ゴをぬかれるものと恐縮し、かの禊の行事すらおこなって河を神聖無垢の斎場に供したではないか。ユメユメ垂れながしなぞという大不敬が、神代の立小便氏は例外として一般に行われたなどいう事があるはずがない——」

「ウムウム、さらばなんじの考察いかに？」

「かわやのカは香じゃ。臭気を発するものじゃ。ハは張るという語の幹辞である。腹もここからきたので、大飯をくらってつッ張っておるからそう呼ぶようになったんじゃ。ヤは矢で、矢は屎に通ずる。ウソだと思うなら、漢和大字典の『矢』の項をひいて御覧じろ。ちゃんとクソとかいてある——すなわち、厠とは、ただ一字にして、その源の深遠なること、ムヤミに腹をつッ張らしていると、香にこそ匂うものが矢のごとく落下してくることありと、おどろくべき物理学的教訓をふくんでいるんじゃ。よく心得ておくがいい——」

こんどは、インキンがギョクンと思わずたちあがってしまった。が、インキンが愕然としているのは、あの夜の密室落糞事件をなんと舞台の連中が知っているらしいことに対する狼狽であって、陰謀者の正体がアラエッサッサにちがいないという証はまだなお頑としてゆらいでいないのだから、はなはだ気の毒であり、滑稽でもある。

このことはアラエッサッサでもおなじこと、アテコスられて真っ蒼になって憤慨しているだけで犯人は絶対にインキンであると信じて疑っちゃいないのだから、その頑愚や済度すべからず。

さてこそ、タカをくくって舞台の四人が、字引をひっくりかえして彫心鏤骨の研究になる出鱈目を、蟇の油売りみたいに恐ろしく早口でしゃべっているわけだが、イヤかえすがえすも厚かましい不敵な連中ではある。もっとも彼らにとっては、かかるスリルが最大の快味なので、実はむしろ大いに疑ってほしくってウズウズしているくらいなのである。正確にして詳細なる証拠がなければ心証くらいいくらわるくったって、それだけでは決して退学や放逐になるはずはないことを承知しているから平気の平左。

ただ、問題は、カンニング事件、少女誘拐事件と、一は現行犯、一は直接被害者をにぎられている雨宮宗兵衛で、さてこそわしがいちばん分のわるいなさけない役まわりだにゃあ、となげく所以だけれど、前者は事件発生以来すでに半月、もう時効にかかっているとしごく虫のいい解釈をくだし、後者の件は、あれから念入りに恐懼謹慎の情を示してあるのだから、もう絶対大丈夫だとあとの三人におだてられ、ケシかけられて有頂天になり、

「さてさていかに、もはやこれにて、わが智慧の無量無辺際なることを悟ったるか？」

「いやまて、もう一問」

とおどり出したのは最後の黄金仮面。

「かの荘子、外篇知北遊、第二十二に、東郭子たずねて曰く、道はいずこにありや、荘子こたえていう、ないことはねえヨ、屎尿のなかにだってあらアな――っていっているのは、どういう意味じゃ？」

頼大太郎の声である。なにがなんだかわからないが、その口調が、ちょっと可笑しかったから、一同は、弱々しく笑った。

「さっぱり面白くねえぞオ！」

と正直に不平をどなったのは大野伝六クンであったが、雨宮宗兵衛はとりあわず、

「カンラカラカラ、たやすいこと。道は糞のなかにありということじゃて。具体的にいえば、いにしえは、道は羅馬のヴァチカン宮殿に通じ、今は河原のアベマツ宮殿に通ずるというがごときじゃ。荘子は壮士、風は蕭々として柳瀬川臭し、壮士ひとたび去ってまたノコノコ帰来し、さて回顧すれば万物すべて茫々として荘周が夢に似たり。荘子が蝶か、蝶が荘子か、頼が親王か、親王が頼か、仮面の下は曖昧模糊として容易に凡俗の窺窬すべからざるところが、この世の神秘不可思議なところじゃ。どうじゃ、わかったか――ああ――ん？」

こんどは、あっとばかり、ガンちゃんがとびあがる番となる。

「や、や、や、や――」

と、闘牛のごとき、うなり声を発するより早く、舞台のうえでは、頼大太郎ハッシとばかり、雨宮宗兵衛をゆびさして、

「アアラ、あやしやな、世人をまどわす妖言邪説、つらつら思うに天下をうかがう大伴糞主とはなんじであろう。いでやその正体をあらわしてくれん、そこうごくな――」

と、どなるや否や、真一文字にとびかかる。ヒラリと体をかわして、バタバタバタ、逃げだす仮面を追って、あとのふたりも走り出す。ふたたび高らかに鳴り出したアコーディオンの音楽にあわせて、身ぶり可笑しい鬼ごっこがはじまった。

先頭のひとりが左手に逃げこむと、あとの三人が追っかける。すぐに背景の幕とうしろの壁とのあいだの細い暗い通路を走りぬけたと見えて、舞台の右手にヒョイとあらわれてくる。すべったり、ころんだり、尻餅をついたり、道化のしぐさよろしく四人の黄金仮面、伴奏にあわせてグルグル、グルグル珍妙なる逃走と追跡の場面を展開した。あんまり破目をはずしたドタ

バタ騒ぎに、沸きかえっているのは、生徒たちばかり、三人の舎監はあきれかえって、キョトンとしている。

ところで――一方。

警察からの電話に呼び出され、青雲寮の長い廊下をとおって、暗い中庭をよぎり、講堂の角をまわって、さらにいくつかの校舎のあいだを歩いていった大塩玄蕃先生、やっと校門のところへきてみたが、妙なことに警官らしい人影はついぞ附近に見あたらない。しばらくキョロキョロ探していたが、ふと気がつくと、門燈の下に一通の白い封筒が蝶のようにピンでとめてある。

（――おや？）とちかづいてみると、『キング・コング先生へ』と墨痕淋漓（ぼっこんりんり）――じゃない、新聞か雑誌の活字をひとつずつきりぬいて貼りつけた宛名。

狸に化かされたような顔つきで封をきってみると、なかにはやはり活字をきりぬいて、

『金時計は寄宿舎の洗面所にあり』

「警察って、変なことをするところだな……」

――と、まだ考えこんでいるから天下太平である。洗面所というのは、五年ばかりまえまで娯楽室にしていた、壁をへだてて食堂の東どなりに位置するところで、やがてもどってきた大塩先生、アコーディオンの音にまじって、わあッわあッというとなりのバカ騒ぎにゲジゲジ眉をひそめつつ、ツカツカと広い洗面所に入っていった。

――と、ジャーッと水のながれる音がしている。見ると、西側の壁のいちばん左手にある、やや高い蛇口――生徒たちが頭から水をかぶることが出来るようにつくった蛇口から、滝のような水が、傍の窓からさしこむ月光に銀のしぶきをはねちらしつつほとばしっている。その窓のふちにキラリとひかる金時計――電燈のスイッチをひねるより早く、ヒョイとそれに視線をやったキング・コング、なにやらそのうえにブランと垂れさがった物体を、そっと見あげて――思わずゾーッとした。

外套だ。生徒の外套だ。が、中身はある。たしかにある。しかも、窓をしめて風もないはずなのに、そいつは、ユラユラ、ヒクヒクうごいている。――先生の背すじを冷たいものがすーッとはしりのぼると、頭蓋骨のなかで北風みたいなある声となって吹いた。……

「し――死にます……ケク……」

総身の毛穴がソソケ立ち、心臓が血圧一八〇の持病をもわすれて、ドッ、ドッと鳴りはじめ、身体じゅうを麻痺（まひ）させるような速度で、氷みたいな血が、脳天に昇騰し、脳天から落下する。

このときのキング・コングの震駭（しんがい）たるや、たんなる首吊りを発見した路傍の人の恐怖ではない。身の毛もよだつ殺人者の戦慄である。しかも、生徒に対する教師、親からあずかった大切な子弟に対する舎監長という至大至重の責任をもふくめた一大衝動である。

（どうか見まちがえであってくれ……生徒がブラ下げた洗濯物であってくれ……）

ガクガクする両脚を、ジリジリと運んでキング・コングはちかづいていった。壁一重の向こ

うにとどろくアコーディオンと爆笑にも聴中枢は麻痺し、ただ地獄の底の轟音のような唸りとなって、機械的に鼓膜が震動しているばかり。

眼のまえにチラつくのは、(かってに死んでしまえッ)と怒鳴りつけたあの日の、かなしげな、恨めしげな宗兵衛の顔である。またあれからの、悄然哀然と、さまよう影のような宗兵衛の姿である。……

ついに先生は、その暗い恐ろしい一隅に到着した。高い天井からブラ下がっているその外套の裾は、ようやく先生の頭にふれるくらいである。傍からほとばしりつづける水道が、腰から下を滝のように濡らすのにも無感覚で、先生は空中を撫でまわすような手つきで両腕をさしのばしながら、

「……雨宮?……」

と、かすれた声で呼んでみた。……

するとそのとたんに、天井のあたりからグーという気味わるい声が聞えて、同時に先生の禿あたまのうえに、ペタペタペタとふってきたものがある。はっとしてふり仰ぐと――外套がブルルと物凄い痙攣の波をうって、高い窓ガラスをとおしてさしこむ蒼白いひかりに首が、――おお、ひとつの顔が、グルッとこちらをむいた!

「――ギャーッ」

と、キング・コングは絶叫した。宗兵衛だ。やっぱり宗兵衛だ! 月光にありありと、バケ

猫のごとくひきゆがんだ断末魔の苦悶の相!

舞台はもとの食堂、黄金仮面の鬼ごっこの場にかえる。

ふざけ放題にふざけちらしていた四人組、ついに舞台のまんなかにスッテンコロリンところんだ仮面を、追いすがった三人の仮面どもがとりおさえ、その両腕をうしろへねじまわしたとたん、捕虜の仮面が突然はるかの扉のかたへ顔をむけると、だれの声ともわからない夜鴉のごとき奇声をはりあげて、

「ああ、信仰うすき者よ、いまだわが世紀の大魔力を信ぜざるか。見よ、見よ、かの大奇蹟を――」

と叫んだ刹那、ギイ……とその扉がひらかれて、しずしずと一個の大怪物が入ってきた。いっせいにふりむいた寮生たちは、思わずわッと鳴りどよめいて、次の瞬間、しんと水を打ったようにしずまりかえってしまった。

見よ! それは実に、威風堂々たる大キング・コング先生であった。が――

「ああ――先生――」

と、われしらず立ちあがったガンちゃんが、笛のような声をあげたのも道理、大塩玄蕃先生の偉大なる禿あたまから両肩へかけて、ドロリといちめんに垂れさがる異様なる物質、顔面またその物質に覆われて、煌々たる電燈に物凄くもまた絢爛たる黄金色にかがやいている。

が、キング・コング先生は、それにはまったく感ぜざるもののごとく蹌踉とあるいてくると、

「し――死によった……雨宮宗兵衛……」

しぼり出すように呻いた。

「先生、先生！　アタマから――糞だらけですよ……」

と、あわてふためいてスキヤキ道具をよけながら、通路の傍の大野伝六クンが叫んだ。

大塩先生は夢みるごとく頭に手をやって、しかしまだ茫乎（ぼうこ）として灰いろの声。

「ああ――これか――なるほど――これはなんじゃ？――ああ、首吊りが、苦しまぎれのシボリ糞……」

「えっ、な、なんですって？」

と、けげんな顔の三輪巖先生。

「首吊った……となり、洗面所で、雨宮宗兵衛めが死んでおる……」

みんな狐につままれたように、キョトンと舞台の方をふりかえった。幕の裏では、なにも知らぬアコーディオンが、いよいよ嫋々（じょうじょう）と妙なる調べをかなでつづけている。突然、はっとしたようにおどりあがって、ガンちゃんが飛び出した。脱兎のごとく舞台にかけのぼり、三人の仮面にとり押えられたままの黄金仮面につかみかかると、

「それじゃ、きさま、いったい何ものだ？」

割れるような大喝におどろいて、舞台の裏でアコーディオンがはたとやんだ。ペリッとひきはがされた黄金仮面。なかからあらわれ出でたのは――これなん、やっぱり雨宮宗兵衛クン。

ケロリと澄ました顔つきである。

つづいてあとの三人も、思い思いに手ずから仮面をとる。こはなにごとといわんばかりの面がまえは、もとより頼、風早、運野のめんめんで、はては舞台の裏から、アコーディオンをかかえて、パン屋の亀さんがキョトンとした顔をのぞかせる。

ほっ――という溜息の風が満場をわたったのは、むろん、なアんだい、という意味にちがいないが、逆にビックリ大仰天、ギョッとばかり糞のかげから眼玉をむき出したまま、立ちすくんだのは、もちろんキング・コング先生で、

「あ、あ、あ、あ」

驚愕と歓喜の絶叫一声、しばし啞然と金縛りにかかった態であったが、たちまち、ピョコンとはねあがって、

「じゃ……じゃ……あいつ、誰か――誰か、洗面所へいってみてくれ！」

声に応じて安木先生、アラエッサッサとばかり駈け出していった。――

二分もすると、片手に金時計をぶら下げ、変に飄渺（ひょうびょう）たる顔つきで立ちかえってきて

「窓のところに、この時計が置いてありましたよ。その他には、なんですか――水道がひとつ、ジャージャー出てましたがネ――首吊りなんて――糞も何もございませんよ――ええ、なんにも」

「ウーム！」

とウナったのはキング・コングのみならず、舞台のうえのガンちゃんで、炯々たる眼光を四人組にかたみに移しながら、太い腕を胸にくんだまま凝然として仁王立ち。

実は、ガンちゃんは、四人を今こそやっとモーレツに疑っているのである。こいつらだ！　先夜わしを前代未聞のヒドイ目にあわせたフラチな奴も――安木君とおキンちゃんに途方もない悪戯をしかけたケシからん奴も――今夜のこの騒動も、きっとこいつらの方寸から出たにきまっとる！

が……わからない。安木先生のときは、自分は直接見ていたのではなかったから思案のほかとして、自分の場合、まったく――ウーム、いま図々しくもいいくさったように、頼が親王か、親王が頼か、そのへんが曖昧模糊として――頼があの夜の「注意」に全部出席していたというのだから、わからない。……

今夜は？――今は、しかし四人とも、たしかにここにいた。入口の扉は向こうのあれがただひとつ、舎監長をのぞいては、だれも出ていったものはない。少なくとも、この四人は、はじめからしまいまで舞台をあばれまわっていたではないか。……

――いずくんぞ知らん。ガンちゃんはいまだ想到し得ないが、この食堂と東どなりの洗面所とは、もうひとつ、直接に通ずる口がある。が、気がつかないのもあたりまえ、それは壁の左端、天井のすぐ下にあるもので、むかし洗面所が娯楽室であったころ、ストーブの煙突がとおっていた遺残物、たった直径六、七寸ばかりの小孔だ。

大塩玄蕃をおどかしたてまつったのは、やっぱり、たしかに雨宮宗兵衛なのであった。しからば宗兵衛、みずから広言したごとく、驚天動地の大魔術をもってこの小孔から壁の向こう側へ通りぬけたのであろうか？

いや、いや、通りぬけたのは首だけである。こちらの壁際に、舞台を組んだ余りの机や椅子がうずたかくつみあげてあったうえによじのぼって、外套を孔から向こうへ垂らし、ちかづいてきたキング・コングへ、ニョッキリ顔をつき出したのである。外套の中身は吊りさげた小桶（おけ）で、紐をグイとひっぱると、なかから糞汁が滝のごとく落下するという仕組みで、下にとび散った糞は、出しっぱなしの水道が、みんなザアザアながしてくれてしまった。

しかし、宗兵衛は終始百人の眼前にいたではないか？　もし分身の、もしくは生霊の能力ありとせば、これは魔術どころかこの世のものならぬ怪談といわねばならぬ。いや――宗兵衛は百人の眼前に終始いはしなかった。彼は舞台とその裏をグルグル逃げまわっていた。――実は、あの鬼ごっこの逃走者は、始めと終りだけが宗兵衛クンで、その間の大部分はパン屋の亀さんが代役を相つとめてくれていたのである。では、その一方で小止みもなく伴奏しつづけていたアコーディオンの音はいかに？　これは、亀さんが外套の蔭にかくして、あらかじめ運んでいったポータブルで、こいつが、亀さんの代役を相つとめてくれていたのである！

だから、もしガンちゃんが、ポアロのごとく明智小五郎のごとき名探偵であったら、早速舞台の裏へとんでいって、底に糞のくッついた小桶やらポータブルやらをひきずり出してきたに

ちがいない。が――惜しむべし、憐れむべし、八木節精神横溢せる熱血の快男児、到底右のごとき複雑なる二人一役、一人二役の組み合わせに想到するだけの智慧を欠き、ただひたすらにウナリあげ、ウナリおろすばかり。……

「なんだ、なんだ」

とガンちゃんの疑惑の眼光にも平気の平ちゃらで、例によって例のごとく、突然騒ぎ出した頼、風早、運野の三人。舞台の下へとび下りて、いま舎監長が遭遇したという怪事件について聞きまわっていたが、やがて、

「そりゃ不思議だ。まったく不思議だ……」

「だって、おめえ、宗兵衛はちゃんとここにいたじゃあねえか……」

「おそらく、大塩先生はお夢でも御覧になったのじゃろう……」

「しかし、糞は――あのとおり、夢じゃないぜ。レッキとした、現実の、どこへ出しても恥ずかしくない立派な糞だよ……」

等々と騒々しく、勝手なことをいいあっていたが、たちまち運野甚太左衛門、はたと膝をたたいて、

「おお、あの電話！　あれは変な匂いがするぞ。そうじゃ、そうじゃ。おういっ、大野伝六、すまんが警察へ電話かけて、さっき大塩先生に盗難事件に関する通知をなされたか、ちょっと聞いてみてくれえ！」

「なんだと――よしきた」

しばらくすると、伝六クン、電話口から屁をかいだ平家蟹みたいな顔をはなして、

「はアて面妖な。警察じゃ何にも知らんといってるぞオ！」

「そいつだ！」

と運野甚太左衛門ははねあがった。

「はたせるかな――その偽電話をかけた奴を探さなくっちゃいけない。金時計盗んだ奴も、なにか大塩先生に催眠術をかけて、お糞だらけにした奴も、そのケシからん怪人物にちがいない……」

なに、その怪人物は、パン屋の亀さんの弟分の鶴さんで、九時ちょっと過ぎ駅前の公衆電話からかけてきたもの。その内容は、ただ、

「御成功を祈ります。ヘッヘッヘッ」

といっただけ。

騒然たる食堂を見まわして、舞台にもどってきた頼大太郎が悲痛な顔をして挨拶した。

「諸君。幻妙魔怪、大悲劇、黄金仮面はいよいよこれから佳境に入るところであったが、この驚くべく、憎むべく、悲しむべき一大不祥事の勃発のため、残念ながら中止する。御諒承をねがう――」

すると、パチパチと手をたたいた連中がある。これは第十九号室の石丸や筏や一ノ瀬たちで、

やっと幻妙魔怪の大悲劇が、その実、これで首尾よく完結したことを悟ったからである。
一年生の末弘馨は、天国荘宣言がウソではなかったことをたしかに承知したものの、その破天荒の大胆不敵と悪戯には、うれしがるよりただ驚くばかり。小さな身体が昂奮にブルブルふるえている。
舞台のうえでは、パン屋の亀さんが、こみあげてくるニヤニヤ笑いをごまかすために、いきなりまたアコーディオンを奏ではじめた。飛入出演だけに気楽な顔である。――このとき、傍で悄然としていた雨宮宗兵衛が、そっとまた黄金仮面をつけた。
向こうの扉口には、口々にたずねてはしきりと首をかしげつつ、インキンとアラエッサッサが、まだ糞だらけのまま茫然たるキング・コングをまもって、ようやく廊下へ消えてゆく。

――

すべてはこのためであった。たんに糞だらけにするだけでは物足りない。最後の千両役者はその豪華なる粧いをしたまま、皆のまえに絢爛と出現しなくてはならない。一世一代の顔面筋肉運動をやって首吊りの形相を見せたのは、キング・コングをして糞のごときを問題外、感覚外とする一大昂奮乃至虚脱状態に陥らせるためで、これぞ天国荘の悪戯者たちが心血をしぼって案出した心理的トリックと称するもの。
そして、その首吊りの伏線として、カンニングを発見されたり、坂田藤十郎をきめこんだりすることが、是非とも必要な前奏曲なのであった。……が……

ああ、いま消えていった憐れな姿は、青雲寮の健児たちを叱咤慴伏せしめる鬼舎監じゃない――あの可憐な、愛くるしい宵子ちゃんの――親愛なるオヤジ殿ではないか。――
(ゆるしてくりゃれ、可憐の乙女よ……)
煮えくりかえるような食堂の騒ぎをよそに、黄金仮面のかげで雨宮宗兵衛クンは、ポロリ、ポロリと涙をこぼしていた……。

恋罪

第一の手紙

山田風太郎君。

しばらくぶりです。といっても、お手紙をさしあげるのもはじめてだが、医科大学のころのクラス・メート新納悠吉です。もっともそのころ、級友全部を十把ひとからげのような眼で見て、ひとりで何かべつのことがらに思いふけっていたような君に、その十把ひとからげ組のうちのサンプルみたいな僕のことが、まだ頭にのこっているかどうか。いま、或る雑誌をパラパラと見ていたら、偶然君の名前があったので、この手紙を書く気になったのだが——君が探偵作家としてデビューしたのは、まだ大学三年のころでしたね。小説とか文学とかいうものはサッパリわからない僕だが、それだけに、君の才気に感心して、僕は君に近づきになりたかった。そのときの問答をおぼえていますか。君は忘れたかもしれないが、僕はまだはっきりおぼえているよ。

「僕は君の文学的才能に感心している。君と親友になりたい」

「冗談いっちゃいけない」

「冗談じゃないよ」

「おれにそんな才能があるとどうして君にわかるんだ。そんなことはおれだって分りはしない。誰だって自分の才能については単なる見物人にすぎないよ——また、たとえあったとしても、そんなことがどれだけ偉いんだ。君にそれが何の関係があるんだ。——買いかぶっちゃいけない。おれのような人間より、君のほうがはるかに立派な人間だよ」

「僕が立派——僕のどこが？」

「君はいい御両親とやさしい妹と、なつかしい故郷を持って——」

「おや、どうしてそんなことを知ってるの？」

「いつか——そうそう、信州に疎開していたころ、寮で君がそんなことを涙ぐんで話してたじゃないか。家へ帰りてえなあ、家へ帰りてえなあ、と中学生みたいに溜息をついていたじゃないか」

「うん、いまでもそうだよ」

「それごらん。そんなに君は苦労もしらず悩みもしらず、すくすくとして杉の木みたいに素直で、明るくって、鷹揚で、飯はかならず五杯食うし、女はみんな天使だと思っているし——」

「よしてくれ。とにかく、君に近づきたいのは僕の勝手だ」

「そんなら、よろしい。おれは何もいわない、——ただおれは、もともと冷淡で、軽薄で、う

そばかりついている人間だ。こういう人間でなくっちゃ、探偵小説なんて書けやしない。まじめにつき合ってると、馬鹿を見る。失望する。腹がたつ。将来それが気の毒だから、いま断わっておく」
「承知した」
と僕はのみこんだ顔でうれしそうにうなずいた。君はひどく寂しそうな、怒ったような表情になって黙っていたよ。僕はちょっと心配になった。
「――君は怒っているのかい？」
「どうして？――おれは曾て怒ったことはない。心から泣いたこともない。腹の底から笑ったこともない。――君は非常によく勘ちがいをする。勘ちがいしては、ひとりで怒ったり、うれしがったりしている。――もっとも、その点こそ、君がおれよりすぐれている点なのだが……」
「君の言葉はわからない」
「わからなくてもよろしい」
「謹聴。――なぜ、いわないんだ？」
「それがおれの主義だから、このおれの主義が賢明か、君のもっている青年らしい美しい熱が尊いものか、それは未来が決定するだろう」
そう憂鬱そうにいってから、君は急にニコリと笑ったよ。

「おれにゃ恋愛はできんが、君は典型的なやつができるね。どうだい。黎子ちゃんから、まだラブ・レターが来るかい？」
「……来なくなった」
と、僕は急に心がそっちへおちこんで、しずんでしまった。何かいってくれるだろうと待っていたが、君はそのことには大して関心がないとみえて、それっきり知らん顔をしていたよ。それっきり――ほんとうに、それっきりだ。君は僕を子供あつかいにして、友好条約締結の申込みをはぐらかして、卒業するまで、僕の顔など忘れたような顔をして澄ましていたよ。
何を考えているのか、どんなことを心にとどめているのか、僕などにはついにまるっきり見当もつかずにすんでしまった君だが、君は今でも、その問答中に出て来た黎子ちゃんという娘をおぼえているか。二年のとき、例の空襲で、学校が東京にいたたまれず、信州のE市に疎開したとき、僕たちの寮にきめられた旅館の裏の弁護士の娘だ。当時まだ女学校を出たばかりだった。
美少女だった。眼が大きかった。頬は白いというより蒼味がかっていた。笑うと片えくぼが彫られて、ひどく異国的な表情になった。みんな惨憺たる東京から爆煙の煤（すす）だらけになって逃げこんで来たくせに、気楽なもので、寮について荷をとくかとかないうちに、はやくもこの娘に眼をつけて騒いだものだ。
「おい、あの裏のメッチェンね。あれはどうもオカシい。庭でぶらぶらしているおれをじっと

見ていたよ。こちらで見ると、ふっと眼をそらすが、しばらくすると、またそっとおれをながめている。あれはおれに気があるのだぜ」

「ばかだなあ、きさま。あれならおれにも変な眼つきをしていたのだぜ」

「そりゃお前の鼻のあたまに面皰が出てるからだよ」

「いかん、いかん、真珠湾の奇襲はいかんぞ。すべて、最高戦争指導会議できめて――」

「そりゃ、こっちはいいが……向こうさまがどうかね。……」

そして大爆笑だった。そのくせ、その翌日、誰か庭ごしに何か話しかけようとしたら、それはそれは冷淡な眼でにらみつけられたと、ほうほうのていで逃げ帰って来てから、みんなたちまち食い気ばかりの方へ精神を転進させてしまった。

そのなかで、どうして僕だけがその黎子という娘と仲よくなったのか。僕は恋愛はしたかったが、それまで恋愛したことはなかった。正直なところ、恐かった。その僕がその娘に迫ったのは――山田君、これも忘れたかもしれないが、黎子ちゃんを一目見たときに君が下した評言だったのだよ。

「あの顔は、どうも悲劇的な運命を予告しているね。甚だしく夫に剋される顔だよ」

その言葉が僕に騎士的勇気をふるい起こさせたのだった。

君が僕にできると保証してくれた典型的な恋愛とは、皮肉な意味でいったかもしれないが、僕は僕らしく素直にそれを受取りたい。まさに、淡い夕月のように、清純で、美しい恋愛だった。僕と黎子はよく虚空蔵山の碧い空の下や、夕焼けの林檎園で語ったが――何を語ったと思う？――日本の運命を。

日本の敗滅とともに、僕たちの恋も果敢なく散ってしまった。疎開して、ちょうど半年、焦土と化した東京へ学校とともに引揚げてから、僕はそれでも十数回、彼女に手紙をやったろうか。それに対して黎子からくれたのは、その半分くらいだったろう。いつか音信は絶えた。僕は彼女が結婚したのだろうと想像した。

その当座、僕はボンヤリ考えこんだり、君にあんな風にからかわれるとしょげたりしたが、心のうちではしかたがないと考えていた。むろんまだ学校からインターンの先はながいし、結婚などは夢の夢だ。しかしその信濃の初恋の想い出は、決して悪いものではなかった。

その程度だと思っていたのだ。僕はそれから六年間たったいまも、決してあの娘の顔を忘れはしなかったが、それは永遠に胸の底に沈んだまま、しずかに消え去ってゆくまぼろしだと考えていた。

山田君、君はむかしから、一言以て道破する警句の名手であったが、予言者的能力もあるらしい。戦後でこそ、誰も彼も日本の敗北を予知していたようなことをいい、またそう思いこんでいたような気がするが、あの疎開地にあって、勇ましい新聞と熱狂的な学生につつまれて、八月に入ってすぐ、日本はここ半月以内に降服するのじゃないか、といって皆を愕然とさせたのは君だった。「おれが賢明か、君が尊いか、すべて未来が決するだろう」といったのは、ど

のくらいの意味か、まだよくわからないけれど、なるほど君は賢明だった。級友のなかで、文通ひとつしなくても、君の消息はここにいてもよくわかるくらい有名人になってしまった。ここにいても――そして、僕は、この北国の小さな町の病院で、青春がわびしい音をたてて燃えつきてゆくのを、試験管を焼くアルコール・ランプの炎に聞いているのだ。

　そうだ、僕は君に愚痴をこぼすためにこの手紙を書き出したのじゃない。僕は君の名を雑誌で見て、急に讃辞をささげるべき義務を思い出したのだよ。小説にではない、僕は文学はむろん、探偵小説のよしあしをも判じかねる門外漢だから、その点では何ともいう資格はない。僕が讃辞をささげたいのは、君の予言者的才能に対してだ。

　一週間ほど前、僕の病院に、三十二三歳の画家がころがりこんで来た。腹がいたいというのだが、皆がちょっとよそ見をしている間に、薬局にしのびこんで、モルヒネをぬすみ出そうとしてつかまった。いかにもモヒ中らしい、痩せこけた、陰惨下劣な男だった。

　あばれるものだから警官が来たが、結局、電話でその妻君を呼んで、一応家にひきとらせることになった。その妻は、オドオドとして、ふるえながらやって来た。モヒの禁断症状に陥っている画家はそのあわれな妻を、いきなり理不尽になぐりつけた。

　そのあわれな妻が――山田君、君が「悲劇的運命を負っている」と予言した――あの黎子だったのだよ。

第二の手紙

山田風太郎君。

　この前は御返事ありがとう。君が大文豪にでもなったら値打ちがでるだろうと、お手紙はていねいにしまってある。しかし「君は僕よりも小説がうまい。去りゆく青春をアルコール・ランプに例えるところなど、君を見直すどころか、僕と代わってもらいたいくらいだ」なんて、からかってはいけないよ。しかし、君が小説を書けないために、雑誌の発行日が予定よりおくれると、雑誌社の損害が百万円だなんておどされるとは、えらいんだか、気の毒なのかわからないね。そんなに書けないものかね。エドガー・ウォーレスという小説家は、速記者に小説を口授しながら、手では同時に別の小説を書いていたという話だがね。なに、これは百科事典の挟みこみ月報で読んだ知識だ。けれど、「苦しまぎれに、君の手紙でもつかいたい」とは、あんまりあさましすぎるだろう。第一、これは小説になるものやら、ならぬものやら、見当もつかない。少なくとも、探偵小説にはなりそうもないよ。たとえつくれといわれたって、探偵作家になる条件だとか君がいった「冷淡で、軽薄で、うそばかりついている人間」とは、僕は残念ながら正反対のつもりだから、とてもつくれやしない。

　探偵小説にはならないかもしれないが、実話雑誌の口絵にくらいはなるような話が――ああ、山田風太郎君、ここまで書いて僕は愕然としている。僕はこの前、君の予言者的才能に感服し

ていると書いたね。これが予言といえるか——どうか、とにかく君は、いま責めたてられている雑誌の小説が〆切りまでになかなか書けず、印刷所の関係から、色刷りの口絵だけ、裸の女が鞭打たれている場面だけさきに書いてもらって、さてそれを見ながら何とか小説を書くつもりだといって来たね。小説家というものは、みんなそんなきわどい芸当をやるものかね。僕などから見るとあんまり不真面目で、君の将来に対して一抹の不安を禁じ得ないが、しかし——こんどだけは参った。予言者などいうべきことではなく、まったく偶然の一致にちがいないだろうが、その口絵に似た情景を僕は目撃してしまったのだ。

けれど、それだからといって、僕の手紙をつかっちゃひどいよ。その場面は、読者を釣る口絵には適当だろうが、当事者の僕にとっては、いつも悪夢としか思われないほど恐ろしい情景だったのだから。当事者、というのは、その鞭打たれる裸の女が、あの黎子だったのだ。

この前知らせたあの事件ののち、むろん僕は黎子とその夫となっているモヒ中の画家の行方をつきとめた。なんとそれは僕の借りている家から一丁もない場所に彼らの家があったのだよ。

画家の名は伊皿子十郎といった。

三年ほど前シベリアから復員して来て、しばらくのあいだ、町の中学の図画の教師をしていたそうだが、なにか破廉恥なことをして免職になった。黎子はやはり同じ学校の先生をしていて、その間にむすばれたらしい。それはいいが、彼女が現在あまり幸福ではないことは先日のあの事件でも知れきったことだが、近所の噂でもよくわかった。

「奥さんは、お若いのに、ほんとによく出来た方ですが、旦那があれではねえ」

「シベリア暮らしですっかり人間が変っちまったのか、まるで気ちがいだ。夜、奥さんがひいひい泣いている声がよく聞えますよ」

僕は或る夜訪ねていってみたよ。町とはいい条、家と家の間から、闇に畠の白い葱の坊主がまぼろしのようにゆらめいて見える夜ふけだった。

それでも五つ間はありそうだが、門の柱も朽ちかたむいているような家だ。門燈もないので、手さぐりでベルを押してみたが、鳴っている様子もない。声をかけようとして、僕は奥の方に異様な叫びを聞いた。

「いえ——いわないか——黎子！」

そして何ともいえない痛苦にみちた呻きがながれて来た。

僕ははっとしてしばらく息をのんでいたが、ふと玄関の横手の方に、なかば壊れた枝折戸があるのを見て、そっと庭のなかへ入っていった。

そして僕は見たのだ。窓から、裸にされた黎子が後ろ手に箪笥の環にくくりつけられて、夫の伊皿子十郎に鞭打たれているのを。——

「まだいわないか——強情な奴だな——いえ！」

ばさばさの髪をふりたて、痩せた腕があがると、鞭がうなって、凄惨な肉を打つ音が鳴り、のけぞりかえった黎子の白い胴に、紫のみみず腫れがはしった。

「知りません――あたし――知らない！」

「畜生！　姦婦（かんぷ）、売女（ばいた）、ようし、あくまでしらをきれよ――」

十郎は黎子を箪笥の環からとくと、床に蹴倒した。はあはあと犬のように喘ぎながら女の腕をねじあげ、

「さあ、いつ、どこで外江伝蔵とあいびきしたか、白状しろ――」

耳たぶに口をすりつけ、気味わるい声でいった。

「知りません、そんなひと――あたし、知りません！」

悲痛な声で黎子は首をふった。十郎の歯がかちかちと鳴った。彼の骸骨のような腕がうごくと女の白い身体は弓のようにうしろにそりかえった。足裏と髪がくっつきそうなほど――のびきったのどもとから双の乳房、ひかるような腹部にすっと細い血の糸さえながれた。

「いえ！　外江――伝蔵と、どこで会ったか――」

なんという悪鬼のような十郎の形相だろう。眼は血ばしってギラギラひかり、額にみみずのように青い筋がふくれあがっている。僕は心臓がはじけそうになって来た。憐れみと怒りと恐怖で。――

ああ、君が黎子を「夫に剋される顔だ」といったのはあたった。僕がその夜目撃した淫猥（いんわい）、醜怪、暴虐、残忍の光景は筆にも口にもあらわすことはできない。憐れみと怒りで、全身の骨が鳴るような思いをしながら、僕がそこへ飛び出してゆかなかったのは、いまのじぶんの立場

をかえりみるというより、まず恐怖のためであったといえば、その凄惨さが想像できるだろう。僕は灌木のしげみにうずくまったまま、肩におちて来た雨さえもしばらく気がつかなかった。その夜、濡れて帰った僕は発熱した。夜、なんどか「外江伝蔵……外江伝蔵……」とうわごとをいったそうである。外江伝蔵――それはいったい何者だろう？　むろん僕は知らないが、しかしどこかで聞いたような気がしてならなかった。君はその名に記憶はないか。僕はどうしても思い出せないのだ。

二三日たって病院にゆくと、そのあいだにまた伊皿子十郎が腹痛を訴えて来たという話だった。モヒの注射を註文したが、むろんうけつけず、警戒しながら一応診察し、レントゲンで検査もしてみた。

「どうも、胃（マーゲン）の陰翳（かげ）に妙なところがあるから、糞（コート）をもって来るようにいっておいたよ」

と同僚がいった。

「何だい？」

「胃癌（クレブス）の疑いがある――」

僕の眼がかがやいたのは、医者として不道徳であろうか。しかし人間としては当然ではあるまいか。天刑下る。僕はそう思った。

伊皿子十郎が糞便（コート）を持って病院へ来る日、僕は入れちがいに、彼の家をたずねた。黎子とはむろんこの前に病院で会っている。しかし、ふたりっきりで相まみえるのは七年ぶりだった。

彼女は黙って僕の姿を見つめた。あかるい外光のなかを急いで来た僕には、彼女が薄明りのなかへふっと消えてしまうように見えた。が、すぐに、あの大きな瞳に、きらっとなにかひかるものが浮かんで来た。

「いつ――いつ――いつ来て下さるかと――」

と彼女はひくい声でいって、よろめきかかって来た。僕は手をひろげた。が、彼女は急に身をはじかれたようにとびのいて、恐怖の眼で外を見た。

「だめだわ、あたし、もうだめだわ！」

「御主人は、いま病院だよ。黎子ちゃん」

「新納さん……あたし……その伊皿子の妻なのです！」

悲痛な叫びだった。僕は愕然として立ちすくんだ。そうだ、黎子は僕の恋人ではないのだ。伊皿子十郎の妻なのだ。彼女のおびえた眼には、僕とのあいだの空間に、黒い冷たい霧のように立ちふさがる夫の姿がうつっているようだった。

「どうして、あの人といっしょになったんです？」

彼女は頭をふっただけで答えなかった。

「あの人は何をして生活をしているんです？」

彼女は苦痛にみちた眼をとじたのみだった。

「外江伝蔵って、誰です？」

彼女は瞳をみひらいた。しかし黙っていた。

「君は幸福ですか？」

彼女はイヤイヤをした。そして、ついにたまりかねて、倒れるようにうしろの壁にもたれかかった。

僕はついに何ものをも得ずして帰った。何ものも得ず？――いや何ともいえない苦い甘い思いをいだいて。その思いは深く、痛烈だった。が、僕は、君も知るように、小説とは縁遠い男だ。七年ぶりにめぐりあった初恋の女が、悪夢のような不幸の網にからまって、のたうちまわっているのを見ながら、それ以上の劇的冒険には、足がすすまない。

僕はうなだれつつ、待っていた。伊皿子十郎に対する科長の診断を。

そしてそれを今日聞いた。

「癌だ。こんなに早く発見したのは僥倖だった。手術すれば癒るだろう」

第三の手紙

山田風太郎君。

実に思いがけないことだ。七年ぶりに、探偵作家の君に手紙を書き出したのは、虫が知らせたのかもしれない。殺人事件が起こってしまった。伊皿子十郎が殺されたのだ。しかも実に妙な殺され方なのだ。「面白そうな話なら、君の手紙でもつかいたい」と君がいって来たのは冗

談だろうが、おねがいだ、どうか僕の手紙をつかって下さい。ただし、探偵小説なら必ず解決が要るだろう。僕はその解決が欲しいのだ。恋人を救うために。——

夫殺しの恐ろしい嫌疑を受けて黎子は警察にひかれていった。彼女と夫しかいない家のなかで、あの伊皿子十郎が殺された。しかし僕は信ずるのだ。彼女は決して犯人ではない。けれど、僕の信頼だけでは彼女は救えない。君どうか君の探偵作家としての透徹した推理能力をふるって、犯人が彼女でないという解決を与えて下さい。そうしてくれたら、僕の手紙を小説につかおうが、いくら原稿料をもらおうが、僕は割前を要求するどころではない。若し稿料の払いがわるいような雑誌社なら、こっちで半年分の月給を進呈してもいいくらいだ。

とりいそいで事件を書く。

あれから僕は伊皿子十郎とちかづきになろうとつとめた。外江伝蔵とは、何者か知りたいと思ったし、それから伊皿子をそれとなく諷諫して、あのむごたらしい拷問だけは一日もはやく止めさせなくては、毎夜毎夜想像しただけでもたまらないからだ。そのためには僕はときどき彼をじぶんの家に呼んで、彼の渇望するモヒまで射ってやった。

その晩、彼は僕のところへ、リュックを背負ってやって来た。というのは、なんの用かと思うだろうが、そのリュックのなかに、彼の商売物が入っているのだ。「何をして生活をしているんです？」と僕が黎子にたずねたとき、彼女が苦痛にみちて眼をとじたきり答えなかったのもあたりまえかもしれない。伊皿子十郎は春画を描いて、あちこち売り歩いていたのだった。

春画——といっても、単にあの妖艶嬌美をきわめた秘画の程度にとどまらない、伊藤晴雨画伯の「責め」の絵と同系統に属する——しかも、あのような古風な画法ではなく、もっと生々しい鮮烈な描写で、縛りあげられ、鞭打たれ、逆さ吊り、海老責め、血の海にのたうちまわる美女とそれを襲う醜怪な男を描いて、十枚も見てゆくうちに、こちらの頭がへんに泥のような感じになる背徳淫靡きわまるものだ。これをリュックに入れてかついでいるのはおかしいが、いつか遠い町の駅でトランクごと盗られて以来、ずっとリュックを利用しているのだそうである。

僕はこれらの絵がみなあの黎子をモデルにして描かれたのかと思うと、みんな火をつけて燃してしまいたいようだった。が、歯をくいしばって十枚だけもらった。そのかわり僕は彼に注射してやるのだ。

「伊皿子さん、あなた、どうしてあんなきれいな奥さんを手に入れたの？」

「へ、へ、向こうがくッついて来たんでね」

「そりゃ羨ましいね。うれしいでしょう？」

「へ、へ、向こうはね」

彼は血によごれた狼みたいな歯をむき出して笑った。いつか、外は嵐になって、日は陰暗とくれかかっていた。僕はいままでなんどか訊こうと思って果さなかったあの名前をたずねてみた。

「あなた、外江伝蔵って知ってる?」
　彼はぎょっとしたように僕を見つめた。何にもいわず、ポケットから一通の封筒をとり出して、吐き出すようにいった。
「先生はどうしてそれを知っているんです?　女房の間男ですよ」
「…………」
　僕はその封筒を手にとって、ぎょっとした。表がきは伊皿子黎子様、裏には、外江伝蔵とある。
「けさ、女房に来たやつですがね。今夜、布袋劇場に来てくれって呼び出しの手紙ですよ。抽出にあるのを見つけたんですがね。どりゃ、女房がぬけ出してるかどうか、これから帰ってとッちめてやるとするか」
　僕は彼がリュックを背負うのを手つだってやった。彼はニヤニヤ笑いながら嵐のなかを帰っていった。——ひらめく稲妻のなかに、それはせむし男のように妖味をおびた後ろ姿に見えた。これが、僕が生きている彼を見た最後である。
　虫の知らせか、僕は胸騒ぎのようなものを感じてしかたがなかったが。ちょうど、いれちがいに病院の友人が、ふたりの女医をつれて遊びに来たので夜半まで麻雀をやっているうちに、伊皿子十郎のことなどいつか忘れてしまった。
　その夜彼は殺された。しかもその家には黎子しかいなかったのである。彼女は外江伝蔵なる

男の呼び出しにもかかわらず、その夜、嵐のためか、外出しなかったのである。ああ、なんたる不幸なことか!　山田君、僕を助けてくれ、僕は黎子を信じるのだ、僕は黎子のいうことを信じるのだ。
　黎子は警察でこういったという。
「あたし、いつ夫が帰って来たのか存じませんでした。嵐の音にまぎれたのかもしれませんが、夫が玄関をあける音も、寝室へゆく音もなにも聞えなかったのです。十時頃、寝室に灯がともっているのに気がついて、奥の居間から起きていって見ますと、夫はベッドの上に上半身を伏せてこときれていたのです。背なかに短刀が一本まっすぐつき立って光っていました。あたしはびッくりしてひきぬきましたが、もう遅うございました。床にころがったリュックは背にあたる部分が十文字にきり裂かれて、なかにある厚い塵紙も絵も恐ろしい血にひたっていました。……誰が殺したのか、いつ入って来て、いつ出ていったのか、全然あたし知りません。……」
　けれど、山田君、不幸なことに、嵐の夜の不安さに、彼女は家じゅうの窓の鍵はぜんぶ内側からかけ、夫が入って来た玄関の戸さえそのあとから内から鍵がかけてあったのだ。門から玄関に入っている靴跡も、伊皿子十郎自身のもの以外には、ぬかるみのなかに一つものこっていなかった。
　警察が、黎子をとらえたのはもっともだ。冷静に考えれば、それ以外にない。そうだとすると、黎子はなぜ夫を殺したのだろう?　なぜ——なぜ——なぜ——ああ、僕にはわかる。僕に

はわかる。黎子があの悪鬼のような夫を死の彼方へ追いやるのは当然だ。
当然だが、しかし彼女は夫を殺さないのだ。僕には黎子が、そんなことができる女ではないことがわかるのだ。僕は冷静さを失わざるを得ない。
……ことわっておくが、犯人が、十郎の帰宅以前に侵入していてあとで逃走したのではないかということはあり得ないらしい。死体を見て玄関にとび出した黎子が、鍵をあけて戸をひらいて叫んだとき、偶然向こうの往来を警邏の巡査が通りかかって、そのまま捜査にうつったからだ。要するに家に入っている足跡は、戻って来た十郎自身のものよりほかはなかった。——そして、あとで僕もいって見たが、短刀を発射する機械的なからくりなどというものも、寝室のどこにも痕跡がみとめられない。
指紋は——ああ、黎子のものただひとつ。しかしこれは彼女がひきぬいたときについたものにちがいない。あくまで黎子に対する僕の信頼に同情して、なにか僕が警察へ訴えて出られるような他の解決を君が教示してくれたら、僕はあやしむべき或る人物の名とむすびつけることが出来るのだ。
外江伝蔵。……
山田君、僕をたすけてくれ。なんとかほかに考えようがないか。それを教えてくれれば、この手紙をつかってもいい。もし〆切りにまにあわなければとりあえずここまでを前篇としてつかってくれたまえ。しかし、あとで必ず君の考えた解決を僕にしめしてくれなければならない。

どうか山田君、友情と探偵作家の名誉にかけて、僕と黎子を救って下さい！」

第四の手紙

山田風太郎君。
僕は無量な感慨をこめて、また——いつであったか、君が「おれの修養の条々だ」といっていた、こんな言葉を想い出している。
「知っていながら、知らぬ顔をすること。忠告したくても声をのんでいること。癇癪が起きても笑っていること。かと思うと、腹もたたないのに狂気じみた憤激をしめすこと。相手をけむにまいて駄法螺をふきたてること。まじめなのか、ふざけているのか、見当もつかない様子をすること。極度な熱中と度はずれた無関心の態をまぜあわせて、天才的風貌をよそおうこと。——要するにとぼけること。……私は、こういう人間になりたい。……」
僕はどうして、そんな君の言葉を想い出したのか。——山田君、君はとうとう僕に返事をくれなかったね。
君は実にひどい男だ。いかにも僕は、あの手紙をつかってくれてもいいといったにはちがいない。しかし、それは、黎子と僕を救ってくれるという条件つきの上でのことだ。その条件を君は果さなかった。しかも、図々しく、僕の手紙ばかりは勝手に発表してしまった。
図々しく？——いや、まさか「君は知っていながら、知らぬ顔をする」信条を地でいったわ

けではあるまい。いくらなんでも、原稿の書けない苦しまぎれとはいいながら、僕の手紙をつかった以上、あの解決を与えてくれるつもりではあったのだろう。けれど、とうとうそれが考えつけなかったのだろうと僕は推量する。

　つまり、君の探偵作家としての能力の貧しさを、みじめに曝露したわけだ。君の惨憺たる修養の結果、やっと世間を化かすほどたくみにつけた天才的風貌なるものの仮面がひッぺがされたのだ。

　ああ、山田君、君は怒りはすまいね。——君に怒る権利はちっともないはずだ。この前の手紙を出してから、僕がどんなに君の明快なる解答を待ったか、待って待って、待ちもだえた僕の苦しみを、どうか察してくれたまえ。そして君はついに僕に待ちぼうけを喰わせたのだ。

　いや、僕は怒っていやしない。実は怒るどころではない。僕はうれしがっているのだ。

　いま、つい筆がすべって君を侮辱するようなことを書いたが、これは待ちぼうけを喰わされた憤怒のためではなく、歓喜のあまりの筆の狂舞だと思ってくれたまえ。

　山田君、僕は解いたのだ。

　黎子だけしかいない密室的家屋に、その夫が背後から短刀をつきたてられて絶命していたその秘密を僕はついに解いたのだ。警察は常識的に黎子をつかまえていった。若し僕に黎子に対する愛がなかったら、僕は茫然としてこの事態を見送っただけであったろう。しかし、僕は黎子の無罪を信じる。犯人が、黎子でないとすれば、はたして誰か？

　あれから、僕は警察にお百度をふんだ。むろん、容易に会わせてくれやしない。が、警察も彼女の必死の否認と、なにやら確信ありげな僕の執拗な嘆願に、やッと面会させてくれた。一週ほど前のことだ。

　僕の聞きたいのはただひとつのことだった。

「黎子ちゃん。……外江伝蔵ってひとは、ほんとにいるの」

　なぜ、そのような疑惑が、僕の脳裡に浮かんで来たのか。その名こそ、あの伊皿子十郎の恐ろしい拷問の責め言葉ではなかったのか。また、十郎が帰っていった夜、黎子が町の劇場であいびきするはずの男ではなかったのか。——けれども、僕は信じていた。彼女が、夫以外にあいびきするような男は、うぬぼれではないが、僕よりほかにあるはずはないということ。いや、彼女がいまや真に愛しているのは、僕以外にないということを。

　薄暗い、冷たい取調室で、蒼じろく痩せた黎子は首をふった。まだ悪夢でも見ているような、ボンヤリした表情だった。

「あたし、知りません、そんなひと……」

「伊皿子君がその名を執念ぶかくくりかえしていたのは？」

「わからないんです。あたしには、全然おぼえのない人の名なんです。いつのころからか、急にそんな名をもち出して来て、あたしを……」

　黎子は急に両掌を顔におしあて、しゃくりあげた。僕の頭に、あの六年前の可憐な少女時代

の彼女の姿がよみがえった。刑事の眼をもわすれて、危うく僕は彼女の肩を抱きしめるところだった。

「可哀そうに」

と、僕は叫んだ。

「あれは、伊皿子君の妄想だ」

愕然として唇をひらいたまま、じっと僕の顔を見つめたまま声もない黎子に、僕はいった。

「若し、君におぼえがないなら、外江伝蔵という名はモヒ中毒で歪み濁った、伊皿子君の頭に浮かんだ、架空の嫉妬妄想だ」

僕は刑事の方にむきなおった。

「聞いて下さい。あの殺された伊皿子君は、ひどいモルヒネ中毒者だったのです。この中毒そのものによる、脳の荒廃はむろんのこととして、ひどい肉体的衰弱から、妻に対する執拗にして荒唐無稽な嫉妬妄想をおこし——つまり、ありもしない情夫などをじぶん勝手に考え出して、妻を虐待することはよくある例です。その虐待が、どんなにむごたらしいものであったか、どうぞこのひとの身体をしらべてみて下さい」

黎子の頬に悲痛なあかみが散った。

「そして、その虐待が、ほとんど変態性を帯びていたことは、伊皿子が描いていたあの醜怪な絵からも想像して下さい。その怪奇なサジズムのきわまるところ——ついに伊皿子は、死んでまでも、架空の姦夫を利用して、貞淑な妻を無実の罪に泣かせようとしたのです」

「な、なに、被害者は、自殺だったというのか」

と、刑事は眼をむき出して叫んだ。

「そんな、君……短刀は背なかにつき立っていたんだぞ！」

「それが彼の恐ろしいトリックだったのです。あなたは、あの寝室の屍体の傍にころがっていたリュックの背にあたる部分が十文字に切り裂かれて、なかにある絵や塵紙がおびただしい血を吸っていたのを御覧になったでしょう。若しこのひとが主人を殺したのなら、そのことをいったい何と御解釈になりますか……？」

「リュックが……どんなトリックを……」

「つまり、短刀はあらかじめ、リュックのなかに水平に入れて、まわりに紙や絵をつめて固定してあったのです。そしてそのリュックを背負ったまま、壁におしつけると、短刀はぐさりと背につき刺さる。苦痛をこらえてリュックを肩からはずすと、背にあたる部分の布は十文字に切り裂かれているのですから、短刀は背につき立ったまま、リュックからはなれて、そして本人はばたりとベッドにうつぶせに倒れてしまう……」

「そんな……そんなきちがいじみたことを……」

「本人は、実際に正気の健康人でなかったことを考えていただかなくてはなりません」

僕は必死にいった。必死のなかに、快感があった。推理の快感だ。ああ、山田君、僕にその

ような能力があろうとは、君の想像もおよばぬところであったろう。僕でさえも知らなかったのだ。その能力をよびおこしたのは恋の力であった。狂乱の悪魔が、死をかけてなお地獄の鎖でひきずってゆこうとした哀れな女を――僕の恋人を救い出す快感で、僕の顔は燃えたった。

「し、しかし、あんた、いくらモヒ中だって、死んでまで奥さんをいじめようなんて……わしにゃ信じられん！」

「刑事さん！　どうか病院へいって訊いて下さい。伊皿子十郎は、このあいだ胃癌だと診断を下された男です！」

ふかい沈黙がおちた。

……黎子の唇がわななき、顔がくしゃくしゃっとゆがんだと思うと、次の瞬間、彼女はわっと僕の胸に泣きくずれて来た。ばかのように立ちすくんだままの刑事の姿もあらばこそ、僕は生命のかぎりに黎子を抱きしめていた。

僕は、ついに黎子を救った。どうだ、山田君、君にばかにされていたこの新納悠吉が、絶妙の推理力を発揮して、初恋の女性を無実の囹圄（れいご）から救い出したのだぜ。……いや僕は君を笑って、得意になりたいどころではない。僕は感謝したい。あらゆるものに対して――上は全能の神から、下は凡庸なる探偵作家山田風太郎氏にいたるまで。いや、これはまた失礼。どうぞ、僕の歓天喜地ぶりに寛容の眼をそそいでくれたまえ。僕は黎子を救った。あの悪魔的な夫からばかりじゃない、尊敬すべき君の予言――彼女の悲劇的運命そのものから永遠に救いあげたのだ。

そして僕も青春をとりもどした。僕は黎子と結婚するだろう。

第五の手紙

山田風太郎様。

とつぜん、お手紙を差上げます。あたし、信濃のE市に医大のみなさまが疎開なさっていらしたころ、寮の裏に住んでいた黎子です。……いろいろとかなしい目にあって、いままたことばにもつくせない恐ろしい破目に追いつめられています。どうぞお救い下さいまし。このお手紙はこの町の警察のなかで、とくに刑事さまのおゆるしを得て、筆もみだれるままに書いているのでございます。

新納悠吉さまから、いろいろお聞きでございましょう。あのE市から、いろいろ家庭的なふしあわせからはなれなければならない事情がございまして、そのあげく伊皿子十郎という恐ろしい男の妻になってしまいました。そして、この町でまるでこの世の話とも思われないひどい目にあって、しあわせにも新納悠吉さまに救っていただきました。

血みどろの悪夢のような事件から約二ヵ月……それは反対に、天国の夢のような生活でございました。この夏のおわりにでも、新納さまと結婚するはずだったのでございます。あなたさまのお話をうかがったのも、このあいだのことでございました。

「黎子、山田風太郎って探偵小説家を知ってる?」

と、いつか、にこにこ笑っておっしゃるのでございます。

「いいえ、知りませんわ」

「そうだろう。本人はうぬぼれて、おれの原稿がおくれると雑誌社の損害が百万円だ、なんていばっているが、まだかけ出しの三文作家らしいからね。雑誌社にうそばかりついて、さんざん迷惑をかけているらしい。それも道理だ。この間の伊皿子の事件でも、詳細知らせて解決を依頼したのだが、なんの推理も立たなかったようだ。僕もあんな頭のわるい男が、まさか探偵作家になろうとは思いがけなかった。……」

「山田風太郎って、だあれ? 御存知の方?」

「黎子も知ってるはずだよ。ほら、E市のころさ。山田って変な男がいたじゃないか。貧乏の神様みたいな顔をした……」

「まあ、あの人が——」

山田風太郎様。どうぞお怒りにならないで下さいまし。こんなことをおっしゃる新納さまのお顔は、あなたさまもきっとごぞんじのあの、あかるい、くったくのない笑顔でございました。そしてこのあいだの恐ろしい事件のごじぶんの推理を子供のようにおいばりになるのです。ただその得意さから、あの方にはめずらしいそんな悪口をおっしゃったので、けっしてあなたさまをそんなふうにお考えではなかったことは、すぐそのあとからたいへんほめられて、そして

あたしがいまこうしてあなたさまにおたすけを請うほどのかんがえを吹きこまれたのでもおわかりでございましょう。

山田風太郎さま。どうぞ黎子をお救い下さいまし。新納さまはむごたらしい死をとげられ、そしてあたしが恐ろしい疑いのまとになっているのです。

二三日まえの日曜日の午後のことでした。新納さまはこの町の警察の刑事さまとあたしといっしょに、ボートにのって海水浴のひとびとの群れている浜をこぎ出していったのです。この刑事さまは、このまえの事件から、すっかり新納さまとお親しくなって、ちょうどその日は非番なそうでございました。

碧(あお)い空、ああ、なんという呪わしいほど明るい午後だったことでしょう。オールをにぎっていらしたのは新納さまでございます。そう申せば、新納さまはなぜか顔いろわるく、へんにしずんでいらっしゃいました。

「あんた、おなかの具合でもわるいんじゃない? 代ろうか」

と刑事さまも、それにはお気づきの御ようすでした。そのとき、新納さまのおっしゃった言葉が妙で、あたしには意味もわからないのです。

「うん。どうも変なかんじがする——」

「変な?——どんな?」

「殺気。……死神の匂い。……」

なんという不吉なことばでしょう。そばに坐っていたのはあたくしだけです。まわりは赫耀とした真夏のひかりに満ちているばかりでした。

まさか、それからまもなく、あの信じられないような事件がおこるとは、どうして想像もできたでしょう。やがて誰もそんなばかばかしい問答はわすれてしまいました。ボートは沖の小島と青い岬のあいだをすぎて、さびしい或る小さな入江に入って行きました。ちょうど、急な山の裏手にあたっていて、浴客はもとより、海鳥にさえわすれられたような、白い砂浜がひっそりとひかっております。

舟に弱い刑事さまは、ひとりで砂浜にあがって煙草をふかしていらっしゃいました。あたしはボートで歌をうたっていました。ボートの先を遠浅の底につけたまま、新納さまはオールを投げだして、空罐で水をしゃくい出したりなさっていましたが、やがて身ぶるいして「さむい――」とつぶやきながら、上衣を足もとによせかけて、あおむけにボートの底に寝て、しばらく空をボンヤリながめていらっしゃいました。実際そのとき、太陽に雲がかかって、入江いったいが、ちょうどあの白日に眼をとじてふっと開いたときの気味わるい薄暗さに満ちたのでございます。

「東海の――小島の磯の白砂に――われ泣きぬれて――」

刑事さまが、がらになくそんな歌をうたい出されたのも、きっとそのものさびしさになにかお感じ入りになったのでございましょう。おきあがられた新納さまはその方をむいて、にこに

こお笑い出しになりました。

「おうい、新納さん、何を笑うのじゃ。実にわが日本は、美しい国じゃないか」

「美しい……奇怪な国ですよ」

といって、新納さまはあたしにお話しかけになりました。

「黎子ちゃん、聖書のせりふじゃないが、予言者って、悲劇的で、喜劇的なものだね」

「え？」

「予言者ってものは、例外なくじぶんの歴史的使命を自覚しないで、出現し消えてゆくから、かなしくって、滑稽だ。人間でもそうだが、国にもそういう喜劇的な国家があるよ。日本なども、発狂的にあばれまわって、その結果、アジアの殖民地が続々独立すると、こちらはこんどはケロリとして西洋の番犬……」

日は雲から出て、あたりはまた風とひかりに満ちわたりました。が、そんなのんきなようなしかつめらしいようなことをおっしゃる新納さまの顔いろが鉛のように沈んだままなのを見て、あたしがおもわず腰をうかせたのは、それから五分とたたないうちのことでございます。

「新納さん、どうかなすって？――」

「うむ。……背なかがなんだか寒いような――」

あたしは立ってゆきました。新納さまの背をのぞきこんで、はっと立ちすくんだのはその瞬間でございます。

「あっ――」

　どう叫んだのかわかりません。目まいがしてくずおれるようにその恐ろしいものに手をのばすと同時に、新納さまはがくっとおからだをふたつにおりまげられました。無我夢中にあたしがぬきとったのは、果物ナイフでございます。碧い海に血の虹がびゅっとはねあがり、さけるまもなく上半身真っ赤に染まって、発狂したようにふりかえるあたしの眼に、ギョクンと砂浜に立ちあがって、義眼みたいにこちらを見ていらっしゃる刑事さまの姿がうつりました。

　ああ、山田さま、刑事さまの眼に、そのときの光景が、まるであたしがとびかかって新納さまを刺したように見えたとしても、それが当然だとお考えになるでしょうか。あたしも……あたしも、その一瞬あたしが新納さまを刺したのじゃないかと、酔いのような錯覚をかんじたくらいです。あの方の背後は、ただ無限の大空と大海原ばかりでございますもの。

　けれど、あたしは知らないのです！　知らないといって、またなんといって解いてよいのかわからないのです。どうしてその果物ナイフが飛んで来たのか、どうして新納さまがそんな目におあいになったのか。……

　刑事さまにもおわかりになりません。けれど、刑事さまは虚空をわたって来た死神の仕業だなどとはお考えになりません。あたしがやったと思っていらっしゃるのです。そして、いまとなっては前の伊皿子の事件すらも、もういちど考えなおしてみなくてはとおっしゃるのです。

　あたしが、どうして伊皿子や新納さまを殺すわけがあるのでしょう。あたしは、伊皿子にさ

えも貞節な妻であり、新納さまはもとより魂の底から尊敬していたのです。……刑事さまは精神鑑定をしてもらう必要があるとおっしゃいます。

　あたしはほんとに気が狂っているのでございましょうか？　気が狂ってこのふたりを殺さないまでも、気が狂ってこのふたりの血みどろの最期の光景を幻覚したのではないでしょうか？

　山田風太郎様。

　どうぞ哀れな黎子をお救い下さいまし。この前は、あたしのほかに、新納さまがあたしを信じて下さいました。いまは、あたしを信じるものはないのです。いえ、あたしさえも信じきれないのでございます。ただ……ただ……あなたさまだけ。どうぞ、黎子を、この哀れな運命から救い出して下さいまし。……

第六の手紙

　山田風太郎君。

　しばらくぶりです。僕が死んでから、約一ヵ月たつ。……

　おどろきましたか。死人の手紙。死んだとみせかけて、実は生きていた、などというちゃちなトリックではないよ。実に僕は断乎として死んでいるのですぞ。といって、君の探偵小説と御同様に、たねをあかせば、実につまらんことです。この手紙は僕が死んでから約一ヵ月後に君あてに出すように、或る知人に託しておいたのだから。

君がいかに快刀乱麻を断つがごとき大探偵作家であるか、黎子には大いに吹聴しておいたはずだから、或いは彼女は君に救援をもとめたかもしれない。が、僕の予想するところによれば、君はただ黙然と思案投げ首をつづけるばかりで、なんの期待にこたえることなく、黎子はこの一ヵ月、警察の重囲のなかで惨憺たる苦悩にのたうちまわったことであろう。

世にもばかばかしいトリックを、いやにもってまわった探偵小説ほど、世にもばかばかしいものはない。——どうせ、図々しく、あさましい君のことだから、この僕の手紙をとくとくとして、じぶんが作ったような顔をして、雑誌に発表することだろうが、僕の死んだ経過をちょっと書いただけで、読者はすぐになにもかも看破してしまうだろう。——もったいぶることはない。僕は自殺したのです。

僕はボートのあかすくいの鑵にナイフを逆にたて、そのうえに仰むけに寝たのです。いたかったよ。——いや、この手紙を書いているのは、まだその一週間もまえのことだから、さぞいたいだろうと思う。それをがまんして起きあがって、背なかをつたう血はナイフをつきたてたままだから、そんなに出ないと思うが——足もとに上衣をかきよせて、浜の刑事君はもとより黎子にもしばらく感づかせないつもりだ。

なぜ、僕は死ぬのか。黎子に、新納悠吉殺害容疑者として惨憺たる苦悩をなめさせんがためである。

なぜ黎子は惨憺たる苦悩をなめなくてはならないのか。彼女は新納悠吉の厳粛悲壮な恋をう

らぎった女として、その復讐をうけるに値いするからである。

厳粛悲壮の恋？——おお、山田君、僕は殺人の罪をすら犯して彼女を僕の腕にとりかえそうとしたのだった。伊皿子十郎は自殺したのではない。彼は死ぬ必要はない。科長は診断した。

「癌だ。こんなに早く発見したのは僥倖だった。手術すればなおるだろう」

かかるがゆえに彼は僕の手で殺さなければならなかったのだ。しかし、伊皿子十郎は自宅で殺されたではないか。彼が帰宅して、十時ごろ黎子がその屍体を発見した夜、夜半まで僕のうちで、病院の同僚と麻雀に興じていたではないか。——そうだ。彼が絶命したのは彼の家の寝室だった。しかし背なかに短刀をつきたてられたのは、そこから、一丁もはなれた僕の家だったのだ。

山田君、あの夜僕はモヒ注射だともったいをつけて彼の背なかの一部にノヴォカインの局所麻酔をほどこしたのだ。注射部位は謂わゆる皮下組織でもよいと思ったが、肺まで刺入しようと考えたので、肋膜の痛覚を麻痺させる必要があり、肋間神経にむかって伝達麻酔をおこなった。こちらが医者だから嬰児の手をねじるようなものだった。リュックを十文字にきりさいて、この短刀をそのなかに没入させ、血液を吸いとらせるようにしたのも僕だった。心臓でさえも、短刀がつき立てられたままなら、相当時間、生きていることがあるではないか。短刀は栓の役をはたし、それに気づかぬ伊皿子十郎はすまして自宅に帰っていったのだ。

山田風太郎君、君に手紙を出したのは、探偵作家たる君がはたしてこのトリックに感づくか

否か、その測量のためだった。すくなくとも第三信までは。——

では、あの外江伝蔵の黎子呼び出しの手紙はどうしたのかと君はふしんがるかも知れない。あれは僕が書いたのだ。僕はその夜、あらかじめ黎子を外へ出して、あらぬ濡衣をふせいでやろうと思ったのだ。けれど、彼女は外へ出なかった。外江伝蔵……これは、そのための洒落ではないが、もっとひとを小馬鹿にした、恐るべき諧謔だった。

「ねえ、黎子、僕はひとつ気になってならないことがあるんだが……」

山田君、君はその名に記憶はないか。僕は、架空の姦夫だとじぶんでいったくせに、どこかで聞いたことがあるような気がしてならなかった。そのことが心に魚の小骨みたいにひッかかっていたのだ。

「外江伝蔵って、ほんとにこの世にいない人間？」

「いないわ」

「いつかの手紙は？」

「あれは伊皿子が自分でつくりあげたことに決ってますわ」

その自信にみちた黎子の顔が、僕にはなんともいえない不安に感じられて来た。そのとき彼女は僕の腕のなかにいた。たえず全身をうごめかしながら、放心したように宙を見つめている黎子には、あきらかに何年かの人妻のなまなましさがあった。僕には、六年前の黎子でないのがかなしかった。

「どうして？」

「外江伝蔵……。それ落語に出て来るひとの名じゃあないの？」

と、彼女はいった。そして笑った。

どうだ、山田君、あっけにとられたろう。聞いたおぼえがあるも道理、落語の「気養い帳」の主人公の名じゃないか。大富豪で大学者で、大艶福家で、そのくせ誰も御存知ない。それもそのはず、ただ御本人がそう思いこんでいるだけだという、あの落語の人物の名だったのだ。

僕がほとんど恐怖を感じたのは、その名がこれほど人をくった由来のものであったと知った意外さのせいではなく、黎子の媚笑になんともいえない恍惚たる不敵さをみとめたからだった。……彼女は知っていたのだ、外江伝蔵を。それはモヒ中の十郎の大脳がかもし出した荒唐無稽なものではなく、黎子ともなれ合いの架空の共有物であったのだ！　なぜか、なぜか、なぜか。

……

「おい、黎子。……」

僕は悲鳴のようなさけびをあげて起きなおっていた。

「き、き、きみは……伊皿子にいじめられて……不幸じゃなかったんだね？」

「——ぶって！　ぶって！　あたしをぶって！」

と、彼女は突然身もだえしてさけんだ。僕は蒼白になっていた。おお、僕はなんたることをしたのだ。サジストは伊皿子十郎ばかりではなかったのだ。黎子もまたマゾヒストだったのだ。

世にこれほど貞節な夫と妻があろうか。甘美にして戦慄すべき鍵と鍵穴。

「待ってくれ、それなら、それなら……」

僕ののどには痰がからんだ。

「黎子、もし伊皿子君が死んだのは、僕の仕業であるとしたら……」

黎子の眼には恐怖のいろは浮かばなかった。彼女は身を焼く陶酔の炎の追憶にのたうちまわり、酔っぱらっていた。その黒い眼は僕を見た。憎悪と憤怒と軽侮が闇黒の火焔のように燃えたつ眼であった。

「それなら、あなたは馬鹿よ！」

いちどでも、山田君、人間がこれほど恐ろしい眼と嘲笑をあびせかけられたことがあるだろうか？

突然、僕は笑い出した。気が狂ったように笑い出した。

黎子が、そのとき口ばしった僕の言葉を、どれくらいの正気でうけとったか僕は知らない。また知る必要はない。僕の哄笑は、僕の厳粛にして悲壮な恋のすべてが崩壊するひびきでもあった。僕は激怒した。僕はじぶんの犯罪が感づかれたから、激怒したのではない。人間は悪を指摘されても怒るものではない。辱（はずかし）められて、はじめて憤怒に顔をそめるのだ。僕は、じぶんの全身全霊をあげての恋を辱かしめられて激怒したのだった。かくて彼女は一ヵ月の惨憺たる苦悩の復讐を受けなければならなくなったのである。

山田風太郎君、僕は君を尊敬する。いつか僕の気性について君の道破した一言を、僕は異様な肌さむさを感じつつ想い出す。

「君は非常によく勘ちがいする。勘ちがいしてはひとりで怒ったり、うれしがったりしている。——」

ああなんという恐るべき勘ちがいだったろう！

けれど山田君、僕の黎子に対する愛には勘ちがいはない。それゆえに彼女の罰は一ヵ月でかんべんしてやろうと思うのだ。……やっぱり、君の予言したように、僕は典型的な恋をした方かも知れない。……

もはや探偵作家としての君になんの註文をもち出す必要はない。すべての犯罪は僕がくみたて、その解決も僕自身がすませてしまったわけだから——ただ友人としての君におねがいする。この手紙がつきしだい、黎子の容疑を解いてやってくれたまえ。かんがえてみれば、可哀そうな女であった。やはり、悲劇的な星のもとに生まれて来た女だった。

では、一週後、碧い海の上、白日の下で、彼女をあわれみつつ、彼女をにくみつつ、彼女をゆるしつつ、彼女を罰しつつ、僕は死んでゆく。さようなら。

ドン・ファン怪談

一

五人の大学生が、料亭「万福」の美しいロビィで、途方にくれていた。

「万福」という名は、京都の宇治の黄檗山万福寺からとったのだろう。東京でも数軒しかない普茶料理をたべさせる料亭である。が、このロビィは、大きな壁面にかけた古めかしい掛軸と、かすかに匂ってくる茶と香のかおりに禅味を感じるくらいで、床にしかれた真紅のカーペットといい、深ぶかとしたソファといい、一流の西洋式ホテルの豪奢なロビィに、ほとんどひけをとるまいと思われた。

門からながい敷石をふんでやってくる客は、いずれも最高級の身なりをした紳士淑女ばかりである。アベックも少なくないが、あまり若い組はない。

「お料理は二千円、二千五百円、三千円とございますが……」

「じゃ、三千円のものを二人前」

客は、ロビィの隅で、おごそかにたててくれた緑色の泡立つ抹茶と点心を口にすると、つぎ

つぎに奥の座敷に去ってゆく。五人の大学生のまえには、誰も茶も点心をも持って来るものはないのみならず、端然と帛紗をさばき、お点前をしている女中頭は、ときどきじろっと彼らをにらみつける。

五人の大学生は、途方にくれた。彼らが、この豪奢な料亭のロビィで途方にくれたのは、つぎのようないきさつがあるのである。

駅弁大学という名が出たほど、戦後大学がふえたが、彼らも、もと旧制高校の昇格した或る田舎大学の学生だが、この暑中休暇の最後の一週間を利用して、東京にはじめてあそびにやってきた。あてにしたのは、旧制高校時代の卒業生ながら、とにかく先輩で、いま進歩的小説家として、全国の大学生の偶像的存在たる堀口善平先生である。文化人名簿でみつけた先生の住所がこの万福という料亭なので、たずねてきてみて、それがあんまり豪勢な家だから労働階級の代弁者たる作者の住所にしてはおかしいとは思ったが、会ってみると、恐ろしく快活に、

「いやあ、ようこそ、遠慮なく遊んでいってくれたまえ」という、ありがたい、洒落た御託宣であった。

御託宣は大いにありがたかったが、三日もたたないうちに五人の大学生は参ってしまった。ここは泊ろうと思えば泊ることができるようになっていて、夜具も羽根蒲団である。それに汗くさい身体をもぐりこませるのに逡巡を感じるほどの気の弱い五人でもなかったが、とにかく食い物が肉気のない精進料理ときている。おかずは、小指ほどの芋だの筍だのひねしょうがだ

の、ちょこちょこと皿にばらまいてあるだけで、どこがもったいなくて、こんなものに二千円も三千円もはらって食いにくるのか、気どった紳士淑女の気がしれない。

悲鳴を訴えようにも、さて堀口善平先生が、会って文学談をしてくれるどころか、日中どこへゆくのか全然いないのである。そして夜になると、ぐでんぐでんに酔っぱらって、妙な女をつれて戻ってくる。酒のあとの普茶料理は、そりゃうまかろう。——と、そのうちに一大事が惹起した。善平先生が、飄然と北海道へ講演にいってしまったのである。

とりのこされた五人の大学生は狼狽した。それとなく先生の御伝言でもなかったかときいてみると、

「なにもございません。だいたいあの先生はこの二、三年ここにお泊りでございますけれども、おはらいはもう一年ちかくとどこおっております。まあ、いざとなれば雑誌社の方からいただけばと思って、それだけをたよりにしておりますが……」

というおどろくべき返事であった。

五人の大学生は、すっかり途方にくれてしまった。休暇はもう終ろうとし、帰郷しなければならない。いや、それよりも、昨夜あの女中頭がやってきて、婉曲に、しかしいかなる劣等児にもわかるように、この一週間の勘定を請求したのである。一回の食事代ですら、二千円から三千円もとる家である。五人の勘定書は想像しただけでも、恐怖すべきものであった。——ところが、彼らの嚢中には、五人合わせて、ひとり分三千円平均しかないのである。

「いや、どうも、ひどいことになったもんだなあ」

と、また何度めかのためいきをついたのは、乾甚太という満面にこぼれんばかりのニキビをたたえた大学生で、さもさも自分ひとりが被害者であるといわんばかりの面がまえだが、なに実ははじめから誰かにもたれかかるつもりで、財布のなかには七百円足らずしかない。

「だから僕は、故郷でメッチェンとあそんでいる方がいいといったんだよ。五人も色々約束していたのに」

と、色の白い、のっぺりした土岐啓之介がいう。そのくせ、東京行の提案にまっさきにとびあがって賛成したのは自分だということを忘れている。

「こうなりゃ、誰かひとり居残りをおいて、あとは一日も早く帰っちまうか、それとも、みんなここにいて、電報為替で家からとりよせるほかはないが……」

銀行屋の息子の伊奈平馬がこういい出すのに、どこかうすぼんやりした感じのある左右田次郎が腹をおさえながら、

「ねえ、僕が居残りの役をつとめるから、なんとか勘定をかんべんしてくれないかな。とても何万円も送ってくれそうもない……」

みんなの視線は期せずして、石谷専右にあつまった。これはいちばん才気満々たる顔つきの、実際また頭脳最優秀だと自他ともにみとめている大学生だが、この男がこんどの計画を発起し、だんぜん堀口先生に費用を払わせることをうけあったのである。

「おい、石谷、責任者は君だぜ」

そう伊奈に切口上でいわれても、石谷専右は、特別にどぎりとした様子もなくみんなと同程度の困った顔つきを、けろりと庭の満月にむけていたが、やがて何を思いついたのか、にやりと笑った。

「そう、この期におよんでぶうぶういったってしようがないよ。あっはっは。何ごとも経験だ。またたのしからずやだ」

「然り、それは払わなきゃならん。そこで諸君、ちょっと妙な相談があるんだが」

「妙な相談？」

「うん、というのはだ。君たち、いつも、誰もがガール・フレンドが何人あるか知れないようなモテてモテてしようがないようなことをいってるだろう？　僕はねえ、うぬぼれの研究、というテーマで将来博士論文をかいたら非常に面白いだろうと考えてるんだが…」

「なるほどおかしなことをいい出したね。それが当面の問題となんの関係があるのだい？」

「だからさ。これからみんな町に出て——荷物はおいてあるし、僕らの素姓もこの家にわかってるんだから、一晩のうちに、誰もが、なんとかひとりの恋人を見つけ出し、それをものにしてここへつれてくる。そいつを較べて、いちばん美人をつれてきた奴は、勘定を免除してやることにしようじゃないか。そして、二番目以下は順々に、一対二対三対五の割合で費用を受持

とう。そうきまったら、家から金を送らせるなり、何なり、とにかく、責任をもつことにしてはどうだろう？」

みんな顔見合わせて、しばらくたってから、いっせいににやっと笑った。

伊奈平馬がいう。

「面白いことを考え出したね。しかし、無一文でとび出すのかい？」

「いや、それでは電車にものれん。さっき、ひとりあたり三千円くらいの金はあるということだったろう？　だから誰もがその三千円を資金とする。どいつも東京に親戚も知人もないそうだから、それで同条件になるよ」

乾甚太がいう。

「しかし、つれてきた女が恋人であるという証拠は？」

「みなのまえで、接吻することにしよう」

土岐啓之介がいう。

「美人はいいが、その等級は誰がつけるのだい？　いずれがあやめかきつばたで、おれの女がいちばん美人だといい出したら、水掛論じゃあないか？」

「はははは、なあに、そうそう美人があつめられるものか。おれはまあいいとしてあとは衆目一致しておかめおたふくと——いや、それにしても順位があるな。そうだ、じゃあこうしよう、いつもおれたちの飯の給仕に出てくるお春ちゃんて娘がいるだろう？　あの娘にみせて、きめ

てもらおうじゃないか」

　左右田次郎がいう。

「さてこまったな。僕は、べつに、ガール・フレンドが何人もあるような、モテてこまるようなことをいったおぼえがないから、そんな競技にかり出される責任はないのだがな」

「自信がないかね？　降参するかい？」

「いや、べつに降参はしないが……僕は僕自身の標準からしてはたしてそんな理想の美人が一夜のうちにつかまえられるかどうか疑問に思うだけで、やれば君たちよりも、まあなんとか……」

「あんなことといってやがる。なんだかいやに歯ぎれのわるい自信だな。しかし、ほかのみんなはやるね？　賛成するね？　おい、やるそうだ。君だけやらなけりゃ、君の不戦敗と認めて、勘定はそっちの負担とするがいいかい？」

「そうだ、そうだ、それにも賛成だ」

　ほかの連中は手をたたいてさわいだ。みんなさっきまでの意気銷沈ぶりはけろりとどこへやらまるで、ダービーのスタートについた若い悍馬のような鼻息であった。

　――こうして、彼らは、髪にていねいに油をつけ、髯をそり、靴をみがき、一金三千円なりを胸中ふかくおさめて、思い思いに美女を求めて夜の大東京に散っていった。

　あとにただ左右田次郎がのこった。

いちばん横着者だが、出なければならんとは考えている。腰が重いのは生来のことだが、そればかりではなく、夕方から少々腹工合がへんなのである。精進料理はすぐに腹がへる。それでゆうべ厠にゆく途中厨房の傍を通りかかると俵づめのさつま芋があったので、二三本失敬して、厠のなかでなまのまま食ったのがたたったらしい。

　うすぼんやりと、下履をつっかけて庭園におりた。樹林あり泉水あり燈籠ありの芝生の庭のあちこちには、風と月には座敷よりもと、毛氈をしかせた風流な人々が酒を酌んでいた。庭のまんなかには、すすきや団子の皿をのせた経机がおいてあった。今夜はちょうど仲秋名月なのである。尤も、ラジオは台風十二号の接近をつたえて、遠い地平線には気味わるい乱雲がもやもやとうごいている。

「へえ、晩げになりました」

　ふいに声をかけられて、おどろいて足もとを見下ろすと、月光のしずんだ芝生のうえを、もそもそと這っているものがある。

「なんだ、お春ちゃんか」

　彼らのところにこそお給仕に出てくるが、まだ女中ともいえない、庭ばたらきの小娘だった。まだ東北から出てきて半月にもならないそうで、顔じゅうすすけたように真っ黒で、眼ばかりどんぐり然とぎょろぎょろとした娘だから、この料亭では女中にもつかえまい。言葉も東北弁まる出しで、ちかごろたったひとつおぼえた東京言葉は「シツレイしちゃうわネ」という文句

だけらしいからおそれいる。
「お春ちゃん、東京、面白いかい？」
「おもしれス」
「しかし、たいへんりっぱな料理屋にいれられて、安心だね。東京には恐ろしいところや悪い女蕩しがいっぱいいて、よく田舎出の娘さんがうっかりその罠におちるそうだが」
「やんだあ。おれ、そげな浮気者でねえス」
「はははは、まあ、お春ちゃんなら大丈夫だ。僕はお春ちゃんをみると田舎のどんぐりを思い出して、はやくかえりたくなったよ」
「あんれ、シツレイしちゃうわね。おめえさまこそドンドと家さけえった方がええでねえか！おっかね台風くるってば！」

二

乾甚太は新宿の、ネオンに彩られた裏町を歩いていた。
台風がくるというのに、大きなキャバレーのはなやかな窓は、夜鴉のように乱舞する影に彩られている。あのなかには、さぞ孔雀のような美女もいることだろうとは思うけれど、東京にはビール二三本のんで何万円とかとりあげたという社交喫茶もあるそうだし、げんに、それほどではないにしても、「万福」でさえあの通りだから、ちょっと三千円ではうっかり近よりかねる。やむなく、赤い提燈をぶらさげた蜂の巣みたいな飲み屋のまえをゆきつもどりつしてみても、その奥に坐っている女は、とうてい女王蜂という名にはほど遠い、カマスの干物みたいな中年増ばかりであった。

知人ひとりない東京だから、どうしたってプロのなかから見つけ出してくるよりしようがないと、乾甚太は思いこんでいる。それにしても、どうしてその女を獲得してくるか。
時間がないから、自分の特性を極度に利用しなければならん。ところで彼の特性といえば、頭にも男ぶりにもさして自信はないから、まず強壮なる肉体である。絶倫の精力である。大学のボクシング部員できたえた、一メートル七十七センチ、八十キロの威力である。ボクシングばかりではない、野球もやればラグビーもやる。彼は大学スポーツの華であった。いま大学を卒業して職につくのに最も有力な武器は、学問よりもスポーツだそうだ。まして女の心をつかむに於ておやで、大学のある町で、秀才の石谷専右の名を知っている女は数少ないが、乾甚太の男性美を知らない女性はない。——と彼はかんがえている。
夜がふけて、酔客の影も、それを呼ぶ女の声も、ネオンのひかりもしだいにまばらになってくる。暗くなったからといって、はだかでまかり通るわけにはゆかない。いやいや、その男性美を見せるには、ともかくどこか明るい店に入らなければ話にならん。
乾甚太はだんだんあせってきた。
（いっそ、この暗がりで、美人が通ったら、腕力で掠奪しようかしらん）

そこへパトロール・カーがはしってきて、彼のこの途方もない着想をいっぺんに粉砕して通り過ぎた。――と、そのヘッド・ライトが、一瞬に照らしてきえた闇のなかに、彼はそのとき幻の水仙のような女の顔をみとめた。

あれだ！

天恵にちかい一瞥だった。乾甚太はとびあがって、つかつかとその方へあるき出した。こいねがわくば、女給かダンサーであってくれ！

「お茶、のみません？」

やさしい、小さな声がかかった。彼は凝りかたまった心臓がとけるような思いがした。

「やあ、のみましょう！」

と、大快諾をあたえて前に立つと、遠明りにその女は、まだ十七八の、ほんとうに透きとおるレースからでも作られたような繊細な美女である。

「あのねえ、その横町を入った、ネスバというお店なんですけど」

「お茶だけのみゃいいんですね？」

「そりゃ、お好きならお酒でもビールでも。……あら、学生さん？」

「ええ、学生です。だから、あんまり金がないんです。……三千円くらいしかないんですがそれでまにあいますか？」

「三千円？……まにあいますとも。ほほ、面白い方」

女のその笑い声も感じがよかったが、そのネスバという小さな社交喫茶につれこまれて、青いけぶるような灯のなかでみると、その女給は、ほとんど乾甚太の理想の美人にちかかった。おかしなもので、八十キロの甚太の好きなタイプは、風にもたえぬ蛾眉細腰の佳人だが、その莉香という娘は、掌にでものりそうな、小柄な、ほそぼそとした身体で、頬に愁いの翳がさし、ときどきかるい咳をしてハンカチを口にあてる。

「ウイスキーでもおのみになります？　ほほ、三千円ベースは決してこえませんから、だいじょうぶ」

莉香という名は本名だそうだ。字をかかれても甚太には釈然としないくらい妙な名だが、きいてみると、琉球の娘だという。

しめやかに彼女の語るところによると、沖縄が戦場に化する直前に九州へにげてきたが、ふたたび還れないことになって、家財も山林もうしない、いまは老父も中風で寝たまま、たまま金をこの店のマスターに借りたのが返せなくなって、ここにつとめることになったという。薄命の佳人、悲運の美女、ますます以って理想的だ。

なんとか、自分のたのもしいところ、颯爽たるところを見せてやるチャンスはないものかと乾甚太はぐるぐるあたりを見まわした。すると、まるでおあつらえむきの人間と事件がそこに待ちかまえていた。

いや、その人間どもにとっては、さっきから甚太をおあつらえのカモだと待ちかまえていた

のである。うすぐらい隅っこでウイスキーをのんでいた三人組のうち、甚太と視線の逢った一人がずいとたちあがって歩いてきた。
「おい、おれの顔にゴミか傷でもついているというのか」
「いや、べつに……」
「それならなんでおれの顔をじろじろみるんだ。その理由をきかせてもらおうじゃあねえか」
むちゃくちゃないいがかりであるが、これがこういう町の与太者の、いちばん手軽な常套手段である。やっと、それと気づいて、乾甚太はニッコリ笑った。ニッコリ笑って人を斬る、という映画の国定忠治のあのニッコリを思い出しながら。……
「ははあ、そういえば、鼻がまがって、面白い顔をしているな」
「なにっ？　この野郎、——このヘッぽこ野郎——きいたようなことをいいやがるな。てめえだって、人さまの顔にいんねんつけられるような面じゃねえぞ。くそ、どっちが面白え顔か、表へ出て、おれの仲間にくらべてもらおうじゃあねえか。やい、表へ出ろ、表へ！」
「よして！　学生さん！　……ねえ、かんにんしてあげてよ……このひと、田舎からきたばかりで、まだ何もしらないんだから……ねえ、よしてったら！」
莉香はすがりついた。乾甚太はそれをふりはらって、悠々と表へ出る。なんだか姿三四郎になったような愉快な気分である。
夜靄にけぶる街燈の下に、彼は莞爾たる笑顔をふりむけて、「支度は——」といいかけた。

その脳天にいきなりビール瓶がたたきつけられて、彼はひっくりかえった。ひっくりかえったところへ、別のひとりがとびかかって、首を抱きあげると、甚太の身体は水車のようにぶンまわされて、またアスファルトにたたきつけられた。レスリングの手をしっているらしい。
「ぐわっ……ぐわっ」
乾甚太は、なぐられるたびに、蛙みたいな悲鳴をあげた。みるみる瘤だらけになった顔から血がながれ、血が涙にまじり、涙に、向こうに立っている莉香の姿が、雨中の花のようにゆれた。
と、みるまに、ころがるように莉香が走ってきて、またビール瓶をふりあげた男の手にしがみついた。
「もうよして……さもないと——」
その男は、どうしたのか、急に犬みたいなうなり声をたてて、顔をしかめた。傍にたちはだかった男はけげんな表情になって、
「おや、さもないと——どうするんだ。おまえ。……」
「あたし、あなたたちと喧嘩しなきゃならないわ。ほんとにこまるんだけど——」
三人とも、きょとんとして、この弱々しい娘を見まもっていたが、やがてひとりがにやにやして、
「ねえちゃん、それじゃ喧嘩しようか」

と、抱きついた。

莉香はさっと飛び立って右足を横に、左足を半歩前にまっすぐにふみ出したかと思うと、風の一閃するように白い手をふった。とたんにその男は、脇腹をおさえてつんのめってゆき、愕然とした他のふたりが両側からおそいかかったとみるまに、ふたりとも一撃のもとに霰のようにはじかれて、一間も先へすっとばされてしまった。

乾甚太は、じぶんの脳髄と眼がへんになって、こは夢かまぼろしか、という状態におち入ったのかと思った。

「しようがないんだわ。かんにんして……」

莉香はかなしそうにつぶやいて、おずおずと近づいてきたが、血だらけの乾甚太の頭を見て、

「あなた、しっかりして。……これじゃとても歩いて帰れないから、タクシーで送ってあげましょう。万福とかいう料理屋だとおっしゃいましたわね。どこなんですの？」

そういいながら、かるがると八十キロの甚太をかつぎあげた。甚太はかるくつかまれた腕のいたみに、

「あっ」とあかん坊みたいな悲鳴をあげた。

「あら、ごめんごめん、あたし、ちょっと本気になると、ほそい青い竹でもにぎりつぶしてしまうの。……」

「君は……君は……」

「あたし？　あたし、ほんの手ほどきなんだけど、父から唐手をならったことがありますの。父はいまでこそ中風ですけど、少林流の唐手の師範もやってた糸満玄城と申します。……」

そうほそぼそといいながら、この怪力無双の佳人は、風のようになよなよと、風のようにかるがると、いまは完全に失神した乾甚太をはこんでゆくのであった。

三

伊奈平馬は、銀座にやってきた。

銀行経営者の息子だけあって、彼の大学に彼ほど小遣の潤沢な学生はない。いままでの経験によると、湖のまわりを小半日自動車でドライブして、別れるときに、ちょいとしたアクセサリーか何か買ってやって、それでぐにゃぐにゃにならない娘はいなかった。まことにカサノヴァがいったように、お世辞とプレゼントで射落せない女はないのである。だいたい彼は、この世の中のことで金で解決できない問題はないと確信している。それは一見ふとどき千万な思想のようだが実際そうなのだから仕方がない。教養も趣味も快楽も美も、金で買えないものはひとつもない。この世の不幸や不満は、愛情の問題をもふくめて、九分九厘までは金のないことに原因している。金があってもいかんともしがたいあとの一厘は、芸術の創作くらいなものだ。

その黄金絶対論者が、徒手にしてこの恋の競技に参加したのだから、いちじまったく途方にくれた。三千円ぽっちの金では、この場合、無きに等しい。

せめて十倍の三万円あってくれたらと思う。そうすれば一流のキャバレーか芸者家にいって、その金をそろえて交渉すれば、いかな絶世の美人でも、明日「万福」で接吻くらいさせてくれる可能性はある。商売女じゃなくってもそのくらいの金額なら承知しそうな奥さん乃至令嬢は、銀座にウヨウヨあるいているのじゃないかとも考える。

伊奈平馬のまず計画したことは、女性よりも、その女性をとらえる金を手にいれるということであった。乾甚太とおなじように、彼の頭の隅を、ちらっと恐ろしい言葉――自動車強盗？――がかすめたが、育ちがいいから、むろんそんな思案はすぐにきえてしまった。もっと危険性がなくって、もっと確実性のある方法がある。

彼は、銀座の宝石店にはいった。飾窓や壁沿いのケースに、真珠、紅玉、エメラルド、ダイヤ、金、銀、プラチナは蛍光燈に映えて、キラキラと地上の銀河のようにかがやいている。――彼はそのまえをぶらぶらと歩きまわった。むろん、宝石泥棒なんかやるつもりはない。平馬は背中じゅうを眼にして、うしろを歩く貴婦人たちを監視している。

（美女を得るためには金が要る。金を得るには――）

将を射んと欲すればまず馬を射よという諺がある。彼は馬を求めていた。

田舎町ではむずかしいけれど、どんなロマンも怪奇もころがっているらしい東京の銀座だ。きっとそれはあるにちがいない。……

予想にたがわず、二三時間のちに彼はたしかに馬をさがしあてた。

それは、ジョウゼットのカクテルドレスをきて、おそろしく肥った、四十四五の貴婦人である。耳にイヤリング、頸にネックレス、腕に銀の指環――もっともこれはアクセサリーというより、このごろはやっている磁電手頸環なるものらしい。――要するになんだかアフリカ大陸のマサイ族みたいにいっぱいぶらさげているが、金持らしいことはたしかである。

さっき、店のまえで車からひとりおりてきて、車のなかにこう挨拶した。

「ほんとうにお美しい花婿花嫁さんでございましたわね。……あたしのようなやもめには、今夜は眠られないかもしれませんわ。ほッほほほ」

結婚披露宴からの帰りとみえるが、これでこの婦人が未亡人であることがわかった。いよいよおあつらえむきである。

ただ、馬は馬でもすこぶる河馬に似ていた。伊奈平馬にとっていたしかゆしの思いであるが、それもこの場合、むしろ好条件かもしれない。のみならず、銀環で空中の電気をとらえて万病をなおすなどというインチキな健康法を採用しているところからみても、そう賢いとは思われない。――ますます以って好都合である。

しきりに陳列してあるガラスのケースをのぞきこんでいる彼女の傍へ、伊奈平馬はちかよった。

「おばさま。……こんばんわ」

こう、いやになれなれしく呼びかけられて、婦人はおどろいてふりかえる。

「まことに失礼ですが、少々おねがいがあるんです」
「……なんでしょう」
「ぼく、北陸の或る大学の学生なんですが、少々事情がありまして、小さいとき別れた母をさがしに、夏休みを利用して上京したんですが、うっかりしているあいだにお金をすられてしまったんです。ただ幸運なことにネクタイ・ピンがひとつのこりました。古物商に買ってもらおうとおもっていたんですが、ばかばかしいほど値が安いものですから、それで、あのう……」
と、彼は口ごもりながら、さっき別の店から三千円で買った金のネクタイ・ピンをとり出した。
「どうも、なんといっていいか、冷汗がでるんですけれど、御主人にでも買っていただけませんでしょうか。おねがいです。おばさま。……いえ、べつに決してあやしい者じゃありません。品物はさっきの店でも保証してもらいましたし、それから、ここに学生証もありますから」
河馬に似た婦人は、まじまじと彼を見上げ見下ろした。学生証を見るまでもなく、平馬の色白な、育ちのいい顔つきを見てとって、やや安心した表情である。
「あたしねえ、それが主人がないんでございますよ。……けれど、それはどなたにさしあげてもいいんですが……それよりそのお母さまはお見つかりになりまして？」
「いいえ、それがとうとうわからないんです」
心の中で、しめた！　と思いながら、平馬はさびしそうに溜息をついた。

貴婦人はなおもながいあいだ、じっと彼の優雅で若々しい姿を見つめていたが、やがてそっとハンカチをとり出して、わざとらしく頬のあたりをぬぐった。尤も涙か汗かそれはわからない。
「お可哀そうに。……」
と、しんみりとつぶやいた。
「わかりました。学生さん。わたしにも生きていれば、ちょうどあなたぐらいの男の子がございましたので、なんだか身につまされますわ。ネクタイ・ピンのことはまたあとで御相談ということにしまして、それじゃおこまりでしょう、なんなら今夜一晩くらいは、あたしのおうちにでもお泊りになったらいかが？」
作戦は恐ろしいほどみごとに図にあたった。もっとも、今夜一晩じゅう泊められてはかなわない。なんとか十二時前には首尾よく解放されて、あらためてかんじんの美女をさがしに出なければならないが、もうここまでくれば、しめたものだ。
平馬は心中小躍りしながら、びっくりしたように、おずおずと尻ごみした。
「えっ？　それはあんまりあつかましくって……」
——しかし、ふたりは、それからまもなく夜の車に同乗して、田園調布にある、菱住富子というその貴婦人の邸へ疾走していた。
見込たがわず相当なブルジョワらしい邸だった。富子夫人の部屋でもカクテルをのみながら、

ふたりはとりとめもないことを話した。ネクタイ・ピンのことは問題外で、場合によっては、何万円でも用立ててあげてもいいようなことを夫人はほのめかした。――場合によっては？

「ねえ、坊や」

いつのまにか、坊やになってしまった。カクテルに酔った富子夫人の小さな眼が、キラキラと異様なひかりをはなっている。

「ねえ坊や、坊やと呼ばせてちょうだい。あたしの息子を思い出させてちょうだい。ああ、あの子を抱いていた肌ざわりを思い出すわ。もしあなたを抱いていたら、きっと大きくなったあの子を抱いてねたような気がするでしょう。……」

そうら、おいでなすった。これはもとより覚悟のうえであったが、昂奮した夫人の顔をみると平馬の背すじにかすかな戦慄がはしる。

「嵐のまえのしずけさかしら？　なんだかひどくむし暑いわねえ！」

夫人ははだかになってしまった。はだかになると、顔さえみなければ、これが更年期の女性とは思えないほど、白い、あぶらぎった、巨大な肉塊であった。そのまえの平馬は、まさに河馬にふんづかまえられた小兎のようにみえた。

嵐はきた！　ものすごい情熱の嵐が彼を蹂躙した。とてもいいかげんにあしらうなどとんでもないことで、彼は、いつしか全生命力をあげてその嵐に抵抗し、死闘せざるを得ない窮地におち入っていた。

狂乱の鼻あらしが平馬を吹きどよもし、水爆的エネルギーが平馬のかぼそい手足をねじまげ、ひねりまわし、もみくちゃにした。十二時までに解放されるどころではない。その時刻、彼は夫人の白象のごとき肉体の下で、半失神状態にあった。

「おばさま、実は……」

ようやく意識を恢復してそういいかける口を、たちまち歓喜のうめきをあげながら、夫人の巨大な唇が覆ってしまう。そしてまた、第何号目かの猛台風が、彼の全身に襲いかかるのである。

「坊や、坊や、坊や、坊や、坊や。……」

伊奈平馬の頬はげっそりとこけ、骨はぐたぐたにたたきのめされ、眼はふかくおちこんでしまった。

――いつしか夜が白んで、そのひかりがぶきみな黄色をおびて網膜を刺戟したとき、伊奈平馬は、もはや時間的にではなく、肉体的にふたたび美女獲得の途につくことが不可能なことを知った。

彼はヤケクソになって、夫人に白状した。けさまでに、是非とも「万福」のロビィへひとりの美人を同伴してゆかねばならぬ約束をむすんだこと。――

「おお！」

と、菱住富子夫人はみなまできかず大きくうなずいて、べんべんたる乳房をたたいて叫んだ。

「まあ、そんなことなら心配ないわ。あたしをつれていっていいことよ！」

四

土岐啓之介は、渋谷駅前の広場にある忠犬ハチ公の傍のベンチに腰を下ろしていた。

南の台風が送ってくる雲の潮に小さな月がながされているようだ。遠い駅と店々のネオンをうけても、ここの柳のかげは暗い。せかせかと忙しそうにやってくる通行人は、ときどきたちどまって不安そうに空の気配を仰ぐことはあっても、ほとんどベンチの方をみることはなかったが、偶然電車のスパークやタクシーのヘッド・ライトが一閃するはずみに、青白いひかりに浮いた土岐の顔をみて、ふっと息をのんで見まもった。――土岐啓之介はそれほど美男だったのである。

まことに彼は、しんしんとろりとよい男――であった。つまり女にもにおわしい美男で、むろん彼はそのことは他人の十倍くらいみとめているから、石谷専右がこんどの提案を出したとき、この競技、われ勝てりと、心中に最もたからかに凱歌をあげたのは彼だったかもしれない。

いつか石谷が教えてくれたが、中国に「潘驢鄧小閑の五つがそろえばとげられない恋はない」という諺があるそうだ。潘とは潘安という絶世の美男の名であり、驢とは驢馬大のしろものをもつことであり、鄧とは鄧登という金持の名であり、小とは若いこと、閑とはもとよりひまなことである。

さてこのなかで、金と若さと時間とはこんどの競争では同一条件におかれているし、驢馬の点についても、まさか大道を公然と誇示してあるくわけにもゆくまいからオミットすることにしてあとにのこっているのは美男ぶりだけである。――おれが勝たないわけはない！

土岐啓之介は、自信満々として坐っている。女にもにおわしい美貌というが、さてこうしてみていると、女に美人が少ないのに一驚せざるを得ない。それでも、ときどきちょっと渋皮のむけたのが、ふと光茫に浮いた彼をみておどろいたようにたちどまることがある。彼が艶然と、微笑んでみせると、彼女たちはどぎまぎとなり、いつまでもなんべんもふりかえる。しかし啓之介はもう知らん顔をしている。彼は望みが大きいのだ。

ありきたりの、田舎の町にも村にもころがっていそうな美人なら、おれがつれてゆく甲斐がない。これこそ東京という人間の大海原の深海からとれた人魚だと、誰もがはっと眼をむくような神秘さと凄艶さをもった超近代的女性でなければ！

――夜空に浮かぶデパートの夜光時計が、美しい音いろで十時を告げ、十一時をつげる。

「……おっ」

ようやく、じりじりしはじめた土岐啓之介は、突然腰を浮かせた。

暗い広場には、いつしかひそやかに立つ女の影がふえてきていたが、出来得べくんば素人の令嬢か人妻を手に入れたいと思っていたから、大して注意の眼をむけなかったので、さっきから柳のかげをゆきつもどりつしている、すらりとした和服姿の女を関心の外においていたが、

なにかのはずみでちらっとこちらをむいたその女の顔が、ぴしりと青い火花のように彼の網膜にやきついたのである。

啓之介はあるき出し、遠廻りして、いろいろな角度からためつすがめつしてみた。それからすぐそばまで近づいて、図々しくじっと見つめた。美人である。日本人ばなれのした美人である。陰翳がふかく、きりりとしまって、まるでギリシャ彫刻のヴィーナスみたいだ。しかも決して混血娘ではなく、その全身にまつわるもやもやした妖気と色っぽさは、たしかに日本の古風な女特有のものだ。――こうなればプロだろうがアマだろうが問題外である。

土岐啓之介は、ぞーっと総毛立つほどの蠱惑（こわく）にふらふらと吸いよせられ、すぐまえにたって自信満々たる千両のえくぼをなげかけた。これで相手が、ぞーっと総毛立つほどの蠱惑を感じてふらふらと吸いよせられないはずは断じてないのである。

ところが、その女は、ぷいとそっぽをむいた。

啓之介は首をふった。そんなはずはない、この女は鳥目なのだろうか。

「もしもし」

たまりかねて、そう呼びかけながら、彼の心にふと一抹の不安がかすめた。ひょっとすると、この女はプロではないのではなかろうか。しかし、それにしても。……

「もしもし、あのう……」

「うるさいわね。さっきから、さかりのついた、犬みたいに、あたしのまわりをうろついていて――」

啓之介は脳天からぶたれたように、ぽかんと口をあけた。じぶんの耳をうたぐった。が、こちらをじろっと見ている女の眼はあきらかに氷のように冷たく、しかも氷のように美しかった。

「学生さん。あたしゃたしかに淫売さ。けれど、ちっとぜいたくな淫売でねえ。学生さんにゃすこし荷がかちすぎると思うし、またこっちも客えらびさせていただきますよ。あたしゃねえ、もっとたのもしげな、ゴリゴリした、髯をはやしたくらいの客が好きなのよ。あんたみたいな、のっぺりにやけた色男はだいッきらい」

啓之介はいつまでも、阿呆みたいに立ちすくんでいる。その眼から、涙がぼろぼろこぼれおちた。女はそれをみても、とんと感動した様子もない。

それから三十分ほどたって、彼女は、なるほど骨ばった髯だらけの男をつかまえて、何か交渉しはじめた。それから、啓之介のところにゆらゆらとやってきて、

「あんた、一時間ほど待っててくれるなら、遊んであげてもいいわよ」

と、ささやいて、男とどこかへいってしまった。

土岐啓之介は孤影蕭然（しょうぜん）と立っていた。広場にはもうほとんど人影もない。一時間待った。女はまだこない。しかし啓之介の瞼の裏には、その女の妖艶な顔が眼華のようにこっている。邪険にされればされるほど、その女の恋しさがいやつのって、もはやほかの女をつれて帰るなど思いもよらないのだった。

二時間たって女はひとりでやってきた。夜露にぬれつくした彼をみて、はじめて女は笑った。けれど、ちっとも同情の匂いのない腹立たしさと困惑のこもった高笑いであった。

しかし、それからつれてゆかれた迷路の奥の或る家で味わせられた恍惚境こそ、いまだ曾て経験したことのないものだった。惚れた弱味でおどおどしている啓之介を、女は実にたくみにもてあそんだ。甘美な、魔術のような女の技巧は、はじめ吐気をもよおすほどの強烈な安クリームの匂いが、いつしか麻痺させるような魅力あるものに変ってゆくとともに、この田舎大学のドン・ファンをほとんど羽化登仙の世界につれていった。

信じられないほどはやい夜明がやってきたとき、ようやくわれにかえった土岐啓之介は、例の約束を思い出して、女に料亭「万福」までいってくれるようにたのんだ。

女は、彼の恐れていたように拒絶しなかった。ただ、にやにやと妙な笑いを見せて承知した。電車にのって、「万福」へゆく駅におりる。そこから料亭への途中にひろい草っ原があった。

「あんた、まだそこまで遠いの？」

「え、まだ三百メートルほど――」

「それじゃとてもあたしがまんできないわ。……ちょっと失礼」

女はそういうと草っ原へかけ出していったが、あたりに身をかくす物蔭ひとつないのをみてとると、もう辛抱しかねたように仁王立ちになり、大きく裾をまくりあげて、堂々と立小便をはじめた。

――これをみた土岐啓之介の表情はどうであったか、ながなが説明するのも野暮なくらいである。あくまで明るい白じらとした朝のひかりのなかに、彼は、まるでこの世のものならぬ幻想でもみているような思いであった。

「あれは……あれは……」

しかし、啓之介はいままで、ちっとも気がつかなかったのである。そも、その女は――その人物は、いかなる変幻の魔法を使ったのであろうか。

その人物は、悠々ともどってきて、顎をなでながら、啓之介をみてにやにやと笑った。明るい白じらとした、朝のひかりのなかに、その顎にはうすい髯さえ生えているではないか。……

「ヒ、ヒ、ヒ、万福へいったら、もういちどきれいなトイレ使わせてね。つい、おひげ剃るのをわすれちまったわ。ほんに、あたしとしたことが、女だてらにアラレもない。――」

五

石谷専右は夜の神田の古本屋をぶらぶら散歩していた。

そもそも彼は、はじめからこんどの競技になんらかの確信があって口火をきったわけではない。あのまま事態が進行すると、全責任が自分におしつけられ、金勘定は自腹をきらされ、そうでないまでも、のちのちまでもみんなの愚痴とこちらの弱味のもとになりそうな危険を感じたからであった。

――といって、全然自信がないわけでもない。彼は曾てみなに「潘驢鄧小閑」という中国の諺を教えてやったが、それは、まごうかたなき古い支那の諺だ。近代的恋愛に於て、このほかに、これ以上に、絶対必要なものがひとつある。それは才気というものである。

もっともこの才は、ノーベル賞文学作品をかいたり、中間子理論をかんがえたりする才ではない。そんなものは女にはわかりっこない。それは恋愛する才能そのものである。そして石谷専右によれば、恋愛的才能とは、かなしいことに、またありがたいことに、それは軽薄さと図々しさの別名にほかならなかった。少なくとも、それを眼つき、口つき、手足の運動に、縦横に具体化できる才能であった。

ただし、単に軽薄さと図々しさというだけなら、あの連中もことごとく容易ならん強敵である。ただ石谷は、その軽薄さと図々しさを、相手の女の性質に合わせて緩急自在に使用することにかけて――とくに、適用すべき相手のえらび方について、抜群の眼力を持っていると自負している。

「ばかな奴らだ。きっとあいつらは商売女ばかり追っかけまわしているだろうな」

たった三千円で、どうして一流のプロ女性が獲得できるものか、だいいち、はじめからそんな場所にのりこめやしない。したがって、かならずうす汚ない二流三流の泥水のなかをさがしまわるにきまっている。ところで、そんな泥水のなかでは、たとえどんなにひかりかがやいてみえる存在であっても、白日のもとにつれてくれば、どこか沁みこんだ薄墨色の生活のしみが、

きっと浮きあがってくるものなのだ。

「おれは、絶対に清潔な素人娘をさがす」

こういう競技で、一見しただけではあとわかる水商売の女を連れてゆくほど、陳腐な、智慧のない話はない。そんな女がずらりとならんだなかに、たったひとり、清楚でういういしい女子学生でもつれてゆけば、みんな、かならず、あっと敗北を意識するにちがいない。

たとえ一等にゃならなくっても、二等三等でも、放っておけば全勘定をおしつけられるところだったのだから、充分採算があうわけだ。

――彼のあるく一間ばかりさきに、ぞろぞろと七八人の女子学生の集団が、さざめきつつあるいてゆく。夜間大学が終った時刻なのである。

彼女たちは、一軒の大きな洋書ばかりの古本屋に入った。

「……ある？」

「見つからないわ」

そんなことをいってしきりに何かの本をさがしている彼女たちのなかに、たしかに、十人並の顔が二つ三つあった。

――とにかく糸をなげてみよう、かからなくったってもともとだ、と石谷専右は、例の恋愛的能力の適用を決心した。

「ボンソアール」――今晩は――

とやってみた。女子学生たちはびっくりしてふりむいて、きょとんとしている。ひとりが、傍のひとりの肘をつついて、「へんなひと、はやくゆきましょうよ」といった。こいつら、簡単な仏蘭西語も知らんらしい。

と彼は失望した。

するとそのとき背後できれいな、流暢な声がきこえた。

「ボンヌール・ロンシャン・ルボオ・エレガンス・エトアール・トア・エ・モア」

ふりかえって——石谷専右は眼を見はった。眼前の女子学生たちとは雲泥の差ともみえる。きりりとした、みるからに才気煥発らしい美しい娘が、にこにこと涼しい笑顔を彼にむけている。

これだ！　と心にさけんで彼はわくわくしたが、さあ彼女のいった言葉がわからない。とりあえず、

「メルシイ・マドモアゼル」——ありがとう、お嬢さん——

とやった。すると、相手の娘はけろりとして、

「あら、いまいったのは、銀座にある喫茶店の名よ」

背後で、わっと女子学生たちが笑い声をあげ、石谷専右は生まれてはじめて赤面した。あっと思いつつ、つかつかと寄って、

「ウイ、お嬢さん、どうです、その喫茶店へでもゆきません？」

と、手をとったのは、さすがに図々しさの天才と自認するほどあって、間一髪のきりかえしであった。

これにはその娘もめんくらったのか、手をとられたまま、思わず知らず店を出る。うしろで女子学生たちはぽかんと見送っているらしい。

しかし、彼は、じぶんがたしかに初太刀のかすり傷をうけたことをみとめた。これは油断のならぬ相手である。彼はむくむくと、鮮烈な闘志と興味とスリルのわきあがってくるのを禁じかねた。

せめて、この娘がじぶんといっしょに歩いて、平然たる近代性というか軽快性というか、そういう度胸をもっているのがこっちのつけめである。神田の裏街をあるき乍ら、

「お嬢さん学生ですか？」

「ウイ、アカデミー・フランセーズの夜間部にいってるの」

これはいよいよ油断ができない。もう仏蘭西語は禁物としようと、彼は心中におじけをふるった。

——と、その裏街に一風変った喫茶店があった。わざわざ古風な燭台に蠟燭をともして、硝子ごしに客の顔の明るくなったり暗くなったりするのが、いまの世にめずらしく神秘的な世界にみえた。ふたりはその中に入った。

コーヒーをのみながら、その娘はじっと聡明そうな眼で彼を見つめた。

「あの曲、お好き？」
「ああ、あのレコード、ぼくのいちばん好きな曲ですよ。じつにいいですねえ、あれは、バッハの――」
「あれはポ・ト・フーの半音階的幻想曲よ」
石谷専右はまた赤面した。どうもバッハのような感じがするが、クラシックな音楽についてほとんど素養がないので、めったなことはいわれない。ポ・ト・フーなんて妙な音楽家はきいたことがないが、君子危きにちかよらず。
「アカデミー・フランセーズは面白いですか？　仏蘭西語をならって、どうかなさるおつもりがあるんですか？」
「ええ、たまらなく面白いわ。いまド・ロボーズの〝アスパラガスの怒り〟という作品を読んでいるんですの。あれは十五世紀の神学的世界をえがいて、なんといまの原子爆弾時代を予言しているんですのよ。すごいわ」
「……ああ、そうでしたね。あれは実に深遠ですな」
と、いったが、石谷はそんな小説は読んだことがない。しかしこれはすばらしい娘を見つけたものだ。ほかの奴らがどんな女をつれてこようと、このひらめくような才智にかがやく娘の前に出ては、真珠の前の里芋くらいだろう。だいいち、ながれるような娘の甘美な声が、すばらしい快感であった。まず女の好む話題に如才なく相槌をうたなければならない。

蠟涙（ろうるい）はうずたかくながれ、幻想曲は神韻縹渺としてながれる。娘は文学について、音楽について、絵画について小鳥のようにしゃべった。しかし石谷専右は、小鳥の声をきくようにうっとりとしてはいられなかった。
サルトルの作品にふくまれる性の原子構造について――アームストロングのジャズと日本の義太夫との不可思議な一致――ピカソが玉葱の好きなことが、その全作品について見られること――石谷専右は死物狂いに相槌をうった。相槌をうちながら、じぶんの不勉強と愚鈍さがいまさらに腹立たしく、みずから頭をぶちのめしたいような思いであった。頭脳の酷使と煙草のけむりに彼は頭がいたくなってきた。
「ここは、もう店をしまうのでしょう」
「そうね。生まれた人間はみんな死ぬのですからね。……でも、あなた、ほんとに優秀だわ。あたしあなたのようにお話のよくわかる秀才にあったことがないわ」
「ぼくもほんとに面白かった。……ところで、まだあなたとお話のできる場所がないでしょうか、このままおわかれしちゃあんまり人生がさびしい」
どうあっても、明朝までこの娘と行を共にする必要があったので、彼はうったえるような眼をむけた。娘は簡単に、すばらしい着想を口にした。
「聖橋をわたったところに小さな公園があってよ。あそこには誰もこないし、可愛いベンチもブランコもあるのよ」

外に出ると、月光がせせらぎのようにはしるちぎれ雲に台風の気配はあったが、月は皓々として天心にある。ふたりは、熱心に語りあいながら、その公園にあるいていった。

公園は娘のいったように、童話的に愛らしかった。石谷は、必死に頭に鞭うちながら、彼女の恐るべき教養と奔放な機智にみちたおしゃべりと悪戦苦闘した。

――朝がきたとき、石谷専右は、徹夜して麻雀をしたような困憊をおぼえた。相手を煙にまくという彼の特技をまったく逆手にとられたような苦しさであった。

それでも、この惨憺たる努力の報酬として、彼はやっとその天才的な少女から「万福」への同行の承諾をかちとった。彼の縹渺たる心に、はるかな未来への夢が浮かんでいた。それはもっと勉強して、大学卒業後は是非このすぐれた娘と結婚したいという希望である。

「万福」へのぼる坂道のところで、石谷は、恐るべき肥満した河馬のような中年の婦人と同伴した伊奈平馬にあった。

おや、伊奈は……、まさか、あの婦人がそうじゃあるまい、と眼をぱちぱちさせて、憔悴した平馬の顔をみると、平馬も彼をじろじろ見ている。

「石谷、君、背なかに何かくっついてるぜ？」

「えっ？……何が？」

平馬は石谷の背から、小さな名刺大の紙をはぎとった。いつ、そんなものをつけられたのだ

ろう？　あやしみながらそれをみると、紙には水茎のあとうるわしく、万年筆でこんな文句がかいてある。

「この男狂人。精神分裂症の娘とたいへんお話がよくあいますから」

ぎょっとして、ふりかえると、あの娘は白い朝風にすずしげな眼をひらいて、ニタニタと笑っている。そして、また小鳥のように愛らしく、けろりとして、ひとりでつぶやきはじめた。

「ボンヌール・ロンシャン・ルボオ・エレガンス・エトアール・トア・エ・モア・ポ・ト・フー！」

六

五人の大学生が、料亭「万福」の美しいロビィで、途方にくれていた。

いや、途方にくれるどころではない。河馬のような夫人と、ひげそりあとも青い美人と、たえずけらけら笑ってはしゃぎまわる娘を、伊奈平馬と土岐啓之介と石谷専右は、げっそりおちくぼんだ眼でうつろに眺めているし、何やら妙な咳をする美人に介抱されている乾甚太のごときは、からだじゅう繃帯だらけになって、丸太ン棒のようにソファにころがっている。そして左右田次郎だけは、ひとりで居眠りをしていた。左右田次郎だけが、まったく美人をつれていないのが、いまやほかの四人の救いであった。

「おい、おい」

と、石谷は、腹立たしげに彼をゆすりおこした。左右田は眠そうな眼をあげて、にやりと笑った。

「おい、左右田、君はどうした。誰かさがしてきたのかい？」

「ぼくは全然この家を出ないよ」

「出ない？　それじゃ無条件降伏だな。君がぜんぶ負担してくれるんだね」

「いや、まだそれはわからないよ。美人をつれてくりゃいいんだろう」

といって、彼は横着そうに起きなおり、入口の方をみて、

「もう来そうなもんだがな、さっき口紅をもういちど塗りなおすといって出ていったんだが」

そのとき、扉がひらいて、ひとりの令嬢が入ってきた。いっせいにみて、みんなうなるような嘆声をあげた。

ぱっと黒い花が咲いたように大きな眼、ひきしまった雪白の肌、愛くるしい鮮烈な唇、かもしかのようにすらりとした肉体の曲線。——髪をヘップバーン刈りにして——いや、それはほんとうにヘップバーンがそこにあらわれたのかと眼をみはるくらいの絶世の美女だった。

「左右田、左右田。……どこであんな美人をみつけてきた？　……」

と、彼らはたまげて、またうなった。

「万福の庭だよ」

「えっ？」

「お春ちゃんさ。お春ちゃんをみがかせてみたんだよ」

と左右田次郎は鼻をうごめかして、

「二千円で美容院へ、千円で古物商の洋服と靴を買いにやらせたら、あんなになっちまったんだよ。実は僕もたまげたね」

そして、左右田は悠然として煙草をふかしながら、

「お春ちゃん、ここにいる女のひとのなかで、誰がいちばんきれいかいってごらんな」

お春ちゃんは、全然まわりを見廻しもしないで、響のものに応ずるがごとく答えた。

「おれ！」

「はっはははははは、どうだい、諸君異議があるかね？」

みんな沈黙していた。左右田次郎は煙草をすて、いよいよ悠々としてお春ちゃんの傍へちかよった。

「どうやら異議はないらしい。お春ちゃん、君がいちばん美人だとよ。そこで、ぼくは、この美人と接吻する、だんどりになってるんだが……」

と、にたにた笑いながら、大きく抱きかかえて、唇をよせていった。とたんに彼は猛烈な勢いではりとばされた。

お春ちゃんは、その大きな眼をぴかぴかひかからせて、左右田次郎をにらみつけた。

「おら、いつおめさまの恋人になったなや。馬鹿くせ。おら、そげな浮気者でねえス。シツレ

イしちゃうわね。おら大望できたなや。おら、この家でて、あのファッション・モデルになるってば。美容院のおくさまが保証してくれたってば！」

そして八頭身の和製オードリイは、茫然たる五人の大学生をあとに、颯爽（さっそう）として「万福」のロビィを出ていった。

童貞試験

プロローグ

「――かけまくもかしこき出雲大社にしずまります大国主大神、須勢理毘売大神、また伊邪那岐大神、伊邪那美大神、産土大神の宇豆の大前にかしこみかしこみ曰さく、保科未香子は、石狩真人の妻となりて、婚儀の式をおこなうにより、大神たちの大前をおろがみまつり、ちぎりかため、結盃してちかいまつらくは……」

正面の祭壇にかけた大国主命の神像にむかって、神官はおごそかに花嫁にかわって誓詞をよんでいる。

私は、花嫁にみとれている。三々九度の盃をすませたばかりの、恥じらいのあまり、いまにも微光にきえいりそうな花嫁の姿を。

いうまでもないことだが、なんという花嫁の美しさだろう。むかいの席には、私の妻をもふくめて十何人かの花嫁の友人たちがならんでいるが、この花嫁にくらべれば、まるで白牡丹と南瓜の花くらいのちがいだ。ゆいあげた文金高島田の壮麗さ、雪の精かともみえる白無垢の打

掛姿の気品……。

実際あの花嫁の姿だけは、未亡人の黒い喪服姿とともに、日本人の服装芸術の傑作で、これだけの創造力のある民族が、どうして、やれディオールの、何とかラインのと尻ッ尾をふりまわすのか、その気がしれないと私は思うのだが、それにしてもこの花嫁姿の未香子さんの美しさと清らかさは、ちょっと比類がない。うっとりと花嫁をみていた私は、そのとき、同じようにうっとりと新郎である石狩真人の方をみている妻の顔に気がついた。

モーニングを着た花婿の方は、花嫁とちがって、服装にはわれわれとそうちがったところはないはずだが、それでも石狩の姿に、いならんだわれわれ男友達とは、ひときわちがう何かがあふれているにちがいない。やはり妻も、花婿の美しさと清らかさに、うっとり見とれていたにちがいない。

「……ちかいまつらくは、惟神の本つ教にそむくことなく、夫婦の大道にたがうことなく、清き明きまことのこころにつとめしまりて、おのがむきむきせず、入れ紐のおなじ心にむつび愛わしみつつ、夫婦のなかにはいかなる憂きことあらむもたえしのびて、あいたすけあいまもらむ。……」

私は、このおごそかな神官の声をききながら、この才子と佳人が、このハッピイエンドをむかえるまでの、或る波瀾とそれを封じこめたいくつかの手紙を、無量の万感とともに、しみじみと思い出していた。

第一の手紙

石狩真人さま。

とつぜん、お手紙をさしあげます失礼をおゆるし下さいませ。封筒のうらがきには花房まゆみとかきましたので、みしらぬ名だと、けげんなお顔をなさったのにちがいございません。花房まゆみと申しますのは、じつは仮名なのでございます。

あたし、ほんとうは、御婚約者の保科未香子さまの数多い友だちのひとりでございます。あなたとは、山田風太郎さまのお宅でたびたびお眼にかかったこともある娘でございます。では、いったい誰だろうと、あたしの本名をおさがしになどならないで下さいませ。じつは、たいへんな、ほんとにたいへんなおねがいでございます。

このたびの御婚約、おめでとうございます。ほんとにお似合いのおふたりで、あたし、未香子さまがねたましいくらいに存じておりますの。でも、このおねがいは決してそんなねたましいなどという感情からおこった大それたいたずらごころではございません。

あたしは、未香子さまと姉妹のような親友でございます。あの方のおこころは、妹よりもよく存じているつもりでございます。ほんとにきよらかな、結婚ということとむすびつけてかんがえるのもいたいたしいほどのお嬢さまでございます。

その未香子さまがあなたを尊敬し、熱愛なさっていることはいうまでもありませんが、それ

だけに、結婚ということをどんなに神聖視し、どうじに、どんなに恐れていらっしゃるか――石狩さまは、御存知でございましょうか？

いいえ、たとえ、頭では御理解になっても、そのやわらかな処女の心のひだひだまでも御実感になるということは、あるいはどんなに聡明な方でも、男の方にはしょせんおわかりにならないのではないでしょうか？

未香子さまはおっしゃるのでございます。

じぶんという、過去未来、全世界にただひとりの女が、石狩さまという、過去未来、全世界にただひとりの男の方とむすばれるのだ。ほんとにたいへんなことだ。まして、このことから、また新しい生命が無限に生まれひろがってゆくことを思うと、どんなに神聖にかんがえてもかんがえたりないくらいだ。

それにつけても、石狩さまには、ほかに愛していらっしゃる女の方はないだろうか。現在のみならず、過去にあったようなことはあるまいか。万一――ほんとうに万一でございます――それがあるなら、あたしは結婚するのがこわい。そういう別の女が現われて、ありふれた家庭悲劇をもちこんでくるのがこわい、というより、石狩さまのお心とおからだに、別の女の痕があるのが、精神的に、感覚的にたえきれない。――こうおっしゃるのでございます。

つまり、未香子さまは、あなたの絶対的な童貞を要求していらっしゃるのでございます。

かんたんに申せばそうでございますけれど、こういう意味のことを親友のあたしにうったえ

られるお顔が、どんなに恥ずかしがり、いたいたしく、可憐であったことでございましょう？

　ところで、あたしは、実はもう処女ではございません。とりかえしのつかない過失のために——清潔をよそおい、正体はすれっからしの道楽者にだまされたために——人工流産までしたことのある娘でございます。それだけに、それほどの純潔さをおもとめになる未香子さまのおきもちが、魂のそこからわかるような気がいたします。

「けれど、いったい、どうしたら男の方が童貞であるかどうかわかるでしょうか」

「そうね。……男は、嘘をつけばわからないようね。からだばかりでなく、おそろしいことに、心まで、童貞をやぶった前後でも、どうやらあんまり大したちがいがなく、けろりかんとしているらしいわね。……」

「まあ、ずうずうしい。そんなだったら、結婚してからだって、何をたよりに信じていいか、おそろしくってたまらないわ……」

「ほんとに、どうしたら、男が童貞であるかどうか、証明することができるかしら？」

　石狩さま、どうぞお笑いにならないで下さいませ。もしあなたが、まじめに人生をお考えになる方で、きよらかな御童貞であったら、決してお笑いになれないはずでございます。

　あたしはしんけんに考えこみました。けれど、どんなに考えこんだところで、いまの医学の力でも証明できないことが女のあたしにわかるはずがございません。

　女のあたしに——石狩さま、あたしは、けれど、たったひとつのその証明法を考えついたの

です。もしあたしに邪心があったら、とうてい思いつけなかった天来の智慧を、友情という太陽からふりおちてくる霊感のひかりのようにさずかったのです。

「未香子さま、御安心あそばして。あたしがきっと石狩さまをしらべてさしあげてよ。どうぞ、あたしを信じてちょうだい！」

　あたしは、むちゅうでこう約束してしまったのでございます。

　石狩さま、どうぞお怒りにならないで下さいませ。あたしは、あなたの試験官となってしまったのでございます。もしどうあっても、未香子さまと御結婚なさりたいのでしたら、あたしの試験をパスしていただかなくてはならないのでございます。おききいれ下さいましょうか？

　その試験とは——来る×月×日夜八時、山田風太郎さまのお宅へおいで遊ばして下さいませ。山田風太郎さま御夫妻は箱根へお出かけになってお留守でございますが、あたしが留守番をいたしております。そこでお目にかかりたいと存じます。お目にかかるといっても、いくらなんでもあたしの顔をみられてはさしつかえがございますから、舞踏会の仮装用マスクをしておりますが、びっくりなさいませんように。——それから声もきかれてはこまりますので、終始だまっておりますが、それもけげんにお考えになりませんように。——いいえ、それでもテストはできるのでございますの。

　この手紙が、たんなるいたずらとか、あたしがあやしいものだと御案じにならないように、それからむろん筆跡をかくす意味もこめて、山田風太郎さまに書いていただきました。あの方

は、御存知のように探偵小説をおかきになりますから、こんなミステリイ風なやりかたをたいへん面白がって承知して下さいましたが、あたしにとっては、目的の厳粛さにひしひしとしめつけられて、とうてい面白がるどころではございません。けれど、どうぞ、それであたしを信用して下さいませ。

もしあなたがおいでにならないようですと、童貞試験をうけるのにおためらいになる御理由がおありになるものとみとめて、未香子さまに御報告いたしますから、そのように御承知下さいませ。

かしこ

第二の手紙

花房まゆみ様。

先夜は大変失礼申しあげました。失礼も失礼。実になんともハヤ、いいようのない失礼なことをいたしました。

終始、無言劇であったので、おわびもいたしませんでしたが、どうか僕の弁明もきいて下さい。

僕はあなたの御手紙を拝見して、男性にも同様な貞潔を御要求になるのは当然のことであります。たとえ同感しなくとも、あの場合、山田家を訪れなければ万事休するようなおさしずでしたが、しかし私はよろこんで、あなたの崇高な童貞試験をうけるべく、わざわざあなたの神

秘的な衣裳と調子をあわせるために、マスクまでつけて参上した次第です。

——あの暗い、深い銀河の下を、路地から路地へ、試験の場へいそぐ僕の心は、どのように神秘と厳粛にふるえたでありましょうか。

しかし、あなたが、なるほど、マスクはしていらしたものの、あとは、一糸もまとわぬまっぱだかとは恐れ入りました。

闇のなかを、あなたは僕の手をひいて、しずしずとみちびき入れられましたね。そして美しい閨と覆をかけたなまめかしい雪洞（ぼんぼり）型スタンドの準備された奥座敷に入るやいなや、いきなり僕にからみついて、両手を僕の背にまわし、燃えるような接吻をおしつけていらっしゃいましたね。

ああ！　あれに抵抗できる男が、またとこの世にあるでしょうか。あれがあなたの御霊感による童貞試験なのですか。あれでは、童貞もへちまもありません。たいていの男は、ああなっちまうのにきまっています。

ああ！　僕は試験に落第したのでしょうか？　未香子さんはもらえないのでしょうか？

ひどい、ひどい、あんまりです。僕の清い尊い童貞をうばってしまうとは！　それでもあなたは、良心に恥じないで、未香子さんに、石狩真人は童貞でないと御報告になるでしょうか？　僕は懊悩絶望のために、日夜悶々としてねむれないくらいです。

しかし、山田風太郎もひどい奴です。どうたのんでも、にやにやしていて、あなたの御本名

を教えてくれません。しかし、未香子さんのお友達といいますと……そのどなたを思いうかべてみても、いずれをあやめ、かきつばたで、未香子さんにおとらぬほどの美人ばかりであることははっきりしているのですが。

とにかく、あなたが非常におきれいな人であることは、あの夜のやわらかな、うすぎぬのような乳房の肌ざわりからでも想像できます。それに、あの……いや、あなたは、もう処女ではないなどとうそをつきましたね。あの御様子は、とてもまえに流産までなさった方とは信じられません。あなたは、たしかに処女です！

しかし、あなたが処女だとすると……あなたの冒険は、容易ならぬ決心です。単なるアプレ娘の行為とだけでは僕には納得がゆきません。いかに友情とはいえ、それほどの犠牲をはらう娘さんが、この世にあろうとは思われません。

花房まゆみさま。もしかすると……どうか僕の小説じみた空想をお笑い下さい……もしかすると、あなたは、ひそかに僕を愛して下さっている方ではないでしょうか。ひとしれず僕を恋し、ひとしれず、僕に処女をささげたいという悲願から、あのかなしくも美しい夜の冒険をこころみられたのではないでしょうか？　それは僕のうぬぼれでしょうか。僕のうぬぼれだとすると、どう考えても、あなたの動機がわかりません。

もし僕のうぬぼれでないとすると――花房まゆみさま、僕は男として、あなたのロマンチックな悲願にこたえないわけにはゆきません。名もしらず、その顔も知らず、忘れんとして忘れ

得ぬかなしさよ、僕は……もし御希望なら、あなたとそのロマンチックな恋を継続するのに、決していなやは申しません。未香子さんには、絶対ないしょで。

いや、いや、これはとんだことを申しました。それはやはり僕のうぬぼれかもしれません。人間は、恋すると、うぬぼれとともに、なんとも、やるせなき気弱さに襲われるものです。あなたは、きっと未香子さん以上の女性にちがいありません。が、もし僕の空想が、まさに空想にとどまるなら、僕はやはり未香子さんだけでがまんします。

花房まゆみさま、花房まゆみさま。どうか、崇高な友情をふるいおこして、とにかく先夜のことだけは、未香子さんに秘密にしておいて下さい。

僕はあなたのために童貞をうしないました。しかし、ひそかに熟考してみるのに、それは必ずしも未香子さんにとって不幸なことであったとはいえないかもしれませんよ。なぜなら、人の結婚は、その初夜の印象で、決定するものだからです。

かのフランス大革命の重大なる原因は、ルイ十六世の優柔不断と、王妃マリー・アントアネットの専横にあったことは、歴史のつたえるところですが、そのルイの優柔不断とアントアネットの専横は、初夜にルイが惨澹たる失敗をしたところから、男としての自信喪失と女としての軽蔑がかもし出され、それが深い心理的傷痕をのこしたせいだと証明されています。

しかし、童貞の男が、初夜にどれほど堂々たる威力を発揮できるでしょうか？　察するにあまりありです。

してみれば、童貞を失った男は、たとえ本人は初夜に甘美激烈なる感動を得ることを犠牲にしても、それまでにせいぜい切磋琢磨して、初々しき花嫁に、男の威力と結婚のよろこびを、泣くほど痛切にあたえてやらなければならないのではないでしょうか？

いずれにせよ、僕の苦衷をおくみとり下さい。この手紙は、責任者山田風太郎氏に口述筆記してもらい、あなたにおわたしてくれるように依頼しました。

恐惶頓首

第三の手紙

まあ、なんという、ずうずうしいお手紙でしょう。ただ全文、無恥とうぬぼれと誘惑と脅迫と偽善がみちみちていますのね。あきれはてて口もきけません。フランス大革命が、きいてあきれます。

あなたが、あたしのための童貞をうばわれたのですって？　あんなにあつかましい童貞がこの世にありますか。

接吻なすったのは、あなたの方ではありませんか。玄関から奥へ、三歩とあるき出さないうちに、もう馬のように鼻息をあらくして、あたしをひっつかまえ、かつぎあげ、奥へ突進なさったのは、あなたではありませんか？

……もっともねえ、それが、あたしの試験ではあったの。男の童貞をしらべるのは、あの方

法しか世のなかにないわ。つまり、そのときの反応をみるのね。童貞は、どんなに童貞でないようなふりをしても、逆に童貞でない男が、どんなに童貞であるようなまねをしても、経験のある女には、すぐわかるものだわ。

反対に、やりかたによっては、女の方が処女であるかないか、かえってその方が男にわからないものであることを知って、あたし、実はほっとしたわ。——ほ、ほ、ほ、あたしが処女だなんて！　あたしは処女のまねをしてみただけよ！

石狩真人さん、あたしの動機がわからないとおっしゃったわね。あたしの動機はそれだったの。つまり、あたしは処女じゃないのに、ちかいうちに或るところへお嫁にゆかなきゃならないのよ。お嫁にいったとき、ばれはしないかと心配で心配で、そこで、その試験台にあなたをつかったただけなのよ！

でもねえ、よくかんがえてみれば、あなたの最後の説だけは、ちょっと感心してあげてもいいわ。ロジックはなんだかへんてこだけど、とにかく初夜に花嫁をよろこばせなくっちゃいけないという目的だけは、大賛成よ。……どうか、あの可愛らしい未香子さんをよろこばせてあげてね。そのことをかんがえると、あたしなんだか胸がうずくみたい。

ほんとに、あなたにはもったいない花嫁御寮だわ。こんどだけは、あたしの試験台になってくれたお礼にだまってあげるけど、もしあの可憐できよらかな花嫁をうらぎって、ほかでもいいことしようなんて助平根性を出すなら、ほんとに未香子さんに報告してよ。きっと！

過去はといません。けれど、将来は、未香子さんの友として、きっとあなたを監視しているわよ。よくって？

第四の手紙

畜生、うまく、だまされた！

と、地団駄ふんで怒りたいところだが、実は、もういちどだまされたいですな。なんべんでも試験台になりたいです。未香子さんに報告してもいいですよ。

と、いうのはね、花房まゆみ嬢、僕があの夜マスクをして山田家を訪れた意味がわかりませんか？

僕は、実は石狩真人ではありません。大伴黒兵衛という、石狩の数多い友人のひとりです。もしあなたがたびたび山田家にゆかれたことのある娘さんなら、きっと僕の顔を御存知だろうと思うが、しかし名に御記憶はありますまい。大伴黒兵衛というのは、もちろん、御同様に世をはばかる仮の名です。

あなたの最初の手紙をうけとった石狩は、蒼くなって僕のところへとんできましたよ。夜、女ひとりのいる家へ、童貞がのこのこ出かけてゆけるものではない——と、奴さん、ふるえているんです。童貞試験とはなんのことやらわからないが、とにかく本能的な不安を感じたのですな。むりもないことです。うぶなあいつは、脳中ただこれ未香子さんに充満しているが、僕

は女なら誰でも結構な方ですからね。よしその人柱はひきうけたり、そもそも若い娘のくわだてる童貞試験とはいかなるものかと、勇気りんりん武者ぶるいして出陣しましたよ。御馳走さま！

要するに、あなたなどにねあの石狩真人のきよらかな童貞をささげさせてなるものですか。あれは、まさに聖処女保科未香子嬢にこそふさわしき花婿です。御気の毒さま！

第五の手紙

まあ、くやしーい。なんという獣だろう。

あの、ぬけぬけと、あたしをだましこんだ狸のような奸悪さ、恥しらずにあたしのからだに加えた暴力の狒々(ひひ)のような獰猛さ、あなたこそは女性にとって最悪の大害獣だわ。

あなたのような無礼な放蕩者には、未香子さんみたいな清浄無垢な花嫁を迎える石狩さんのような幸福は、決してきっこないわ。よく、まあ、あなたみたいな男が、あの純情な石狩さんのお友だちになれたわね。あなたのような悪徳漢、無頼漢、破廉恥漢には、いつかきっと天罰が下るでしょう。下らずにいるものですか。

狸！　豚！　狒々！　ハイエナ！　いいーだ。

第六の手紙

パンスケ、だまれ。

お前さんみたいな、あんぽんたんの、とびあがりの、淫乱の、スッペラペッチョのカクサカモンキーは、すれっからしの道楽者にだまされて人工流産でもするのが、分相応のところだ。保科未香子嬢の爪の垢でも煎じてのむがいい。わかったか。このおたんちん。

エピローグ

……笙ひちりきの音は、荘重に鳴りつづけている。私は微笑して、清らかに美しい文金高島田の花嫁と、凜々(りり)しく爽やかなモーニングの花婿をながめやった。なにも知らない。祝福されたる結婚式よ。

しかし、私だけが知っている。

大伴黒兵衛はやはり石狩真人であり、花房まゆみは、やっぱり保科未香子であったことを。

ふたりは知らない。永遠に知らないかもしれない。それならば、幸福これにすぎたるはない。

……

いや、ふたりは知るかもしれない。今夜のうちにも。知ってもふたりは離れることはあるまい。これ以上はない似合いの御夫婦だから。

神官は厳かに誓詞をよみつづけている。

「……未香子はやめにしあれば、真人をおきてあだし心をもつことなく、異しき行いをなすことなく、玉の緒のながく久しく、相そむかじと誓いまつらんを、穏かにきこしめせとかしこみかしこみ曰す。……」

寝台物語

一

まず少壮弁護士磯谷猪之吉が、不思議な幻聴神経症にかかった次第を物語ろうと思う。

運命の皮肉、彼がその恐ろしくも悩ましい幻の音をはじめて耳にしたのは、彼の結婚初夜のことだった。

——海にうつる町の灯が、蜃気楼のように美しい初秋の熱海、そのホテルの一室で。

彼の主義によって、貧しい階級からえらんだ——けれど、清純な処女が、いまや人妻となる恐れと恥じらいに息をつまらせているそのからだを、ひしと抱きしめようとしたときに、

「あ……」

突然、彼はぎょっとしたように顔をふりあげた。そのまま、じいっと耳をすませている。

——新妻は、ほっと匂うようなあえぎをもらして、

「あの……どうかなさいまして?」

「いま、妙な音がきこえたが。……」

青い灯をともした部屋が、そのまま、すうっと闇を濃くするような沈黙におちた。そのなかで、たしかにきこえる。ドック、ドック、ドック、ドック……というきくのも息苦しいような音が。

——ドック、ドック、ドック。……

急に新妻が両掌で顔を覆った。

「あなた……あたしの心臓の音ですわ……」

「え?」

といって、なお耳をすませていて、やがて彼は笑い出した。新妻への可憐さが、ぎゅうっと胸につきあげてきた。顔をかくしている白い掌を、ひとつずつ剝がしとり、片腕で、燃えるような胴を抱きあげて、その唇を吸おうとしたが、その瞬間、またも、

「うっ……」

名状しがたい異様なうめきをもらして、彼は硬直してしまった。

「いや、ちがう。……鼓動の音じゃあない。……」

「いまの音? ……ベッドが軋みましたけれど……」

「ベッドの軋み——」

彼は、突然、新妻のたおやかなからだから手をはなして、じっと坐りこんでしまった。いちど、バタリとたおれた新妻も、いまはアリアリと恐怖の色を顔にうかべて起きあがった。

「ベッドの軋みが、なにか……あなた……」

「ベッドの軋みが……きみ、鶯の声をたてやしなかったか」

「鶯の声？　あなた、いまは秋ですわ。……」

「いいや、その鶯ではない。ベッドが、鶯の声をたてるんだ……」

新妻には、もとより彼の言葉の意味がわからない。まして彼の歯ぎしりするような恐怖の表情がわからない。けれども、彼女は恐ろしかった。ただ、彼の恐怖ぶりが恐ろしかった。

彼女はわけもなく、彼にすがりつこうとした。すると彼はまた耳にふたをして頭をふった。

「やめてくれ、うごくのはやめてくれ。ベッドが鳴る。ベッドが鶯の声で鳴く。……」

「鶯の声だなんて……あなた、ベッドはただ、ギイギイと鳴るだけですわ。……」

磯谷猪之吉はなお耳を覆ったまま、ボンヤリと彼女の姿をながめ、寝台に視線をおとした。

「ああ、そうだったな。ここは熱海のホテルだな。これはあの鶯の寝台じゃなかったんだな……」

「鶯の寝台って、なんですの？」

それは、結婚式の数カ月まえ、彼が売りはらってしまったベッドだった。たしかにこのベッドは鶯の声で鳴くはずはない。けれど。……

「ああ、またきこえる、きこえる。……」

「あなた、あなた、何がきこえるんですの。あたしには、なんにもきこえません。ベッドは、鶯の声もなんの音もたてやしませんわ……」

磯谷猪之吉は、フラリとたちあがって、窓際の方へあるき出した、ガラス扉をあけて、ヴェランダへ泳ぎ出してゆく姿を、新妻は、酔いからさめたように総毛立った顔で、茫然と見送っている。

この世の新婚の幸不幸は、初夜の印象で刻印されるといわれる。たしかに、この異様な初夜こそは、彼と彼女の惨澹たるこれからの生活を予言するものにちがいなかった。

が、これからの生活はおろか、背後の哀れな新妻の存在すら忘れたように、磯谷猪之吉はヴェランダによりかかって、潮鳴りのきこえる暗い沖を見つめたまま、ひとりでブツブツつぶやいている。

「ホウ……ホウ……ホウ……ホウ」

二

磯谷猪之吉がその『鶯の寝台』をはじめて見たのは、彼がまだ法科の学生だったころ——戦争の終る二、三年まえの晩春の或る夕方のことだった。

もっとも、大学生といっても、もともと彼は田舎の水呑百姓の子で、ただ小学校のころからたいへん成績がよかったので、もとの旧藩主、いまは玉虫子爵家の書生として、ほかに似たような四、五人とともに、玄関番や風呂焚きをしている身分として、それを見たのである。

それは、玉虫子爵と縁戚にあたる陸軍大将で、そのころ中国に駐屯していた司令官が、わざ

わざ海をこえて贈ってきたもので、むろん戦利品というのか、掠奪品というのか、その種のものであったにちがいない。なんでも清朝の高貴な婦人がつかっていた寝台とかで、四本の柱に紅い天蓋がついていて、柱は竜の巻きついた彫刻がしてあり、四脚は獅子の足を模してある。頭の方には美しい鏡板がついていた。純然たる支那風ではなく、洋風も加味してあるのだろうが、とにかく華麗で豪奢なものだった。

裏庭の藤棚の下で梱包をとき、老子爵をはじめ家人も出てきて、ひとしきり嘆賞の声をあげたが、かんじんの令嬢優子の姿はみえなかった。二、三日前から婚約者の飛鳥典彦が遊びにきていて、午後からふたりして馬で遠乗りに出ていたのである。

やがて人々が去り、どうかしたはずみで、広い庭に、寝台とただ猪之吉だけがとりのこされた瞬間があった。

彼はおそるおそる寝台にちかづいて、さっきまで子爵たちが興がっていたように、それを片手でおさえてみた。その寝台は、軋むかわりに、鳴くのだった。妖しい、甘美な、鶯の声で。

「ホウ……ホウ……ホウ……ホウ」

それは鶯の声のようでもあり、美女の吐息か、ふくみ笑いのようでもあった。

猪之吉は、いつしか寝台に腰をかけたまま、やるせない幻想に沈んだ。

この寝台にお嬢さまがお眠りになる。それは想像しただけでも、お伽噺のように美しい姿だった。上流階級に対して深刻な批判意識を抱きつつ、表面は黙々として服従している、鈍重

で不敵なこの貧しい大学生は、その蠟のような白い肌をもつ学習院の姫君だけには、その足もとにひれ伏したいほどの想いを懸けていたのだ。たとえ、その無邪気で高慢な令嬢から、ふだん「おまえは猪之吉じゃない、牛吉みたいね」とからかわれても。

けれど、その恋はもとよりはかない幻想にすぎなかった。よしんば身分ちがいということをぬきにしても、彼女にはもう婚約者がきまっているのだ。

飛鳥典彦。

それは猪之吉のクラスメートだ。が、伯爵家の御曹子で、そして――大学に入ってからはそれほど成績が上位にあるとはいえない猪之吉などに比して、はるかに秀才だった。猪之吉などは眼中にないといった風であったから、ふだん親しく話したことはないけれど、その快活、その闊達、その廉恥、その典雅、要するに、いい意味での貴族中の貴族らしい物腰には、いかに不敵な猪之吉にも、反感をこえて快いものがあった。

この姫君と御曹子、これ以上はないかがやくように似合いの結婚だ。そう理性ではみとめつつ、またこればかりは明るく祝福できない若い感情が、猪之吉にある、この美しい寝台に眠るのは、お嬢さまひとりではないのだ！

ああ、生まれながら与えられた運命という盃のにがさよ、彼は船に酔ったようにあえぎつつ、じぶんの前途の索漠さと、お嬢さまへの身もだえするような慕情に涙ぐみながら、夢中で寝台を鳴らしていた。

「ホウ……ホウ……ホウ……ホウ……」

ふっと、猪之吉は、前の地上にふたつの黒い影がさしたのに顔をあげた。

いつのまにか、そこに飛鳥典彦とお嬢さまが立っていた。乗馬服のまま、典彦はまだ手に鞭（むち）をもっている。

はっとして、猪之吉は立ちあがっていた。

「磯谷」

と、典彦は冷たい声でいった。

「何をしている？」

「はあ……いえ」

「それは、ぼくたちに——いや、お嬢さんに贈られたベッドだろう。使用人の身分で、僭越（せんえつ）だぞ」

お嬢さまは眉をひそめた。

「あっちへゆきたまえ」

「きたないわね。……つぎはぎだらけのズボンで」

典彦はかるく鞭で、犬でも追うように猪之吉をはらいのけた。かるく——が、典彦のすこし激した感情は、ピシリと猪之吉の左手の甲に赤いすじをつけた。

反射的にその手を唇にもっていった猪之吉に、お嬢さまはケラケラと笑った。猪之吉はその

姿勢のままで、うっそりと立っている。紫の花筒をたれた藤棚の下の美しいふたりを見つめているその眼は、花房のえがく春光の斑（ふ）にゆれて、暗い茫漠としたなかに一点の灯のともったのをまぎらわせた。

それは、この三人にとって、その未来に運命的な悲劇を予告した、しずかな、恐ろしい瞬間であった。

三

敗戦の暴風は、すべての人々の運命を狂わせた。

おそらく、飛鳥典彦にとって、その人間的光芒をまぶしいばかりにかがやかせた最高潮は、敗戦前夜、特攻隊として蒼い死の海へとび立っていったときにあったのではあるまいか。英国貴族は、国難にあたって、まっさきに敢然としてその一身を楯（たて）とするといわれるが、飛鳥典彦も、それにおとらぬ貴族としてのほこりを持っていたのである。

けれど、彼は死ななかった。飛行機の故障で、途中の島に不時着して九死に一生を得たのである。

帰ってきた家はやけていた。妻の実家玉虫家も焼けていた。いや、その階級的基盤、生活的基盤はすべて崩壊していたのだ。

重傷のからだが癒（い）えると、彼は弁護士として再出発した。——ここまではよかったのである。

もともと、七光りをのぞいても、きわめて優秀な素質をもっているはずの典彦だ。最初の二、三年、『飛鳥法律事務所』は、すべてうまくゆきそうに思われた。……

しかし、そのころから、彼のゆくてに、黒い影がたちふさがった。彼の依頼された訴訟の、かならず相手方にまわる弁護人。

——『磯谷法律事務所』

その正体を知って、典彦は愕然とした。それから憤激し、また嘲笑した。あの牛のように鈍重な百姓あがりの男などにまけるはずはないのである。

——けれど、社会の戦場におけるたたかいは、学校のように、ただ秀才だけが勝ち、軍隊のように名誉心のみで支えられるものではないことを、彼はいやでも思い知らされずにはいなかった。

生意気な！

あの男が。あのうすぼんやりした成り上り者が！

そう歯ぎしりすればするほどに、ふしぎに典彦は敗れた。法廷では、飛鳥弁護士の精巧な千万言の弁論よりも、磯谷弁護士の重厚きわまる訥弁の方が、はるかに人を打ち、迫力があるのだった。

——飛鳥法律事務所はしだいに寂れるようになった。

不幸は手をたずさえてやってくる。このころから、典彦は、いろいろとからだの故障をうっ

たえることが多くなった。眼がかすんだり、背骨がいたんだり——医者にしらべてもらうと、不時着したときの傷、とくに脳にうけた打撃がまだ癒りきらず、ふたたびたたりはじめたらしい。

——そして或る年の冬、ついに破滅的な事件が起こった。

東京に粉雪のふる夜のこと、『磯谷法律事務所』と金文字の入った硝子扉をおずおずと押して、ひとりの女が影のように入ってきた。

なにげなくその姿をみて、磯谷弁護士は、さすがに棒立ちになっていた。

「……お嬢さん」

玉虫家の姫君——いや、いまは飛鳥優子は、ショールにちりかかった雪をはらいながら、わざと猪之吉をみず、ジロジロと事務所のなかをながめまわした。

「これは、雪のなかを……」

「ごりっぱな、事務所ですこと」

「おひさしぶりでございます」

磯谷弁護士はすすみよって、鞠躬如としてお辞儀をした。奥の部屋に通されてから、自らコーヒーをわかして持ってくる磯谷に、

「あなた、まだおひとり？」

「はあ、貧乏ひまなしで……お父さまにもあれほどご恩をうけながら、ろくにお酬いもできな

いうちにお亡くなりになり、はなはだ慚愧にたえません」

「父は、あなたからまで、恩をかえしてもらおうとは思っていなかったでしょう」

優子はいった。彼女は美しかった。人妻としての翳が、その美しさに夜のような深みを加えていた。人妻としての翳——いや、彼女にはたしかに生活のやつれがあった。テーブルにたたんでのせたショールの色も哀れに褪せていた。それでも彼女はなお傲然としていた。

「けれど、猪之吉」

と、呼びすてた。磯谷弁護士は神妙に、

「はい」

「恩はかえしていただかなくってもいいから、せめて恩を仇でかえすことだけはやめてくれない？」

磯谷は顔もあげず、しずかに答える。

「それは、どういうことでございましょうか。お嬢さま」

「とぼけないでよ。おまえ、ことごとに飛鳥に盾ついて、その邪魔をするじゃないの？」

「お嬢さま、裁判で敵味方にわかれるのは、商売の性質から、やむを得んのでございます。そして、その勝ち負けは、ただ法理によって、裁判官が決するのです」

そして、持ちまえの沈痛な語気のなかに、さもなつかしげに微笑をふくませて、

「ここのところ、しばらく逢いませんが、飛鳥君は元気ですか？」

「飛鳥君——」

と、優子は、いらいらしたようにつぶやいた。磯谷に君づけで呼ばれることさえがまんができない風だった。吐き出すように、

「病気してるわ」

「それはお気の毒です。存じませんで、お見舞にもあがらず、失礼申しあげました。で、病気といいますと、どういう——」

「よしてちょうだい。お見舞なんかいらないわ。おまえが飛鳥を病気にさせたといってもいいんじゃないの」

「はあ？」

と、彼はめんくらったような声だった。が、依然として優子の顔を見ない。

「私が？」

「おまえ、麹町の事件について、いろいろと調べているでしょ？」

「ああ、あれでございますか」

「飛鳥は、もはやじぶんの弁護士としての生命は、磯谷の手中ににぎられたといって苦しんでるわ」

それは、実にこまった事件だった。磯谷だけが、その事実を探知したのだ。飛鳥弁護士が、或る人から依頼された事件をひきうけていろいろな内情をきいたのちに、反対側に寝がえって、

はじめの依頼人を脅迫しているという弁護士として失徳悪辣きわまる事実だった。経済的窮迫から、金に眼のくらんだ飛鳥の失敗にちがいなかった。

「あれは」

と、磯谷は平然としていった。

「ちかいうち、弁護士会に訴えて、是非黒白を明らかにしたいと思っております」

「それで、主人は破滅です」

思わず優子は泣き声になっていた。

「なぜおまえはそんなに飛鳥を苦しめるの？　なんの恨みがおありなの？　飼犬に手をかまれるとはこのことだって、主人は歯がみしてくやしがってるわ」

「お嬢さん。……いや、奥さん」

はじめて彼は顔をあげた。

「弁護士は、厳粛な職業です。個人的な恩怨で、同業者をおとしいれたり、また悪徳をゆるしたりすることはできないのです。われわれは……ただ正義によって行動するほかはないのです」

それから、にやりと不敵な笑顔になった。

「たとえ、玉虫子爵がご存生で、弁護士でいらしても、そういう事実があれば、あえて私は弾劾を辞さないでしょう。それが人格者でいらした故子爵のご教訓でした。もし孔子孟子が攻め

て来たら、日本の儒者はこれとたたかうのがかえって孔孟の道にかなうという奴ですね。……まして、誤解なさらんように申しあげますが、私は玉虫家にこそ大恩はありますが、飛鳥家には恩はありません。飛鳥君は、ただ大学時代の尊敬すべき旧友にすぎんのです」

優子は、蒼白になって彼をにらんでいたが、急にがばとテーブルの上に身を伏せて泣きむせんだ。

「ひどい、ひどい……磯谷さん」

「磯谷さん？」

ちょっと磯谷の眼が動揺した。が、すぐにもとの鈍いような顔色にかえって、

「奥さん、もうお帰り下さい。夜がおそいし、ご病気のご主人も心配していらっしゃる」

「あなた、どうしてもかんにんして下さらないの？」

身もだえする優子の背なかを、彼はじっとうすびかる眼で見すえていたが、身うごきもせず、なんの返事もしなかった。

「どうおねがいしても？」

「………」

「何を代償にしても？」

彼女は顔をふりあげた。涙におくれ毛がねばりつき、狂ったような眼であった。

「磯谷さん」

「奥さん、奥さんが、何を代償にしても、などとおっしゃる相手は、これでも男のはしくれで、弁護士ですよ。係争の両方にふたまたかけるような悪徳弁護士だと、どんな危険なことを考えるかわからん」

にがっぽい男の笑顔に、彼女は冷水にうちのめされたようになった。彼女はすでになかば失神したように、ヨロヨロとたちあがった。磯谷弁護士はその背にまわって、鄭重にショールをかけてやるのだった。

優子が、扉をあけて出かかったとき、ふと彼がきいた。

「奥さん、それはそうと、あの寝台はまだおありですか？」

「寝台？」

「ほら、あの鶯のような声をたてる奴。——」

優子のけげんそうな眼は、すぐ怒りの灯をともした。

「まだ寝台を売るほど、おちぶれちゃあいませんわ」

磯谷は平気で、もっともらしくうなずいた。

「いえ、そんなつもりでおうかがいしたのではありません。ちょっとなつかしく思い出しただけなんです」

が、哀れな、美しい人妻が、チラチラと粉雪にぬれつつ、朧ろな闇へきえていったあと、そのゆくえを熱ッぽい眼でいつまでも追いながら、彼は唇をすぼめて、うわごとのようにひとつ

の音を出していた。

「ホウ……ホウ……ホウ……ホウ……」

四

一年もたたないうち、或る会合で、池袋の某料亭にいった磯谷弁護士は、そこの女中のなかに、飛鳥優子のなれの果てを見出した。

それは、一流とはいえないまでも、相当な高級料亭でありながら、そこの女中は、みんな芸者とおなじことをすると、その道に通じた人々のあいだで噂されている家だった。

所用のため、だいぶおくれて磯谷がいったとき、客にのまされたとみえて、もう前後不覚に泥酔してみなを興がらせていた美しい女中が、彼女だったのである。

「だれもあたしを愛してくれやしない。……誰もあたしなんか愛してくれやしないわ。……」

テーブルに片肘をつき、彼女はグラグラと上半身をゆすぶりながら、ブツブツと同じことをくりかえしていた。うるんだような黒眼は酔いのためとも思われるし、涙を浮かべているようにもみえた。

「あっはっは、それじゃ、わしが可愛がってやろうか」

と、傍の客のひとりが、真っ赤な顔で、片腕をそのくびにまきつけ、片手を彼女の襟のあいだから胸へさしこんだ。

「そう、あなた……あたしと、火遊びがしたいっておっしゃるの？」

「火遊び？　……うむ、まあ、そうだ、おい。姐ちゃん、ぼくと火遊びをやろう」

「ありがとう。やりましょう」

彼女は泥酔者に特有な、緩慢な、しかもくねくねと柔軟な動作で、シュッとマッチをつけると、いきなりじぶんのくびをまいた客の手の甲におしつけた。

「なにをする、あっちっち」

とびあがって、あわてふためき、血相かえる客をトロンとした眼でみて、優子は面白そうにケラケラと笑っている。

座敷の隅にそっと坐った磯谷は、そんな彼女をみても、べつに驚愕の色もみせず、黙って盃をふくみながら眺めていた。ただ、眼のおくに、さすがに覆いがたい曇りがあった。

ほかの女中が、ひきずるように優子をつれ去り、ひとしきり騒動がおさまったとき、磯谷の傍に坐っていたもうひとりの女中が、銚子をさしだしながら、顔をしかめてささやいた。

「あきれたひとでしょ？……あのひと、ヒステリイなのよ」

「どうも、そうらしいね」

「きょうなんかまだいい方だわ。こないだなんかテーブルをワッとひっくりかえしちゃって、上にのってたお料理なんかメチャメチャ。……それをまた面白がってひいきにするお客さまもあるんだもの、いやンなっちゃう」

「面白いじゃないか」

「まあ、殿方って、へんだわ。もっとも、あのひと……器量すてきでしょ？　それにねえ、あのひと、あれで子爵の令嬢だったんですってさ。ここのおかみさんが、むかしずいぶんその子爵ってひとにひいきになって、その恩があるからこそくびにしないんだわ」

「恩？　ほほう、そりゃ感心なおかみさんだね」

「もっとも、結構売物になるからですわ。酒乱だろうが、ヒステリイだろうが、華族であれだけ美人だとねえ。……でも、ちょっと持てあまし気味」

「ふん」

「こちら、いやに泰然自若としていらっしゃるのね。でもあのひと、なぜヒスになったかご存知？　それおききになると、きっと同情なさるわ」

「知っている。あのひとの亭主が、だめだからだろう」

「だめ？　あなた知ってらっしゃるの？　なにが、だめ？」

女中はおどろいて、磯谷の顔をのぞきこんだが、磯谷はもう返事もしなかった。

彼は知っていた。すべてのことを探知し、調査しぬいていた。優子がこの料亭にきたことも、その原因が飛鳥の病気にあることも、飛鳥の病気が、いまや彼を性的不能者に陥しいれていることも。――

その夜ふけ、まだひどい酔いにフラフラしている優子は、おかみから、

「お名ざしのお客がホテルへつれてって下さるそうだから」
といわれて、なんの気もなく車にのりこんだ。
それはめずらしいことでもなかった。彼女が、車に同乗した客が誰か知ろうともしなかったのは、あながち泥酔のせいばかりではなかった。たった数カ月のあいだに、彼女はそれほど腐敗していたのだ。
が、さすがに車からおりて、その家へ、二歩、三歩入ってから、彼女はふと立ちどまった。
「ここ、ホテル？」
闇のなかで、相手はだまっていた。
「ここ、どこ？　あんた、だあれ？」
スイッチをひねる音とともに、灯がついて、男の顔が浮かびあがった。
じいっと見つめて、彼女のからだがヨロリと玄関の壁によりかかる。
「あんた……猪之吉」
「そう、ぼくのうちです」
「あたしは……どうして？」
「ぼくが、あなたを買ったのです。まあ、お入ンなさい」
はじめて彼女は、この事態のよって来るゆえんを了解したらしい。恥が、彼女の顔をあかくして、それからすうっと血の気がひいた。彼女はだまりこんで、魂のない人形のように、磯谷

について奥へ入ってきた。

五

優子をソファに坐らせると、磯谷はパイプをくわえた。が、火をつけないで、そのまえをゆきつもどりつした。その跫音（あしおと）のほかに、ながい沈黙の時がすぎた。
「お嬢さん」
と、やっと彼はいい、出した。
「僕は、ながいあいだ、この日を待っていたのです」
それから、言葉をきって、やさしい、しみじみとした調子で、
「ずっと昔。……あなたのお邸に書生をしていたころから。……」
と、つぶやいた。
「あなたには思いがけないことでしたろう。僕もそれは夢だと考えていた。……それ夢でなくしたのは、あなたはきっとお忘れだろうが、或る小さい事件です。ほら、あなたのご結婚のとき中国から鶯の寝台を贈ってきた日のこと、うっかり寝台に坐っていた僕は、飛鳥君に鞭で追っぱらわれた。それを見て、あなたは笑った。そのときです。僕が、いつかきっとこのベッドの上であなたを抱いてみせる、と心に誓ったのは。……むろん、僕は、たとえ伯爵の御曹子にせよ、かりにもクラスメートから犬みたいに鞭でたたかれたことに大いに不満だった。しかし、

そういう目にあわされたのは、あのころ、しょっちゅうだったのです。とくにそれがそんな深刻な決意にかたまったのはやはりあなたへの恋のなせるわざだったと考えざるを得ない」

「………」

「若気のいたりもありましたろう。しかしそれが決して一時的な浅薄なものでなかったことは、敗戦後、飛鳥君への挑戦があれほど執拗につづいたことからもわかるでしょう」

「………」

「僕はご存知のように、鈍な男です。あなたから牛吉と呼ばれたこともある。が、馬鹿の一念です、あなたを思う心だけは……その代わり、思いこんだら恐ろしい」

彼は苦笑したが、優子はふるえた。彼女は小さな声で、

「ウイスキーでもあったら、ちょうだいよ」

と、いった。

磯谷はすぐにウイスキーの瓶とグラスをとってきて、じぶんで注いで、テーブルの上においた。ぐっとあおる優子を見ながら、

「いちど、その悲願が実現しかかったことがあった。この冬、あなたが僕の事務所においでになったときです。しかし、僕はあえてそれをおさえた。それは男と男とのたたかいに、女の涙でとどめの剣をひかえることは、僕らしくないからです。それでは、結局、飛鳥君に僕がうまくしてやられることになる。また、あのころ、あなたはまだ飛鳥君を愛していた。飛鳥君を愛

するために僕に身をゆるしたって、いい面の皮は僕の役どころです。それに……」

彼は急に夢みるような眼になった。

「もうひとつまだ条件がそろわないということもあった。あの鶯の寝台ですね。あの当時、あなたの家には、もうその寝台がないことを僕は知っていた。しかし、それが誰に売られて、どこにあるのかわからなかったのです。……が、いまやその時はきた」

優子はおびえる犬のような眼で、ちらっと磯谷をみて、グラスをあおった。

「僕はみんな知っている。僕の眼は、つねに飛鳥家の運命の上にそそがれてきた。あなたのご主人は脳外傷のくすぶりで半廃人となっている。それをなおすには三十万円かかる。それを僕は提供しようというのです。しかし、こんどは飛鳥君に利用されるのではない。僕が利用するのです」

「要らないわ」

と、優子はかすかにいった。が、磯谷はのしかかるように、

「要らない。……そうあなたがおっしゃる理由もわかっている。誇りからではない。誇りがあるくらいなら、あなたは淫売婦なんかなるはずはない」

優子はたてつづけにウイスキーをのんだ。

「あなたはもう飛鳥君を愛してはいないのだ。あなたの心は、まったく飛鳥君からはなれてしまったのだ。それは、貧乏より何より……飛鳥君が夫としての機能を失ってしまったからじゃ

ありませんか？　僕はすべてを知っている。それでも飛鳥君は離婚を承諾しない。いまではあなたはむしろ飛鳥君をにくんでいらっしゃる。……」

　磯谷はほとんど怒号するような声になった。

「僕は勝った。完全に飛鳥君に勝った！　そして僕は、あなたを買ったのです！」

　優子はひしと両手を顔におしあてた。磯谷はその肩を残酷につかんでひきたてながら、

「なぜ、ようやくあなたをここへつれてきたのか。それは条件がすべてととのったからです」

　彼は、彼女を抱きかかえ、ひきずるようにして隣室の方へつれていった。扉をひらくと、そこは寝室らしかった。

「ごらんなさい。あの鶯の寝台を！」

　優子はおそるおそるのぞきこんで、よろめいた。

「四本の柱はとれ、紅い天蓋こそなくなっているが、まさに鶯の寝台です。ながいあいだ、あれをさがしていて、最近やっと手に入れたのです」

　優子は塑像のごとくたちつくしている。しばらくの沈黙ののち、優子はふっといった。

「猪之吉」

「はい」

　反射的にそう答えて、彼は愕然としている。が、次の瞬間、彼はがばと床に坐って、相手の足をかき抱いた。

「お嬢さま、どうぞ僕のねがいをききとどけて下さい。僕をにくまないで下さい。すべてはお嬢さまへの恋がさせたわざなんです。どうぞ僕を可哀そうに思って下さい……」

　じぶんでも思いがけない衝動だった。かつて女に吐いたこともない、みじめな、ばかげたせりふにじぶんでも驚愕し、歯ぎしりして嘲笑しつつも、声が、涙とともにほとばしり出るのだった。それは彼の本音の絶叫だった。

「僕にとっては、あなたはやっぱり玉虫家のお嬢様だ。けがれのない、月のような高貴な姫君です。どうか……どうか……お嬢さま。いちどでもよろしゅうございますから、あの鶯の寝台で僕と一夜をともにして下さい。……」

「猪之吉」

と、優子はしずんだ、が、威圧的な声でいった。

「わかりました。あなたのいうとおりになるわ。いいえ、もったいないことだわ。どうせあたしは淫売婦なんだもの」

　彼女の眼に涙がやどった。

「けれど、そのまえにおねがいがあるの、後生だからきいておくれでないか」

「はい、なんでございましょう。お嬢さま」

　彼女はトロンとした、けれどむせぶような調子でいった。

「飛鳥はもう半分死んで、あとの半分はまるで子供かきちがいだわ。これでもあたし、ときど

きは可哀そうに思うこともあるの。ただ捨てちゃ寝ざめがわるいと思って、別れることもできないの。その飛鳥が、よくいうのです。あの古道具屋に売りはらってしまった鶯の寝台のことを。……あのはなやかで幸福だったころのことを。……ですから、おねがい、一晩でいいから、あのひとをあの寝台に寝かせてやって下さらない？　それであたしは、生きながら供養をしたようなきもちになって、せいせいするでしょう。あとは、あなたのいうとおり、何でもするわ。買われた淫売婦の身分で、こんなことをいえた義理じゃないけど、昔なじみのご縁で、もういちどあなたにすがります。勝ったあなたは、こんどはきいてくれるでしょうね？」

六

「ホウ……ホウ……ホウ……ホウ。……」

鶯の寝台が鳴いている。

隣の部屋で、磯谷弁護士は、ウイスキーのグラスを持ったまま、檻のなかの熊のようにあるきまわっていた。あるきまわらずにはいられなかった。なんという悩ましい、なまめかしい音だろう。それがもう何時間つづいていることだろう。……

「畜生」

彼はうめいた。

「おれは、やっぱり悪魔に徹すべきだった！」

あのとき、ふしぎに人間的なきもちになったのがいけなかったのだ。おれともあろう男が、なんだ。みっともない泣き声などをあげて！

あの鶯の寝台をみせたとき、優子の顔にうかんだしみ入るような哀感、そしてその次に呼んだ、「猪之吉」という異様な厳粛な声。……それが、ついおれをむかしの書生にひきもどしてしまったのだ。勝利は完璧だ、そう思った刹那の心のゆるみのせいだろうか。……

いったん人間的な感情につきおとされたところへ、そのまま哀れッぽくつけこまれて、うっかり承諾してしまったのが失敗だった。おれはまんまとしてやられたのではあるまいか。……

「いや、そんなはずはない。あいつはたしかに廃人だ」

それは、その夜優子が車でつれてきた飛鳥典彦の、変りはてた幽鬼のような姿をみてそう思うばかりではなく、彼を診察した某博士の筋から得たたしかな事実だった。彼は完全な性的不能者である。……

それを確信していればこそ、優子のねがいをききいれたのだ。けれど。——

「ホウ……ホウ……ホウ……ホウ。……」

寝台は歓喜の詩をうたいつづけている。

なぜ寝台は鳴るのだろう？　典彦と、それからいっしょに入った優子とは、何をしているのだろう？

磯谷は耳を覆った。それでも、その音は、鼓膜の内側にからみついた。筋書どおりなら、ま

さに天上の楽の音ともきこえるはずだったその音が、いま地獄の笞(しもと)のようにじぶんの耳をかきむしるとは、なんというばかな！　うちたたきたいのはじぶんの頭であり、柄(がら)にないじぶんの仏心だった。彼はウイスキーをガブのみにした。

「ホウ……ホウ……ホウ……ホウ。……」

寝台は笑う。

何をしているのだ。もう夜明けがちかいのに、ふたりは何をしているのだ。名前だけの夫婦が――いや、彼の得たまちがいのない知識では、地獄のように呪い合っていた不能者の夫と淫売婦の妻は、いま何をしているのだ。それこそは、磯谷にとって、ぞっとするような不可解事だった。

ふと、女の声が耳によみがえった。

――飛鳥がよくいうのです。あの売りはらってしまった鶯の寝台のことを。……あのはなやかで幸福だったころのことを……。

女の涙が眼によみがえった。なんのために彼女は泣いたのか、あの寝台が、どんな魔を彼女の胸に吹きこんだのか！

「ホウ……ホウ……ホウ。……」

寝台は鳴りつづける。鶯の寝台はむせび泣く。

「ばか、ばか、ばか、ばか！」

その音にあわせて、チンドン屋の鐘のように彼はくりかえしていた。が、誰にいっているのか、自分にいっているのか、よくわからなかった。

――うす白い昧爽(よあけ)が窓に訪れたとき、精魂(せいこん)つきはてたようにソファにしずみこんでいた磯谷は、ふと、いつのまにやら寝台の音がきえているのに気がついた。世界は異様な静寂に満ちていた。

ふたりは眠りこけたのだろうか。――なぜか、そうとはいえない直感と寒気が、彼の背をはいのぼった。

彼はギョクンと立ちあがると、もつれる足で扉のところへかけよって、二、三度呼んだのち、意を決してひきあけた。そして、そのまま、死固したように凝然と立ちすくんでしまった。

豪奢な、が、うらぶれた寝台のなかに、廃人の元貴族と淫売婦のその妻は、しずかに枕をならべていた。そして、死微笑をうかべた唇から、白蝋のようなその顎へ、ひとすじずつの血の糸がタラリとひいて、鏡板(パネル)の照りかえす夜明けの蒼(あお)みに美しいひかりをはなっているのであった。

大無法人

一

大江彦蔵が、四十五歳にもなって、急に人が変った理由が、その当座、知人のだれにもわからなかった。

たとえ、市井の医者にしても、このくらいの年輩になると、一種の貫禄がついてくるもので、とくに彼など決してはやらないほうではなかったから、そろそろいわゆる金肥りしてもいいはずだが、べつにそんな徴候もない。ふとりもせず、やせもせず、いい男でもなし、ぶ男でもなし、およそ患者にとって、医者の顔ほど忘れ難いものはないはずだけれど、三、四回診察をうけた人間でも、なにかのはずみにふと思い出そうとしても、はてなとくびをかしげてしまう。

患者に強烈な信頼感をあたえることも、医者商売の上の大きな要素だが、逆に彼のように圧迫感のない人間であることも、患者を気楽によびよせる利点となるものらしい。圧迫感はないといっても、軽いというわけではない。みせかけではない親切さ、質実さはそなえているのだ。

そんな大江彦蔵が、或る年の正月から、突然変った。まず人の眼にたったことは、彼がひど

く道楽者になったことである。

近所の夫人連はこういった。「大江先生、はやくのちぞいを見つけてあげなくっちゃあ。奥さまが亡くなられて、先生さびしいのよ」

彼の細君は、二年ばかりまえに亡くなったからである。

知りあいの男たちは笑った。「あいつ、やっと羽根をのばせるようになって、悦に入ってるな。なにしろ婿にいって、その女房がまたたいへんなヒステリーだったからな。……遊び好きになったのは御同慶のいたりだが、そのうち破目をはずさなけりゃあいいが」

大江と高等学校時代の友人で、いま小説家になっている男がある。その男が彼といっしょに温泉にいって、かえってから、大江の変りようについての噂が出たとき、こう評した。

「いや、あいつはね。去年、陰毛に一本白髪のまじっているのを発見したんだそうだ。それにショックをうけたと本人はいってるが、ショックというより、悟りをひらいたんだろう」

どの批評もあたっている。とくに最後のものなど、本人がそういっているというだけに、いちばん大きな真相のひとつだろう。

しかし、大江彦蔵の変化は、他動的なものではない。ずっと若いころからかんがえていたことの実現である。

道楽の実行というにとどまらない。むずかしくいえば、自己の人間の可能性をきわめることであり、ひらたくいえば、やりたいことをやってみるということだった。

そんな素質は、子供のころからたしかにあった。少年時代の彼の夢は、世界的な探検家になることであり、じぶんの運動神経がむしろ鈍重であることを知ってから、青年時代の望みは、小説家になることだった。からだでやれないことを、ペンで描こうと思ったのである。しかし、むろん、そんな才能はないから、すぐにあきらめて医者になった。もっとも、いうまでもなく、こんな夢想や希望は、人生の途上、だれだって一たびはゆくての空にかける虹ではある。

彼は、そのころから、じぶんの欲望をとげるのに、じぶんにない才能をあてにして、むだなもがきをこころみるのは愚かであるとはやくも見ぬいて、まず生活を安定させることを当面の目的とした。といって、大実業家になる才分もないから、ふつうのあたまの持主なら、まず生活は保証できる医者をじぶんの職業にえらんだものである。金さえあれば、この世の欲望の八、九分までとげられると思ったからだ。

医者になった以上開業医にならなければ金にはならない。彼の生家はそう裕福ではなかったから、あまり美人でないのを承知で、小金をもっていた亡妻のところへ養子にきたわけである。大変レアリスチックな人間で、そのことは否定しないが、しかしここまでは彼らしい夢があった。金も生活の安定もたんに手段にすぎなかったからだ。

しかし、現実はもっと酷烈だった。彼の細君は、彼の夢を達成する道具たるべく、あまりにも気のつよい、ケチで、ヒステリックな女性だったからである。彼はこの二十何年間か、ただ馬車馬のようにはたらかされた。完全に本末は顛倒した。しかし、金というものは、たんなる

手段にしては猛烈に魅力的なものだから、ただためるだけでもなかなかたのしいもので、彼もむちゅうになったから、ついウカウカと一千万円ばかりたまってしまったのである。

神は、彼の忍苦を見すてたまわず、ちょうどそのとき、恐るべき細君は、うまいぐあいに死んでくれた。真に天佑神助というべきである。

人間には、ひとによく思われたいとアクセク心をつかうのみならず、死ぬときでさえ、ひとにいい記憶をのこして死にたいというセンチメンタルな感情がある。なんの実利もない場合にも名誉がほしかったり、すべて絶望のうちに息をひきとる際にすら、「知己を後世に待つ」など、苦しいせりふを吐くのがそれである。

その心がけはわるくない。しかし、こまったことは、その反対に、おれはひとによく思われるために生きているわけではない、ひとにいい記憶をのこすために生まれてきたわけではない、あらゆる希望も野心も成功もこの世かぎりという考えもはたらくのだ。このほうが科学的な思想にちがいない。

これまたこれに徹すればいい。しかし、ふつうの人間は、この両者のあいだをさまよっている。悔いの翼をたれつつ、不徹底な、なまあたたかい人生の沼をうろついて終る。

たった一度の生涯を！

どちらかに、なにかに徹底すれば、よろこびにせよ、かなしみにせよ、じぶんの感情、心理の極限まで味わえるのだ。またそれによって、この世はガラリと相貌をかえるにちがいないの

だ。

　やってみよう、とついに彼は決心した。

　ところで、かなしいことに、大江彦蔵は、これといって特別な趣味もなかった。絵が好きだからピカソの絵をあつめるとか、芝居が好きだから、人気役者のパトロンになるとかいうような欲望はない。またそんなことをやれるほどの金はむろんない。ある金は一千万円だけである。

　これがまだもうすこし若ければ、そんな華やかな望みに投資する気をおこしたかもしれないが、二十何年間、ケチン坊の細君の鞭(むち)のもとに馬車馬のごとくはたらかされたおかげで趣味といえばまあ碁をうつか尺八をふくくらい、あと思いつく欲望というと、いたって次元のひくいものばかりである。

　彼は、あと一年間に、一千万円のうち五百万円だけつかうことにした。

　はんぶんの五百万円だけにかぎったところは不徹底だが、細君によく使い馴らされたうえに、生来彼も現実主義者であるし、回収ないし利益を目的とする投資ではなく、まあ無目的の浪費であるから、彼にしてはたしかに一代の壮挙といわなければならぬ。

　一年間に五百万円、一ト月に四十万円ばかりの小遣いを、はたしてつかいこなせるかどうか、度胸と経験のない彼は、じぶんでもおぼつかないような気がするが、このさき一年間とかぎれば、なんとかつとめあげられそうにも思う。

　浪費！　これが彼の最初の欲望であった。

　それはどんな人の心にも巣くう願いであろうから、これはあくまでも市井の平凡人の野望ともいえるし、またこの実行に敢然とのり出したところは、やっぱり大江彦蔵はすこし変った人間だったともいえよう。作者にはよくわからない。

二

「先生、どうですね、御感想は」

と、木部(きべ)一郎は、獣のように真っ白な歯をみせて、ニヤリとした。

真夜中をすぎた空に、すずしげに夏の月がかかっている。大江彦蔵は白痴みたいな顔で、フラフラとあるいている。

「いや」

と、唾(つば)をのみこむようにして、くびをかしげた。

「女たち……汗まみれになって、息もきれそうな声を出してさいごにはけいれんしおったが、ありゃ芝居かな、ほんものかな」

「さあ、そりゃ先生は、お医者だから、よくおわかりでしょう」

「そんなこと、いくら医者だって、わからんわ」

「あとで、男の人が相手じゃあ、男のほうがここまでもたないわネ、などぬかしやがった。業腹だが、そうかもしれない。はじめは演技でしょうが、おしまいごろの昂奮は、演技ばかりじ

ゃないと思いますね。たしかにあれだけ刺戟をつづければね――」

ふたりは、いまこの浅草の裏町にあるあやしげな旅館の二階で、いわゆるシロシロというショウをみていたところである。若い女同士が、器具をつかってからみあい、のたうちまわる奇怪な見世物だ。

大江彦蔵は、眼をひらいても、月光のなかに、もつれあう白い蛇のような八本の手足の残像が、眼華のようにきえなかった。

彼は、この正月から、こんな遊びや見世物にむちゅうになっている。

ただ金をつかう。――世のなかに、これほど面白おかしくらくなことのようで、いざとなると、存外むずかしいことはない。天性か、育ちか、天衣無縫の放蕩漢はべつとして、ふつうの人間には、やっぱりどこかふッきれない、ギコチないところがあるのである。大金をつかうのは、かくごのまえであっても、その対象がその金額と釣りあうかどうか、無意識の底にケチな勘定がはたらくからだ。とくに、天性においても育ちにおいても、謹直な努力型であった大江彦蔵などには。

むろん初老の医者らしく、そのほうの仲間も、高級料亭や待合や大キャバレーやナイト・クラブなどにも出入りするようになって、だから「大江君、実に面白い人になったねえ。いや、御同慶のいたりだ」などおだてられるのだけど、実はむりをいっているだけに、本人にはちっとも面白くない。

むろん彼にしてみれば、壮挙のつもりだから、努力をおしむ気はないが、おなじ道楽をするなら、なるべく本心から愉快なほうがいいにきまっている。彼は、遊びのほうにかけてはおくてだった。子供じみたところがあった。いったい、四十五にもなって、まなじりを決して、こんな冒険にのり出すなど、彼の本性に稚気がなければできないことで、ツンとすました名妓のまえで浅酌低唱をこころみる趣味は、とうてい彼のひたりきれない世界だった。

「どうも、いささか、くたびれましたな」

「きみでも、つかれることがあるのかね。すこし刺戟が強すぎたかな」

「まさか、ぼくは先生、あいつはもう七回みましたよ。……きのうは麻雀で徹夜でしょう。きょうひるまは野球やってきたんですからね」

と、木部は鼻で笑った。

木部一郎は、大江のところに居候をしている甥の一柳昭夫の友人だった。昭夫は陰性の蒼白い文学青年だが、この大学生は、どうして昭夫とウマがあうのか、ふしぎなくらい、明るい、社交的な――というより狂躁な若者だ。スポーツマンらしく、からだも大きく、ボクシングのため鼻がつぶれ、胸毛がフサフサしているところなど少なからず動物的だ。ほっぺたに大きな傷あとがあるのは、二年ばかりまえ、町のぐれん隊とやりあって、たたきわったビール瓶でられたあとだそうだ。

ふとしたことで、この青年に道楽の案内をたのむようになったのだが、はじめて彼は満足し

た。彼のつれていってくれるのは、ストリップだとか、男色者の酒場だとか、青線区域だとか、ギラギラと油の虹のうかんだような腐臭にみちた一画だったからだ。そこには高級料亭などにはない、あらあらしい野獣性があった。彼は、そんな卑猥な、堕落した巷に沈淪すればするほど、むなしく去ったじぶんのあわれな青春をとりもどせるような歓喜に惑溺した。

むろん、木部はタカることを当然としている。きょうのシロシロ見物にも、二万円の金をまきあげられた。学問はできず、ひるまは河馬のようにドロンとした眼をしているのに、こんな場所に入ると別人のように気のきいた軽口をとばしたり、知能犯的行為をやってのけるのに、あきれることがある。

シロシロのあとで、筆を陰部にはさんで、字をかく曲芸をみせられた。

「なんて、かく？」

ときかれて、木部はそくざにこたえた。

「忠孝」

――この春のことだ。やはり浅草でストリップをみたのだが、その踊子のなかに、ヨダレのたれるように妖艶な女がいた。そのあとで、劇場裏の変な家につれてゆかれて、ひとり或る部屋におしこまれた。しばらくすると、ドアがひらいてひとりの女がなげこまれ、ドアに外から鍵をかけられた。みると、さっきの踊子ではないか。

「なにするの？　出してよ！」

と、女はわめく。大江もおどろいて、いっしょにドアにとりすがったが、ふたり密室にとじこめられたことがあきらかになると、彼は次第に昂奮してきた。

「きみ、お金はいくらでもやるから……」

というと、ドアに背をこすりつけたまま、涙ぐんだ美しい眼でにらんで、

「いや！」

という。

それから一時間以上もかかって、せまい部屋のなかで、恐ろしい鬼ごっこがはじまった。はじめからうすものをまとっただけの半裸にちかい女だったが、それでもつかまえるたびにビリッとさける衣裳の音は、彼をきちがいのようにした。つかんだ足くびが牛酪のようにすべり、もも色に染まった乳房がつるつると掌からのがれ……とうとう半死半生になってあえいでいる女を、こちらもヘトヘトになっておさえつけてしまったのだが、あとで「お金をやろう」といったら、女は艶然と、

「要らない。……あたし、こんなことが好きなの」

と笑って茫然とさせた。

このふしぎな女の家のことだけは、大江のあたまに、日のたつにつれていっそう濃艶なかげを沈めていった。彼は、夜々てんてんとしてその妖しい想い出をかきいだいた。そして十日ばかりのち、また木部に案内をたのんだのである。

おなじようにストリップをみて、おなじ家に案内された。しかし、あの女はなかなかあらわれない。焦れきって足ぶみしていると、ドアがひらいて、木部が入ってきた。

なにかいいかけると大江を、「しっ」と制して、

「先生、ここをのぞいてごらんなさい」

と、壁にかかった裸体画をはずすと、三尺四方くらいの大きな窓があいていて、硝子ごしにとなりの部屋がみえた。そして、おどろくべきことに、口ひげをはやした中年男が、先夜の彼そっくりに、汗みどろになって、あの女を追っかけまわしている滑稽な光景がみえたのである。

「あれは、有名な作家のYですよ」

と、木部はニヤニヤ笑って、それから何をするかというと小さな撮影機をもち出して、その光景をフィルムにとりはじめるのだ。

「こ、こんな窓が、あったのかね！」

「向うの部屋からみると、ただの鏡になってるんです。こっちからはつつぬけです。警視庁にもこんなしかけがあるそうですね」

「そ、そ、それをフィルムにして、ど、どうするんだ？」

「むろん、Yに買わせるんです。五十万円くらいでね。……先生は、とくべつに二十万円にまけておきますよ。ぼくひとりの企業じゃないから、悪いけど、そのへんで眼をつむってぼくの顔をたてて下さい。あとで、あの夜のフィルムをとどけますから、ひきかえに――」

してやられた！　と思うが、この青年のばかのようなニヤニヤ笑いをみると、怒る勇気も出なかった。

むろん、このような小説的な快楽をあたえてくれる男を、これで手ばなす気にはなれない。

「じゃあ、もうかえるのか」

――と、いま、ガッカリしてつぶやく大江の、まるでベソをかいた子供みたいな姿を、木部はまたニヤニヤとみて、

「それじゃあひとつ、渋谷のカフェにでもゆきますか」

「カフェ？　特別におもしろい家かね？」

「いやあ、ただの、例のビール二、三本で一万円くらいふんだくる暴力喫茶ですがね」

「そんなの、つまらんじゃないか」

「それに、寝にゆくんです」

「寝るだけ？」

「寝るだけで、二万円くらい出す意気がありますか？　お気に入るか、どうか、まあいってみませんか」

それで、ふたりは深夜の東京を、車をとばして渋谷へいった。

もうとっくに零時をまわっていたし、警察もうるさいのでその横町はところどころ灯のすきまがみえるだけで、人通りもなく、暗かった。その店も、もうカンバンにするところらしかっ

た。
木部がつれてあがったのは、店のホールではなく、二階である。その下に、あの豪華な(?)店があるとは思えない、あかちゃけた、うすよごれた四帖半の部屋だった。そこに女給たちが泊ることになっているらしく、みんなシュミーズひとつになっているところだった。なかには、パンティひとつの娘もあった。
「おい、ふたり泊めてくれよ」
と、木部はいった。
「まあ、この暑いのに、いやねえ」
と、女たちはさけんだが、これも商売のひとつらしく、それ以上拒否はしなかった。
大江が、入口にあきれてたちすくんでいたのは、この四帖半にねる女が、八人もいたことだ。そこにまた大の男がふたりもとまる……。
「ことわっておきますが、先生、手を出しちゃあいけませんぜ」
——その一夜のむせかえるようなやましさを、彼はいつまでも忘れることはできない。女たちはなれているらしく、ふたりの男を適当な位置にはさんでおいて、まわりに折り重なって、人魚のように横たわった。灯をけすと、窓の月光が幻想的に部屋を満たした。
それは一種の肉ぶとんだった。女たちは濃い寝息と体臭と安香水の匂いを燻蒸させながら、或いはねむり、歯ぎしりをたて、ねがえりをうった。いちど、傍の女に「あっ」とへんな声をあげさせ、つぎに「ウ、フ、フ、フ」となまめかしいふくみ笑いをたてさせた木部は、すぐに大きないびきをかき出したが、大江は朝まで眼ばかりギラギラひからせていた。ちょっとからだをうごかしても、どの女かの腰にふれ、手足にさわる。うごかなくっても、乳房が背と腹に密着して、息づいているのだ。いや、そのうちに、彼女たちは眠ったまま柔かい唇を彼の口すれすれによせ、重々しい四肢を、ドタリドタリと彼のからだになげかけてくるのだった。……

三

「謹賀新年。
さて、昨年中、小生の変化について、さぞ一驚を喫されたことと存じますが、実は小生、或る所存があって、意志的にあのような放埒な生活をこころみたわけでございます。
つきましては、今年は、それとは逆に、苦行者のごとく質実剛健な合理的生活をこころみるつもりであります。そのために、或いは諸方よりさまざまの悪評が出ると存じますが、よくお考え下さいますならば、どちらさまも、御自身の御真情にてらして、痛快な御共鳴をお感じになることを、小生は信じてうたがいません。ただこの一年だけでありますので、なにとぞ大目に、御容赦下さらんことを切望いたす次第でございます。……」
大江彦蔵が、こんな奇妙な年賀状を知人一同にくばったのは、その翌年の正月だった。なんのことかと思ったら、要するに、ケチをきめこむことらしい。それを前もって断り状を

出すところはいささか気弱で、不徹底だが、実際彼は、禁酒禁煙を志す人間が、あらかじめみんなに宣言するように、こうでもしなければ、とうていやりぬけそうにないと思ったからだった。

浪費の欲望ばかりではなく、また或るときは、どんなにいままでケチに徹底したいと望んだことか！　いや、要るべきことにも出さない金銭的なケチではない。さして必要もないのに、義理、見栄、気弱なこころから、人々は、金、物、心を、しぶしぶと他人のためにつかう。それがこの浮世というものだとあきらめてはいるけれど、それにしてもそれらの犠牲はあまりにも大きい。人生のうち、そのためにアクセクすることのほうが、真にじぶんの必要とすることのためより、むしろ多いのではないか。

いわゆる浪費よりも、この方が真の浪費というべきかもしれない。これを決然として拒否したら、どんなに人の心はサバサバとして、残暑のあとにひたいをふく冷たい秋風のようにさわやかな快味を味わえるだろう。

大江彦蔵は、それから一切の寄付金などはねのけた。知人の幸不幸に対するわずらわしい贈物も廃止してしまった。お義理のつきあいや、無意味な挨拶やお世辞笑いもやめることにした。

患者で、治療費をはらわないある男の時計を、たんぽとしてあずかっておくといったら、その娘がにくにくしそうにつぶやいた。

「まあ、医は仁術なりっていうのに――」

「冗談をいっちゃいけない。医は仁術なりというのは、病気をなおす医術というものが、本質的に仁術だっていうことで、その報酬をタダにするという意味じゃないよ」

これを、この四十過ぎの男が、二十歳まえの小娘に、青筋たてて、ムキになっていうのである。

「よしまたそれをふくめて仁術というにせよ、それはこっちの慈善行為で、そちらから要求すべき筋合いのものではない。どうもちかごろの若い娘は、厚顔で、図々しくていけない」

本人は、合理的精神に徹する悲壮感すらおぼえているのだが、一見、その心情その行為が、冷酷で、意地わるで、小言幸兵衛（こごとこうべえ）じみてきたことはやむを得ない。

田舎の親戚の村長が上京して、ちかくの河と畑がダムになるので、その補償問題について代議士に陳情にきたといったら、皮肉に顔をゆがめて、

「やれ米がとれない百姓の補償、やれ魚がとれない漁師の補償、はては市町村が清掃事業をはじめたら、オワイ屋の補償までとび出す。……これがみんな税金ですぞ。いったい、なんの補償にもあずかれない国民の補償、補償無関係者の補償というものはもらえないのかね？」

と、いった。

往診の途中、ある公園で、偶然某大臣がとおりかかるのを群衆やカメラマンがとりまいて、ひしめくのをみた。むろん新聞社のカメラマンもいたが、ほかにその倍くらいのアマチュアももみあっていたらしく、急にかんしゃくを起したプロのカメラマンが唾をはいてののしった。

「アマの人は遠慮して！　どうもアマは出しゃばりすぎていかん。——」

　すると、大江彦蔵はツカツカとすすみ出て、そのカメラマンの腕をひっつかまえていった。

「どういう根拠でアマが遠慮しなければいけないんだね。きみがプロであることは、きみの勝手ではないか。写真機もってる奴は、みんな同権ですぞ」

　映画をみに入ったら、ちかくで赤ん坊が泣き出した。若い母親は必死にあやしているが、おそらくめったに映画をみることができないせいだろう。あやしつつも、腰は坐席に、眼はスクリーンに吸いつけられたままなのに、大江彦蔵はノコノコとたちあがって、顔をつき出し、

「奥さん、はたに迷惑だから、出てゆきなさい。子供はあんたには可愛かろうが、アカの他人にとっては、ただギャアギャアとうるさいガキですぞ。かんちがいしてはいけない。だいいち、意味もわからないものを、赤ん坊だって迷惑だよ。あんたはいい目をして、その結果として、赤ん坊を生んだのだから、そのまた結果として映画をみることができないくらい、自業自得というべきですぞ」

　と、きめつけた。いうことがしつっこくて、毒々しい。

　それどころではない。死にゆく病人の耳もとに、この医者は二、三度ささやいたことがある。

「おきのどくだが、きみはもうたすからない。さぞ、もっと生きたいであろう、心残りであろうと、きみの身になってみれば重々同情に値(あたい)するけれども、このあいだからきみの周囲をじっと観察していると、どうもきみが死んでもだれもこまる人はないようだ。きみは死んだほうが、

人さまがほっとするようだ。そう観念すれば、ちっとも心残りなことはないはずだよ。いらぬ未練はのこさないで、安らかに無に帰してもらいたい」

　悪意ではない。それどころではない。彼は、高僧のごとく、真実をじゅんじゅんといいふくめているつもりなのだ。

　大江彦蔵は、悪人ではなかった。だから、前年の浪費時代など、どんなに慈善行為をほどこしたかわからない。慈善というものも、そうたやすくほどこせるものではない。乞食に金などやったあとは、だれでもちょっとテレるものだ。慈善にも、勇気が要るのである。まして、それまでには、ケチン坊の細君が監視していたのだ。……だから、彼は去年一年、いままで鬱屈(うっくつ)していた慈善欲を、一見無反省と思われるくらい満足させた。

　まえからたのまれていて、細君のために頑と拒否されていた彼の甥の一柳昭夫を同居させたのも、そのあいだのことだった。

　実家が裕福でないので、アルバイトをして大学へ通っている青年だが、そのせいか、大学生らしいハツラツとしたところがないが、反面、ものしずかで、ていちょうなものごしの所有者だ。しかし、この青年にかぎらないのかもしれないが、そうみえて、ひどく非常識で、図々しいところがあった。彦蔵の書斎からドイツ語の辞書をもっていって、彦蔵にそれの必要なことが生じたので、すぐもってきてくれるようにといったら、「いま、ぼくが使っているんですがねえ」と、大変めいわくそうな顔をした。慈善と寛大の年ではあったが、このときは彦蔵も怒

ってどなりつけた。それで、シブシブもってきた辞書は、赤線だらけ、書入れだらけ。
　さて、ことしはあらゆる慈善を拒否する年である。むろん、昭夫は追い出さなければならない。

　そのころ、彦蔵の患者で、薬石効なく死んだ男があった。その奥さんは、まだはたちになるやならずで、雪をあざむくほど肌の白い、実に可愛らしいひとだった。それに昭夫が、恋の詩をささげたのを発見したのも、追放の口実のひとつになった。

「それじゃ。ぼくはどこへゆけばいいんです？」

　と、昭夫は、さすがに途方にくれた顔をした。彦蔵の家にいるかぎり、食費と部屋代はただだったからである。

「もとどおり、木部君の下宿にいって、アルバイトをすればよかろう」

「おじさん、せめてその部屋代だけでも補助していただけないでしょうか？」

「そういうことは、一切ことしはやめることにしたんだ」

「しかし、社会人は、すべて後輩の——未来の日本を背負った学生を援助する義務があるのじゃないでしょうか？」

「六法全書にそうあったら、出してもいいよ」

　といって、彦蔵は診察室の廻転椅子をクルリとまわし、顕微鏡で蛔虫の卵をのぞき出した。

四

大江彦蔵は、人を殺してみたいと思うようになった。
さまざまの人生実験をやってみて、いつのころからか、ふっとあたまに浮かんだかんがえである。

　或いは人にきらわれたくない。或いはにくまれてもいいから勝手なことをしたい、或いは底なしの好人物でありたい、或いは破廉恥漢でありたいと、人にはいろいろ矛盾した欲望がある。そして結局人間は、どれにも不満足な、不徹底な一生をすごす。——それに抵抗しようとした彼の実験は実に成功であった。

　もし、そのうちの何かひとつを生涯つらぬくということになったら、それはとうてい出来ない相談であったかもしれないが、ただ一年だけとかぎって実験したことが成功のもとだったとみえる。やれば、できるものだ、と彼は確信するようになった。彼は一年間、道楽どころか、破廉恥のかぎりをつくした。東京に——いやこの世にこんな場所や行為があったのかと眼をみはるような光景を見つくした。その結果、人間というものが、実に底しれぬほど面白い存在にみえてきたのだ。町であうどんな人間でも、だれのからだの内部にもきっとあんな素質が巣くっているにちがいないと思ってみると、実に飽きなかった。だから、なめるようにみていると、その人間がこちらをみて、それを肯定するようにニッコリする。おどろいたことは、女という

ものは、こちらが破廉恥な眼でみればみるほど、なぜかふしぎに愛情と好意にみちた眼で見かえしてくることだった。彼の評判は、ふしぎなくらい女たちのあいだでいいらしい。そのまた逆に、節制と厳格のかぎりをつくしてみると、これが案外に悪評のまととならない。むしろ威厳にみちた、信頼できる人間として、患者たちは畏敬の眼でみるし、友人たちのあいだにも、近来とみにその存在が重きを加えたようである。

　この世は、こっち次第だ。疑うことを知らぬ赤ん坊を、だれがにくむことができるであろう？

「英雄天才が、一世をうごかすというのは、ここのところだな」

　彼は、だんだん神がかりになってきた。これは彼を責めるわけにはゆかない。ナポレオンだって、ヒトラーだって、豊臣秀吉だって、みんな途中でだんだん神がかりになってきている。

「やればできるのだ。余の辞書に不可能という文字はない」という確信が、ものに憑かれたような妄想に変わってくるのである。

　おれは、何でもやれる。……いちど「悪いこと」をやってみたいな。

　ふっと、或るとき、そう思ったのがはじめらしい。だれも味わったことのない「悪」を。

　その欲望が、いつしか「悪」の最大なるもの、「殺人」という思いつきにおちていったのは、すこし神がかりに――異常心理におちいっていた彦蔵の必然的な心理のうごきといえる。

「殺人」それこそは、人類にとって、最大の禁断の木の実である。禁断の木の実ほど、人間のこころに甘美な戦慄をあたえるものはない。むろん、この世にある殺人のすべては、怨恨や狂気や物欲や、とうてい殺人者にその愉楽を感ぜしめるような余韻のあるものではない。しかし、それを、あのシロシロをみるように、いや芸術をみるように、まざまざと凝視し、鑑賞できるならば！

　――いくたびか、彼は、患者のうえに覆いかぶさりながらこんなことをかんがえていた。

「……先生なおるでしょうか？」

「なおるとも。なおるとも」

　おれは気がちがっているのではあるまいか、殺人を夢みつつ患者をみている医者があるだろうか。彼はときどきフラリと脳貧血のような眼まいを感ずることがあった。

　いや、そうじゃない。おれは正気だ。これは実験だ。たったいちどやってみたいだけだ！

　――しかし愕然としたことは、彼にはとうてい、それがやれないということを自覚したことだった。殺人だけはできない。いまこの患者を殺すとする。どうもたのしくない。芸術的陶酔にひたれそうにない。

　だいいち、衰死の病人の息の根をとめるのは、どうみても美的ではなかった。殺人芸術の対象は、どうしてもピチピチした肉体でなければならなかった。まさか、たとえ病人であっても、まだピチピチしたからだを死のまないたにのせて庖丁をふるうことは、いかに医者であっても

むずかしい。むろん、「人生体験」のひとつのつもりなのだから、あとで発覚してはこまるのだ。

懊悩(おうのう)のうちに、宙にふりあげたままの彼の手とはべつに、彼のあたまのなかでは、妄想はいよいよこの世のものならぬ妖麗な幻想の華をひらいていった。

それは、どうしても美しい肉体の——若い女であってほしい。その黒髪がうねり、黒瑪瑙(くろめのう)のような眼が、かっと恐怖にみひらかれ、あかい、美しい唇が、悲鳴と哀願のためにあらゆる音響を発する。しかし、彼女はやがてそのまっしろな肌を真紅の血でいろどって、足をくねらし、白い腕で宙をかきむしってもがき死んでゆくのだ。……

「肌のきれいな女でなければならんな」

或る夜、そうつぶやいたら、ふっと或る女の顔がうかんできた。

去年死んだ患者の未亡人で、きのう、妙な用件でやってきた。大江は産婦人科ではないが、去年よく知りあったせいで、思いあまって相談にきたらしい。月のものがないというのだ。まだごく初期とみえて、そのほかに確徴がみられないので、Z・A反応をみるため、尿をもらってしらべた。あきらかに妊娠だった。

「けしからん女だ」

と、彼は大道徳漢のようにひとりごとをいった。

「相手はだれかしらん？」

しかし、あの若さと美貌では、むりもない。その愛くるしさとなまめかしさのみごとにとけあった顔は、はたちの未亡人でなければみられない妖しいくらいの美しさだった。

「実験動物に、最適の人だが……」

それから二、三日たって、甥の一柳昭夫がブラリとあらわれた。この若者は、はにかみやのようで、妙に図々しいところがあって、いまでも月に二、三度はやってくる。アルバイトのゴムひもを買ってくれというのだ。

「またゴムひもか」

と、彦蔵はニガ虫をかみつぶしたような表情をしてから、ふと或ることを思い出した。あの妊娠した未亡人が、この甥のかつてへたくそな恋の詩をささげた相手だったことを思い出したのである。

「しかし、おまえもまあそうしてアルバイトをしておれば、へんな女に迷うヒマもなかろう。小人閑居して不善をなす。やっぱりわしのところにノラクラさせておかんでよかった」

「おじさん、それはどういう意味です？」

と、昭夫はめずらしくけしきばんだ。彦蔵は、しまった、と思うと同時に、すこし癪(しゃく)にもさわり、意地わるい笑いも浮かんで、

「ところで、おまえ、安西の未亡人をおぼえているだろう？」

「おぼえているどころか、ちょくちょくいって、ゴムひもを買ってもらってますよ」

「はははは、もう恋どころじゃないか」
「いや、まだぼくはあの奥さんを愛しています」
「こりゃまた収拾のつかないほど鉄面皮なやつだ。それじゃいってやろう。おどろくな。あの女は、未亡人のくせに子供ができておるぞ」
「ああ、こないだおじさんに診てもらったそうですね」
「なに？　おまえ、もうそんなことを知っているのか」
と、彦蔵は横っ面をひっぱたかれたような顔で、大学生の白い顔を見つめた。
「どうも、あれは、ぼくの子供らしいです」
彦蔵は、声もない。昭夫は奇妙なうす笑いを浮かべて、
「おじさん、しかし患者の秘密をしゃべることは、医師法の第何条かにひっかかるんじゃありませんか？」
彦蔵は、真っ蒼になったまま、唇をブルブルふるわせているきりだった。大金を投じ、悪戦苦闘した「人生体験」の修行も、なんの役にもたたないようだ。
その夜、はじめて大江彦蔵は、確固として殺人の決意をした。
「あの女は、殺される資格がある」

五

大江彦蔵は、買いおきの薬瓶やこわれた医療器具などを置いてある地下室に、ひそかに手入れを加え出した。隅に大きな甕を三つおき、地下室の天井には、煌々たる電灯がともるようにした。階段の上には重い厚い扉を設け、階段の下には鉄格子をはめた。
準備完了。
彼はあのはたちの未亡人に電話をかけた。
「もしもし、あなたのおなかの赤ちゃんの問題についてですね、重大な問題が起ったのです。昭夫もくることになっていますが、ちょっと秘密にしておきたい必要があるので、わたしのところにくるとは誰にもいわないで、今夜五時、おいでねがえますまいか」
次に、木部一郎を電話口によび出した。
「いや、ひさしぶりだね、え、さっぱりお見捨てでなさけないって？　はははは、すまんすまん。実はそのことなんだ、わしはもういちど、きみとばか遊びをやってみようと思うんだ。今夜六時にこないかね。ただし、或る趣向があるから、きみがぼくのところにくることは、だれにも秘密にしてくれたまえ」
しばらくたって、一柳昭夫を電話で呼んだ。
「昭夫、今夜七時にれいの未亡人がくる。おまえとちょっと相談したいことがあるのだ。その時刻、だれにも秘密にきてもらいたいのだがね。わかったかね？」
五時に、若い未亡人がやってきた。彦蔵はいいかげんなことをいって地下室につれていくと、

背後の扉をしめて、おどろく未亡人にとびかかり、彼女をまるはだかにしてしまった。
それから、鉄格子のなかになげこんで出ていった。
六時に、木部一郎がくると、彦蔵は彼にウイスキーをのませた。
この無頼の若者にアルコールが入ると、サカリのついた獣のように兇暴になることをよく知っていたからである。六時半をまわると、彼に、風呂に入らないかといった。
「へへえ、お酒のんで、男前になって、こりゃ面白いことになりそうだな。いったい先生、どこへ出かけるんですね？」
「まあ、わしにまかせろ。はやく風呂にはいってこい。おっと、風呂はいま修繕中なんだ。そこで裸になって、こっちへおいで。――こっちに臨時の風呂場をつくったから」
と、彦蔵は、木部を地下室へ案内して、まっくらな鉄格子のなかへおしこむと、ガチャンとしめて錠をおろした。
それから、階段をのぼってスイッチをひねった。まぶしいような白熱のひかりが地下室にみち、格子のなかに相対している若い二匹の獣の姿がうかびあがった。二匹の獣の皮膚は、全身うすももいろに染まっていた。一匹は酔いのために、一匹は恥じらいのために。――
「木部君。どうだ。面白い趣向だろう」
と大江は高笑いしたが、すぐにまた出ていった。もう昭夫がやってくるだろう。彼はなかなかいそがしいのだ。

七時に一柳昭夫がやってくると、「未亡人はこちらに待っているのだ」といって、大江は昭夫を地下室につれこんだ。
階段の上にたって、昭夫はポカンと口をあけた。
劇場の三階でみるパント・マイムのような光景が眼下にあった。
いや、それよりも、もっと人間の血をどよめかせる、美しくも恐ろしい見世物がそこにあった。案の定、はだかの雄は、はだかの雌をくみしいて、きちがいのように昂奮しているのだった。
名状しがたい熱気が、螺旋状にうずまいて、階段の上のふたりをつつんできた。
「みたか？　ふん、女まで夢中になっている」
ばかのようにつっ立ったままの昭夫の手に、冷たく重いものがのせられた。
ピストルである。
「昭夫、腹がたったら射つがいい。いいや、木部じゃあない。木部でもいいが、それよりあの甕をうつのだ。……三つとも、なかには濃硫酸が入っている。射てば硫酸がながれ出して、床をひたすだろう。……恥しらずのあのふたりも、あわててはねおきずにはいられまい。足を硫酸にひたして、ふたりは空中でダンスをやる。手をふり、胴をくねらせても、翼がない以上、硫酸のなかでいろいろなポーズをみせるほかにすることがない。……」
大江彦蔵の声は陶酔しているようだ。ついに見ることができるのだ。

かつてこの世の人間が想像もしたことのない凄惨華麗きわまる殺人の大壮観を！

「やがて、足は足くびまで、骨も肉もとろけるだろう。三寸ひくくなって、ふたりはなお立っているだろう。しかし、やがて硫酸にひたった部分がまたとろける。……ふくらはぎから、ひざへ、ふとももへ――そしてふたりは、硫酸のなかへメリこむように消えてゆく。そのときのふたりの顔の変化をみてやるがいい。ふたりの吼える声をきいてやるがいい」

これは、実に殺人芸術の傑作だ。と大江はわれながら歯ぎしりするほどの歓喜に酔っぱらった。

「射て！　さあ、はやく射て！　扉は外に声ももらさない。おまえもあのふたりも、ここにきたことはだれも知らない。屍体は濃硫酸にひたしておけば、数日のうちに完全に消滅してしまう。虫ケラのような奴らが消えたって！」

その虫ケラのなかに、昭夫も入っていた。すぐそのあとで昭夫からピストルをうけとって、それをつかって昭夫も硫酸のなかに追いおとすつもりなのだ。

「射て！　昭夫！」

「はい」

と、一柳昭夫は素直にうなずいて、いきなりそのピストルを彦蔵の横腹におしつけた。

「な、なにをする？」

「あなたを射ちます。いやだったら、階段をおりて下さい」

恐怖より、驚愕のために、大江彦蔵は、階段をころげおちた。昭夫はヒラヒラと蝙蝠みたいに追ってきて、大江のあたまにピストルをおしつけたまま、鉄格子の扉をあけ、彼をそのなかに追いこんだ。かわりに、二匹の獣は外へとび出した。

「おい、話はうまいじゃないか」

「うん、おれたちがここにきたことはだれも知らない。屍体はなくなってしまう。実にスムースだね」

と、昭夫と木部はうす笑いをうかべてしゃべっている。

「どうだい、昭、おれにこのひと、くれねえか？」

「そいつはこまる。ぼくの子がそのなかに入ってるんだぜ」

「その代わり、おまえはこの家の財産をもらっちゃえ。……待てよ、おれもそっちのほうがいいかな？」

「それじゃジャンケンをしよう。勝ったほうが、金、負けたほうが女だ。三回勝負！」

「よしきた、それ、ジャンケン、ポン！」

「あっ、ぼくが勝った！」

「もういちど、ジャンケン、ポン！　ホイ、こんどはおれの勝だ」

そのとき、はたちの未亡人が傍から口をとがらせた。

「金か、女か、なんていやあねえ。あたしとお金は抱き合わせよ。つまり、あたしもお金ほし

いわよ」
「あっ、そうか」
と、ふたりの大学生はあたまをかいた。
「それじゃ、金も女もここ当分共有にしようや」
「うん、それじゃここを出るか」
三人とも階段をピョンピョンとはねのぼって、扉のところで昭夫は下に銃口をむけた。
棒をのんだようにたちすくんでいた大江彦蔵は、なんともいえない叫びをあげた。
「おい、いいかげんにしろ、冗談だよ。おれのいろいろの実験のひとつで——まさか——おまえたちを——」
「こっちも冗談ですよ。しかし、おじさん、ついでだからそこで殺される人間の体験をひとつ味わってごらんなさい。なかなか得がたい経験ですぜ」
三人の高笑いが地下室に反響し、それがやむと同時に銃声がとどろいた。
一発！　二発！　三発！
甕はくだけちった。電灯はきえた。硫酸はながれ出した。
そして、暗黒のなかにのこった一人の刻苦勉励型無法人をしりめに三人の天性無法人は、羽ばたくようにかるがると、扉の外へ——天空へきえてしまった。

臨時ニュースを申し上げます

臨時ニュースを申し上げます

「臨時ニュースを申し上げます。臨時ニュースを申し上げます。本日午後八時三十二分、モスクワ時間で午後二時三十二分、国籍不明機がモスクワに水爆を投下いたしました……」

物凄い昂奮をしめす早口が、そこまでいっきにいって、ラジオはプツンときれた。

赤坂の料亭へ、財界要人と一夕（いっせき）の「清遊」をこころみるため官邸を出ようとしていた首相は、たまたま一室のラジオのカン高いこの声をきいて、階段をふみはずし、顚倒して前歯を折った。

前歯くらいで倖せであった。この刹那、心臓麻痺をおこしてそのままになった政治家と実業家が数多くあったし、東京都内で衝突事故を起こした車が数十台あった。自動車どころか、その直後空中衝突をした自衛隊のジェット機が三組もあったのも、決してこの臨時ニュースとは無関係とはいえなかったであろう。

これをきいたものすべてが、町をあるいていたものは電撃されたように立ちどまり、家に坐っていたものは、カッと頭髪をさかだてて総立ちになったことはいうまでもない。

たしかに、眼がさめてみたら、この地球の上で何が起こっているか、恐ろしいような時代であった。が、人々は恐怖と驚異になれて、昂奮の感度がにぶくなっていた。しかし、このニュースには、人々はのけぞりかえった。まったく予想しなかったことではない。だれもが心の奥底に——いつか、ひょっとしたら——という悪夢のような予感を抱いていただけに、それが突然、耳もつん裂く咆哮をあげておどり出してきたようなショックにうたれたのだ。

次の瞬間、だれもがウワッという名状しがたい叫喚をあげていた。何十万、何百万という口からである。その声は、全日本をゆるがせた。

そして、その夜——日本は、大自然の叫喚にもゆらいでいたのである。巨大な台風が、闇黒の日本列島をわたりつつあった。

平和なる最後の夕

その日の夕。——

夕方といっても、夏のことだから本来ならまだ明るい時刻のはずなのだが、雨気をふくんだ雲が空を覆っているのと、それでなくとも濡れているような緑が両側からせまっているために、まるで水底のような山峡の路を、一台の自動車が、Y県の湯（ゆ）ノ杖（つえ）温泉にはいってきた。

乗っているのは、二人の紳士と一人の女性である。

紳士はどちらも高名な評論家で、白髪をきれいになでつけて、タップリふとっているのは鵜（う）

殿真吾で、彫りがふかくみるからに鋭い容貌をしたのは、まだ四十そこそこの小見山次郎である。

　彼らは『女性公論』という雑誌の主催で、この地方の講演にまわっていたのである。むろんまだほかにも数人の講演者がいたのだが、それはさらに次の都市へ去り、彼らだけ、東京に待っている仕事のため、Y市でうちどめとして、ただせっかくここまできたのだからと、Y市にちかいこの湯ノ杖温泉へ、それまでの疲労をいやすべく一夜の宿をもとめてきたのであった。

　Y市にちかいとはいうものの、それでも二十キロの距離がある。車で二十キロはそれほどの時間を要しないはずだが、恐ろしい悪路であった。途中で車輪がはずれかかって、或る小さな町で修繕するのに一時間以上も時間をとられたくらいである。

「相変らずだな。……」

　と、小見山次郎がはねあがりながら苦笑した。鵜殿がくびをこちらへむけて、

「相変らずって……君、前にここにきたことがあるんですか」

「いや、はじめてですが――」

　と、小見山はちょっとまごついて、

「日本じゅう、どこでも、という意味です。戦後、バスとバスガールだけは実によく発達もし、訓練もされてきたが、道路だけは、神代以来ですな」

「政治の問題だね」

「しかし、おかげでこういう美人の弾力を鑑賞できるのだから、悪路もまた捨てたものではありませんな」

「シツレイしちゃうわ。……」

　と、まんなかの美人がいった。

　彼女は速水泰子といって、Y市の娘で、この春『女性公論』で募集した美人コンクールで準ミスに当選したのであった。それ以来、この地方の祭とかコケラ落しとか催しものにはきっとひっぱり出され、ちょっとしたスターになっていて、こんどの講演会にもむろん花束贈呈役に登場させられたが、準ミス女性公論なのだから、これは本筋だ。会が終ってから係の編集員が「どうですか、鵜殿先生と小見山先生とごいっしょに湯ノ杖温泉へゆく気はありませんか」となかば冗談にいったら、アッサリ承諾したのでかえってめんくらったが、彼女はおちついたもので、

「あたし、鵜殿先生も小見山先生も、どちらも愛読者なんですの」といった。

『女性公論』は婦人雑誌ではハイブロウの方だから、したがって準ミス女性公論もグラマーと知性美を兼備していなければならぬ。速水泰子が両先生の著書の愛読者であってもふしぎはなく、当然そうあるべきではあるが、それにしては少しおかしいところがあると、さっきから鵜殿も小見山も感じていた。

　車の中の雑談で、彼女がアンドレ・モーロアを洋菓子の名と思い、バーナード・ショーをシ

ョウの一種と考え、スプートニクを「スープと肉」と発音していることを知った。
両先生は、暗然とした眼でうなずきあった。
しかし心のなかで鵜殿は考えた。「しかしこの娘のあの明るい湖のように澄んだ眼はどうだ。あのかたちのいい高い鼻はどうだ。これほど無教養なあたまを包むものが、これほど美しい聡明そうな形態をそなえているとは。……この娘にとってはどうかしらんが、人間の悲喜劇のタネはこういうことにもあるな。これは一つ、随筆にかいてやろう」
小見山は、うすい衣服を通してはずむ美しい肉と芳香をこころゆくまでたのしみながら考えていた。「この娘は、東京へ出て映画女優になりたくって、ウズウズしてるらしい。それはムリだが、銀座のバーなら充分イカス。ひとつ今夜、気をひいてみるか」
台風がくるという予報のとおり、ぶきみなほど大粒の雨がフロントグラスをうち出した。
「湯ノ杖はまだかね？」
「あの吊橋をわたると、もう一キロほどです」
と運転手がいって、それから舌打ちをした。
なるほどむこうに吊橋がみえてきた。ケーブルも細く、あちこち板がくさって穴のあいているのがみえる。見るからに危なっかしい吊橋だ。大型車が通ればスレスレになるくらい狭い。
そして運転手が舌打ちしたのは、そのまんなかに、ひとりの男が立っていたからだった。
二、三度警笛を鳴らして、なおその男がうごかないとみると、運転手は怒声をあげて車から

とびおり、走っていった。そしてその男と一、二分何やら話しあっていたが、すぐ彼をつきとばすようにしてもどってきた。男はトボトボと橋をわたっていった。
「どうしたんだ？」
「腹がいたくってうごけない。……湯ノ杖までこの車にのせてってくれないかっていうんです。東京のえらい先生がのってらっしゃるんだからダメだってはねつけてやったんですがね」
男が橋をわたるかわたらないうちに車は発車して吊橋をわたっていった。三十メートルほどのみじかい橋だが、見おろすと相当な谷だ。ふかい谷の底に、水はこんな上流とは思えないくらい凄じい奔騰（ほんとう）をあげていた。
「おい、待て――」
そういいかけた小見山は、橋のたもとで窓越しに男の顔をみて急にだまった。すりきれた鳥打帽をかぶった男の人相があまり好意のもてるものではなかったからだ。蒼白く、貧乏そうで、陰惨な顔だった。美人と同乗させて温泉へゆく顔ではない。
白い恨めしげな眼で見送るその顔を、うしろにながして、車はまもなく湯ノ杖に入った。
あの蒸されるようなY市が、わずか二十キロの距離にあるとは見えない山峡の別天地だった。心配していた雨はすぐにあがって、美しい日のひかりが青葉と谿流にキラめいて、湯ノ杖は小鳥とひぐらしの声にうまっていた。予約していた山家荘（さんかそう）という旅館のまえは、黒山のような人だかりだった。この村の人々はむろん、ゆかた姿の浴客も背のびしてこの高名な文化人の車を

待っている。
鵜殿先生と小見山先生はかるく会釈しながら山家荘に入った。
主人からその妻までうやうやしくあいさつにまかり出る。
「どうも、ここまできても解放されないとみえますね」
と、ふたりは苦笑しながら盃をかわした。夕食だけは三人いっしょにしたのである。
「先生、お酌」
泰子になまめかしく麦酒瓶をつき出された鵜殿先生は恐悦してまたコップを乾した。いろいろな催しものに狩り出されるので、準ミス女性公論もこんな手つきをおぼえたらしいが、先生もふだんは二杯ほどで真っ赤になるのに、きょうはもう一本をあけて相好をくずしている。
「先生、いけますね、きょうは」
と小見山は皮肉った。可笑しかった。鵜殿の、謹厳そうな顔をしていて存外女性に眼のないことを知っていたからだ。
とは言え、じぶんも——実はさっき岩風呂で一ト浴びしていたら、いきなりはだかで速水泰子が入ってきておどろいたのである。「先生いい?」といって、小見山がまだ返事もしないうちに「ここの家はね、この風呂がいちばんいいの」といって、小見山のすぐまえで、湯ぶねのふちで仁王立ちになった。
「あたしのヌード、イカスでしょう?」

小見山は声もない。
「まあ、お入んなさい」
泰子が大きな音をたてて笑いながら湯に入ってくると、小見山もややおちついて、やがて四十男の図々しさをとりもどし、はだかの泰子を抱きよせた。
「すばらしいな、君は……ぼくが審査員だったら、準ミスどころか、ほんもののミスに推薦してあげたのに」
と、みごとな乳房をなでまわしたあとではっと気がついて、
「鵜殿君は入ってきやしないかな?　ぼくのすぐあとから来るといってたんだが」
「先生は、ここの主人とお巡りさんと話していらっしゃるわ」
「お巡り?　どうしたんだ?」
「あのね、さっきＹ市から刑事がきてね、この湯ノ杖にひとり人殺しが入ってきたんですって。だからご用心なさいと村のお巡りさんがいいにきたのよ、こわいわね」
「そりゃよたいへんだ、なぜ早く捕まえないんだ」
「それがね、何だかポカンとした話なのよ、もう十三年も前の人殺しなんですって。Ｙ市で未亡人が殺されたの。その犯人を、裏に住んでる男が知ってるんだけど、これが生まれつきのばかなんですって。ところが、きのう、その犯人がＹ市にいるって突然いい出したのを刑事がききこんだらしいの。それで、そのばかを注意してたら、きょうその犯人がＹ市からこの湯ノ杖

への路を通っていったと知らせたものだから、追っかけてきたというんだけど、なんだか雲をつかむような話ね」

「なんだ、十何年もまえの話か。……そろそろ時効ものじゃないか。しかし――」

と、小見山先生はふいにぎょっとして、

「さっき、ここへくるとき、車をとめた男……ありゃ何者かね？」

「あっ、そうね！　ほんとにおっかない人相してたわね、そうだ、お巡りさんに知らせてきてあげよう」

「待てよ、そんなこと……そんなカビのはえたような人殺しのことなんか、どうだっていいじゃないか」

と小見山は泰子に接吻をこころみた。ヘタクソであった。泰子は接吻をかえした。それはパンという快音を発した。

「先生、あたし、もう少ししたら東京にのり出すつもりよ、いま或る映画会社から話はあるんだけど……主演作品のことであたし注文があるのでまだＯＫしてないの。もしあたしがスターになったら、先生スポンサーになってくれる？」

「スポンサー？　ああ、なるともさ、なってやるとも！」

「でも、先生、お金ないでしょ？　評論家なんて、お金ないわね」

「これは恐れ入ったな、しかし、君くらいの美人のためなら、なんとか一ト肌――」

「ね、だから、スポンサーといってもね、お金は出して下さらなくってもいいのよ、評論であたしを援護射撃してくだされぱいいの」

ケロリとしていった。全然無邪気なもので、そんなことをやり、そんなことをいいながら、媚態のかんじもいやしいところもちっともない。天空カイカツ。さわやかなものであった。しかし『現代資本主義からみた速水泰子の美貌』『植民地問題と速水泰子のヌード』――どうも結びつかんな。……

――小見山先生は心胆を奪われたが、いまこうやってホロ酔いの血がまわってくると、浴室のことは思い出しても心愉しい。ニヤニヤして泰子の姿を見ていると、鶏殿がジロリとこちらをみて、

「ああ、速水君、あのひとと浮気しちゃいかんな」

といった。テレカクシか、それとも、風呂場のことを知っているのかな。

「まあ、いやな先生」

「いやじゃない。このひとは東京でも有名な女蕩（おんなたら）しで……女を手に入れては捨て手に入れては捨て……変節漢（へんせつかん）という点では、日本でも名だたるもので」

笑いながらいったが、言葉に毒がある。小見山が戦争中左翼から右翼に変り、戦後また左の方で売り出しながら、最近少々それがあいまいになってきたことを指しているのだ。

小見山は、鶏殿がじぶんを軽蔑していることを知っていた。こんど偶然ふたりがこの温泉に

同行するような破目になったことを、内心迷惑に思っていることを感づいていた。鵜殿真吾は、戦争中ついに軍に屈しなかったバックボーンのある自由主義者として自他ともにゆるしている人物だった。ところが、それが可能であったのは、「彼に財産があったからだ。彼に軽井沢にひろい土地と別荘があったからだ」と小見山はいつか匿名で鵜殿をやっつけたことがある。筆のついでに、「軽井沢の別荘で愛人とともに戦争を高見の見物をして、背骨も腰骨もあるものか」と毒づいた。ひょっとしたら鵜殿は、あの匿名評論の正体を知っているのかもしれない。

が、笑いながら面とむかって変節漢と呼ばれては、小見山も顔色をかえた。何かやりかえそうと口をモガモガさせたとき、窓の外でどっという喚声があがった。

宿の主人が部屋にかけこんできた。

「ちょっと先生、そこのヴェランダへお出ましねがいとうございます」

「なんだね？」

「さっきの連中が——お客さま方や村のものたちが、是非お顔を拝見したいとさわいでおりますので」

ふたりは顔を見合わせた。苦笑したが、わるいきもちではない。酔ってもいたし、ふたりは立ちあがって、ヴェランダへ出ていった。

「これじゃ休養になりませんねえ」

「いや、まあわれわれみたいな文化人がこういう歓迎をうけるのだから、日本も平和時代になったというべきだよ」

ヴェランダのすぐまえはふかい谿流になっているが、片側が小公園のような広場になって、群衆がざわめいていた。空はなお陰暗と曇っていたが、どういうわけか西にそびえる山のすぐ上にほそい真っ赤なきれめがひらいて、そこから、黄金（こがね）いろのひかりが巨大な扇形にふりそそいで、人々の姿を照らし出した。それは見ようによっては、「この世の見納め」といったかんじの物凄い光景だった。

しかし、いいきもちになっていたふたりは、群衆に手をふりながら、それを美の極（きわ）みと見た。

「台風はどうしたものですかな！」

「うん、美しいねえ。……きみ、ね、われわれは何とかかんとかいうが、今の日本は、歴史上いちばんいい時代じゃないのかな。キラビヤかな物と無際限に近い自由にあふれかえっている。……」

「世界でいちばん幸福な国かもしれんよ、これがアメリカとかソビエトとなると、かえって——」

群衆のさわぎがどうもおかしいと感じたのはそのときだ。

「ミス・コーロン出てこい、ミス・コーロン顔みせてくれえ」という叫びがきこえた。

ヴェランダのすぐ下にいた若い男が金切声をあげた。

「へーい！　ミスコロ！」

右側の方で四角ばった中年の男が歯をむき出した。

「ジジイ、ひっこめ！」

ふたりは狼狽した。群衆が見たがっているのはじぶんたちではなかったことにはじめて気がついたのだ。まっかになった顔を見合わせ、クルリと人々に背をむけて部屋に退却した。悠々とコンパクトをひらいていた準ミス女性公論は、ふたりに眼もくれず、シャナリシャナリとヴェランダに出ていった。

外でわあっという海のような叫喚があがった。千両役者が登場したようなさわぎだ。

鵜殿は麦酒をのんでから、やっと苦笑してつぶやいた。

「しかし、われわれよりも、美しい『スープと肉』嬢を歓迎する方が、はるかに平和の表象かもしれんな。……」

――が、天気はやはり平和ではなかった。西の空のわれめが突然閉じられると、下界は真っ暗になった。ゴォーという音響が天の一角に鳴りひびくと、凄じい雨がたたきつけてきた。ついに台風が襲来したのである。

そして、人間世界もまた必ずしも平和ではなかった。珍しく大いに酔った両先生が、やはり酔っぱらってゆかたから肌をむき出しにした準ミス女性公論の両手を両方からにぎって、それぞれかってにくどいている最中に、ドカドカと部屋に入ってきたものがある。

「誰だ」

ふたりは、かみつくようにふりかえった。

すると二人の闖入者は、これまたヨロヨロしていたが、速水泰子の方には眼もくれず、それにまけないかみつくような調子でいった。

「先生方にご質問に参りました！」

「いま、そこの飲み屋でギロンしているうち、この問題はどうあっても両先生に裁きをつけてもらわんけりゃという結論に達したのであります」

ふたりとも、眼が坐っている。

「な、何かね？」

と、いったが、小見山は、若い方がさっき広場で、「ヘーイ！　ミスコロ！」とわめいた男であることに気がついたし、鵜殿は、中年の方が、「ジジイ、ひっこめ！」とどなった男であることに気がついた。

どちらも、この湯ノ杖の人間で、若い男は、いまちょっと足に腫物ができて休んでいるが、市への路の途中にある花火工場の労組委員長の中西といい、中年の男は桑山という鍛冶屋だった。ふたりは村で、『思想的』に相容れない関係にあるといった。

さて、彼らが血相かえてききに来たというのは、天皇制と再軍備の問題だった。むろん、労組委員長の方は否定論者で、村の鍛冶屋の方は肯定論者だ。

これは大問題だが、それより一方がアンチャン風の青二才、一方が土のかたまりみたいな風

貌で、それがもつれる舌で脈絡もなくまくしたてるのをきいて、ふたりの評論家は興醒めがした。

「やはり、マスコミのおかげですな。こんな山奥も、やっぱり別天地ではない。……」

「しかし、山奥の居酒屋で、工員と鍛冶屋がこういう問題で大議論をやるんだから、やっぱり、君、日本は空前の自由なる時代だよ。……」

と、ふたりは苦笑してささやきあった。

が、すぐにとりすました表情で、それぞれ「うん、君の意見は面白いね、なるほどなるほど」と鷹揚にうなずいていると、鍛冶屋と委員長はそれをどっちも自論への賛成ととっていよいよいきりたち、

「問答無用だ、やるか！」

「表へ出ろ！」

と、歯をむき出して立ちあがった。とたんに部屋は真っ暗になった。停電したのである。

一瞬、拍子ぬけしたような静寂が部屋に満ちた。ここばかりでなく、湯ノ杖全体が突然あらゆる物音を絶ったようだった。

それが、たちまち異様などよめきに包まれるのに三秒とはかからなかった。嵐の音ではなかった。

「なんだ？」

みな、ぎょっとして闇の中に立ちすくんだとき、廊下をこけつまろびつして走ってくる足音がきこえた。

「先生！　先生！」

発狂したような宿の主人の声だ。

「大変です！　いま臨時ニュースがありました。アメリカがモスクワに水爆をおとしたそうです！」

第二報

脊髄をつらぬかれたような衝撃だった。

一分後、かわいた声で、鵜殿真吾がつぶやいた。

「——うそだろう？　そ、そんなばかな……」

「うそ？　いえ、先生、しかしたったいまラジオがたしかにそういって、そこでプツンと停電できれてしまったんですが、きいていたのはあたしばかりじゃございません」

主人の声には、断じて悪戯や冗談のひびきはなかった。それが決してうそではないことは、風雨のあれ狂う外を、

「戦争だ！　戦争だ！」とうわずった声をあげて走ってゆく数人の足音からすぐにわかった。

「アメリカが」

と、茫然と小見山もつぶやいた。
「やった！」と突然ひッ裂けたように鍛冶屋がとび出してゆき、「畜生！」と労組委員長がうなると、それを追ってかけ出していった。
それでやっと正気にもどって、ふたりの評論家は主人にみちびかれて、ラジオのある部屋まではしった。歯がカチカチと鳴り、ひざがガタガタとふるえた。
その臨時ニュースをきいたのははたしかに主人だけではなかった。しかし、水爆を投下したのはアメリカの飛行機だといったのはまちがいで、アナウンサーは「国籍不明の飛行機」といったらしかった。しかしこの場合、それはどちらでもおなじことだった。
「ど、どうなるんです、先生！」
「……ともかく、続報をきかなくっちゃあ……」
闇と、沈黙したラジオのまえで、鵜殿と小見山はジリジリした。
外の嵐が、彼らをいっそう恐怖に駆りたてた。さっきまで酔っぱらったり、くどいたり、大論争をきかされたりして、ちょっと耳から遠ざかっていたが、いま耳をすませるまでもなく、怒濤のような暴風雨のとどろきであった。
「少なくとも、けさまでは、外電にこんなことの起こる気配は全然なかったんだが……」
と、鵜殿はまたかすれた声でいい出した。
「しかし、やるとすれば、いっそうそういう気配は見せないかもしれんな。……」

「それに、アメリカは不景気だし、ソビエトはあらゆる点で猛烈にアメリカに追いつき、追い越し……共産圏は徐々にひろがりつつあったのだから、どうあっても結局平和共存できないとアメリカの首脳部が判断したとすれば……」
「だが、アメリカの指導者が、そんな断を下すとは信じられんが……」
「しかし、先生、アメリカの政府首脳とは無関係に、水爆パトロールをやってるアメリカ飛行士が、独断乃至発狂してやるということもあり得ますね」
水爆パトロールに従っているアメリカの飛行士からといって、水爆の恐ろしさを現実に人々に見せつけるために、イギリスの近海に投下するという怪文書がソビエト側に入ったというニュースがつたえられたのはごく最近のことであった。——まったく、何が起こるか予想もつかない時代だったのである。
五分……十分……三十分……電燈はつかなかった。それは数時間のように感じられた。そしてこの嵐では、今夜一晩じゅうつかないということもあり得ると、ようやく人々は考えはじめた。
「だれか……情報をとりにいってみてくれないか？」
と、とうとう鵜殿はいい出した。電話もきれていることがわかってからだ。
「Y市までゆかなくても、途中までゆけば何とかニュースが入ってるかもしれんから」
誰にも異論はなかった。すぐに宿の若い衆がふたり、雨具をつけてとび出していった。

三十分ばかりたって、外でまた異様なさけびがあがった。吊橋がおちたというのである。ふつうでさえ危なっかしい橋であった。それがこの嵐にきれたという椿事（ちんじ）が起こったのだ。

それも一大事だが、それに加えて、湯ノ杖から出ていった若い衆はどうしたか。Y市方面へ連絡にいった者はその二人だけではなかったらしく、時間的にみて橋と運命をともにしたものはないはずであるが、向こうへわたったまま、彼らがいっせいに帰って来れなくなったことはたしかだった。

「この温泉は、あっちへ出る路しかないのかね？」

と、橋さわぎがややしずまってから、小見山がきいた。

「いえ、この奥にほそい路がつながっておりますが……」

と急に山家荘の主人が不安そうな声になった。

「それはどこにゆく？」

「あたしのところの隠居所へ参る路なんでございます」

きいてみると、この温泉の奥に、いよいよ絶景をきわめた場所があって、そこにこの山家荘の主人の老いた両親が小さな別宅をつくり、少女をひとりつかって隠居しているのだという。奥にあるのはそれだけだし、またそこへゆくためのみに、断崖をけずって細い路がつけてあるという。――

「暑中休暇でかえってる息子が、実はけさはやくそこにトランジスターラジオをもっていって

やるんだと出かけたんでございますが、あした友達とY市へ遊びにゆくから是非夕方までにかえるといっておりましたが、この嵐ではいくら知った崖路でも……」

「トランジスターラジオ！」

みんなまできかず小見山はさけんだ。

「おい、この村にはどこかにそれをもってる人があるだろう、いや客の中にもきっともってきてる人があるだろう」

「ところが、ここではそれがダメなんですよ、山峡のせいですか、トランジスターラジオがまずほとんど入らないんでございますよ。でも、あの隠居所なら眺望がいいからどうか、老人のたいくつしのぎになればいいがと、それで倅がけさ持っていったようなわけで――」

そのとき、ふいに蠟燭の灯がゆらいだ。どどっと凄じい家鳴り震動が起こった。みんないっせいにとびあがった。

「なんだ！」

「崖が崩れたんだ。ああ命びろいした」

突然、入口で、まのぬけたような嘆声がきこえた。

ふりかえると、大きなからだの大学生である。蠟燭に浮かんだその顔は、子供みたいにまんまるであった。

「悠次郎（ゆうじろう）！」

と、眼の球をとび出させて、主人はさけんだ。

「おまえ……この嵐のなかを、かえってきたのか！」

「ああ、どうしてもかえってきたくなっちゃってね」

「ばか野郎！　友太とあしたY市へあそびにゆく用だろう、この嵐でそんな……吊橋もおちてしまったぞ！」

「嵐は今夜でいっちまうさ。吊橋がおちたってことは知らないもの。……でも、冷汗かいたなあ、もう十分あそこを通るのがおそかったら、おれ崖の下へ押しながされてたよ、お父さん、いまの音は隠居所へゆく崖路が崩れたんだ」

ただ口をパクパクさせている父親をみて、大学生は笑っている。そのことよりまず小見山はせきこんできいた。

「きみ……ラジオはきこえたか。あのニュースをきいたか？」

「あ、お客さまですか。よくいらっしゃいました」

とこの場合、彼はニコニコと愛嬌よく、

「ええ、実にどうもバカなことをやったものですね！　モスクワに水爆をおとすなんて——」

「では、やっぱり——いや、それは知ってる。で、その後の情報は」

「アメリカ大統領の特別メッセージがありましてね、そんな命令は下したおぼえはないというんです。それはアメリカ以外の国の飛行機か、それともアメリカ兵としても発狂者か——という声明があって二十分後に、弁解無用とばかりニューヨークにも水爆がおちたというニュースです」

「なにっ、ニューヨークにも！　大陸間弾道弾をつかったな！」

みんな蒼然たる顔色になった。

「そ、それから？」

「それから、トランジスターラジオの調子が狂っちゃってね、全然きこえないんです。お父さん、やっぱりあそこでもうまくゆきませんね。まさかこっちが停電してるとは思わないから、いそいでかえってきたのはそのせいもあるんですよ。しかし、たいへんなことになっちゃったなあ、世界の終りですなあ」

この宿の息子は、すこしどうかしているにちがいない。そんなことをいいながら、声はノンビリして、顔はいまにも笑い出しそうであった。

——その夜、評論家たちは一睡もできなかった。いや、太平楽な顔をしてねている二人の人間をのぞいては、この湯ノ杖にいた人間は、だれひとりとしてマンジリともしなかったろう。その太平楽な二人とは、大学生の悠次郎と、準ミス女性公論の速水泰子であった。

もはやこの美人をくどきに推参するどころではない。ふたりの評論家はあれを思い、これを思って眼もおちくぼんだ。

やがて、疲れはてたあたまで、弱々しく鵜殿真吾はかんがえた。

「核戦争は一週間もつづくまい。そのあいだに、日本もきっと水爆の飛沫をうけることは決定的だ。いや、もう東京にはその一発がおちているかもしれない。……おれがこの山の中にいたのは、天の助けだった！」

おなじように、闇の中に眼をキョトキョトさせて、小見山次郎もヤケクソになって考えていた。

「どうせ世界じゅうメチャメチャになるなら、日本もメチャメチャになるがいい。すこし清掃してもらった方がせいせいするかもしれん。その清掃組のなかにあの鵜殿がいないのは残念だが、その他の論敵、うるさいあの女、あの女、あの女……みんな水爆でケシとんでしまえ。この世にはおれとあの速水泰子がいりゃあ充分だ。……」

外の雨と風はいよいよ猛り狂っていた。この山峡の小天地は、完全に外界から遮断されてしまったのである。

第三次世界大戦第一日

——夜が明けてきた。

一晩じゅう、まさにこの世の終りのごとく荒れ狂った台風は、どうやら一応去ったようだが、まだ蒼白いひかりをおびた強風が吹いていた。墨のような乱雲がうずまきはしり、ときどき未練げにザッと大粒の雨をぶちまけていった。樹々は折れて白い肌をみせ、農家のうち屋根をはぎとられたものもあり、空に地に、群雀のように木の葉がとんで、きのうまでの桃源郷とはガラリと相貌をかえた凄壮感が、この湯ノ杖を覆っていた。

その夜明けとともに、とんでもない知らせが入ってきた。

ふたりの評論家ははね起きて、外にかけ出した。

「世界大戦などはじまってやしない。それより台風で日本じゅう大さわぎだ」というのである。知らせはだれから出たのかしらないが、さっき数人のものが、落ちた吊橋を見にいったら、対岸に誰かいて、水音をこして大声で問答した結果、向こうがそんなことをいったらしいということであった。

ふたりは吊橋の方へかけ出した。また灰色の空から、ザッと雨が顔を打ってきた。

吊橋はたしかにおちていた。きのう見たのとはまったく別の谷のように、恐るべき増水をみせた川は、凄じい咆哮をあげて、奔騰するしぶきの中に、きれたケーブルがねじれ、空におどっていた。

そのたもとから、二人の人影がこちらにもどってきた。どちらも男のレーンコートをきているが、ひとりは宿の息子の悠次郎で、もうひとりは、なんと速水泰子である。いつ、どこで意気投合したのか、ふたりはいかにも親しげに、ケラケラと笑いながら歩いてくる。——それをふしぎがるなり、かみつくように小見山がさけんだ。

「君……戦争のニュースは嘘だっていうじゃないか！」

「へ、誰がそんなこといいました？」
「いま、誰か村のものが、この川越しに対岸の人からそんなことをきいたとかいってたぞ」
「とんでもない」
と悠次郎は口をとがらせた。
「それどころか、たったいま、向こうにうちの若い衆があらわれてね、報告したんですよ、それによると、ソビエトはもうメチャクチャらしいですよ。西ヨーロッパの各基地と北極から千機のアメリカ水爆機が殺到してね、ソ連は全滅状態だって——ねえ、速水君、そういったねえ」
「ええ、ほんと、それから中共のことも何かいってたじゃないの。台湾から中国本土へ大軍が敵前上陸をはじめ、中共のあちこちで暴動が起こってるって——」
「やっぱりそうか？」
と、小見山がうめいて、小さくつぶやいた。
「そうか、そうだろう。世界にもう戦争が起きないなんて考えていたのは日本人だけだったかもしれない。ぼくもそのことはいちど国民に警告しておいたんだが。……」
鵜殿はソワソワしていった。
「しかし、もっと事態がハッキリしないと何ともいえないね。われわれは慎重に行動する必要がある。……」

なぜか、大学生はこのときニヤニヤした。まんまるい、のんきそうな童顔をしているが、やはりいまの青年らしく、感覚がちと妙だと、鵜殿も小見山もきみがわるくなった。
宿にひきあげて、ふたりの評論家は切迫した表情で情勢の分析にとりかかった。
「アメリカが勝った。……それは考えられる。ソ連のＩＣＢＭはまだ完全じゃなかったのだね、いわんやスプートニクはまだ軍事的に使用できる段階じゃなかったろうし、やはりこうなると二千機の水爆パトロールを常時やってたアメリカの方に確実性があったのかもしれん」
「ニューヨークもやられたというニュースですが……」
「アメリカが半分やられたときにソ連の方は全滅したのさ。とにかく日本はまだ無事らしいから、それをみてもアメリカの勝利はほぼたしかだ」
「しかし、ソ連が崩壊したとなると、こりゃたいへんですぜ。共産主義というものが姿を消すとなると……」
「——主義、思想が、武力で潰滅できるだろうか？　むしろ戦後の荒廃で、いっそうそれが蔓延しやしないか」
「ぼくは武力で思想を潰滅できると思いますね。武力というのはつまり科学力ですからね、この科学力という奴は、もうこの地球上にどんな事態をひきおこすか、いままでの歴史的常識を絶しているから」
「そりゃぼくも、共産主義は排撃してたから、そうなることに不服はないが、さて、日本はど

うなるのかね。いや、いまの政府がどんな行動をうち出してくるかね？」

　ひるごろ、また新しい情報が入った。どこから、誰がきいたのか、これまたハッキリしないが、こんどは日本のことだった。政府がいっせいに全国の共産主義者を検挙しはじめたというのだった。共産主義のみならず、進歩的文化人、労働組合の幹部をも逮捕しはじめたために、各地で名状しがたい混乱が起こっているというのだ。

「やっぱり、そうか！」

と、小見山がうめいた。

　ふたりとも、腕をくんで、考えこんだ。いままで書いたり演説したりしてきたことを思い出そうとしたのだ。それから顔をあげておたがいに見合わせた眼は、おたがいにはっとするくらい疑惑と非難とおそれに満ちたものだった。

　午後三時ごろ。急に、外でまた大さわぎがはじまった。

　依然として雨はときどきなぐりつけるように降るし、その中を人々が無意味にかけまわるのが、そのたびにギョクンとなり、はては麻痺してしまって、しだいにめいめいのもの想いにくれることに専心していたので気がつかなかったが、突然のただならぬ大喚声にとびあがって、ふたりともヴェランダに出てみると、例の小公園は群衆でいっぱいであった。

　その向こうのたかい石の台にのぼって、吠えるように演説している男があった。

「ソ連は滅んだ！　ええか！　この前の戦争で日ソ中立条約をふみにじり、太平洋で悪戦苦闘

している日本を背後から刺したロシアは滅んだのだぞ！　あのときスターリンは何といったか、おれたちはおぼえている。あいつは、これで日露戦争の仕返しをやったといった！」

　彼は大きな槌をもっていた。かれはあの村の鍛冶屋であった。スターリンも執念ぶかいが、この鍛冶屋も執念ぶかい男だ。

「そしてソ連は満州で何をしたか。満州でソ連兵に強姦された日本の女が何万人あったか、シベリア抑留された何十万の兵隊が、どんな苦役にコキ使われたか。みんなそれを知ってるはずだ！　それどころか、あいつらは樺太も千島もオホーックの魚もとりあげた！」

　群衆は怒りのうなり声を発した。ドス黒い、民族本能そのもののうめきだった。ふたりの評論家は立ちすくんだまま、十何年かまえの八月十五日の真夏の太陽の下に号泣する群衆の姿を思い出した。が、いま二人は、そこにいるのが異種族のような恐怖を感じた。

「いまや、おれたちもソ連に言ってやるときが来た！　われわれが大東亜戦争の仕返しをするときが来た！　とな。樺太、千島をとりかえせ。それから——赤化した奴らを、みんな日本海に放り出せ！」

　彼は槌をふり下ろした。それがあたったわけではないが、その下で豚みたいに悲鳴をあげたものがある。そこにあの中西という労組委員長をしている若者が、うしろ手にくくられてひきすえられていた。

「こいつは天皇制廃止をとなえた奴だ！」

と、鍛冶屋はさけんだ。

「日本は天皇の国じゃ！　三千年この方、天皇陛下の国じゃ！」

彼の声はひッ裂けそうで、いまにも脳溢血を起こしそうな顔いろだった。

「天皇陛下――」

といいかけて、鍛冶屋はふとヴェランダに立っているふたりをみると、

「先生――先生方は、おれのいうことをどう思います？」

と、大声で呼びかけた。

ふたりは狼狽したが、いっせいにこちらを見あげている群衆の火のような視線を感じると、思わず返答をした。

「君のいうことはもっともだ」

「それでは、先生方――そこで天皇陛下万歳の音頭をとって下さい」

「天皇陛下万歳！」

と、ふたりは金切声をはりあげた。人々は狂乱したように「天皇陛下万歳！」とさけんだ。

鍛冶屋は歯をむき出して、もういちど槌をふりあげた。

「そこでこいつをどうしてくれべえか？」

「たすけてくれ。たすけてくれ、天皇陛下万歳！」

と、委員長は死物狂いに身をもがいた。

そのとき人々をかきわけて石の台にとびあがり、鍛冶屋の傍に寄って何かささやいた男がある。あの大学生だった。

鍛冶屋は口をアングリあけて、それからぎょっとしたように縛られた中西を見下ろしたが、急に平家蟹みたいに渋面をつくって石の台をおりていった。

「どうしたんだ？」

と、声がとんだ。大学生はこたえた。

「いま、また情報が入ったんだ。政府は農地解放をとりけして、旧地主に土地を返還せよという命令を出したそうだ」

わっとまき起こった混乱を、そのときまたはげしい驟雨が覆っていった。これは現実に身に迫る情報であったらしい。人々は、第三次世界大戦のことなど天外にとび去ったように、どっと崩れて、雨の中を四方にかけ出し、散りはじめた。

宿にかえってきた悠次郎をつかまえて、顔色をかえて鵜殿と小見山が口々にきいた。

「おい、きみがさっき広場でいったことはほんとうか！」

「いまの政府ならやると思ってたが――」

大学生はくびをふった。

「うそですよ」

「なんだって？」

「ああ言わなきゃ、桑山が中西君をたたき殺すじゃありませんか」
ふたりの評論家は啞然としていたが、やがて鵜殿がかすれた声で、
「なぜ？　あの鍛冶屋が――」
「あの鍛冶屋は農地解放のおかげで、中西君のうちの土地をだいぶもらったんですよ。そのため中西君のとこはひどく貧乏して、工場に働きにゆかなきゃならんことになっちまったんです。そのくせ桑山が右翼で、中西が左翼になったのはへんですがね。とにかくその土地をまた中西のところへ返さなきゃならんとなると――こりゃカックンとゆきまさあね」
――それはともかく、ソ連が敗北したことはたしからしい。日本から急速に左翼思想が掃蕩(そうとう)されることは眼にみえてあきらかだった。そして、ふたりの評論家は、「天皇陛下万歳」の叫びとともに、これからの彼らの立脚点をさだめたのである。
――その夜、小見山先生は、厠(かわや)に立ってもどる途中、ふと速水泰子の部屋の扉をひらく気になった。この場合、そんなふらちな気を起こしたのはおかしいようだが、情欲というより何かしら悲壮な、不安な、それでいてあらあらしい心から、何か行動せずにはいられない衝動にかられたのだ。まだ停電がつづき、四界闇黒だったたせいもある。
手さぐりに這いより、やすらかな寝息をたよりに顔を近づけて、その唇に唇をおしつけると、
「おい、もういいよ」
と、眠そうな声とともに、じゃけんに顔をはらいのけられた。先生は驚愕した。それはあの

大学生の声だった。それと並んだ位置から、
「まだよくなくってよ、あたし……」
と、これも眠そうな甘い声がきこえた。これこそほんものの速水泰子の声である。寝言らしい。
ぎょっとして先生が立ちあがり、跫音(あしおと)しのばせて逃走にかかったとき――窓にパッと閃光がはしった。
数秒後、遠雷のようなとどろきが伝わってきて、山のむこうにこの世のものならぬ巨大な火柱が立ち、やがて夜目に真っ赤な、凄惨きわまるキノコ雲をひろげていった。

ソ連機日本に水爆を投下す

「あれは何だ？」
三人は窓ぎわへかけよった。
それはたしかにふつうの火事ではなかった。黒い山巓(さんてん)と雲をつなぐ真紅の焔はみるみる怪物的な膨張をしめし、その火照りをうけて、まだ垂れこめた雲は、無数の赤い蛇腹のように重なってみえた。まさに、この世のものとは思われぬ物凄い景観である。
家の窓べからつき出した無数の顔が提灯みたいに赤く、それが一様に恐怖にねじくれて何かさけんでいた。

「あの方角は？」
と、小見山はあごをガクガクさせた。
「あれはY市の方角ですが……Y市よりもっとちかいですね」
さすがのんきものの悠次郎の声もふるえている。泰子は顔を覆って、指のあいだからその地獄のような雲をみていた。三人とも、目下のまのわるい立場も忘れている。
「いや、夜の火は近く見えるものなんだ。それにあれが途方もなく巨大なものと考えれば、あれでふしぎはない。Y市だよ、Y市以外に、この近くにあれがおちる可能性はないよ」
「あれ？　……あれとは何です？」
「……水爆……」
ささやくような声だ。
気のせいか、遠くから、わあああん、という形容しがたい叫喚がきこえてくるようだ。いかになんでも二十キロはなれたY市からそんな声が伝わってくるはずはない、と気がついてみると、いつのまにか、あの広場に人々がとび出して、いっせいに口をあけている。その風とも虫の大群ともつかないふしぎな音は、その無数の口から出てくる声なき声のようであったが、しかしまたたしかに山をこえて伝わってくる人間の大叫喚のようにも思われた。
「……水爆？　まさか、Y市なんかに……」
「それじゃもっと遠くのS市か。S市にしても、S市にまで水爆がおちたとなると、君、こり

や、東京、大阪をはじめ……日本じゅうたいへんなことになってるぜ……」
「しかし、どこの飛行機が水爆を日本に？」
「むろん、ソ連機だ。日本はアメリカの前線基地だからな！」
「ソ連は全滅したんじゃないですか」
「まだわからないさ。とにかくニュースが入らないんだから。……なんといってもあの広大な秘密国だ。いくらアメリカの水爆機が何千機覆おうと、大陸間弾導弾の基地が一つのこらず潰されたとは考えられない。とにかく一トン半の人工衛星をうちあげた科学をもち、この前の大戦でも一千五百万の人的損害をうけながら、とうとうドイツをやっつけた、不死身のスラヴ民族なんだから！」
彼は急にあわて出した。
「いや、こうなることは考えられたんだ。やっぱりそうだ。しかし、これは鵜殿君ともういちど情勢を再検討してみる必要があるぞ」
愴惶（そうこう）として部屋を出ていった。
「あの先生たち……いつも何か起こってから、やっぱりそうだ、っていうのがクセね。……」
と、速水泰子が両手を顔からはなしてひとりごとをいったが、不安そうにふりむいて、
「でも、あれ、ホントに何かしら？」
悠次郎は、彼らしくもないむずかしい顔つきで、はだかの腕をくんで、遠いぶきみな雲をな

がめていた。

そのとき廊下のあたりで、おびえたような父親の声がきこえた。

「悠次郎、悠次郎はどこにいる？　駐在所からおまえにききたいことがあると呼びに来たぞ。お前、いったい何をした？　こら、悠次郎やあい」

悠次郎は、「うるせえな」といった顔つきでふりかえり、泰子を抱いてパンときれいな音をたててキスすると、シャツとズボンを手さぐりにひろいあげて、部屋をかけ出していった。

――小見山が「やっぱり」とじぶんが前から予測していたような口吻をもらしたことを泰子は笑ったが、しかしその不安は必ずしも彼だけ抱いていたわけではなく、無知な民衆の誰しもの心にあったことだった。

あのぶきみな赤い雲がしだいに消えて、その方角の空がふたたび真っ暗なしずけさにもどったころ、村には戦慄すべき流言がささやかれ出した。

「関東地方と近畿地方、北九州が、全滅したらしい」

「ほかの各都市にも水爆がおとされたというぞ」

「いや、沿海州、樺太、北鮮、中共から何千機かとんできて、落下傘部隊が降下中だとよ。――」

「日本に駐屯してたアメリカ軍の残存兵はみな無条件降伏をしたという」

「だれか……中共にいってた共産党の幹部が飛行機でもどってきて、臨時政府を組織したそうだ――」

おびえきったヒソヒソ話は、しだいに恐るべき具体性を構成しはじめた。

そして――いつ誰が命令したのか、あの小公園にまたおびただしい群衆があつまった。まだ夜のあけきらぬ蒼昧がかかった大気の中に、「日本は解放された！」という金切声がひびいたのをきいて、鵜殿先生と小見山先生は、吐胸をつかれてヴェランダへとび出した。

「人民諸君、米英帝国主義は裁きを受けた！」

石の台の上で、赤い旗をふりたてているのは中西委員長であった。

「はじめて原爆を使用し、われわれの同胞、ヒロシマとナガサキの罪なき市民二十万を殺戮した人類の敵は、またもやわがソ同盟にこの暴挙を敢てしようとして、一撃のもとに粉砕されたのだ！　このまえの戦争以来、彼らがわれわれに何をしたかを思い出せ。われわれの血と涙の税金による終戦処理費でぜいたくのかぎりをつくし、幾万という混血児をのこし、貧しい弾ひろいの農婦を面白半分に射ち殺し、政治、経済、軍事、教育あらゆる分野でわれわれを骨ぬきにしようとし、一たんソ同盟への盾に利用しようとすると、たくみにこんどは鉄鎖であやつろうとした！　みんな知ってるだろう。英国ではなお日本軍の残虐をえがいた映画をつくって反日を煽っていたという。しかしその英国は武器をすてた日本軍に何をしたか。シンガポールのチャンギー刑務所その他で、板ガラスや瓶のカケラの上をはだしでかけまわらせ、汚物のつまった水洗便所を素手で掃除させた上その手で食事することを命じ、淋病にかかっているじぶん

の小便をのむことを強制したではないか！」
群衆はうなった。怒りのために全身をうねらせ、足ぶみをした。
「その米英に媚を売り、その走狗となった保守党政府はケシとんだ。資本家をスポンサーとして私腹をこやし、人民の税金で日夜新橋赤坂で酒をのみ女を抱いていた汚職政治家ドモはケシとんだ。彼らの上に立つものはだれか、それはやっぱり天皇だ！」
中西はしぼるような声をはりあげた。
「太平洋戦争で天皇のために六百五十万の日本人が死に、傷ついた。その天皇は退位の責任もとることなく、ケロリとして帽子をふってクラゲを研究してる。三帖に八人住んで、赤ん坊がおしころされるものもある人民の血税で、皇太子は二億円のご殿をたてるという。……天皇制をたおせ！　天皇制をたおせ！」
彼は赤旗をふりたてた。
「そして人民の裏切者は、いま粛清しなけりゃあならん。反動分子はみんな絞首刑だ！」
その足もとで、牛のようなうなり声があがった。そこに桑山が縛られてころがされていた。
中西はこのときちらっとヴェランダを見あげて、
「先生！　先生！」
と呼びかけた。
すると、彼がまだ何もいわないうちに、鵜殿先生と小見山先生は先を争って、

「ソ同盟万歳！」
と、絶叫した。
そのとき、うしろからも「先生、先生」と呼ばれてふりかえると、山家荘の主人だ。
「な、なんだ」
「あの、恐縮でございますが、広場の方へお出ましねがえますまいか」
「どうしたんだ？」
「実は、おととい来た村の巡査が……例の人殺しがどうしても見つからんそうで、お客さまに一応みんな広場にあつまっていただきたいと申して参りまして――」
「ばかな！　この際なんということだ。日本が全滅しているかもしれんというのに、つまらん十何年もまえの殺人犯ひとりを追いまわすなんて！」
と、小見山は舌打ちをした。
「無礼な奴だ。現政府の警官などにもう用はない！」
「いや、小見山君、それはそれとして、われわれは人民の中に入ろうじゃないか」
と、おごそかに鵜殿真吾はいった。

この世の終り

太陽はまだのぼっていなかったが、夏の朝はまったく明けはなれていた。いつのまにか、濁

流のような雲はきれいにおしながされて、澄みきった大空が蒼々と頭上にあった。ただ風だけは依然としてはげしく吹いた。
「それではこれから天皇の犬の人民裁判を行う」
と、中西がそっくりかえってさけんだとき、群衆の中から、
「おや？」
という悲鳴のような声がきこえた。
「灰が――」
そういったのは、いつ駐在所からもどったのか、大学生の悠次郎だった。
みんな、ぎょっとしておたがいの頭や肩をみた。そこにはだれの頭にも肩にも、うす白いこまかいものがウッスラとかかっていた。大雨のあとだから、砂塵のあがるわけはない。灰だ。たしかに灰だ。
「死の灰だ！」
何ともいえない恐怖のさけびであった。それから群衆は沈黙して、恐怖に凍りついてしまった。
昨夜のY市の方角にあがったキノコ雲がその正体であることはあきらかであった。……骨にくいこみ、血を腐らせ、しかも治療の道のまったくないストロンチウムの死の灰！
「おおい、もうダメだ。おれたち、みんな死ぬのだ！」

悠次郎の若々しい声が悲痛にひびきわたった。そして石の台にとびのると、村の鍛冶屋の縄をほどいた。立ちすくんでいた中西があわててその手をとらえた。
「何をするんだ」
「みんなあと大して生きてはいられないんだ。ゆるしてやれ」
鍛冶屋は猛然とはね起きて、委員長の胸ぐらをつかんだ。
「やい、この死の灰はソ連の水爆のせいだぞ！」
「何いやがる。さきにアメリカがソ同盟に攻撃をしかけたからだ！」
「まあ待てよ」
と、悠次郎はふたりを両側へおしわけた。大男だからふたりは軽くひきはなされた。
「まもなく死ぬというのに、ソ連もアメリカもあるものか。世界の終りだ！　この世の終りが近づいているのだぞ！　みんな心残りのないように、今やりたいことをやるがいい。念仏をとなえるもよかろう。ひッぱたいてやりたい奴をひっぱたいてやるもよかろう。ひとの女房に惚れていたらいそいでくどきに走ってゆけ。……泰子、おいで、ぼくたち、見本を見せてやろう」
彼は石の台の下から準ミス女性公論を抱きあげて、ロダンの「接吻」そっくりの姿勢で抱擁した。
「なら、おれもさせてくれ！」

「おれにもその女を抱かせてくれ！」
あっけにとられてこれを見ていた中西と桑山は急に身をもんでさけび出した。それもむりはない。それほどいまのふたりの姿は魅惑的で、彼らは悠次郎の口に泰子が舌をさし入れるのまでまざまざと見たのである。
もりあがった乳房、くびれた胴、まっしろな肌――彼らはいままで、こんなに美しい娘を見たことはなかった。すぐ石の台の下にまできていた小見山まで、頭がクルクルするようであった。
群衆のあいだに凄じい混乱が起こった。さっそく女を追いまわす連中が出てきたのだ。あっちこっちで、積年のうらみか、猛烈な格闘がはじまった。
「やめろ！」
宿の方からはしってきた山家荘の主人がさけんだ。
「いまきいたが、悠次郎、なんてばかなことをいう、みんなよしなさい。むちゃをやる奴は巡査にひきわたすぞ！」
「巡査がなんだ！」
という怒号が起こった。
「じゃまする奴はたたッ殺せ！」
狂乱した群衆の迫力に、山家荘の主人はたじろいだが、急に蒼白な表情になり、何かうめいた。

その顔が、あの平凡な旅館の亭主とは別人のようにみるみる凶悪なものになった。
「よし押えるのは力だ！」
と、彼はさけんだ。
「皆の衆、いいか、おれをただの山家荘の主人と思っているのか。おれは……いま白状するが、これでも二十年前の南京攻略戦で、七人の中国人を虐殺し、十人の女を強姦した男だぞ。いいか、これからおれの指揮に従え、湯ノ杖の治安はおれが握る。服従しない奴はみんなたたッ殺すぞ！」
あまりに意外な変貌ぶりにみな度胆をぬかれ、圧倒されてしんとなった。しかしこれはあり得ることであった。戦争中の残虐行為、敵ばかりでなく味方の兵隊までが例外なくヤキを入れられたあの凄じい行為。あれをやった連中がすべて戦死したとは考えられない以上、その無数の恐るべき野蛮な魂は、この十何年か平和な日本の山河に農夫や工員や郵便配達や、やさしい父、夫として眠っていて、それが突如として仮面をとってムキ出しになることはあり得ることなのである。
「へ、オヤジ、ムリしてお芝居してやがる」
と、しかし悠次郎はセセラ笑った。
傍の小見山に、

「嘘ですよ、先生、あんなこと嘘ですよ」

そのとき、そのうしろの方からそうっと影のようにあゆみ出したものがあった。石の台の上に立ったその顔をみて小見山はあっとうめいた。

「人殺しはおれだ」

と彼はいった。それはおととい湯ノ杖へくる途中、吊橋のところで逢った病んだ男だった。が、その鳥打帽の下のくぼんだ眼から物凄い殺気が放射されていた。

「十三年前、Y市で女を殺したのはおれだ。やい、お巡り、そこにポカンと口をあけてないで、つかまえるならおれをつかまえてみろ」

しかし駐在所の巡査は気死したように立ったままであった。彼はニヤリと笑った。

「つかまえてもしようがなかろう。もうこの世の終りだ！　この空の下にもう夜明けは来ない。いいか、おれがこの湯ノ杖の天皇になるぜ。おい、そこの別嬪、ここへこい」

まねかれた速水泰子は美しい唇を半びらきにして、恍惚とその殺人犯を見あげていたが、フラフラと酔ったようにその方角へ吸いよせられかけた。

突然、小見山が彼女をおしのけ、石の台の上にとびあがった。

「うそをつけ、おれが人殺しだ！」

と絶叫した。癲癇でも起こしたように口から泡をふき、そっくりかえって、

「Y市の未亡人を殺したのはおれだ！」

そのとたんに、その手くびにシャッというひびきとともに、銀色のものがひかった。

「きさまを逮捕する。おれはY市の刑事だ」

手錠をじぶんの手につないだまま、鳥打帽の男がいった。

急に悠次郎が笑い出して、大声でさけんだ。

「みなさん、いまの灰は死の灰ではありません。たったいまオヤジがヴェランダにまいた大火鉢の灰が風にとんできただけです。きのうの爆発は、ありゃそこの中西君のつとめてる花火工場の事故でしょう。いや、実は僕もあれにはギョッとしましたよ……」

朝の光が、石の台の上に立ちすくんだ小見山次郎のひたいに射した。

しかしその顔は、まさに「この世の終り」であった。

大変失礼を申し上げました

読者にも、アメリカ氏にもソビエト氏にも、大変失礼を申しあげました。

実は、最初のニュースは、暑さと過労と女房の酷使にノイローゼになっていたアナウンサーの発狂によるものでありました。

この途方もないニュースは、むろん副調室のニュース課員にきかれ、たちまち調整技師に命令してマイクのスイッチをきらせた。そしてそのあと「つつしんで訂正とおわびを申しあげ」られたことはいうまでもない。

しかし、内容が内容だけに、その一瞬、全日本にあたえたショックは冒頭に報告したとおりである。

ところで、山の中の湯ノ杖温泉では、その臨時ニュースの直後に停電してしまったのである。そのうえ、台風のためにまったく外界から孤立してしまったのである。

その混乱の中に、わるいことに大学生の悠次郎がかえってきた。彼は村の騒動をきいて、とんでもないいたずらを思い立った。彼は山の中のながい休暇にしごくたいくつしていたのだ。それがあの第二報であった。さらにあの深夜のキノコ雲は、悠次郎が推定したように花火工場の事故による爆発であった。ついでにいえば、臨時ニュースのあと、Y市の方へ情報をとりにいった若い衆は四、五人あるのだが、そのうち一人は途中で怪我をし、二人はそのまま親戚の水害に手伝いにゆき、谷川の手前まで報告にもどった二人のうち、一人はほぼ正確に村人につたえたが、次の一人の報告は、いたずらものの悠次郎のためにまたも変形させられてしまったのだ。

——十三年前の殺人犯人を、白痴の目撃者の証言のみで追ってきたY署の刑事は、はじめの一日は腹痛のため駐在所でうなっていたが、それがなおると「第二報」をきいたという悠次郎をよびつけて調べ、白状させ、さんざんあぶらをしぼったが、ふとこれを利用して犯人に白状させる環境をつくりあげる策略を思いついたのであった。

彼はその真犯人の名も顔も知らなかったのだ。戦争中、右翼へ転身してみせたものの、なお

特高のきびしい眼をふせぐことのできなかった小見山次郎は、当時変名してY市に疎開し、未亡人をたぶらかして養われていたが、戦い終り、新時代が到来すると、未来のじゃまになる彼女を殺して立ち去ったのである。

嵐も去り、蒼々と晴れあがった空の下を、あぶない仮橋をわたって山を下ってゆく殺人犯と刑事に、それよりもっと足の重い鵜殿真吾を、明るい笑顔で、悠次郎と速水泰子が手をふって見送っていた。

この美しい玩具のおかげで、当分悠次郎のたいくつ病もおさまるであろうか、それはおたがいさまだと、泰子の方でもいうかもしれない。

解説

長谷部史親（文芸評論家）

本文庫既刊の『十三角関係』の巻末解説でも述べたように、山田風太郎作品はきわめて多岐にわたっており、一般的な文芸ジャンルの呼称の枠に収まりきらない。とりあえずミステリーと呼んでみたり、時代小説として捉えたりする一方、双方の領域にまたがるものもある。ただし実のところこれは、けっして不思議ではない。

　そもそもジャンル論は、作品を読み解き味わう上での窓口として機能してきた。あるいは批評する立場の者が、便利な物差しとして使うだけである。しかるにつねに作家が、既存のジャンルの枠内に束縛されて作品を書くとはかぎらない。そこで批評家は、枠からはみ出た部分について、複数の物差しを用意して当ててみるか、全く別の物差しを作り出すか、もしくは無視することになるわけである。

　批評には独自性や自律性が期待されるがゆえに、批評が新たな潮流を生む場合もあるだろうが、とりわけエンターテインメントの分野では概して批評が作品の後を追ってきた。むしろ新しい作品を追いきれずに、在来の批評基軸に何とか押し込めようとする事例も少なくない。そうした齟齬を折衷するために、いつしかジャンル・ミックスという表現が用いられるようになった。ただむろんこれは、一種の便宜的な措置にすぎない。

　本書『天国荘奇譚』には、昭和二十年代後半から三十年代前半までに書かれた七つの中短篇が収録されている。作者が探偵小説専門誌『宝石』の懸賞に投じた「達磨峠の事件」によってデビューを果たしたのは、まだ医科大学に在学中の昭和二十二年（一九四七年）のことであった。そして一世を風靡した忍法帖シリーズは、昭和三十三年（一九五八年）に開始されている。したがって本書収録の初篇は、作者がもっぱら探偵小説作家として世に知られていた時期の作品ということになろう。

　ちなみに探偵小説とは、ミステリーに対する古い呼び名である。いろいろな細かい経緯を省略して現象面だけを追ってゆくと、かつての探偵小説は昭和三十年ごろから推理小説と呼ばれることが多くなり、やがてミステリーと慣称されるようになった。内容や時代に応じて呼び分けてもよさそうなものだが、厳密に区別するのはなかなか難しいので、単に呼称が推移してきたと考えた方がわかりやすいだろう。

　余談ながら、探偵小説が推理小説を経てミステリーになる間に、ジャンルの意義が徐々に拡散し稀薄化したと見る向きもある。しかしながら旧来の探偵小説には、今いうところの怪奇小説や恐怖小説、あるいはＳＦまでも含まれることがあったから、あながちそうともいいきれない。ただ、昭和二十年代までにデビューした作家の作品には、探偵小説という表現が似つかわ

しい場合が多く、山田風太郎もまたしかりであった。

　しばしば山田風太郎は、自分は探偵作家と呼ばれたものの、探偵小説をほとんど書いたことがないという趣旨の発言をしている。ここでの探偵小説は、一般的なジャンルとしてのミステリーではなく、もっと主観的に意味が限定されているように思う。すなわち、典型的なミステリーを備えた純然たるミステリーのことである。なるほど「純然たる」という言葉を冠した条件の下では、山田風太郎作品には探偵小説が少ないだろう。

　だが今さら確認するまでもなく、探偵小説のジャンルは「純然たる」ものばかりで成り立っているわけではない。ポオが一八四一年に書いた「モルグ街の殺人」をミステリーの始祖と見なすなら、その祖型に多様な要素が流れ込んできたことによって、ジャンルの成熟がもたらされたと考えた方が自然である。いいかえれば、祖型をいかに活用するかの試みが長期にわたって繰り返され、結果としての現代のミステリーが醸成されてきた。

　こうした流れの中において、ミステリーに変幻自在なデフォルメを加えた山田風太郎作品は、非常に意義深いものをもっている。先に記したジャンル・ミックスという表現などは、その便宜性が発揮され世に浸透するよりもはるかに前に、山田風太郎作品が率先して実践したことであった。本書『天国荘奇譚』に収められた七つの作品もまた、エンターテインメント界における先進性を雄弁に物語っている。

　さて巻頭の表題作「天国荘奇譚」は、『宝石』誌の昭和二十五年一月号に発表された。なお

本稿の文中で示す初出データ等は、『別冊新評』版の『山田風太郎の世界』に掲げられた中島河太郎編「山田風太郎年譜・作品目録」にもとづいている。昭和二十五年は、最初の作品「達磨峠の事件」から四年目にあたるとともに、作者が医科大学を卒業した年でもあった。すでに作者は、デビュー二年目から旺盛な執筆活動を続けていたわけだが、大学卒業と同時に作家専業に踏み切ったことになろう。

　この「天国荘奇譚」は、昭和十年代の旧制中学の寮生活を題材に、強烈な諧謔を潜めつつ構築したものである。エッセイなどで語られるところによると、作者は旧制中学の時代に四人の仲間を組み、教師の目を盗んでいろいろな遊びにふけっていたという。仲間内で互いを呼び合う符丁が雨、風、雷、雲とかいったもので、作者はそのうちの「風」であった。そこで、受験雑誌で募集している学生小説に投稿した際に風太郎という筆名を選び、後に『宝石』の懸賞に応じるときにもそれを踏襲したのである。

　ひるがえって「天国荘奇譚」の物語の中で、寮の天井裏に一室を設けて遊びの拠点としている四人組の名前が雨宮、風早、頼、運野なのは、たぶん偶然の一致ではあるまい。もちろんフィクションであり、彼らが次々に繰り広げる所業がみな事実に立脚しているわけではないが、実際に作者は天井裏にこもって火を焚いたりしたこともあるそうである。全く世代の異なる私も高校生のころ、仲間と一緒に校舎の床下に勝手に地下室を造営した経験があるので、十代の少年の遊び心とはえてしてそんなものであろう。

ともあれ「天国荘奇譚」は、探偵小説専門誌に発表されたわりには、ミステリーというよりはユーモアと皮肉のきいた青春小説である。しいてミステリーとして眺めるなら襲撃もののパターンに近いが、無理にこじつける必要はない。たしかに遂行の具体的な手段やアリバイ作りなど、ふんだんにミステリーの手法を用いてはいるが、謎めいた状況の呈示によって読者の興味を引きつけるのではなく、そのたびにすぐに種を明かしている。むしろここでは、悪童物語の趣向とスカトロジー文学の風味を満喫すべきではなかろうか。

ただ、ひとつ見逃せない要素として、昭和十年代に舞台を据えながら、戦後の視座をまじえている点に注目しておきたい。ときおり作者の筆先は、太平洋戦争に対する批判に向けられている。山田風太郎作品は、たとえ明治期やそれ以前の時代を描いたものであっても、つねに太平洋戦争と日本人との関わりに無縁ではなく。加えてこの「天国荘奇譚」では、教師たちを標的とする糞便攻撃を、空疎な権威に対する反逆と憐憫の表明と捉えることができる。軽妙かつ滑稽な展開の中に、苛烈な認識が内包されているのは、山田風太郎作品の特質のひとつといえよう。

続く「恋罪」は、『探偵実話』の昭和二十七年七月号から八月号にかけて掲載された。複数の書簡を並べて物語を進行させる手順や、それらが作者自身への来信だという設定によって虚構に奇妙な真実味をもたらす技法は、ミステリーではとくに珍しくはない。ここではやはり、思い違いが複雑に交錯した末に意外な結果を生む過程が絶妙である。

また「ドン・ファン怪談」は、『傑作倶楽部』の昭和二十九年十二月号に発表された。懐中の乏しい学生たちが、高級料亭への払いをまかなうために、奇抜な賭けを発案するのが発端である。二段構えのオチのつく結末も秀逸だが、戦後復興を遂げつつある東京各地の盛り場の風俗が定着されているのも、見どころのひとつであろう。

やや短か目の「童貞試験」と「寝台物語」のうち、前者については今のところ初出データがわからない。結婚式がとり行なわれている最中に、新郎新婦の出会いと過去の奇妙な出来事を回顧する「童貞試験」では、匿名の手紙と覆面が小道具として効果的に使われている。また『面白倶楽部』の昭和三十年十月号に載った「寝台物語」は、特定の寝台に励起されるエロティシズムの魅力もさることながら、戦争を経て没落した旧華族と、かつての使用人との間に起きた立場の逆転を描いたところに妙味があろう。

次いで「大無法人」は、『傑作倶楽部』の昭和三十一年十一月号に発表された。謹厳な資産家の女性と結婚した医師が、妻と死別した後に思うがままに実験的な生活を送る話である。遊蕩三昧に明け暮れる一方、今度は吝嗇に徹してみるといった具合で、ついには悲劇的な末路をたどるものの、他者の視線を意に介さない闊達な人生観が興味深い。

巻末の「臨時ニュースを申し上げます」は、『小説倶楽部』の昭和三十三年九月号に掲載されたもので、本書の収録作品の中では最も新しい。ラジオのニュースで、モスクワが水爆による攻撃を受けたと伝えられた直後に、台風のせいで停電したことから、隔絶された温泉街で珍

騒動がまき起こる。一種のユーモアSFであるとともに、近年のシュミレーション小説の走りともいえるが、やはりここでも太平洋戦争と日本人の関係が大きく影を落としているのは否めない。壮大な皮肉を読みとりたい一作である。

●底　本

「天国荘奇譚」（『女死刑囚』旺文社文庫　昭和六十年二月刊）

「恋罪」（『虚像淫楽』山田風太郎奇想小説全集6　桃源社　昭和四十年三月刊）

「ドン・ファン怪談」（『春本太平記』山田風太郎の奇想小説3　桃源社　昭和五十四年十二月刊）

「童貞試験」（『春本太平記』山田風太郎の奇想小説3　桃源社　昭和五十四年十二月刊）

「寝台物語」（『黒衣の聖母』山田風太郎奇怪小説集3　立風書房　昭和五十三年五月刊）

「大無法人」（『夜よりほかに聴くものもなし』現代教養文庫　昭和五十二年六月刊）

「臨時ニュースを申し上げます」（『男性滅亡』山田風太郎奇怪小説集4　立風書房　昭和五十三年五月刊）

〔お断り〕

本作品中には、今日ではいささか不適当と思われる用語が使用されておりますが、作品が書かれた時代背景等を考慮し、概ね発表当時のままとしました。御理解頂きますようお願いいたします。（編集部）

天国荘奇譚

著　者　山田風太郎

発行者　櫻井道弘

発行所　廣済堂出版

〒105　東京都港区芝3-4-12

電話　03(5445)1202(営業)

電話　03(5445)1204(編集)

振替　00180-0-164137

印刷所　廣済堂印刷株式会社

〈編集担当〉伊藤秋夫

定価は、カバーに明示してあります。

落丁・乱丁本はお取替えいたします。

ISBN4-331-60542-6 C0193

廣済堂文庫 ミステリー&ハードノベルス 好評発売中！

ミステリー&ハードノベルス群!!

- 孤独な週末　赤川次郎
- 火遊び妻　赤松光夫
- 聖未亡人　赤松光夫
- 未亡人秘書　赤松光夫
- 誘惑未亡人　赤松光夫
- 八ヶ岳山麓殺人事件　梓林太郎
- 大雪山殺人事件　梓林太郎
- 八甲田山死の誘い　梓林太郎
- 血の中の砂漠　梓林太郎
- 鳥海山殺人渓谷　梓林太郎
- 黒い岩壁　梓林太郎
- 七つの迷路　井沢元彦
- 赤い雲伝説殺人事件　内田康夫
- 後鳥羽伝説殺人事件　内田康夫
- 平家伝説殺人事件　内田康夫

- 恐山殺人事件　内田康夫
- 王将たちの謝肉祭　内田康夫
- 北欧孤島奪還戦線　大石英司
- 調毒師を捜せ　大沢在昌
- アルバイト探偵　大沢在昌
- 女王陛下のアルバイト探偵　大沢在昌
- 不思議な国のアルバイト探偵　大沢在昌
- アルバイト探偵／拷問遊園地　大沢在昌
- 小説東大法学部　大下英治
- 小説 政界三国志〈第一～六巻〉　大下英治
- 野獣都市　大藪春彦
- 殺人許可証No.3　大藪春彦
- 鮮血の宴　勝目梓
- ライバルはベッドで殺せ　勝目梓
- 紅い薔薇の狩人　勝目梓

廣済堂文庫 ミステリー&ハードノベルス 好評発売中！

ミステリー&ハードノベルス群!!

- 暗黒の祭壇　勝目梓
- 凶獄　勝目梓
- 処刑の鐘を鳴らせ　勝目梓
- 火刑の檻　勝目梓
- 凶刃　勝目梓
- 悪党は休まない　勝目梓
- 愚か者たちの烙印　勝目梓
- 濡れ事裁き人　菊村到
- 不倫狩り　北沢拓也
- 牝獣狩り　北沢拓也
- 淑女の謝肉祭　北沢拓也
- 不倫の祝祭　北沢拓也
- 裸女狩り　北沢拓也
- 淑女たちの祭典　北沢拓也
- 淑女の密猟区　北沢拓也

- 不倫まつり　北沢拓也
- 情事の祝祭　北沢拓也
- 5時から情事　北沢拓也
- 情事の戦略　北沢拓也
- 人妻の不倫祭　北沢拓也
- 新・翔んでる警視1～8　胡桃沢耕史
- 翔んでる捜査官　胡桃沢耕史
- 新・俺は秘密諜報員　胡桃沢耕史
- 袖の下捕物帳〈春艶の巻〉　胡桃沢耕史
- 翔んでる警視正〈新世紀篇1〉　胡桃沢耕史
- 半佐夢全権密使　胡桃沢耕史
- 十津川峡谷殺人事件　木谷恭介
- 京都いにしえ殺人歌　木谷恭介
- 長崎オランダ坂殺人事件　木谷恭介
- 仏ヶ浦殺人事件　木谷恭介

廣済堂文庫 ミステリー＆ハードノベルス 好評発売中！

ミステリー＆ハードノベルス群!!